

ほたるじゆのそら

# 蛍樹の空

平 龍生

「人間同士が喰らい合うのは悪なのか！」

飢餓戦場、肉体が生き残るための道理・道徳とは？

目次

まんじゅう一等兵

魔のバシー海峡

蛍樹の空

## まんじゅう一等兵

平 龍生

### 1

春の柔らかさは、もうそこまで来ているのに、ここ、大山の麓の地、開拓村香取地区の牧草地帯には、まだ雪が残っていた。地を這うようにして風が舞ったが、切るような風ではなく、どこかに、春の息吹が含まれていた。

この季節、背景の空の青さに映えてのことだが、白雪を戴いた大山の頂上も、白く輝いて見えていた。

眩（まばゆ）くさえもあった。

その分、今日は天気も良いようだった。

鳥取・大山は中国山地の北外れに位置する秀峰であった。標高は千七百九メートル、伯耆（ほうき）富士などとも称されるだけに、山頂の険しさだけでなく、山裾野のやさしさをも兼ね備えた美しい山として知られていた。

「今からわたしが会おうとしている穂坂真吉さんは、戦後の数十年余、この地の開墾史とともに苦節を重ねての生き方を貫いてこられた。自然の厳しさとして、この山の持つ四季折々の表情の一つ、冬の寒さのことなどを考えれば、この山麓の地で、嘗々、酪農の仕事を続けられてきたこと、並みたいの苦労ではなかつたろう。まずは、それらの話を訊いてみるべきなのかも知れない。いや、今回、わざわざ穂坂真吉さんを訪れることになったのは、穂坂真吉さん自身のまだ終わっていない、戦後の始末記の続きを、敢えて、促したいという思いがわたしにはあるからだ」

一人、わたしは呟いた。

ほぼ、三十年前のことで、昭和五十九年三月二十日、大山の麓の地に住む穂坂真吉を、わたしは初めて訪ねた。一昔前の話となる。

穂坂真吉は太平洋戦争の最激戦地ルソン島の戦いで生き残った一人、戦友への償いの思いも込めて、「自分なりの戦記ノート」を残しておきたいと願っていた穂坂真吉の相談相手になる役目を、わたしが与えられてから四年、手記体裁の戦記の様を記した手紙を、わたしは穂坂真吉

から何回か預けられ、折りに触れて読む機会を、これまでに得ていた。

いずれも、過酷な体験を強いられた一兵士の「生き地獄の戦記」で、いずれ、出版すべく、わたしは原稿の準備を進めていたところであった。

ところが、昨年末以来、その手紙が途絶えた。そのことを案じて、数度、手紙を返したが返事がなく、やっと、年が明けた一月、穂坂真吉から、短い返信が届いた。

『わたしはこれ以上の話を書くことは出来ません。わたしの気持ちだけを記しておきます。

戦った 飢えた 死んだ

死んだ兵隊の肉を食うのは

そこでは 最高の道理・道徳でした

その本質たるもの 個人が『生きる』ことにある  
からです

さらに 生きている兵隊を殺して食うのも

個人にとっては 最高の道理・道徳でした』

これまでに、わたしが読み了えた手紙形式の手記は、敗残の兵たちが、所属する本隊の部隊から外れてしまい、人跡未踏の密林地帯に迷い込む場面までであった。

もちろん、兵士たちは飢えて、全員が栄養失調、加えて、弱った体に追い打ちを加えるマラリアやアメーバー赤痢、 Deng 熱などの風土病に悩まされて、もはや、一歩の歩みもならぬ状態に追いやられていた。

わたしは短い手紙に込められた穂坂真吉の思いを理解するだけの知力も体験も持ち合わせていない。

どうせ、知ったふうの解釈、したり顔のその自分のいい気さが恐ろしかった。

それでも、わたしは穂坂真吉と会う決心をした。戦争の残酷さを伝える、その理不尽さを伝える義務がわたしにはあるように思えてこれまで生きて来た。ルポライターの道を選んだのも、その選択肢の一つとも言える。

自分のことを記せば、わたしは終戦時は国民学校(小学校)の四年生で、当時、十歳の少年だから、実際に、太平洋戦争の戦場そのものには参加していない。

穂坂真吉との唯一の接点は、やはり、ルソン島のバクダンの地で、わたしの兄、菊池勇(いさむ)が戦病死して

いたので、少しは語る資格があるのではと、思ったからだった。そもそも、穂坂真吉と知り合ったのも、巡り巡ったの知縁であった。通信隊に所属していた兄の「最期の様」を知る生き残りの人物、元通信隊上官の入江高志と邂逅(かいこう)する機会をわたしが得たことから、その由縁で、わたしは穂坂真吉とは知り合うことが出来た。

穂坂真吉のことを入江高志に紹介されて、わたしは手紙を交わすこととなったのだ。

穂坂真吉から寄せられたそれらの手紙の一文、一文を思い返し、わたしは「ふーっ」と、息を吐(つ)いた。

今回の手紙の内容と、これまで目にしてきた手紙、いずれも、過酷な内実の『戦記の一文』であることには間違いないかった。

残雪を分けて、名も知らぬ小さな黄色の草花が、ところどころに咲いていた。「早春賦」の知らせで、少しずつだが、芽生えの季節(とき)が訪れているようだった。

わたしはリュックサックを背に負い、十メートル道路の坂道を、この時、徒歩で登った。

このあたりは、地方道三十号、赤碕大山線に位置して

おり、途中には、開墾道路などの標識もあり、どこまでも、九十九折りの坂が続いた。

息も切れる急坂の道であった。

やがて、見渡す限りの牧草地が、目の前に開けた。もちろん、雪も残っているので、青々とした緑の牧草地であったわけではない。

このあたりは北側面の中腹地帯、標高五百メートルから八百メートルの位置になる。

見霽(は)るかす彼方の空遙かに、聳え立つかのようにして、大山が控えていた。

大地を踏まえて立つ、この勇姿に見惚れて、わたしは、しばし、おのが歩みを止めた。

風音だけはひゅうと鳴り、頬を打って過ぎた。空の上で風が舞ったのか、しばらく歩を進めると、もう、大山の頂き付近には雲が掛かった。裾野までにと延びて行く。

たちまちにと、山の天気は変わり易い。

その山の麓から降りて来た風に煽られてか、目近(まじか)のブナ林がわさわさと揺れた。

当時、大山町の香取開拓地を訪れたこの時期、わたしにはわたしなりの感慨もあった。



前年のこの春、いつにない雪の多い年に、わたしは母を亡くしていたので、実のところ、この地の名残りの雪景色の様に触れたことで、わが心も痛んでいた。

哀惜の思いであった。

この哀惜の思いと重ねて、わたしは穂坂真吉の心の内をも慮(おもんばか)った。

戦地から帰還した時、穂坂真吉は母親の無慮の死を知らされることになった。

終戦の二週間前のことで、昭和二十年七月二十八日に発生した、大山口列車空襲<sup>1</sup>の犠牲者となり母親が亡くなっていたことを知らされたのだった。

貧しい暮らしゆえに苦勞をさせた母親に孝行すべきところ、「やっと、生き延びて還ってきたのに」と、無念の思いに、胸搔きむしった。

穂坂真吉は父親も、長兄、次男も、すでに、戦死公報を受けており、三男の穂坂真吉の帰りを、母親はひたすらに待ちわびていたはずだった。

この、大山口列車空襲<sup>2</sup>だが、鳥取駅発、出雲今市駅行き列車で、三朝(みささ)にあった呉海軍病院分院からの退院、転院する者、それに付き添う人、看護婦などが

乗っていた。

列車の屋根には赤十字徽章がつけられていたが、米軍機が来襲して無差別爆撃を加え、多数の死者、負傷者を出した。

穂坂真吉はこの無惨な結果だけを知らされた。穂坂真吉は一人、天涯孤独の身となった。

母親の死まで知った時、どれほどに、嘆き悲しんだことか。穂坂真吉は母恋しさの思いだけで、懸命に、『生き地獄の戦いの場』を生き抜いた敗残の兵士の一人だった。

## 2

どこかからか、この時、牛が鳴く声がした。

回りをブナの防風林に囲まれたこの地は酪農地帯となっており、四差路を挟んで、何軒かの家の構えが、一帯には整えられていた。

わたしは目印の香取草谷展望台まで、一旦、行き着き、少し、道に戻った。やっと、訪ねる先を見つけた。

これから会う人物に、平常心を失わないよう務めようとわたしは思った。

ことがことだけに、ことさらにこちらが構えていては、会うことを許してもらった穂坂真吉にも申しわけなかった。ひよいと、この時、牛舎の陰から、陽に灼けたやや角顔の老人が顔を出した。

額のあたりにだけ深い皺が刻まれていた。

「よぐお出でなしたじゃ。大儀いばかけてえ。こげえな、汚(きち)やんげえとこじゃ、いやだっちゃ。まあまあ、母屋(おもや)の方に来てつかんさい」

人を警戒しないのか、牛舎の牛が鳴いた。

平屋の牛舎には六、七頭のホルスタイン種の乳牛がおり、干し草を食んでいた。

広い肩幅で、がっしりとした体格。姫路連隊の輜重兵(しちようへい)として軍役に就いていた経歴のある人物、輜重隊というのは、兵站(へいたん)業務で水・食料・武器弾薬などの各資材を輸送する任務を負う力仕事をこなすので、体格のいい者が多くは採用された。

わたしは彼の背に搦(つ)いた。

坊主刈り頭には白いものか混じっていたが、まだまだ、仕事を続けていられる元気があった。

今年で、確か、六十五才、わたしは穂坂真吉は大正七

年の生まれと聞いていた。

母屋は頑丈に造られていた。

太い木組みの梁と、木地のままの柱、素朴な構えだが、これなら、風雪にも耐えられそうだった。

土間を上がると、直ぐに、囲炉裏が掘られてあり、わたしはその場所に導かれた。

囲炉裏に炭火が埋めてあった。まだ、寒いから、遠来の客への心遣い、わたしは暖かさに包まれる思いがした。

居間は黒い煤で燻（いぶ）されていたので、わたしは煤（すす）の匂いを嗅いだ。

「なくんもしやべらんけと思うておられるかも知れんが、ほんまはあばかんことで、あんたをここまで呼んでしもうたがな。そうじゃ、あばかんはここのらの方言葉で手に負えないことの意味だっちゃ」

「はい、わたしにも手に負えないことかも知れませんが、お気持ちに添うようにしますので、穂坂さんのご真情をお聞かせ頂ければ。少しでもお役に立つよう努めます」

やつと、一杯の茶を淹れた後、穂坂はわたしと囲炉裏端で向かい合った。

「なんじゃ、口下手じゃけえ。ようはしやべれんが、実

は、やっと決心がついた言うんが正直なところなんじゃ。そいじやが、口が裂けても言えんがや。そげなことは…」『兵隊の肉を食うことは最高の道理だ』の件りを反芻するように、穂坂は口元を歪め、そう告げた。

一度、目を瞑(つぶ)った。

「…あんにやあ、いろんなことがあーましたにや。大体が最初に、あんたに手紙書いたんも、ありや、オラが女房が死ぬる目に遭うたんがことでにや。そんなまでは、むごたらしい戦争のこと口にするのもいけん思うて、女房には黙っておったけん。そいでえ、決心がついたんは、こりや、辛えことじやが、女房なんならかして、(※死なして)もう、オラ、戦友たちのためだけ生きるしか法はないと思うたことが初めなんじや。前々から、気に掛けていたことでもあったじゃでな」

穂坂は湯飲み茶碗を両手で包み込むようにしながら喋ったので、わたしは少しは救われた。次に、ゆっくりと、穂坂は茶を啜った。

穂坂が昭和五十一年十月に妻の茂子を三十七歳の若さで亡くした話は、紹介者の入江高志から聞いてわたしは知っていた。

だが、その時の心情までは聞いてはいなかったもので、わたしは耳を傾けることにした。

「まあ、痛い話じゃが聞いてくれるがじゃ。ここは開拓村じゃけに、医者がいる麓の地まで十二キロあるがじゃ。牧草の草刈りが終わった頃のことじゃったが、風邪をこじらせて肺炎になってしもうて、手遅れになったがや。オラが可哀想なことをしてしもうた。オラ、さでぼろける(※転がる)ようにして、麓まで医者呼びに行かいが、しごならず、死ぬる羽目にしなった。このだらくそ(※馬鹿)、このだらくそ、何しちよったと、オラ、自分を責めたが、あげなことになったじゃ」

直ぐには返事が出来ず、わたしは穂坂の顔を見詰めていた。無念そうに口元が歪んだ。感極まったのか、穂坂は口元も震わせた。

ぼろぼろと、目から涙がこぼれ落ちた。

酪農仕事をこなして来たごつい手で、穂坂は涙を拭いた。それでも気を取り直し、穂坂は次の言葉を用意した。それは、亡き戦友たちに対して罪と償いの意を込めた文句だった。

「…何やっちよーや。何やっちよーや。オラ、いや、オ

ラだけ、一人前に、ここで暮らして、あげくに、結婚まで果たしたじゃ。いつも、ええ思いする度に、あの地に朽ちた戦友たちの声が聞こえたがや。何やっちょーや。」

「何やっちょーや、ですか？」

「戦い、艱難辛苦の果てに死ぬる運命を負った戦友たちは、もちろんのこと、九死に一生を得て帰還することの出来たもんも、黙して多くを語らず。わしらに代わって、オメエ、何か、言っちょーね。あんなあ、あんなあ、わしらにや、口がないじゃけに、オメが言わいでどげするね。何か、言っちょーね。いつも、オラには、みんながそう言っちょる声が聞こえておったじゃ。そやけど、戦記を書き記す決心はつかんじやった。あんたに出会おうて、そいで、拙い文を残し始めたんじやが、あんにや、実のところ、女房が死ぬる目にオラが遭わされた時、戦友たちの声がオラには聞こえとつたがじゃ。女房をもろうたん、そんなん許せんがや。と、やっぱ、オラの仲間たちの声が聞こえたがじゃ。オラ、罰をば食ったがや。そいで、仲間にも、死んだ女房にも、オラ、土下座して、この、居間に頭ついて謝ったんじや」

「それは…」

「そやけんど、あの神の姿をした大山を仰ぎ見た時、オラ、救われたがや。どんとしてござるで、オラのちっばけな悩みば、ふふーと、笑おうてござった。もはや、頂きには雪を頂いてござったが、大地に生きるこの身、オラは大自然に抱かれて生かされとるう。そう、思うたことで、オラは救われたがや」

やっと、わたしは冷えかけた茶を啜った。

### 3

本題に入った時、また、穂坂は真剣な顔つきに戻った。わたしがこの地にやって来たのは、穂坂の決心とやらが揺らいでいて、後の文章が進まなくなっていたことに起因する。

どうしても、話を先を進める必要があった。この場に、わたしがいる意味は、人肉を食うことの道理の話、を、穂坂真吉自身の口から聞き出すことにあるー。

「…どないすればええがじゃ。オラ、おのれの文句では、こげな話はどうはせんじゃ。どやって、人間が人間の肉を食らう話、このお、ほんまの話をすればええんか、そ



の方法を教えてもらいとうて、あんたを呼びつけたがや。  
ほんまにあばかんことじゃ」

囲炉裏の炭火が爆ぜてぱちぱちと微かに音を立てた。  
遠いところで牛が鳴いているようにわたしには思えた。

本当は、「もおおー」と鳴く声は近くにあったのだが、  
何もかもが間遠く思えた。

その後には、静寂そのものの真の静けさのようなものが訪れた。じつと息を殺して、空気そのものが微かに息をしていった。わたしは考えあぐねていた。

徒(いたず)らに、時が過ぎて行つたー。

『道理話』とはいうが、理屈立てた話ではない。

まして、生々しいであろう事実ごとの一つ一つを、丹念に、拾い尽くす愚かさも、この場合は、よくよく考えてみる必要があるとわたしは思っていた。

これは、穂坂真吉自身が躊躇っている話でもあった。  
無下に、聞き出せる話でもない。

わたしは考えあぐねた末に、口を切った。

「どうでしょうか？あくまでも箇条書きで記して頂くと  
いうのは？ただ、事実としての真実味は伝える必要があります。  
穂坂真吉さん自身の心情部分については、わた

しが付度(そんたく)しながら、行間を埋めて行く。もちろん、そんなおそれた付度の法、おこがましくもありますし、間違いも犯しますので、穂坂さんに筆を入れて頂くというのはどうでしょう？問題があれば、赤線を入れて頂いて結構です。まず、事実ごとを伝えること、そのことに意味があるとすれば、ぜひ、勇を奮って、この際、穂坂真吉さんの胸の内を伝えて頂きたいのです」

「そのように：そう、願えればええがじゃ」

一つ、二つ、頷くと、しっかりした声が返ってきた。

決意を固めた穂坂の顔には、強い目の炯(あか)りが宿していた。

「このこの囲炉裏端に座ってじゃ、それこそ、雨の日、風の日、雪の降る日も、これまで四年余り、オラ、原稿用紙に向かい、筆を進めてきたじゃ。何やっちゃよや。その戦友たちの励ましの声は今も聞こえちよるう。一つだけ、オラの口から言わせてもろうておきますじゃ。なんも言い訳で言っちゃよやないとじゃから、よお、聞いておいてもらいたいじゃ。六人の戦友たちは、オメエの肉体が生きて日本に帰れるなら、オラもオメエの肉体と一緒に日本に帰れるじゃろうてえ。なあ、：なあ」と、

そんな時は、何人かが口癖みたいにい、言うちよったあ。  
オラ、ここにいるは、みんなと一緒に帰ったことじゃが  
にい。食われたこと、次々と、おのが肉体を食われたこ  
とにい、そのお、つまりは、次に生きている者の肉体に  
なり変わることに、みんな、儂い望みを繋いでおったか  
ら、あげなことに……」

穂坂が言わんとすることの意味はわたしにも分かった。  
はぐれ小隊の六人、食われた者たちは、暗黙の了解の内  
で、『人の肉を食うのは最高の道理』と、認め合っていた  
ということだろう。そして、穂坂真吉の肉体は、一人、  
生き残ったーこの事実だけがここにはある。

「おぞい(※恐い)ことじゃが、オラの慟哭の声、この声  
は、みんなと共に生きていることなんじゃ。声なき声……  
じゃが、オラが生きているうちは、そうじゃな。コケコ  
ッコーの朝鳴き鶏ぐらいはしとると言われたいがや。そ  
げんじゃな。よろしゅう、みんなの、黙して語らぬ者た  
ちの声を代弁して下さること、お頼み申しますじゃ」

牛が鳴いた。ニワトリもいるらしく、「こつこつこつ」  
の声も聞こえた。生活をする者の音がここでは生きてい  
た。

大山の向こうの青い空を掠めて行くのか、旅客機の音も、この時、微かに聞こえて来た。

穂坂が淹れ直してくれた熱い茶を、わたしも音を立てて啜った。

すでに書きかけている原稿の打合わせも含めて、その後、穂坂真吉宅での聞き取りは三度に涉った。

その度に親切にもてなされた。いろんな季節の大山の表情もわたしは知る機会を得た。いつも大自然そのもの、大山の懐に抱かれての取材行となった。

追って、鳥取・大山での『人の肉を食うのは最高の道理』に関する本人からの取材内容には触れていくことにして、これまでに、穂坂真吉がわたしに寄せた『戦記ノート』を元に、穂坂真吉自身が体験したとされる「敗走の記」そのものを、ここでは、まずは、レポートの形式で綴って行くことにしよう。

4

昭和十九年十二月の下旬、南方総軍・第十四方面軍、山下奉文大将率いる陸軍鉄撃兵团(防諜名)に属する輜重

隊の一員として、陸軍一等兵穂坂真吉は、フィリピン・ルソン島にと送られたが、戦況は切迫したものだだった。

昭和十六年十二月八日の開戦以来、この時期、戦況は負け戦さにと傾いていた。

この時点で、フィリピン諸島での防衛線であったときされるレイテ島、ミンダナオ島などで、すでに、日本軍は大きな痛手を蒙っていた。レイテ島では昭和十九年十月終わり頃に、米軍の上陸作戦が開始され、海路の補給を絶たれた日本軍は孤立、八万人余の将兵が戦死、病死、餓死により全軍が壊滅した。その生存率は、わずか三パーセント、将兵は玉砕、レイテ島は昭和十九年十二月十日には米軍の手に落ちていた。

また、ルソン島と海を隔てて近接するミンダナオ島でも「永久抗戦」の名の下、日本軍部隊が常在していたが、これも、米軍支援下の抗日ゲリラ部隊などの広範囲に亘る活発な抵抗運動もあって、各個撃破されて苦戦、軍隊としての戦力は、すでに、この時点で失いつつあった。

フィリピンの首都マニラの攻防戦も、敵機の猛爆が続き敗色濃厚の状態、十四方面軍師団の総司令本部もマニラから撤退、主力部隊も、海軍の一部戦力を残してマニ

ラを去った。市内各地もすでに戦乱の地となり、マニラ周辺の事態は風雲急を告げていた。

いずれの地も敗残の様相が日毎に増していた。このような過酷な戦況下、無謀とも思える新たな軍団、決死部隊が、大量にルソン島には送り込まれたのだった。

記録によると、このルソン島戦線だけでも、五十一万余柱の将兵が、戦死・戦病死を遂げた。

ほとんどは、病いと飢えであった。

この頃、日本各地でも、連日、重爆撃機B29から、爆弾、焼夷弾が投下されて軍需工場などでは多くの犠牲者を出すに至っていた。本土にも、もはや、連合軍の攻撃の手が伸びていた。出征した兵士たちも、これらの内地の事情は、大方のところは知り得ていたことだった。

内外とも逼迫した戦況だった。

太平洋戦争での全日本人の犠牲者は三百十万人余、軍人・軍属の戦没者は、二百三十万人余、そのうち、飢え死にした者は六十パーセント強で、いかに、無謀で、過酷な戦いであったか、これらの数字が物語っている。

台湾とフィリピンのほぼ真ん中に位置する魔のバシー

海峡を命からがらに軍用船で渡って、やっと、「鉄撃兵団」の一部は南の島に着いた。

アメリカ軍の潜水艦が出没する危険な海域、陸地に着くまでに、多くの艦船が魚雷攻撃の犠牲になり海没していた。

この輸送船団の辿る哀しい物語は、他の章に譲るとして、穂坂一等兵の戦記そのものに焦点を当てて、ルソン島での戦いの実態を迫ってみることにしよう。

厳しい戦局下、最高機関の総司令部は、最後の決戦地をフィリピン・ルソン島中・北部の山岳地帯と位置づけ、鉄撃兵団などの将兵もこの地に送り込まれた。

『敵兵を一人以上必ず殺して死ね。一人も殺さんで死ぬようなことでは、畏(かしこ)くも陛下に対し奉り申し訳がたたためぞ』

連隊長の激した文句を胸に、兵士たちは見果てぬ南洋の陸地、死地にと足を向けたのだった。ルソン島に派遣された各部隊の将官には、アメリカ軍の日本本土上陸を阻止させるための時間を稼ぐべしの通達がなされていた。つまりは、一兵たりとも、死地より還るべからずの軍命令が下されていたことになる。当初から、軍指令部・

参謀部の将校たちは、兵士の相当の損耗は止むを得ず、の強固な方針維持者たちで占められていたのであった。

輜重隊は水・食料・武器・弾薬・各種資材の部材を第一線部隊に送り届けるのが任務なので、ルソン島北部のサンフェルナンド港到着早々、物資揚陸のための荷役作業に就いた。

大隊の輜重第二分隊長は小笠原健三曹長だった。

穂坂真吉一等兵との関係は、昭和十四年に彼が駐屯した満州派遣部隊以来からの仲であった。穂坂真吉は一度除隊された後の再応召組の一人、二度目の軍隊勤めで、小笠原曹長は軍隊歴七年、軍隊の表も裏も知り尽くしている苦勞人なので、みんなに慕われていた。職業軍人一筋の者にしては、この分隊長は優しい面も持っていた。

面倒見のいい、部下の兵隊思いの人格の持ち主、威張っているばかりの古参兵意識もそれほどはなかった。

本来なら、軍歴からすると下士官待遇、小隊長ぐらいに任命されてもおかしくなかったが、軍隊に向かないその性格のゆえか、冷や飯を食わされている組の一人となっていた。



ちなみに、軍隊下士官・兵士の階級は、曹長、軍曹、伍長、兵長、上等兵、一等兵、二等兵で、兵隊からの勤め上げだと、軍歴・任官試験などを経て、下士官の准尉までなれるが、将校階級の少尉任官になることはない。

5

上陸数日後、南国らしい、椰子林の中で、小笠原分隊は小休止で露營することになった。

椰子の木の葉陰から、降るように散り敷く夜空の星が眺められた。澄んだ夜空なので、一層に、ちかちかと星は輝き、瞬いていた。

物知り男の友近(ともちか)正晴兵長が「あれが南十字星」だと告げたので、改めて、穂坂一等兵らも夜空を見上げた。

斜めの列のかたちで四つ、目で追うと、十字架星が望めた。ひときわ、青輝色が強い。

「南十字を構成する四つの星は、統(な)べて、一等星ほどの明るさがある。だがな。あの南十字星の近くには

コールサック(※石炭袋)と呼ばれる有名な暗黒星がある。南十字星は、北極星が見えない南の地では方位を知る道しるべとして大いに活用すべしだが、さあ、これから、われわれはどちらの方角に向うのか？何しろ南十字星、闇をさえ呑み込む無限大の闇の宇宙、暗黒星まで従えているからな。まさに、これぞ、天知る地知るだ。あの南十字星、いい道しるべになってくればいんだが、天に口なし、人をもつて言わしむ」という文句もあるからな。何にしても、これからの戦い、人間相手であることには間違いない。さて、われらの運命やいかばかりか」

いつものように、友近兵長が天体学についても解説をしてみせた。もの知りで、博学の士であった。東京の大学を出て、中学の英語教師をしていたが、思想的に問題があるとされて、学校も辞めさせられた。

応召される時、「一兵卒で結構です」と、将校になるための幹部候補生試験も受けなかった。いきなりの兵長ではなく、頭のいい分、仕事もこなせるので、この地に派遣される際に、兵長に進級していた。

他の分隊に所属していたのだが、湾口で海没させられた部隊の生き残り、員数合わせで、上陸来、この兵長は

小笠原分隊に配属された。

大隊の本部では、けむたがられる存在であったが、小笠原分隊では、みんなに一目おかれ、友近兵長は通称、<sup>、</sup>博士<sup>、</sup>の名で通っていた。前の部隊からのこれは通称で、小笠原分隊でも、<sup>、</sup>博士<sup>、</sup>の名は引き継がれた。

これからの戦地、穂坂一等兵は友近兵長に導かれて、人間とは、人間の命とは、死ぬとはどういことか。この軍政下、一兵士の命の値段はいくらなのか<sup>、</sup> などなどの、いくつもの難題を問いかけられ、学ばされることとなるのだったが、まだ、馴染めず、仲間としても受け入れていけるのでもなかった。

「なあ、今のうちに、歌でも歌っておくか。これからが本当の戦地、歌なんぞ歌っておる余裕はみんな無くなるぞ。人間が歌を歌っていられる安楽さ、これは人生、まずまずは無事の証拠だ。なあ、みんな、その発声器官が備わった口があるうちにだぞ。よし、おれが一丁、<sup>、</sup>椰子<sup>、</sup>の実<sup>、</sup>の気持ちとやらを歌ってやろうか。南の国を訪れることになったわが感懐をも大いに込めてだ」

「他の部隊は軍歌のようだぞ。まあ、いいか。よし、友近兵長は美声の持ち主だから、一つ、頼むか」

と、小笠原分隊長が煮え切らない態度で許可した。お人好しのその性格が出た。

「友近兵長、流れ寄つたる。椰子の実一つ。早々にはありますが、ふるさとを偲んで歌わせていただきます」

まん丸の黒色のセルロイド製、ロイド眼鏡を掛けていたので、見ようによつては、喜劇役者のように見えるが顔立ちは整っていた。その、眼鏡の縁に手をやり、友近兵長が歌い出した。ぱちぱちぱちと、みんなが手を叩く。

もつともみんな控え目であった。威勢のいい軍歌ではないので他の部隊にも遠慮したようだった。

椰子林の高くなった場所だったので、それほど気にすることはなかったのだが、それでも、所と場所を心得ぬお門違いの友近兵長の申し出なので、独唱の運びとなった。正直、この時、穂坂一等兵も、この状況下、「こいつ…やりすぎだ」と思った一人だった。

生暖かい南の風が椰子林を吹き抜けて行く。

椰子の葉陰から抜けて見えている夜空には、無数の星が煌(きら)めいていた。

♪名も知らぬ遠き島より

流れ寄る椰子の実一つ

故郷(ふるさと)の岸を離れて

汝(な)はそも波に幾月…。

この歌の一節一節には、この南の地に送られた兵たちの切なる思いが詠まれていた。

小笠原分隊の七人は、友近兵長に反感は持ったものの、歌につられて、みんなしんみりした。自ずから涙がこぼれ出た。泣かせる歌の文句に、みんな嵌められふしがあつた。

♪実をとりて胸にあつれば

新たなり流離(りゅうり)の憂(うれ)い

海(うみ)の日の沈(しず)むを見れば

激(たぎ)り落(お)つ 異郷(いこく)の涙(なみだ)…。

この後、分隊では強気で鳴る甲西伍長が軍歌の一つを歌ってこの場を締めたのだが、直接の咎めはなかったものの、どこかで、椰子の実の歌は噂話になって、後々、この歌の歌詞はあらぬ噂を残すことにもなった。

「おらだち、えっと遠いところまで来たもんじゃのお。いよいよ覚悟決めてかからんならじゃが、それにしても悪げじゃね。こう、食うもんがのうては、そんなん、輜重隊かてえ力も出んぞな。勘弁してつかあさいのじゃ」  
この地に船で送られる時から、兵士たちは碌な物は口に入れていない。

食事は朝夕二回だけの支給で、握り飯に沢庵二切れ、水だつて、一日に水筒に半分だから、みんな咽喉だつて渴いていた。

「堀上等兵の、勘弁してつかあさいの。それが出るたんびに、おらたち、確かに痩せ細って行きよるう。食べれんはきつーいこつちや。おえんな」

みんながみんなお国言葉でしゃべった。

軍隊勤めの窮屈な日々では、ほんのひとつきの息抜きの時間、顔付きも和やかになった。

、勘弁してつかあさいの、が口癖の堀幸一上等兵は広島市出身、旅館の跡継ぎ息子で、如才がない。人当たり

のいい性格でもあった。

相方の島崎卓治上等兵は柳行李などを作る柳細工を扱う職人で、手先が器用で何でもこなす。兵庫県・但馬(たじま)の地の出身であった。

時期が悪くて二人とも再召集組みで、二十三歳同士、彼らも今回の南方派遣で、上等兵に進級した。若い分、彼らは元気もあった。

同じ部隊で出身県が違ったりするのは、召集の時、本籍地が「本地」となるからで、他府県に住んでいても、「本地部隊」の所属、それで、お国言葉が入り乱れることとなった。

「満州は零下の極寒、こっちは南洋でござるう。この暑さで、軍服も防寒衣から夏衣に衣替え。ばってん、寒いより暑い方がええが、食(※い)くられんで飢(※かつ)れるんは、この強靱牛(こつてうし)でも、生きては行けんとお。なあ、こんところの食いもん。腹に力が入らんとつ。えーころかげんのことではなかつね」

甲西三郎平伍長が肥後弁で話を続けた。

「肥後もつこす」が売りの二十七歳の古参兵で、一本気なところがあつた。鼻の下にちよび髭を生やしているの

で、威張っているようにも見える。元は料理屋で丁稚奉公、修業した身なので、食い物には煩い男。中肉中背だが、熊本地方でいうところの「こつて牛」そのものの、厳つい体格で力自慢男でもあった。

満州の話が出たのは、元々、鉄撃兵団の部隊は、中国・北満の地に駐留していた部隊で、現役徴用されて加わった奥田元春二等兵を除き、北満組の連中は特に仲が良かった。話が進むのも仲間意識の強いせいもあった。

それだけに急増・新增の部隊とは違って、小笠原部隊は一つにまとまる力は強かった。

「私語分隊か、それにみんなのお国言葉、味があつていな。人間味があつて大いによろしい。おれは東京生まれの東京育ち、軍隊用語の標準語しかしゃべれん。何をしゃべっても軍隊用語だ。まったく、つまらんよ。わいのわいのと、こうやって言いたいことも言わないと戦地ではみんな身がもたない。これからはだ。みんなの愚痴はおれが一手に引き受けることにしよう。遠慮せず何でも話してくれ。戦いにはかり明け暮れていては、それこそ身も心も持たん。いや、身も心も腐っちまうぞ。お国のために奉公させられているが、おれはみんなに役立



つことで、奉公させてもらいたいもんだな」

にこにこ笑ってみんなの話を聞いていた友近兵長が、嬉しい時の癖で、眼鏡に手をやりながら、そう付け加え、長々としやべった。

遅れ馳（ば）せに、小笠原分隊長が口を挟んだ。

出身は島根県だが、お堅い軍隊口調に戻り、この場を締めた。戦場のこと、公用語を使うのは、これまた止むを得ないことではあった。

「輜重隊任務は毎日毎日が過酷だが、みんな、ここまでよくやってくれた。分隊長よりも礼を言う。明日も激務があることだから、みんなもう寝よう。腐るように寝るべしだ。ああそうか。身も心も腐らんようにであったな」  
みんなは頷いた。分隊長を信頼していた。

露営地は草の生えた大地の上、軍隊毛布を下に敷いて寝たので、ひとまずは眠る環境にはあった。この日が最後の人間らしい眠り方、みんな一様に上を向いて夜空を見上げた。満天の星が降るようにちかちかと輝いていた。とても、身近なものに感じられた。

南十字星はみんなには分かったが、暗黒星、石炭袋（コールサック）が、どこにあるかは誰にも確かめられなか

った。

これからの各自の運命が示されているようにみんなには思えて、その位置をみんなは目で追ったのだった。

穂坂一等兵も、同じ思いで夜空を見上げていた一人だった。やはり、どことは知れない。

コールサックは六百光年の彼方にある暗黒星雲で、天体では唯一見える闇の星座、真の深い闇であったが、近くの恒星の光が反射して、わずかに輝いて見えているはずだった。

兵士たちは、誰もその存在を確かめることは出来なかった。余りにも遠い星座に思えた。

南十字星座の南東方向、左下方に広がる空間に、その暗黒星座の、コールサック<sup>♁</sup>はあるのだが、素人目に見付け出すのは難しい。

『よだつきい(気味悪い)な。暗闇の星座の奥の奥を見るつちや。どの辺がコールサックとかいう暗黒星座なんかあ。どこからどこまでが闇かもこれではわからんちや。そんなもん、おらたちが探してどうなるんだがあ。しんどい話だで。なんや、深い闇に引き込まれそうだったちや。：おっとろしい(怖い)な』

宝石箱と称される南十字星座のきらきら星ばかりが、  
穂坂一等兵の目には映っていた。

それとて、普通の輝きの星ではなかった。降るように  
とはいうが、ちかちかと、一つ一つの星が輝く度に、一  
気に、暗い天から、すべての、その満天の星が落ちて来  
そうに思えた。それほどに、頭の直ぐ上に星座はあった。

流れ星が、一つ、二つと、糸を引き落ちた。

慌てて、穂坂一等兵は目を瞑った。

闇の空の奥に引き込まれそうになった。

真つ暗の宙（そら）が、覆い被さって来るように思え  
た。驚天動地のこれからの事態を、穂坂一等兵は予感さ  
せられていたのもあった。怖かった。目を開けてはい  
られなかった。

友近兵長だけは、もはや、深い眠りの中にあった。微  
かに、いびきの声が聞こえた。

7

乾季も終わりの季節ではあったが、南国特有の暑さが、  
密林地帯を焦がす日が続いた。

スコールの凄さも半端ではなく、天幕を張っていても役立たず全員びしょ濡れになった。

それに、夜は夜で寒く、温暖の差も激しくて、すでに、体調を崩す各隊の将兵が目立つようになっていた。どこかの隊も同じであった。

この時期の戦況報告書によると、

『昭和十九年十二月末、鉄撃兵団は決戦場バレット峠に向けて集結中で、各部隊は上陸地北サンフェルナンドから、昼間は敵機の攻撃目標となるので夜の強行軍、一日、約四十キロの行軍、約十日を要した。その間、連日、敵機の爆撃や、抗日ゲリラによる攻撃が随所で発生していた』とある。

陸軍の行軍の標準とされるのは、一時間四キロ、一日二十四キロとされるから、四十キロというのは凄まじい強行軍となる。

三十キロはある背囊（はいのう）などの装備、三八銃、腰の帯剣の重さ、体調の悪さなどが重なり、行軍の途中、体力のない兵士たちは落伍した。

「この野郎、甘えてるんじゃない！」

「ここに、何をしにきやがった！」

「足手まといだ。ここまで来て泣きをいれてんじやない！」

怒声とビンタ、倒れると、踏みつけられ蹴り上げられた。新兵たちは、悪名高い軍隊ゴロの古参兵どもの餌食となった。動けなくなり、道路際に、蹲ったままの兵士たちは、行軍の落伍者として、その場に捨て置かれた。

酷暑と蒸し暑さ、降り出すと、いつまでも降り続ける雨、早々の食糧制限と、疲労も加わり、馴れぬ土地のこゝと、熱帯病で高熱の出るマラリア、デング熱などの風土病、水当たりで下痢症状を呈する兵士などが増えた。

野戦病院に後送された者は、ひとまず、一命は取り止めたものの、その後、彼らには、もっと、過酷な運命が待ち構えていた。

こんなに簡単に人間が死ぬのかーひよろひよると急に倒れ込み、そのままに絶命する者もいた。まさしく、死の行軍<sup>①</sup>だった。

佐官、尉官の階級を示す色違いの将校旗を掲げた軍用車が、「道をあけろ」と、その傍らを我鳴りながら何台も通り過ぎた。

この行進だが、輜重隊の任務はもっと過酷だった。兵

站基地からの新たな物資移動が任務となった。輸送部隊の本隊とて、わずかに数台残った軍用トラックがあるのみ。後は人力搬送しかなく、前曳（まえび）き二人、後押し一人曳きの人の力に頼った輸送方法、当然、荷物満載なので、のろのろ行進となった。

小笠原分隊も、本来の任務は自動車部隊なのだが、軍用トラックの都合がつかず、人力輸送の任務をこなしたので、全員が消耗した。

この時期、戦局の急なことから、正式の教練を受けていない補充兵と称される年配者なども多く含まれていた。また、爾後入院患者と称された半病人、傷病者などが野戦病院から追い出され、鉄撃兵団には編入されていた。杖についての行軍など、ありうるはずのないことが、ここでは平然と行われており、その分、鉄撃兵団の兵士損耗率は高かった。

この隊列に追い討ちを掛けるようにして、連日、敵の艦載機が飛来して、掃射を加えた。

隊列が崩れると、そこには血に染まった兵士たちが、弾道の列のままに倒れていた。

近くの椰子林地帯に逃げ込むが、今度はもぎ取られた

椰子の枝木が頭の上から降り落ちて来た。吹っ飛ばされた多数の兵士たちの死体が周辺には飛散した。

血の雨が降った。

直接の攻撃を避けるために、多くは夜間行軍となったが、これとて、難行を極めた。

すでに、前途多難の道、それでも、前進するしかなく、各兵団は遅々と一步を進めた。

年が明けての正月元旦、それでも生き残った大隊全員が、元旦を祝して皇居のある東方の方角を遥拝した。

上陸以来、食糧不足は続いていたが、マツチ箱ぐらいの大きさの牡丹餅が、この日、全員に配られた。これがみんながこの世で迎える最後の正月となる可能性が大だった。餅とは名ばかりの餅ではあったが、それでも将兵たちは、ふるさとの味にしばし憩うた。

空ばかりは晴天、一点の雲もなかった。

一月六日には、リングエン湾に米軍の大艦船軍団が現れ、湾口を埋め尽くした。

翌七日には海上よりの艦砲射撃が開始された。圧倒的

な物量武器作戦の始まりであった。

これからの数ヶ月、敗戦の日まで、ルソン島北部の地に陣を構えた日本軍は、為す術（すべ）もなく、破滅への道へと突き進むのであった。敗残の記、穂坂一等兵の手記も、それらの事実をつぶさに追って行くことになる。

主要港リングエン湾方向からの敵の艦砲射撃の爆雷音が、日常化、どこにいても地響きとなって伝わっていた。

元々は、彼らの部隊を乗せた船も、リングエン湾に上陸するはずだったのだが、危機を察し、迂回して、北ザンファン港に接岸した。

敵艦は鉄撃兵団が上陸した一週間後には、七百隻もの艦船をリングエン沖に集結させた。

鉄撃兵団とて、あと旬日、上陸が遅れていれば、艦砲射撃や艦載機の掃射により、直接の爆撃を受けて壊滅していたやも知れなかった。事実、これ以降、上陸した他の兵団の多くは、直接の戦火に晒され、その地は血なまぐさい戦場と化して行ったのであった。

首都マニラにあった方面軍司令部は、一部の殿りを勤



める部隊を残し、決戦を交える前にマニラから撤退、一時、サンホセにあった。

昭和二十年一月初頃までのことであつた。

サンホセはルソン島中部に位置する要衝の地であつた。苦難難行の行進、多くの犠牲者を出した末、鉄撃兵団がサンホセに到達する頃、最高機関・方面軍司令部は、早々に、スイス統治下では避暑地ともされていた山間の風光明媚の地、バギオの安全地帯にと逃げるようにして移つて行つた。

後続の実戦部隊鉄撃兵団に、十四面軍参謀により命令が下され、代わつてサンホセには鉄撃兵団司令部が置かれることになつた。

そのための物資輸送が小笠原分隊の次なる任務となつた。マニラに近い地に、撤去予定の兵站部はあり、物資が敵の手に渡つてはならないので、いわゆるたピストン輸送、やつと手配されたトラック仕様の軍用車二台を連ねて小笠原分隊は弾薬を運んだ。

これまた、悪路もありで輸送任務は難行し、なお、小笠原分隊員もこれまた消耗した。

輜重隊では車の運転免許を所持した兵士たちだけが重用された。そのトラックだが、国産の戦時規格型トラック、鋼板の代替品として木も多く使っているため壊れやすい代物、ヘッドランプも一つしか付いてはいなかった。

それでも、物資を運ぶには役立った。

小笠原分隊で、車の操縦手は、小笠原曹長、友近兵長、堀上等兵の三名で、各々、貴重な存在となった。穂坂ら他の兵は、荷物の積み下ろしの要員で、荷物台に乗った。

「おい。どうもやりきれんな。これで、グラマンP51の機銃掃射でもまともに受けたら女子供もかまわずの無差別殺人ということになるな。いくら戦争でも、そういうのは国際法規上からも認められてはいない。ひとまずは、そういうことのないように願いたい」

運転手にはならず、穂坂一等兵と同じ車の荷物に乗っていた友近兵長が言った。

背が高いので、両膝を抱えるようにして座っていた。がたがた、がっくんと荷台が揺れるので、その声は途切れ勝ちだった。

首都マニラの戦況も急を極めていた。

事実上、この時点で日本軍はマニラの軍事拠点を放棄

していた。無防備地帯同然となり、この時期、マニラからサンホセに至る道には、マニラから逃れて来た邦人の、それも、ほとんど、女子供ばかりの群れが蟻の列のように延々と続いていた。

みんな大きな荷物を背負っていた。

マニラから北進し、サンホセを通って、遠く、バレテ峠、そして、カガヤン河谷（かこく）の穀草地帯を目指す逃避行で、その先にあるのは、なお深き人跡未踏の地となるはずだった。まさしく、難民たち、すでにこの地は、「敗残の道」と化していた。

マニラからの途次までは軍用トラックで、邦人たちも運んでもらえたのだが、サンホセを目指す地点では、輸送手段も限界となり、全員、徒歩での逃避行を強いられていた。

「みんな、マニラ方面から来た移民たちだな。鉱山事業、マニラ麻やゴムの木、砂糖きび、コプラ椰子の栽培なんぞ、日本の国策に従って、この地に渡って来た連中だ。

『石油の一滴は血の一滴』か。資源、産業もない国だから、その先兵役にさせられた。挙句にこうやって放り出された。どうやって生きて行くのか」

友近兵長のロイド眼鏡がずり落ちそうになっていた。がっつんと、悪路に荷台は揺れた。

「助けてやらんとお。ぐたぐた言うてもなんもならんかね。博士なら何とか知恵がなかつとお。助けてやれんなら、黙っておるがよか」

同じ荷台の隅で揺られている甲西伍長が言った。副分隊長格だからその口調はきつい。

「ない。あるわけがない。危険物の爆弾をだ。この際、全部、車から降ろして女子供と乗せ換えるか？なあ、一部は救える。だが、おれたちはどうなると思うか。軍令違反で全員銃殺になるのは間違いない」

「そげな。たわごとは訊いとらんとお」

「力の弱い者はあくまでも弱い。力の強い者が弱い者を食い尽くす道理、戦争の構図もまた然り。弱肉強食って奴だが、昔から、そうさ、古今東西、おんなじ思考で人間どもは戦争というのを繰り返して来た。今もこれからも変わりはない。その一現象が地獄絵のように、改めて、ここには示されているだけだ」

「なに、知ったげに言うつとつ。わしらが行く先は地獄なんかねっ。聞きたかなかとつ」

「この軍用車の積載物は爆弾だ。まだ、来襲していないが、グラマンが飛んで来て銃射を食らったら、爆弾積載、見事に自爆して果てる。沿道を歩いている者たちもみんなもろともに吹っ飛ぶさ。それだけのことだ」

「敵機が来てから言わんとね。ばってん、要（い）らたんこつ言うても、仕様（※じょん）なかとね」

「ガス欠気味で、もう、この、のろろ運転、この先の坂も越えられんかも知れんぞ。地獄の三丁目ぐらいには差し掛かっているってことだな。おい、穂坂、お前はどう思う？」

急に、隣席で場所取りをしていた穂坂一等兵に、友近兵長が訊いた。

「はっ…。わたしは」と、だけ答えただけで、穂坂一等兵には適当な文句が思い浮かばなかった。

二人の顔を気弱な目で見比べた。

「穂坂、お前の生真面目ぶりはおれは好きだがな。生真面目は分解すれば、なまマジメ」と書く。生きているからナマ真面目。死んじまったら、どうなると思う？」

「そう言うのは…」

「苦手か、生きているってなんだ？いま、おれはなにを

している？なにをしようとしている？この三つのナニナニを命題にしないと、われわれはこの戦地では生き残れんぞ。そう、死んじまったら、人間それでおしまい。なあ、なにが残ると思う？名誉の戦死か。なあ、そんなのは糞食らえじゃないのか」

この友近兵長の言い分には説得力があつたが、将官たちがこの話を耳にしたら、軍律上、このままで済まないのは必定だつた。

「もう止めんね。わしゃなんも聞かんかったことにすつとよつ。なーんも聞く耳持たんとね。あからんこつ、こは戦場じやなかとお」

そっぽを向き甲西伍長が口を尖らせながら言った。そのごつい肩が怒っていた。

友近兵長の顔は見ずに、斜め前にいた奥田二等兵に、甲西伍長の視線は向いた。

この兵隊は何も答えなかつた。

海没した部隊では友近兵長と同じ大隊にいたので、仲間のつもりか、友近兵長の悪口には同調しなかつた。自分だけ生き残つたことを気に掛けていて、鬱々と日々を過ごしていた。海難で、一度、死地を潜っているので、

定まらない眼差しで虚空を見詰めていることも多く、小笠原分隊の他の者とも馴染めずにいる。いつも、伏せ目勝ちで陰気に見えた。

よろよろとした歩みの避難民と、ぶつかりそうになり、何度か、軍用車が止まった。

何回か、繰り返しているうちに、友近兵長も口を噤んだ。それで、黙ったまま、トラックの荷台に乗った甲西伍長以下の兵士たちは、後から後から押し寄せる女子供の列を、ただ、見ていた。

見ているより他に法はなかった。

友近兵長の不謹慎とも思える言動だが、この時点では、穂坂一等兵は友近兵長の言い分を理解出来ずにいた。

後に、友近兵長の個人的事情を知ることになり、領是（がんぜ）する心情になるのだが、軍隊の中にあっては危険な言動、甲西伍長がそれとなく注意を与えるのも、止むを得ないことではあった。

上陸後、連日、物量にも言わせての空からの米軍の猛爆が続き、特に、戦車や軍用車、装甲車は敵機の標的になり易く、搭乗していた兵士たち共々、敵機の機銃掃射、爆撃などに遭った。日本軍の機動軍団、戦車部隊、重砲部隊などは、この時点で、事実上、壊滅していた。空軍力もなく、日本の戦闘機はもはや一機も空を飛ぶことはなかった。

当然のことながら、輜重隊の役目もほとんどなくなり、小笠原分隊も、混成歩兵部隊の一つとして編成換えさせられていた。

『一月五日正午を期してサンホセを絨毯（じゅうたん）爆撃する。住民は避難せよ』

米軍が空から撒いたビラに、恐れをなし、日本軍サンホセ守備隊の大部も、この時点でサンホセから早々に撤退することになった。

前方陣地も一ヶ月持たずの有様で、二月五日には米軍戦車隊がカバナツアン方面から北上、サンホセを占拠、その急進ぶりにも、両軍の戦力の差は歴然としていた。

これまた敗残の道、次に、さらに奥地の難攻不落の地と思われたバレテ峠山麓にと、鉄撃兵団や他の各部隊は



逃げ延びることになった。その地に新たな布陣を布いた。

バレテ峠の正面に立つと、険しい地形の道路が三ヶ所望めた。その一つは名うてのバレテ峠、ルソン中部からカガヤン河谷に通ずる本道で、舗装された国道五号がマニラからアパリに向けて走る大動脈、戦略上でも重要な地点であった。

バレテ峠の東方には、スペイン統治の時代からある旧道があったが、こちらは新道が出来たために、今は荒れ放題の狭い道路が残されているだけ。どちらも、密林に覆われた峻険の地、それだけに、ここを陣地とすれば難攻不落の要害となるはずであった。

三つ目は、ウミガン付近から伸びる道で、激戦地ともなった日本名サクラサク峠を越えて、バレテ峠の北麓からサンタフェに至る道で、ここの地形はいちばんの難所。山々の絶壁の横腹を、うねうねと縦断する難行路が占め、通称、この行路は、土人道、とも呼ばれた未開の地であった。

いずれの道も、敗残の日本兵が逃れるだけでも、難行の地形、未踏の密林地帯であった。

鉄撃兵団・小笠原分隊も、この時、主力隊の陣取るバレテ峠に差し向けられた。

標高七百メートルから一千四百メートル。

高い山々が折り重なるバレテ峠の山系は、日本で例えると、岡山県北部から、蒜山（ひるやま）、大山などに至る奥深い山岳地帯、中国山脈の地形とも似通っていた。

もつとも、折りから始まった雨期の季節の始まりで、密林地帯を控えるバレテ峠の頂上付近には、白い靄のような雲がなたびいていた。

低い雲が山々の峰をも隠していた。

山の中腹の各所に横穴の壕の陣地、たこ壺が掘られていた。岩盤質の山の壁を円匙（シヨベル）で、不眠不休、何日も掛かって穴を穿ち、陣地を構築した。シヨベルもない者たちは鉄兜の縁を使って、日がな、岩を削った。

連日の重労働に加えて、食うや食わずの日々、兵たちはみんながみんな体力を消耗した。『自戦・自活戦の持久戦』の始まりであったが、すでに、物資の補給路も各地で寸断されていたので、山だけの列なる「陸の孤島」に、各部隊が各々に陣形を張る羽目となった。

布陣した鉄撃兵団の各部隊であったが、まるで高い雲

の上に浮いているようでもあった。

雲の中空に散開して構える頼りなげな軍団、まさしくその通りで、わずかに機関銃などは残っていたが、攻撃を仕掛けるでもなく無為の日々を鉄撃兵団は過ごさねばならなかった。

この頃、すでに、敵の複葉の偵察機が低空で、連日、飛来して陣地の上を旋回した。

この偵察機、電波探知力と暗視技術を備えているので、センサーもどきの性能があり、ほぼ、正確に、日本軍基地の在り処を捕捉していた。通称竹トンボ、狙い撃てる低空で旋回するので、撃ち落とすのは可能なのだが、たちまち何百倍もの報復を受けるので、飛行音に耳を塞いでいるだけしかなかった。

初めは盲ら撃ちだった米軍の砲撃が、やがて、精度を増した。この竹トンボの偵察能力には悔りがたいものがあつた。

至近から発射される米軍の迫撃砲が、連日のように陣地では炸裂していて、戦死者の数も日増しに増えていた。

陣地ごと吹っ飛ぶ。

これも日常茶飯事の戦況となっていた。

まさしく、ここは戦場と化した。

それでも、反撃に出る機会はなかった。

日本軍の補給路を確立する手立てもなくなり、やがて、物資輸送の役目を負う輜重隊の特別の任もなくなり、小笠原分隊は役立たず扱い、一歩兵部隊員に編成替えされた。早速に、「斬り込み隊」に加えられた。

もはや、真っ向から米・比軍と戦う余力はなく、一人一殺ならぬ必殺兵、敵陣地への斬り込み隊が結成されていた。すでに、先陣部隊は、「斬り込み隊」として戦闘に挑んでおり、多くは戦死、それらは輝ける戦果として司令部に報告されていた。

小笠原分隊も半端部隊であることから、すぐさまに、この分隊全員に命令書が下った。

二月上旬のある日、午後二時のことであった。

手榴弾五個を各自に配られた。携行食は乾パン二袋のみ、小笠原曹長、甲西伍長、友近兵長、堀上等兵、島崎上等兵、穂坂一等兵、黒田二等兵の全員が指名された。

この時期、もはや、小笠原分隊のみんなは栄養失調症のために痩せこけて頬がげっそり落ちていた。

部隊からの支給は粃（もみ）が一人当たり、半合（はんごう・〇キログラム）で、食事は一日二度、自活を余儀なくされていたので、小笠原分隊でも食量班を組み、食うための戦いを日々に強いられていた。

草の根までも掘り尽くし採取した。米三分のかゆだけの食事、そのため、全員の糞の色は草色、青くなった。痩せるのは当たりの前だった。

もちろん、水事情も悪いので下痢患者も急増した。余計に兵士たちは痩せ細った。

すでにこの時期、自活戦では、飢えとの戦いが始まっていたのであった。加えて、風土病のマラリアが兵士たちを襲った。四十度の高熱と悪寒、軍医でも罹患するほどに猖獗（しょうけつ）を極めた。

小笠原分隊の兵士もそうだったが、全員がマラリアに一度は罹患していた。

軽症、中症は病気扱いにはならず、高熱が続き、脳が冒される重症者を除き、軍務に就かされた。この扱いのために、体力を失い、病死する兵士たちも各隊でも日増しに増えていた。すでに、上陸後四ヶ月近く、全員が髪はぼうぼうで、髭も生え放題、軍衣も薄汚れて、浮浪者

のような格好になっていた。

それでも、「斬り込み隊」には携帯用の乾パンが支給されるので、それだけが今は兵士たちの楽しみ、命を引き換えにする者にとっては、余りにも、その代償は軽いものだった。

「森高中尉殿、集合終わり！」

「みんなご苦労だが頑張ってくれ。全員無事で帰れ。成功を祈っている。終わり。急げ」

近くの岩穴から出てきた大隊副官の森高中尉が、<sup>①</sup>死の儀式<sup>②</sup>を大隊長に代わって告げた。

さっさと、この副官はおのが踵（きびす）を返した。陸軍幼年学校卒、陸軍大学出身のコースを歩んだ職業軍人、この学歴、当時は、東大に入るより百倍は難関とされたぐらいだから、超エリート意識が旺盛で、陰では、<sup>③</sup>ふところ小僧<sup>④</sup>とみんなは呼んでいた。

まだ、二十三歳で、戦地では有能すぎる戦争好きの若者、いつも、岩穴に引っ込んでいて姿を見せない大隊長の代役をてきぱきとこなし、得意になっていた。

その大隊長は金鎖のついた懐中時計が自慢で、いつも、

兵士たちに見せびらかせており、その大隊長の命令をきちっと時間を図ったようにこの若い副官は実行するので、「懐刀」ならぬ、「ふところ時計」そのものなので、「ふところ小僧」なる名が付いた。

谷を下り、密林を分けて敵陣地に向う途中、小笠原曹長がみんなに注意を与えた。

様子を窺うために、空を覆ったラワン樹の枝葉を伸ばす遮蔽地の小高い丘の上で小休止した。蒸し暑い熱気が立ち籠めていた。

「みんな死んではならんぞ。攻撃した後は素早く撤退する。これも作戦の要諦だ。この場所を撤退後の集合場所とする。合言葉は、梅と桜だ。この場所に集合するのは攻撃三十分後で、待っている時間は五分程度、確認しておく」

敵地陣地は三百メートル先、敵の歩哨もいないので、ここまで発見されずに来た。

事前情報では米・比軍の混成部隊。

いわゆる抗日ゲリラ隊で、機関銃の銃座を複数構え、また、至近距離からの迫撃砲発射基地ともなっていた。

ここに来るまでに、密林地帯を抜け、丘地や谷地などに、何回も出食わした。

それだけでも、相当に体力を消耗する。

高地にある日本陣地から、将校たちが偵察のために、望遠鏡で覗いているその距離感とは、まるで違う。二時間余の行程であった。

「この真つ昼間に、あいにく、雨も降らずで丸裸同然、まともに突入したら全員、機関銃で蜂の巣だ。ふところ小僧<sup>こぞう</sup>が何を考えたか。夜襲ばかりの斬り込み隊、昼間つから騒ぎを起こして来いってやつだ。高等用兵の操典なんかにも、兵隊の効率的な殺し方があってだ。そのお手本役をわれわれの部隊は負わされているってわけだよ。きつと」

友近兵長が言った。やや、齒切れが悪い。

一人、ひよろりと背が高いので首を竦（すく）めるようにして立っていた。

口達者などころは相変わらずだが、初めての斬り込み、どこか不安そうであった。

他のみんなも同じこと、穂坂一等兵も、緊張のために、さつきから口が渴き、何度も唇を舐めた。三八銃や、手



榴弾の重さも忘れた。

「最後に支給された乾パンだ。突撃するんだから、もういいだろう。一袋分は、もうこの場で腹の中に入れておこう。喰い収めにならんよう。もう一袋は取っておけ」  
みんな夢中で乾パンを貪り喰った。それでも、音を立てぬようにであった。誰も「うまい」とも言わない。一口だけが水も飲んだ。

敵陣地の手前にある小高い丘で小笠原曹長が最後の確認を行った。

下る道筋には竹藪が続いていて身を隠すことが出来た。その先の向かい合った二百メートルほど先が攻撃目標地点となる。進出基地の造成中で大きなシヨベルカーが稼動していた。呻りを上げて坂の斜面を掘り起こしている。一帯は岩盤の地質だから、叩きつけるようにシヨベルの鉄のくちばしが動いていた。

このような最新鋭と思われる造成機械を見たのは、みんな、初めてで、目を皿のようにして、前方を眺めやっただ。初めて間近に見る鬼畜米兵、黒人兵と白人兵も混じっていたので、空恐ろしくもあった。

甲西伍長から着剣命令が出た。小笠原分隊全員七名、

斬り込み体制が整った。

「攻撃は五分内、あの工事場の敵兵を目標とし攻撃する。手榴弾を投げられるだけ投げたら直ちに撤退。無理はするな。攻撃開始後、十五分以内でこの場所に戻れ。帰れなかった者は各自で行動とするが、あくまで原隊復帰を目標せ。これも生きる道だ。いいな。みんな生きて帰れ」

命令された者全員が小さく頷いた。

みんな青褪め、顔面が硬直している。

穂坂一等兵も膝ががくと震えた。

これは誰しも同じで、人殺しに行くというより、自分の命もなくなることなのだからわれを失う。人の顔色を窺っている暇などない。

右と左、二手に散開する作戦が敢行された。

本隊は小笠原分隊長以下、甲西伍長、堀上等兵、島崎上等兵の主力四名、後方援護部隊として、友近兵長、穂坂一等兵、黒田二等兵の三名が配置された。

主力部隊が敵陣に攻撃を加えた時点で、援護射撃をするのが後方部隊の役目であった。

数分後、小笠原分隊長の斬り込み隊は、敵陣に突っ込んだ。工事さなかの敵陣地への進入、敵にも油断があった

ので、容易に近づけた。

それらの行動を見届けた上で、友近兵長の「撃て！」の合図で、援護部隊三人の兵士たちは、三八銃の鉄爪（ひきがね）を引いた。

9

「もしかして、無事なのはおれたちだけか」

援護射撃をした後での退却中のこと、友近兵長が穂坂一等兵の背に声を掛けた。足元には乱射された敵弾が一直線に走り、地面を削っていた。砂煙と共に草が根こそぎ飛んだ。

気銃射の音だけでも、凄まじく、足が竦む。

気丈に二人は弾を除け走ったが、当たらなかつたのはただの偶然に過ぎなかった。

まろび、転びつしながら、急坂を這い上がり、丘の上まで辿り着いたところで、二人とも、坂下の谷地に飛び降りやつと助かった。

声を掛けた友近兵長はまだ肩で息を吐（つ）いていた。ロイド眼鏡の奥にある目は閉じたまま、眼鏡があるのを、

自分の手で確かめた。

主力の小笠原曹長以下は右側面からの正面突破作戦、そして、友近兵長、穂坂一等兵、奥田二等兵らの支援隊は左側面からの援護射撃を行った。三八銃で十五、六発の連射を果たした。この時、援護地点からの退却の際に、この援護支隊に向けて敵の機銃が火を噴いた。

この際、一瞬、立ち止まったように見えた奥田二等兵の顔が半分飛び、鮮血が派手にあたりに飛び散った。無残な死に様であった。

友近兵長と穂坂一等兵は無事だった。

敵陣地内で手榴弾の爆発音が響いたのだけは確かめた。その後の本隊の消息は不明。

本隊との約束の集合地が、どの辺になるのか、ここがどこなのか、その地理もわからぬままに彼らは逃げに逃げた。その結果、辿り着いたのがこの谷底の地。

「おい。呆気なく死ぬな。ボロ布（き）れのようにだ。無残だ。奥田、声も上げなかった。地球ごと奴らはぶっ壊す気で撃って来た。見てろ。バレテ峠のどの山もその内、血の海だ。きっと、あの原始林や、急峻の山々も、その内、すっかり変容してしまうぞ。奥田の顔のように

だ。わけもなく吹っ飛ぶってことだ」

「はっ、兵長殿、自分は生き残っただけ不思議な気持ちであります」

「よせよせ。兵長はなしだ。二人切りなんだから友近と呼べ。なあ、このままだと道に迷うぞ。いやいや、道に迷うのも悪くはないかも知れん。今只今は軍律なしだ。どうする？穂坂は原隊に戻る気があるか？戻ったところで、再度の斬り込み隊に出されるぞ。もう一度、いや、二度、三度と死ぬ思いか。つまり、兵隊なんか一銭五厘、死ぬまでの消耗品だ。なんで斬り込み隊だ？何にもしないでは司令部は点数が稼げない。死んだ兵隊の員数が増えるほど、勇猛果敢な部隊の司令官でいられるわけだ。穂坂、お前は員数合わせに付き合う気か。おれはご免だな。こういうのはさ」

急に訊かれたことなので、穂坂は黙った。

（敵前逃亡になるのだから見付かれば間違はなく銃殺。こんなこと、口にするだけでも、厄介な問題を起こすことになる…と、言っ、この山中を一人でさまよう自信もない）

咄嗟に、穂坂一等兵は頭の中の考えをまとめた。その

頭の中を読み、友近兵長が言った。

「ともかくもだ。今日は今日で生きて行かなくちゃならん。その続きで明日もだ。まあ、ひとまずは二人で力を合わせよう。どうやら随分と遠くに来ちまったようだ。そうだな。穂坂とは明日までは一緒にいよう。お互い一人ぼっちじゃ心細い。それならいいか？」

「はっ、自分もそのようにいたします」

こうして、友近兵長と穂坂一等兵の二人切りの日々が始まることになった。持ち合わせた食糧は乾パン一袋、水筒の水だけ。密林地帯でも、このあたりはまだ荒らされていないから、何か、食糧はありそうにも思えたが、椰子林とかの果樹園があるわけでもなく、どこまで歩いて、昼なお、薄暗い闇があるだけ。

その内、疲れ果て、二人は根瘤（こんりゆう）の張り出た大木の下で寝転んだ。どちらも、しばらくの間は無言だったが、友近兵長の方が口を開いた。

「死ぬぞ、みんな。ここまで連れて来られたら逃げようもない。どこまでみんなで走り続ける大東亜戦争つてやつだな。迷路には初めから迷い込んではいるが、よく、分かる話を教えてやろうか。総司令部の連中とて、ここ

ら辺の地図なんぞも、ろくろく持っていない、二十万分の  
一の地図ぐらいしか用意していないって話だぞ。お先真  
つ暗な上に、このざまだ。勝つ必要もないが、勝てるわ  
けもない。地理不案内、その縮図の上に、われわれも今  
は乗っかっている。明日の一步はどう歩く？」

やはり、穂坂一等兵は黙っていた。

この時、爆音がし、密林の上空が轟いた。

何十機になるのか、敵機の編隊がバレテ峠の方向にと  
向っていた。ちらと、樹葉の隙間からその機影が望めた。  
三十機までは目で認めることが出来た。「きーん」と鳴る  
爆撃機の金属音が空が裂いた。木の梢を揺るがす。

「あっちの方角が原隊の位置か。どっちに向いてもわれ  
われの命はないようだな。行くも地獄、戻るも地獄だ。

さあて、穂坂、自活、自活、まずは元気な内に食い物集  
めだ」

小さな川の支流を見つけ、水を確保、浅い川瀬に入り、  
小石を一つずつ捲って、長さ二、三センチほどの巻貝を  
何個か二人は見つけた。

「ほらここで食っちゃえ。こういう生(なま)もんは持つ  
て歩くわけにはいかんから、さつさと、身につけること

にしよう」

許しが出たので、夢中で穂坂一等兵はそのまま口に付け、巻貝の蓋をこじ開けると啜った。生臭い。それでもうまいと思った。

「よし、おれもご馳走になるか」

食い様は、友近兵長の方が素早かった。実を啜った後、友近兵長は硬い殻も噛み砕いた。

「何一つ、捨てるものはないぞ。実だけ啜るなどぜいたくな話だ。骨の元も補給だ」

穂坂一等兵も噛み砕く。口の中がじやりじやりした。噛み潰す歯があるだけ感謝した。

水筒に水を確保した後、道なき道を二人はさまよい歩いた。どこへ向かっているのか、分からなかった。食べ物のあるらしいところを求めて、ひたすらに二人は歩いた。夕暮れ時、岩穴を見つけて二人はひとまず眠った。

どっと疲れが出て、前後不覚のままに、穂坂一等兵は寝入ってしまった。



夜半になると、山間地は冷える。その寒さのために、穂坂一等兵はふと目を覚ました。

「おい、寝てばかりいると、朝、そのまんま死んでいることだってあるんだぞ。安楽死か。楽でいいがな。暑かったり、寒かったり、どちらも度が過ぎている。これで体温の調節が効かないと、二人ともおだぶつだ」

岩穴の天井のあたりに穂坂は視線を投げた。

ぽつとん、ぽつとんと、雫が落ちていて、ぐっしよりと軍衣を濡らしていた。

「しゃべることしか出来ない。だからしゃべろう。なあ、穂坂、お前はなんで生まれて来た？それで、どんな具合で死ぬ？今は、この遠く離れた南の国の逃れようもない山山中、ここで死ぬか。死ねるのか」

いきなりの難しい質問だった。暗闇なので相手の顔色は窺えない。それでも、暖かい息だけは吹き掛かって来た。穂坂はほっとした。

「覚悟は出来ております」

「おいおい、それが答えか。潔ぎよきこと尊からずだぞ。国家のためにだ。覚悟なんぞしなくともいいんだ。まず、どうやったら、自分だけ、この場で生き残れるかを考え

てみる。これが個人にとっての作戦要諦の第一なり」

「よく分かりません」

「穂坂、お互い、明日も生きよう。次の日もだ。知恵を絞らないとここでは生きてはいけないぞ。なあ、生き抜くってどういうことか考えたことがあるか。ここでは肉体が生き残ることなんだ。最後の最後まで。これしかない。勝つための精神論、偉そうなことを言っても肉体が減ればどこにも精神なんぞかけらもないぞ。なあ、だから、そのための、肉体が生き残るための道理が、この場では個人には求められているんだ。分かるか」

「いえ：そのお、分かりません」

「はは、小むずかしい理屈は止めよう。今のは前論、理解しなくともよろしい。分かり易い話から始めよう。内地に帰れたらだ。いちばん最初に穂坂が会いたい人、それは誰だ？」

「はっ、おふくろであります」

「そうか。この戦地でも、死ぬ時はみんな母親の名を呼ぶ。天皇陛下バンザイとか、軍人勅諭を唱えながら死んだ輩もいるみたいだが、傍に、上官がいての話、嘖飯ものだ」

「友近兵長は誰でありますか？」

「軍隊の肩書きで呼ぶなど言っているだろう。友近でいい。そうだな。呼び捨てに出来ないなら、さん付けにでもしろ。抱き締めて欲しいとは思わないが、おれの場合もおふくろだ。男って照れ屋だからな。おれはまだおふくろ」と呼んだことがない。まだ、二十代半ば、そんな齡でもなかったし。だがな、そう、一度は、心から呼んでみたい」

やや、間があつてから、友近が話を続けた。

暗い洞窟の中のことで声だけが響く。

「人間のふるさとは統（す）べからく母親の胎内、胎内こそがふるさとなのだよ。太古の昔、人類は海より生まれ出た―人類の祖先を辿って行くと、海の生物で、人体は海水を体内に取り込んで進化して来たとされている。陸（おか）に上がった人類だが、その証拠に、生まれる時はお母さんの羊水という太古の海水と同じ成分の塩水の中で育くまれ、そしてこの世に生まれ出る。母なる海、の所以だ」

「はい」

「おれは人体とは何かという話をしているのだが、いい

か、元はと言えば、人体と地球は相似物で、地球も人体もその約七十パーセントが海水か、血液から成り立っているんだ」

「自分もどこかで聞いたような気がします」

「そうか。もう一つ、人体には有機化合物資が含まれている。これを摂取することも必要だ。これまた、海水とよく似た成分と言われているが、ここは海ではないので海水の成分を摂取するのは難しい。分かり易く言えば、塩分の摂取は人間にとっては不可欠なんだが、この山中、どうやって手に入れる？」

「手に入れる方法でありますか？」

「そうだ。生きるためには、塩だけに限らず、各種の元素が人間には必要なのだが、この戦場では、もはや、それらの栄養素は調達出来そうにない。各自が生き残るために必要なもの、それらの各種の、肉体を保持するための栄養素が一番豊富に含まれているのは何か、今の状況では、これを知っておくことが大事なんだ。穂坂はちゃんと答えられるか？」

「い、いえ…何でも食えることではありませんか」

「そうだ。その通り。好き嫌いなくってやつだな。もっ

と分かり易く言えば、食物連鎖だ。動物は草を食べ、動物は糞を垂れ流し、草はその栄養素を吸収して育つ。そして、草を食わない動物は草を食った動物を食う。ものは一巡り、それが食物連鎖の理（ことわり）だ。人間もまた然りだ。人間は雑食動物、なんでも食うが…」

「好き嫌いなしの動物でありますか」

「そこで本論だ。肉体が生き残るための道理論<sup>①</sup>に戻る。道理って何だ？人の踏み行う正しい筋道、正邪、善悪の心、その心意とまで解説すれば分かるか。でもな。どれだけ立派なことを主張しても、人間生きていなければウンでもなければスンでもない。この地で朽ち果てて土になって大地に還るのだと言えば聞こえはいいが、そうは素直にはなれない」

「は、はい…」

「さあ、おれたちはこれからどうなるか。生き残ることを大命題とした場合、自分で自分の道理・道徳<sup>②</sup>を作らねばここでは生き残れない。この戦場という場では自分が考え、作り出したものが、道理・道徳<sup>③</sup>だ。分かるか？生き残るための知恵を持って！これがおれの持論だ」

友近は眼鏡の縁に手をやった。

これは、持論を展開する時の、「博士」の癖であった。「この他国の地では勝手に軍隊が国家論の上に立って、非道徳という道徳を作っている。まず、人が耕した畑であれなんであれ、軍隊を保持するための盗む行為があり、日本軍は退却の途中、調達と称して地元民から農産物や物品を略奪して来た。家畜とて同じことだ。日本軍の軍票を発行して物資を買ってもいるが、これは商取引行為ではなく、一種の詐欺行為だ。今は、その軍票の価値も下がって、貯め込んだ者たちは、そのことも恨んでいる。本当の紙切れになってしまったってことさ。これとて、盗む道徳が正当化された結果に生じたことだろう。もはやこれは既定の事実だ」

「盗んではならないのでありますか」  
「いや、本来は盗んではならない。だがな。そんな道理・道徳論も通用はしなくなることだろう。もつと、われわれが飢えればな。いや、もう、飢えは始まっている。暗くて見えんのが幸いだが、おれもお前も骨と皮だけの生き物になりつつあるじゃないか。自分の顔を鏡で見たとしたら、おれなら他人顔をするな。ははん、この顔はだ。穂坂の顔に違いないと、自分に言い聞かせるだろうよ」

「自分とて：そうかも知れません」

この後、穂坂は小さく笑った。

事実、友近の眼鏡の奥の目も引っ込み、頬はげつそりとこけていた。自分の顔とて同じようなものと、穂坂も思わざる得なかった。

一回り、どの兵も小さくなっていた。

「われわれ一兵卒には、ろくろく食い物は回って来ないが、佐官級ともなれば白いメシを腹一杯食っている奴もいるらしい。階級制度悪用のこれは収奪行為だ。みんな、われわれ輜重隊が台湾から船で運び、肩に背負ってだ。この奥地の山の中にまで届けたものだ」

この話にも、穂坂一等兵は頷いた。

「おれの話、わが部隊で耳を傾けてくれるのはいまのところは穂坂ぐらいだな。耳学問でも何でも聞きしに勝るものはなしだぞ。そうだ。この機会にもう一つ大事な話をしておこう。その内、機会があれば部隊のみんなにも話してみたいとは思っていたんだが…」

「大事な話でありますか？」

「おれが口にあること、いまはそんな暇もないからだが、本来的に言うところには軍法会議もんだ。それら

いのことは分かっている。一見、反戦論者のように見えるからな。まあ、難しい話は止めよう。さつき、母親の話をしたが、実は、おれの父親は軍人、それも将官でな。おれはそいつが子供の頃から大嫌いで、何が苦痛って、あの軍刀をどんと据えてだ。偶(たま)に家に帰って来ると、記念写真を撮りたがる。いつも、子供のおれを傍に立たせておいてだ。自慢の写真ってわけだ」

「自分なんかは、碌々、写真もありません」

「特権階級を誇りたかったからだろう。それで、おれが十五の時のことだが、これまでの父親と撮った写真を、おれはびりびりに破り全部捨てちまった。よかったか、悪かったか。その答えは、二年後の昭和十四年に起きた、ノモンハン事件<sup>ノモンハン</sup>がすべてを物語ってくれた。関東軍の者なら誰でも知っている話だ。ノモンハンの国境地で日本軍がソ連軍に無謀な戦いを挑んだ結果、ソ連軍の圧倒的な機械化部隊によって、日本軍の守備隊が蹴散らされた事件さ。まあ、この事件と関係あり。将官だった父親は軍上部から責任を取らされ、強要された挙句に、拳銃で頭を撃って自決した」

「そのような…」



としか、穂坂は答えられなかった。

ノモンハン事件は、当時の満州国と、モンゴルとの<sup>①</sup>国境紛争<sup>②</sup>の一つで、何度かの小競り合いがあった末、昭和十四年八月に本格的戦闘となり、日本軍が孤立、惨敗。

その際に、ソ連軍に多くの捕虜が捕えられた。<sup>③</sup>生きて虜囚の辱しめを受けず<sup>④</sup>の軍隊訓とも思いき禍々しきこの文句は、この時を契機に生まれとされている。

以後、日本軍人の<sup>⑤</sup>美風・精神の拠り所<sup>⑥</sup>ともなり、多くの兵士たちに無為の死を強いることになった。

「そのことで軍隊を恨んでいるわけじゃない。おれの人生の中で、おれは父親を一度は抹殺した。写真を引き裂いたってことは、おれが父親の存在そのものを否定したってことだからな。今もつて、この父親がおれは嫌いだ。なぜ、男と言うのは<sup>⑦</sup>挙(こぞ)つて、誰もが戦争をしたがるのか。暴力そのものだ。そんな男どもの血をおれは引き継ぎたくはない」

洞窟の闇に向って、一人、友近は呟いているかのようでもあった。もちろん、闇は何も答えない。ぽったん、ぽったんと、岩雫が落ち、その雫の音だけが洞窟内に響いた。

「…次に、現実論の話をしよう。おれとお前の明日からの食い物のことを考えておかねばならんな。穂坂、われわれは、自戦自活せよ」と言われているが、もはや、戦うことはない。戦いようもない。そんなお題目戦争は無理だろ。自戦、そんなものは、もうここには存在しない。自活だけでいい。これが戦いだ」

「二人だけでありますか？」

「心細かいか？このおれと二人切りでは？原隊追及もこの地点なら選択肢には入るが、おれは一人でも生き伸びてみせるぞ。その覚悟だ。ここはお国を離れて何百里、ともかく、肉体だけは生き残らねばな。そうでなければ、心なんてのも付いては来ないんだから。なあ。人間性善説の道徳話にはもはやおれは付き合っではいられない。穂坂、おれが何を言おうとしているか、その内、分かるようになると思う。この地で、食い物を食い尽くした後の話だな。おれが切り出した、肉体が生き残るための道理・道徳論の序論話だけは、頭には入れておいてくれ」

念を押すような口調で、友近は言った。

岩雫の音が、闇の間を静かに揺るがせた。

寒くて、二人ともがたがたと震えていた。

やっと暗さにも目が慣れて、ごっこつした岩天井が望めた。いかにも寒々しい。

「環境劣悪、食い物を漁る前に死ぬかも知れんな」と、ぽつんと、友近が言った。

11

朝が明ける頃、穂坂は全身に悪寒を感じ、一人、呻いていた。高熱が出ていた。

マラリアの再発症状だった。

三日熱、四日熱があり、人によって症状は違うが、命取りになることが多かった。特効薬キニーネがあれば、症状が、一時的に和らぐことはあったが、兵士たちには、そんな貴重な薬は、最近は、一切、回っては来ない。

回復は自分の体力に頼るしかなかった。

「おい、厄介なことになったな。病状は夕方に出るときれているのに、朝からか。この寒さにやられたのなら、下手すると肺炎も併発しかねないな。さて、どうするかだ」

友近もまた呻いた。手の施しようがない。

この場合、マラリアの高熱は出切るまで見ているしかなく、その症状も激しい。

悪寒に襲われると全身ががくがくと震えて体が波打つ。余りの激しさに、毛布など被せて、大の男が何人かで、患者の体を押さえ付けようとしても跳ね返されてしまうほどだった。高熱が下がるのを待つしかないのだった。

「自分は持ち応えてみせます。友近兵長殿は自分を見捨てて頂いても結構であります」

「戦場では、一切、同情は禁じられているがな。だがな。そうもならんだろう。昨日からの二人だけの友、盟約もありだ。それに、さつきから考えていたんだが、斬り込み隊には不要だから飯盒を持たされていない。飯盒を調達しなければ不自由をする。まあ、殲滅されたどこかの部隊の壕でも探れば、飯盒の一つや二つ、手に入れられないこともないがな。ひとまずは原隊追及、昨日敵機が行った方角におれは向かい、分隊長にお前の救出を願ひ出よう。こればかりは軍隊組織が役に立つかも知れん。お前の命が掛かっている。これはおれにとっても、今は人間としての大事な選択肢の一つであるのやも知れぬ」

もう、返事も出来ず、穂坂は呻っていた。その枕元に、友近は自分の分の乾パンをそっと置いた。穂坂の水筒に水も注ぎ足した。

「おい。生き残ることだ。明日の後には次の明日があるだ。どうあっても生き抜け！」

自分に言い聞かすような口調で、改めて、言い置き、友近は岩穴を出て行った。

論理的なもの言いを展開する人物にしては珍しい行動だと言えた。よもや、この、友近兵長の垣間（かいま）見せた非論理性の思考が、とんでもない方向に向かおうとは、この時点では、二人は知る由（よし）もなかった。

三、四時間後、穂坂の高熱は少し下がった。

この岩穴に居る限り、どうせのこと命を保つことは出来ない。いつまでも寝ているわけには行かなかった。岩穴を出た。ふらふらしながら、穂坂は歩き始めた。

やはり、原隊のある高い山々の頂きを目指していた。食欲もないので、食うことに気は向かなかった。

記憶を辿りながら元来た道を探して歩いた。

やがて、真つ暗闇の時刻が訪れた。

草むらに仰向けに寝て、一休みしたが、「もう死んだ身」だと、穂坂は思った。何より、「漆黒の闇」というのは怖い。距離感が一切無いから、一切、自分の体の在りようが確かめられなく、「闇の宙」に、浮いている「怖さ」のみが、ひしひしと迫った。

つまりは、ここが「死の国」だと、思う以外にはなく、何度か、胸に手を置いてみた。

心臓の脈拍はあった。まだ体も暖かい。

眠りに落ちる時も、死を恐れた。それでも、疲れのせいで、すっと眠りに落ちる時は落ちた。そんな無体な日々が続いた。飲まず食わず、四日、さまよった末に、バレテ峠の麓の地にある陣地に辿り着いた。

味方の地だと分かったのは、バレテ峠への道が始まる三叉路あたりの山々が、一様に、焼け焦げて丸裸になっていたからだった。

ドラム缶に入れた焼夷弾式の油、(ナフサ・重油など)を、空から敵機は撒いたに違いなかった。密林の焼き尽くし作戦が、この地点でも始まったらしい。

雨も降ったことで大方は鎮火していたが、それでも、燃え残った屑の山は燻っていた。

煙が何ヶ所も立っていた。

そんな道標を辿って、やっと、急峻の山道を這うように歩き、穂坂は帰隊を果たしたが、そこには、予期せぬ事態が待ち受けていた。

みんなの顔が緊張で引き攣っていた。

「穂坂一等兵か。よく戻ったな」

そう、声を掛けてくれた小笠原曹長も、穂坂一等兵を迎えた同じ隊の者も、なぜか、一様に、戸惑った顔で、嬉しさを表さない。

小笠原曹長の唇はわなわなと震えていた。

その場の状況は、すぐさまに読めた。長い横穴式の洞窟地下壕のある大隊本部前、小さな丘の上にある一本の樹の根元に、友近兵長が後ろ手に縛り上げられていた。やや、斜め上の場所だったので、まだ、穂坂一等兵とは目を合わせてはいなかった。

あたりは樹木が生い茂る谷合いの地、上の方から順に、大隊本部、そして、五メートルほど離れて将校用の穴、次が下士官用の穴が掘ってあった。ここらあたりは特別の領域、兵たちは余り踏み込みたがらない場所だった。

その時、大隊本部の地下壕から声が飛んだ。

高い声があたりに反響して伝わった。

「準備が整ったら直（ただ）ちに執行せよ。命令、陸軍兵長友近正晴、守地を離れたカドで銃殺に処す」

その大隊長の命令を受けて、副官の森高副官が地下壕から出て来た。

急いで、丘の方角に足を運んだ時、折悪しく、ひよろひよろの病人姿で現れた穂坂一等兵と、森高副官は鉢合わせる羽目となった。

「官姓名を名乗れ！」

「はっ、小笠原分隊、穂坂真吉一等兵であります」

「もう一名の敵前逃亡者か。貴様も銃殺だな。大隊長の指示を仰ぐ。おい、その当番兵、穂坂一等兵の身柄を確保せよ。一名追加、当番兵、銃殺の場所にもう一つ穴を掘っておけ」

こちらはキンキン声だった。任務遂行のために気分が高揚し、<sup>ふ</sup>ところ小僧<sup>ぞう</sup>そのものに成り切っていた。当人は、正確に時を刻んでいるつもり、動作もきびきびしていた。

言葉を失った小笠原分隊長が、その場に立ち尽くす。

甲西伍長が「こげんなこつか」と、呟いたが、誰にも聞



こえてはいなかった。

結局、穂坂一等兵も後ろ手に麻ロープで両手首を縛り上げられた。友近兵長と二人、木の幹に隣り合わせ、次には太い蔓で、穂坂一等兵の体も三重がらめに縛られた。病い上がりなので蔓に支えられて、やっと立っていた。

「友近兵長、穂坂一等兵、お前たちの命を小笠原分隊に預けてくれるよう大隊長殿に頼んでみる。もう一度斬り込み隊に出るよりない」

小笠原分隊長が縛られた二人に言った。

「斬り込み隊に出ます」

その意を承（う）けて甲西伍長が答え、他の総員が、低くではあったが、「おうっ」と応じた。みんなが気持ち一つにした。

堀上等兵、島崎上等兵、分隊長以下六名がこの場には居合わせた。

この展開だが、小笠原分隊長が大隊長の命を仰いでいる最中に、急ぎ、第二大隊の伝令下士官が駆け付けて来た。よく透る声があたりに響いた。みんなにも聞こえた。

「井出大尉報告、わが第三大隊の前方に敵の大部隊進入、弾薬、糧食欠乏、斬り込み不能、速やかに搬送頼む。大

隊副官以下十六名戦死、負傷十七名、戦闘人員七十六名、報告終わり」

この件で、友近兵長、穂坂一等兵の処刑は中止、応援部隊派遣となり、急遽、第一大隊麾下（きか）の一小隊が現地に向うことになった。この部隊は「正規軍」で斬り込み部隊とは違うが、軍隊でのいわゆる員数合わせ、第三大隊の井出大尉の顔を立てての部隊派遣となった。派遣隊、成瀬曹長の指揮する歩兵小隊に、輜重任務を負った小笠原分隊が加えられた。歩兵から元の輜重隊への任務替えとなるが、第三大隊の井出大尉の支援要請は、弾薬・糧食の搬送も求めていた。

小笠原分隊としては、起死回生、汚名挽回の機会を与えられていたことにもなる。

だが、小笠原分隊は幸運に恵まれることともなった。急を告げていた第三大隊の陣地は、焼き払われた密林地の一郭にある最前線、歩兵小隊は焦眉を決する戦場に急行するため先を急ぎ、小笠原分隊とは、途次、袂を分かった。弾薬に、糲（もみ）の糧食などを、背囊に詰められるだけ詰めての行軍なので、どうしても先行部隊とは距離が空いた。

食うものも食っていない体力不足の輜重部隊、よれよれの、この荷馬同様の部隊が運べる量は知れていたのだが、先遣部隊に遅れたのが幸いした。

二時間後に、小笠原分隊の運命が決した。

焼き払われていない密林地帯を迂回しながら支援に向った小隊・本隊はゲリラの前哨部隊に、その地帯で遭遇して全滅した。

その機銃連射の音を背に小笠原分隊は戦う前に持ち場から退却した。みんな後ろは振り向かなかった。敵前逃亡と取れないこともない。焦土地帯に沿った密林地帯を辿ったのも幸いした。帰隊の時、自分の辿った安全な道を友近兵長が教えた。その貴重な体験が、この場では生かされることになった。

## 12

「おい、みんな、これからどうするか。みんなの意見を訊きたい」

小さな洞窟の中ではあったがここは安全地帯、岩の壁は直接に弾でも打ち込まれない限り、ひとまずは雨露だ

けでも凌（しの）げそうであったし、何より密林地帯で、ここまで来ると、ゲリラ隊にでも出会わない限り、ひとまずは、非戦闘地域でいられるはずだった。

それでも沈痛な表情のままに小笠原分隊長が言った。置かれている立場ばかりは厳しい。

全員六名、暗い洞窟の中で顔を見合わせた。

「おれは生きている。銃殺刑で始末されるところだったがおれは生き残った。みんなも生きるべきだ。いや、生き残るべきだ。もはや、ここは戦場ではない。食わねば死ぬ。死なないために食う。そのための自活戦と、これからはみんなが認識すべきではないか」

顔の頬が見た目にもげっそりとこけていた。ロイド眼鏡が鼻のところ止まっているのが、儂げに見えた。博士<sup>3</sup>の面影もない。

「よかとね。どっちを向いていると思うとつ。弾の飛んで来るとこね。ここんは」

甲西伍長が言った。「しっ」と、おれを叱咤するような舌打ちの声も発した。

「そんな通りじゃ。弾除け部隊じゃ生きてはいけん。なあ、なんもかも、もう許してつかあさいのおじゃ。ワシの口

癖、これからも自分のために使わせもらうけんのお」

堀上等兵の久し振りの広島弁が出た。

旅館の跡取り息子なので、おっとり型の人物だが、決意を述べた時の顔は、きりりと締まっていた。やや色白面長なので、痩せこけると、青びょうたんのような顔付きになった。

「島崎上等兵はどう考えておるのか？」

「はっ、以下同文でア・リ・マ・ス」

分隊長の問いに島崎上等兵が答えた。

語尾が伸びた分、笑いを誘い、小さくではあったがみんなが笑った。どんな場でも、笑いを提供する男、この場も和ませてくれた。

母一人、子一人の家庭環境だったが、いつも明るい母親のお陰で、みんなに好かれる性格に、島崎上等兵は育ったようだった。

最後に、穂坂一等兵が発言した。

「自分も今度は命を助けられた一人であります。道に迷っている最中、自分はこんな人知れぬ他国の地で死ぬのかと自分の運命を呪いました。それでも、帰隊した時、銃殺される運命にあつたにも関わらず、あの時、死ぬ前

に、にぎり飯の一個でも支給されれば、これで死んでもいいと自分は思いました。今も、なにかを喰いたい。

分隊長、自分はそれだけであります」

「それは友近兵長とて同じことだろう」

小笠原分隊長が付け加え、言った。

食うや食わず、穂坂一等兵は四日間、密林の中をさまよっていたのであったが、友近兵長も三日間、それに、帰隊した後の一日、水だけしか飲まされてはいなかったのだ。みんなしーんとなった。

「この分隊は、斬り込み隊でありませんから、飯盒付き、それに、背囊の中には多少の糲もあります。この利を生かさぬ術（て）はないと思います。これからの自活戦であります。小笠原分隊長が食糧の公平な分配の責任者になることをお願いします。みんなが食糧を集め、みんなが公平に食する。実はこれが一番難しいのでは。従って、自分は只今は腹は減っておりますが、私心は持ちません。特別の配慮は結構であります」

改めて友近兵長が眼鏡の縁に手をやりながら言った。ここ、何日間での憔悴ぶりが目立っていた。眼鏡の奥の目も小さく見えた。

「そうか。われわれは自活部隊と言うことか。それでいいだろう。こうなると、博士のいろんな知識がこれからは生きそうだな。いい知恵を貸してくれ。よろしく頼む」

「はっ、軍隊の規律は必要ありませんが、生き残るための規律は大事です。みんながそれぞれに勝手な言い分を主張しては、分隊は自爆作用を起こし、空中分解をして、結局は、自分たちの首を絞めることになります」

「よし、分かちよるつとお。友近兵長の言う通りねっ。全員、隊長には従うべきではなかつ」

みんなを代表して甲西伍長が言った。直截簡明（ちよくさいかんめい）、この男の真つ正直さ、男気が生きた。この時を境いに、小笠原分隊は自立した新らしい分隊として生まれ変わった。

食うための部隊、生き残るための部隊となるのだが、往くも地獄、戻るも地獄の過酷な日々、戦争の真相の厳しさそのものが彼らを待ち受けていた。

終戦の日を迎える、ほぼ四ヶ月前、四月末のことで、日本本土なら、花が咲き誇る季節の頃であった。

雨期に入ったルソン島の山岳地帯は、鬱陶しい日ばかり、彼らは、人智を超えた厳しい自然とも対決する羽目

となった。

13

何日間の平穏なひとときが過ぎた。

みんな、軍隊の規律から解かれた。

また、人知れぬ山間の地に踏み入ったので、敵軍の攻撃の対象から逃れられた。束の間の『自由の時間』を得た。ひたすらに、彼らは、すべての災厄から、身を守る法を選んだ。こうなると「私語部隊」の本領が生きた。

「いんまだけでも、せめて人間らしか。ちつとでも休みたかね。ばってん、精ば出して、みんなの小屋ば作らんとね」

甲西伍長の申し出で、小笠原分隊のみんなは密林の奥地で足を止めた。わずかだけの草地を馴らして、俄か仕立てのニツパハウスをその場所に建てることに「衆議一決」した。

倒木の何本かを、拾い集めて、小屋の柱にすることになった。みんな、気分が浮かれていて、久し振りに各人の顔に笑みが戻った。



この時、島根県出身の小笠原曹長が妙な掛け声を掛けるようみんなに命じた。それに応じながら、みんなは笑い呆けることになった。

一、二の三の掛け声は、島根地方ではこのような掛け声になるとみんなに告げた。

「ほれえ、おつ、ぱい、さん！じゃ」

力が入らなくなる者もいたが、無邪気そのもの、倒木を手にする度に、みんなは、「ほれえ、おつ、ぱい、さん」と、嬉々として声を上げた。お色気話にも縁がありそうで、みんな気に入ったと見えて、これ以降、しばらくは、小笠原分隊ではこの掛け声が罷り通った。

真面目振りばかりを見て来た隊員たちは、分隊長の意外な点も発見して大喜びもした。

椰子の葉で、ひとまずの壁を設え、屋根を敷いた。

あくまでも「仮の住まい」であった。

柳細工職人の腕を生かし、島崎上等兵が椰子の葉を巧みに折り重ねて敷物を作った。

収奪品の靱を鉄かぶとを用いて木の棒で搗く。七部搗きだが白米に近い。この時期でも、当番兵を使い、将校連は、搗き米を口にしていた。やっと、彼らにも番が

回って来た。

今度は、無煙かまどが調達された。

煙を出すと、直ぐに、偵察機が飛来するから、洞窟の横穴の深くに飯盒を据えた。

無理やりに無理な場所を探り出し、火を燃やすから、無理かまどで、余り、狭い洞窟では自分たちが燻り出されることにもなる。

火種を作るのに、博士の知恵が生きた。逃げる道々で、骨だけになった水牛の角を、友近が兵士たちに切り取らせた。小片にして切り取ったその角を隊員たちが持ち合わせていた。原住民の火起こし術の様を、観察眼を生かして、友近は学んでいたのだった。

水牛の角をマツチ状に四角く切り、巻き煙草様の穴を開け、その穴に火種になるモグサを詰め込み、同寸の木の棒で穴を擦ると、直ぐ様に、火が点いた。絶妙の術だった。この飯炊きには、甲西伍長が元料理人の腕を揮った。あれこれと、煩い分、日本出立以来の旨い飯に、みんなは有りついた。

飯盒の蓋に半分ほどの白米飯がみんなの口に入った。

おかずは何もなかったが、それで十分だった

みんなが夢中で口にした。

夕方の六時過ぎのこと、さつきまで晴れ間があったので、まだ、あたりは明るい。

何より、和気藹々（わきあいあい）、「これで、もう、死んでもいい」旨の言葉を何人かが吐いた。

みんなは口々に、「貧乏百姓の出」だとも言った。

事実、軍隊に入ったら、白米メシが腹一杯食えると伝え聞いて、農家の次男坊、三男坊などは、志願して兵になった者も多かった。どこの家でも、大体は「一汁一菜」で、飯に味噌汁、沢庵だけというのも普通だった。

それほどに、日本全体が貧しい時代で、国内にも産業と言えるものなど数少なかった。

この後、「私語おしゃべり部隊」は賑やかになった。みんな、機嫌が良かった。

自分自慢にお国自慢で話が盛り上がった。

飯が旨いと褒められた後、甲西伍長が上機嫌で料理人の心得などを披露した。

「尋常小学校を出て、日本料理店に料理人で丁稚奉公だいな。追いまわし。三年で、ただ働きの代人（カセド）稼業だつちや。後は、揚げ物、焼き方、煮方、碗方、

と来て、五年、やつと、裏方から板前になったのに、贅  
沢は敵でぐらり来て商売上がったり。満州部隊にいた  
時はこれまた裏方、飯炊き隊たい。ここで、やつと、  
ちびつとだけ、板前の腕ば揮うたうたい」

「花の板長が軍隊で花咲いたって話か。いいじゃない  
か。久し振りにホカホカの旨い飯を食わせてもらった。  
感謝、感謝だ。この密林の中、草の根と葉っぱばかりで  
料理するまではいかんと思うが、板長さんの腕の見せど  
ころ、まあ、包丁捌きの方もよろしく頼むよ」

「しつ、兵長、そうは言うが、ゴボウ剣一つ、どう、ふ  
るっても、そこら辺に、肉なんぞ何もなかとね。まちつ  
と、喰いモンを見つけんといカンばい。うまかと、オ  
イも言われたいとじゃが、喰いモンば手に入れんと、腕  
も揮えんと。みんな、このまんまじゃと、飢えて渴(かつ)  
れるとね」

得意口調の時の癖で、「しっしっ」のひしり声をも混じ  
ったが、甲西伍長が本音を吐いた。

一瞬、みんな、しゅんとなつたが、食い物を口にした  
ばかり、みんなの話に花が咲いた。

それぞれ各人の「境遇話」を聞いているだけで、穂坂

一等兵は楽しい気分になれた。

職人技についての話は、甲西伍長だけでなく、島崎上等兵の柳細工職人の話も面白かった。兵庫・但馬地方は柳の木が多く、柳行李、柳籠、花籠などの生産地としても、全国的に知られていた。軍隊でも、柳行李は必需品、トランク代わりに使われていて、戦場にまで私物品も含めて、幾つかの柳行李を持ち込んでいる将校連もいた。もちろん、一兵卒には私物品など縁はない。

手に入り難い貴重な品物なのに、職人たちも、戦場にと狩り出されていたことになる。

「わいは、いがり股<sup>ゝ</sup>やから、蛙足と言われて、よう、少年の頃はからかわれたんや。奉公に出たんが伸び盛りの年やろ。座ったままの姿勢で仕事をするから、ガニ股<sup>ゝ</sup>になつてまうのや。軍隊で、気を付けつて号令掛けられても、膝んところがかくつきよらん。そいで、そのたんにびにビンタや。ほんま悔しい思いをしたで。そいでもな。暑さ、寒さには強い体になれたんはよかつたんかも知れへん。柳は湿気がないと折れ易いから、夏は扉は開けたまんま、冬は火鉢なしや。この山ん中、朝晩の気温の違い、わいはこればかりは強いんや」

「奈良の正倉院御物の中にも、但馬産柳箱<sup>ゑ</sup>が収められているって話を聞いたことがあるな。二千年も続くこれは伝統工芸だ。こんな、尻に敷いている敷物を、島崎卓治様に作らせたたりするのは、これは罰当たりというもんだ。みんな、心して、座るべしだな」

物知り博士が島崎を援護したので、彼は鼻高々であった。自分たちが尻に敷いている莫蔭ふうの敷物を、みんなは、改めて見直した。

莫蔭（むしろぎ）は椰子の葉が敷き詰められたものだったので、何の変哲もなかったが、何本かの倒木を組み立て、建て屋造りにされた小屋の一角には、小さな窓が一つ開けられていて、そこだけは、竹編みの枠が一つ作られていた。

それは、丹精を込めて、島崎が作った手製の窓枠で、縦と横に紋様が編み込まれていた。

次に、堀上等兵が「世情の話」をした。

「旅館言うても、軍需景気で持っているようなものじゃったけんのう。そやけんど食い物はあまくりかえるほどある所にはえっとあったけん。将校の偉いさんは新鮮な魚でも持ち込みじや。何回も、宴会をやらせてもろうた

が、去年頃からぱったりで。おえん。広島軍需工場もいけんようになって、なんや、いつの間にか、うちかたも、出征兵士の家族たちの泊まり宿になったじゃ。

宿でも食事は出せん、風呂は立てんようになって、こうなったらどうたらこうたら。ふうが悪うなつてえ。勘弁してつかあさいの<sup>で</sup>、オシマイい」

ひょうきん者らしく堀は笑いを取った。

「みんなで故郷の唄でも歌いたるところだが、誰かに聞かれてはまずい。どうだ。堀の話の続き、故郷の話ならいいだろう。穂坂は鳥取市の出身だったな？鳥取と言えば大山だ。絵葉書か何かで見たことはあるが、美しい山、お前の自慢話も聞きたいな」

と、友近が穂坂を促した。穂坂が頷いた。

「ああもう、いつもお、雲か雪かを頂いておる山と思うとるちや。空からは風ばつかし吹いちよらいで、ほんにい、荒けた山だつちや。作物も取れん火山の地だで、あばかん山で、ありやいけんてえ。何だだ、いい思いはしとらんけなえ。見ている分にや、どこからもお、富士の山、美しい山な」

「あんねえ。尋常小学校出るまでは、オラ、貧乏百姓の

倅(せがれ)で、その後は、姉が嫁いだ。香川の開拓団と一緒に満州に行かいが、現地召集されて、そのまんま軍隊に居ついたがや。あんなあ、朝な夕なに見とった少年の頃の大山だけん、懐かしいぞいね、大山は。オラにとっては、故里の山、日本のお山、富士のお山なあ」

久方ぶりの島根弁が小笠原曹長から出た。

「ばってん、富士の山とお。オイはまだ本物の富士も見とらんとばい。生きて帰ったら、大山も、富士山も仰ぎ見たか。登ってもみたかね。みんなもそうすつとね」

話を受け継ぎ、甲西が言った。

同感の思い出で、みんなが頷いた。

改めて、口調を整えてから、穂坂が付け加えた。こちらは「天災の話」が加わった。

「ああそうじゃ。兵隊に取られる前の去年の九月十日の夕刻、鳥取には大地震があつたがな。えらい揺れじゃつたでえ。うちらも家が半壊だでえ、ほーんにびっくりしけな。みんな、この話、知っちよるきや？」

この話は、みんなが知らないと告げた。

時節柄、報道管制されていたので、被害の状況は伏せられていたのだ。



地震発生は、昭和十八年九月十日、震源地は旧鳥取県気高郡豊実村（現在は鳥取市内）の野坂川中流域で、震度6、マニグチユード7・2、極めて震源が浅く、鳥取市内の中心部は壊滅、家屋の全壊率は八十割を越えた。

その後、敗戦前後、この地震は四年間も続き、瀬戸内海の岡山にまで波及して、死者も千名を越えた。

「大山鳴動してねずみ一匹か。国にとって不利になることは一切知らされずか。例によつて大本営はちゅう、と言う鳴き声一つにしちまったわけだ」

「そうか。島根県出身なのに、満州に駐留しちよたから、なーんも知らなかった。鳥取地震か。島根も近いから大揺れだったろうな」

標準語に島根弁も交えて、小笠原が答えた。

「天災に人災か。これからは日本本土への米軍の空襲も本格的になるんじゃないかと、人災の方もおれは心配している一人だ。ここらあたりみたいに、徹底的に壊すやり方だ。内地の者のこれからのことも気に懸かる。天災は防ぎようがないが、戦争は人災そのもの、何とかならないものか。天地鳴動のこの物騒な世の中、天の怒りも買っていて、何だか、この世の終わりのような話が続

くばかりで、心が痛くなるよ。みんなのこれからも心配だ」

眼鏡に手をやりながら、友近が言った。

「すまんことじゃ。おつとろしい話をしてしもうたじゃ。なにがい足らんへん話じゃが、大山の裾野はなだらかであ、ほんに、季節のいい頃じゃったら美しいけえ。あの山は中国山脈のお、山また山の外れで、裾野を引いておるけん、その先は日本海、海も近いだっちゃ。弓が浜に境漁港なんぞと、海の幸にも恵まれておるけん。海のある方には、人の住む街も、ようけ、あらあね」

「中国山地の山々は日本でも有数の山岳地帯だ。地形的に言うと、列なる山脈の、山また山の海の果てに、大山は位置するってことか。このルソン島の閉ざされた山岳地帯ともよく似た地形ではあるな。そうか、この山の中からどこを目指すのか。やはり、東海岸方角を目指すべきかも知れない。前々からだが、台湾のある海の方角に逃れたら救かるといふ話も、軍隊内では伝わっている。筏を組んで海に出たら黒潮に乗れて、その内、日本の艦船に救出されて内地に還れると信じての話ではあるが、逃げ足の早い将校連は台湾に一番近い、北の果ての港、

アパリの方角に足を向けているというからな。海のあたりなら、平地もある。剣が峰の山ばかり相手にしているわれわれは山を越すだけで体力が消耗してしまう。食い物も手に入らぬままに野垂れ死にさせられる。いや、もう、みんな、すでにして、栄養失調状態だ。行く先を決めるのも重要となるな」

「博士の言う通り。やみくもにこの山中をさまよっていいわけがない。よし、明日からは向こうに海があると思える道を歩くことにしよう。ここからは東北方向か。その前に、このニツパハウスを拠点に携帯食糧集めをしてからだ」

直ぐに、小笠原が自分の考えを示した。

「後は、火が燃やせるなら、飲み水は熱湯消毒をした方が望ましい。それに、消し炭も持ち歩くべし。下痢薬は何もないが、昔から、消し炭は腸を整える作用ありとされている。もう一つ、塩が無くなると、脚気に罹って足が腫れ、歩行困難になってしまう。一人、取り残されると、命に関わることになるぞ。体から塩分を放出してはならない。唯一、人間の体の中にあるものだけが今は頼りだ。いいか。各自、自分の小便も飲むべし。わたしはもう飲

んでいるがな」

「小便は熱(あつ)かね。ばってん、舌を火傷することはなかが、ありや、えらいしこ、熱かもんよ」

と、言うことで、実行者の一人であることを、甲西が自分から名乗り出た。

他の者もこの法を用いることになった。

小笠原分隊長と友近兵長は二人してみんなのために知恵を出した。軍歴が長い分だけ、小笠原分隊長は地理や気象を読むのには長けていたので、高い山も山の稜線には、必ず細道があると主張し、まずはその道を探すことを隊員に提案した。

方角に関しては、友近兵長の「南十字星」の位置定め  
の観測術も生かさることになったが、「雨期」の訪れで、  
あいにくと、夜空も晴れていることが少なかった。

南十字星の近くにあるとされる暗黒星(コールサック)も、無限の闇に吞まれているのか、厚い雲に覆われた遙かな宇宙の彼方で、今は、ひっそりと息を潜めているか  
のようだった。

朝も明け切らぬ頃から、小笠原分隊の者たちは、食糧集めを始めた。

無人地帯に足を踏み込んでいたので、他の者たちに荒らされていなく、収穫はあるかと期待したが、実のところは、得る物はそれほどはなかった。

携行した銃を傍らに置いての、野良仕事。同様の行動で、到底、軍務とは言い兼ねた。

春菊に似ているのでシングクと名づけられていた野草をみんなで摘む。木の実も拾った。

草っ葉で、かたつむりを二匹見つけた。五センチほどもある南国ならではの大物だった。

川筋に出たので、五、六ミリほどの川ニナの貝を漁った。やっと、みんなで雑嚢に半分ほども拾い集めた。午前中一杯掛けて、やっと一日分の食糧、この程度では、

この先、小笠原分隊六人の兵員は生きては行けなかった。

一行は、やっと、午後の時刻に僥倖を得た。

木の実の成った樹林の向こうから、山猿の鳴き声が聞こえて来た。小笠原分隊長が耳敏く聞き取った。足音を忍ばせて、みんなが近づく。ざわざわと行く手の樹林が

揺れていた。初めて遭遇する山猿の群れだった。

「おい、全員で一斉に撃つか。撃ち損じたらそれでお終いだ。逃げられる。なるべく近づいて撃てる分の数発だけだ。ゲリラ兵にでも銃の音が聞き取られたら、われれの所在が知れてしまうが止むをえん。やろう！」

「背に腹は変えられんわっ。うまく仕留めたら、ありや、肉じやけん」

分隊長と甲西伍長の会話だった。匍匐前進、実戦ながらであった。至近の距離から、六挺の銃が照準を合わせ、狙いをつけた。

「撃て！」

分隊長の合図で、全員が銃爪を引いた。

「バン、パ、パン！」

乾いた連続音がした。「ばさ、ばさっ」と、樹林がざわめき立ち、何体かの個体が落ちた。

「おっ、ばつちりだ」「やったぞいね」「あっじゃいやあ」「いいやん！」

一発危急の時は、みんながみんな、お国コトバに戻るらしい。歓喜の声だった。

百中命中とは行くはずもなかったが手応えはあった。

誰が命じたわけでもなかったが、全員が樹下に向けて走った。倒木なども邪魔しているので、直ぐには行き着けない。やはり、一番乗りは、猪突猛進、こつて牛の甲西だった。早速に勝ち名乗りを上げた。

「貴方(あーたがた)はあ。うまかつモン、猿めがおんなさる。来(こ)こけ、来なっせ！」

三匹の猿が射止められていた。親猿ばかりではなかったが、誰も気に止めてはいなかった。

収穫物の数を確かめていた。

「弾が当たるか当たたらぬか。運、不運で、生きるか、死ぬか。どっちかしない」

とだけ、ぽつんと、友近が言った。

逃げ去った猿の方が数が多かった。友近の眩きは、みんなの耳には入っていなかった。

それでも、友近は動揺しているふうではなく、猿たちが群れていた木に実っていた果実をもぎ取るようにみんなに教えた。「猿が口に行っている物なら毒はない」とその持論を展開した。これは、バンザクロの赤い実で、スモモのような甘酸っぱい味がした。

ニッパハウスに戻った時からが、また、一騒動となっ

た。どうやって捌くか。もちろん、甲西が自らで名乗り出たが、まず、ゴボウ剣を水牛の角を借りて研ぎ上げた。包丁捌きのほど、どうやら職人技が期待出来そうだった。

万事、拔かりなく、甲西はやり遂げて行った。格好の平らな岩の上で、手早く、ゴボウ剣の刃先を傷つけないように心配りをしながら、三匹の猿は捌かれた。肉片と臓物に別けられた。みんなは感心して眺めていた。

「平等に分けるとね。臓物が一番うまか。いっちよん、栄養つけるにはこれに限るじや。みんなあ、血まで啜って食うとよかね」

「ようし、これで一週間は身が持つわいね。よかった。よかった。猿様々じゃだあ。さあ、みんなで栄養をつけようや」

小笠原が指示したので、みんなが飯盒の蓋を差し出した。甲西が驚掴みにした臓物が、各自の食器に分けられた。その六等分の分け前の量を、小笠原分隊長が目分量で測った。

「猿は人間様に似ておるけえのう。なんじゃ、気味が悪いのう。いんや。生唾が出ちよるう」

これは堀の文句だった。全員、腹がぐうーと鳴ってい



た。もう、四ヶ月も肉にはありついていない。

その分、肉が削げて、全員が骨と皮、痛々しいほどに痩せ細っていた。

次に、友近が一説を垂れた。

意味深い事柄も含まれていたのだが、友近の腹の内までは、まだ、兵員たちは読んではいなかった。仲間が仲間を食うやも知れぬ掟<sup>せう</sup>のことで、そんな「予感」が、すでにして友近の胸の裡にはあつたようだった。

『死んだ兵隊の肉を喰う それは最高の道理・道德だった。さらに生きた兵隊の肉を喰うのも 個人にとっては最高の道理・道德でありました』の、穂坂真吉の告白の件りは、多分に、友近正晴の考えに影響された上での発言のはずだった。その幾分かの意味のほどは、この時の友近兵長の言にも含まれていた。

「その名も人類猿様々<sup>さ</sup>ってわけだ。人間に食われてしまうことになるが、ものは考えよう。人間の血肉になればだ。お猿さんも、一步、人間様に近づくのやも知れんぞ。霊長類になれるってわけだが、いやいや。これは人間様の驕<sup>おご</sup>った思いか。そうだ。人間になれ。人間になれ」と、わたしは呪文でも唱えながら、一気に、この「ウマカモ

ン」を啜ることにしよう。わが身と共に生きるんだぞ、と、言い聞かせながらだ。この地で人間が生き残る法だが、もはや、餓鬼地獄に堕ちているのは間違いない。その内、手段を選ばずってことになる。みんな、心して、これからも、好き嫌いなし、何でも食う精神を養うべしだな」

そう、友近が口にしたのもは無理はなかった。

血生臭い匂いが鼻を突く。とろけたな臓物の形状とも相俟（あいま）って、手が出難くはあった。

「ぼってん、いたらんこつ、旨（うま）かつ、ほれ、オイはこの血から啜るつとね」

友近の言を諫めてから、自分の手指についた血糊を、音を立てて甲西がしゃぶった。

「うまか。うまか」と、通ぶりを示す。

臓物の旨さについて、やつと、みんなも夢中になった。血の味は、おのれ自身の血になるはずだった。がつがつと平らげた。いや、飲み込んだ。やつと、みんなは一息吐いた。

洞窟穴の、無理かまどに、今夜も火が点けられた。

飯盒に湯が沸かされて、猿の肉片が煮られた。一人、一

片ずつ食う。

削がれた肉は、携帯食にするために、甲西が燻製仕立てに仕上げた。各人に分配された。

収穫した川ニナも携行保存食とするために、甲西の発案で飯盒で炒られて加工食にされた。

固い貝殻ごと口を入れられるので、豆のようにポケットに忍ばせて、移動中でも、ぽりぽりと音を立て噛み砕けるので、<sup>、</sup>特製炒り豆<sup>、</sup>は携帯食として珍重された。

この夜、眠りに就いた時、真つ暗闇の中、みんなは野太い野鳥の声を耳にした。何の鳴き声かは知れず気味が悪かった。<sup>、</sup>ルソンふくろう<sup>、</sup>の名のあるふくろうの鳴き声であった。

「ぼあ、ぼああく。ぼほほう」と鳴く。

<sup>、</sup>ふくろう博士<sup>、</sup>が解説を試みた。声の正体は、<sup>、</sup>森の賢者<sup>、</sup>とも、<sup>、</sup>森の番人、守り神<sup>、</sup>とも称されているふくろうであった。

「ごろすけ、ほー、ほーと鳴く。ふくろう様だ。<sup>、</sup>不苦勞<sup>、</sup>で苦勞せず。福の字をかぶせて、<sup>、</sup>福老<sup>、</sup>、いい話をすれば、語呂合わせだが、福のある路(みち)で、<sup>、</sup>福路<sup>、</sup>とも書く。ふくろうは夜だけのことだが、先を見通すほどに目が良

い。未来をも切り拓く眼力があるそうだ。その力が借りられれば、これからの行き先、話は明るくなるが、さて、どうだろう。この地で聞くふくろうは、ボロ着て奉公、ボロ着て奉公」と鳴いているようにわたしには聞こえるな。みんな、そうは聞こえないか？」

「ボロ着て奉公……。ふくろう博士の言う通り。人知れぬこんな山人中、身も心も、ボロ着て奉公、でござんす。そんな通りじゃなあ」

しみじみとした口調で、小笠原分隊長が、その説に応じた。一座の者は話と同調した。

また、遠い闇の向こうで、ひとしきり、ふくろうが鳴いた。誰の耳にも、ボロ着て奉公、ボロ着て奉公にししか、聞こえていなかった。

15

長い道のりとなった。山岳地帯を逃れて、小笠原分隊の者たちは、北東方角の海があると思われる方向を目指していた。

地名としてはカガヤン大河を挟む東山岳地帯、バンヨ

ン、パユタゲ、ツゲラガオ、カタランなどとなるが、一行には地名などは、一切不明であった。

進むほどに、彼らの一行は「敗残の日本兵」たちと、各所で、遭遇することになった。

バレテ峠陣地を「最後まで死守せよ」と命じられた鉄撃部隊も、五月初旬には完全に壊滅、敗残の兵たちが大挙して峠の山を下った。

戦う場も、過酷なら、逃げる道も過酷であった。すでに、彼らは消耗し切っていた。

片腕のない者、隻眼(せきがん)の者、失明者、敗れた軍衣、靴を履いている者は半数に充たず、裸足の者がほとんどだった。

帯剣は重いので捨て、蛮刀のように、刀身だけのゴボウ剣を肩に掛けていている者もいたが、その多くは丸腰姿、水筒すら持っていない者もいた。『穂坂真吉の戦記』にある地獄絵図が、ここからは、さらに展開されて行く。幾つかの山を下った頃、仲間の部隊とはぐれた、放浪者の兵の一人と会った。

ボロを纏った幽鬼の姿なのに、この兵はにこにここと笑っていた。何やら唄を歌っている。

「笑いキノコにやられたな。あいつは幸せ者だ。ああや  
つて、この地獄道を笑いながら歩いていられるのだから  
な。やれやれだ」

道々、彼らの部隊の者は、友近の忠告により、極力、  
キノコ類を採取するのを止めた。笑いキノコだけでは  
なく、毒キノコも、各所に派生していた。苦しんだ末  
に、苦悶の表情を浮かべた兵が、毒キノコを片手に死  
んでいるのも、彼らは多く目にしていった。

笑いキノコは、中枢神経を冒す神経毒シロピシンを  
含んでいるので、食用にすると、気分が高揚して陽気  
なる作用がある。げらげらと笑い出すのも、その症候の  
一つだった。いかにも毒性ありと分かる赤い傘の形状を  
したキノコもあったが、笑いキノコにも各種あり、素  
人目にはその分別は難しい。

笑っているだけの兵はどこまでも道なき道を歩き、や  
がては、行き倒れとなって死ぬ。

哀れな兵の後姿を、みんなは見送った。

もちろん、この地獄絵図の様の日々、正常な神経でい  
られるわけもなく、「気の狂った兵」たちにも各所で出逢  
った。みんな一様に、「ぶつぶつ…」、と口の中で何やら

咳いていた。平坦な道筋には、人が集まるのか、腐敗し、白骨化した死体が累々と横たわっていた。

イゴロット族の芋畑には、兵たちが次々と虫のように蝟集して来るのか、無数の死体が転がっていた。ゲリラ兵の標的にもなり易いので、傷つき、斃れた兵たちの死体も多く見受けられた。そこは危険地域なのであった。

「地獄図の異変」のほどが、一步を進めるほどに明らかになって行く。

彼らが目にしたのは、食うための戦い<sup>②</sup>の様であった。腕を削がれた兵たちの死体が、幾つも行く手の道々には混じるようになった。

銃を手にした彼らの部隊を目にすると、死を待つだけの兵からは、「獲物」として狙われているとの思いがあるのか、警戒の目を向けられた。生きたままに食われる恐怖感も、この場には存在していたということになる。

この究極の場で、何が、飢えた兵たちの口に入るのか、<sup>③</sup>自給・自活戦<sup>④</sup>の「実相」がここには、すでに、示さ  
れていたのだ。

薄い陽が射し染める或る朝のことだった。

「おい、誰か、おれの名を呼ばなかったかね」

小高い丘地を巡っている時、小笠原分隊長が、後ろの者を振り向き、言った。

「…オ、ガ、サハラ、小笠原分隊長だろ。足を止めよ。これは命令だ」

二メートル余の長さのある芒の穂が行く手を遮っていた。その先は台地になっていて、霧ともつかぬ蒸気のようなものが、その辺りには立ち籠めていた。

人の気配があつたので、後ろの兵が銃を構えて、分隊長に続いた。丘の手前辺りに兵が一人倒れていた。

蛆が湧き、顔の半分は白骨化していた。十数メートル先の笹藪に将校服の男が横たわっているのを発見した。

青息吐息で弱っていた。

痩せ衰えてはいたが、幽鬼になった兵たちよりは見た目には肉も付いていた。

「森高中尉だ。病気になってこの様だ。少し動く筋肉が引き攣れて動けん。担架を用意して運べ。どこかに野戦病院があるはずだ」

拳銃を持ち、構えていた。ふところ小僧に、六人の兵は運悪くも遭遇してしまった。第一大隊副官で、大隊



長の懐刀。小笠原分隊は、脱走兵の生き残り部隊、本来なら、全員が銃殺の刑に処されるころだった。

斬り込み隊に出されて、敵陣に到達し得なかった部隊、または、戦果なく戻った部隊、一部の兵だけ帰隊した部隊の兵など、部隊の士気を高め、規律を守るために、その多くは銃殺刑に処されていた。

敗走兵たちから集めた情報によると、日常的に処刑は実施され、食糧がないから余分な者は始末されたの不満の声も、彼ら分隊の者は聞いていた。

大隊本部のあった陣地一帯は、敵機に猛爆撃を加えられて、五月初旬に壊滅し、大隊長は陣地に直撃弾を受けて戦死、第一大隊は指揮官を失って支離滅裂の状況に追い込まれ、戦闘機能を失った。鉄撃兵団の死守部隊が、バレット峠を下って、さらなる死地に向って、退散を始めたのも、この時期と一致していた。

この際にも、森高副官は生き延びたらしい。  
どこまでも悪運には強い男のようだった。

「所持品を持たせた当番兵が二名、ここら辺りまで一緒に来たが死んだのか返事がない。おい、医薬品などが入っている所持物を探して持って来い。もしかしたら、持

ち逃げしたやも知れぬが、どいつもこいつも銃殺ものだ」  
みんなが森高中尉を取り囲んだ。こけ脅しに拳銃を支え持ち、なお、森高中尉は命じた。

「馬鹿じゃなかと。笑い葺なら拾って来てやるが、そんなもん、ここら辺にはなかとねっ」

真っ先に、甲西伍長がそう宣告した。

小笠原分隊長と友近兵長が顔を見合わせた。

二人は頷いた。お互いの心意を汲み取った。

次の瞬間、森高中尉の手にしていた拳銃を、友近兵長が右足で蹴飛ばした。

草むらに拳銃は吹っ飛んだ。

そうやって総員の意志を示した。

「貴様あ。副官を、なんと思っておるっ…」

と、だけ言うのがやっとなった。立場は逆転しているのだから、軍令など存在しない。

この後、自ら友近兵長が拳銃を拾い上げ手にすると、森高中尉のこめかみに銃口を向け、銃爪を引いた。血のしぶきが噴いた。

「おいと兵長はこの場に残る。小一時間もらう。いや、もつと、掛かるかも知れん。他の者は当番兵の遺失物を

探す。それでよか」

決意を込めた声で甲西伍長が言い、友近兵長と二人がこの場に残った。何が行われるのか、直ぐに、小笠原分隊長は状況を把握した。

穂坂一等兵が雑囊に入れて所持していた水牛の角製の、火起こし器<sup>カ</sup>を甲西伍長が受け取った。決然とした態度だった。火付けに必要な、モミ草<sup>カ</sup>は、湿気がつかぬように、支給されているゴム製品、衛生サック<sup>カ</sup>の中に、友近兵長が忍ばせていた。

他の隊員は無言のままにこの場を去った。

この後、当番兵二名の所持していた雑囊が近くの草むらで見つかった。状況を推察すると、当番兵たちは碌々、食糧の支給は受けていなく、医薬品も用いることは禁じられていたかのようにだった。

手つかずの品が幾つかあった。正しく、敗残分隊<sup>カ</sup>にとっては、戦利品に値いした。

食糧では、圧縮口糧(玄米あられ)、乾燥野菜、麩の缶詰、粉味噌、岩塩少々、梅肉エキスの小瓶一つ、それに甘味ものとして、角砂糖状の固型南方食(※中身は黄な粉にでんぷん)と、ゴム玉入りの羊羹も一本入っていた。

兵士たちが目にしたこともない品が多かった

。一錢五厘兵への支給品とは、明らかな違いがあった。錆びてはいたが、髪を刈るためのバリカンまで、当番兵は持たされていた。

将校連の『日本本土への帰還率の高さ』を物語る一側面が、ここでも立証されていた。

薬品類では、キニーネの錠剤瓶一つ、マラリア発症時に効くとされるアンプル入りの食塩水(リンゲル)、それに、「み号剤」と呼ばれていたビタミンDアンプル液などもあった。

いわゆる、夜盲症防止薬で、闇夜でも見通せると思ったのか、こんなものまでも、将校連は持ち歩いていたことになるのであった。

約束の一時間ほどが経過した時、友近兵長だけが戻って来た。露営地を見つけたから、今夜はそこで過ごそうと提案し、「無理カマド、有りの洞窟だ。煙るかも知れんが、総ては、甲西に任せよう」と、みんなに告げた。事の顛末は以上だった。

『穂坂真吉の戦記』には、これ以上のこともこれ以下のことも記されていない。この時、みんな無言のままに、

友近兵長に従った。

小さな喜びのひとつのことは記されている。食うことの喜びについてであった。

この世で初めて、いや、最後になるかも知れぬ思いを各自が抱きながら、小笠原分隊の者たちは、南方食とようかんを六等分に分けて口にした。ほんの一口だけだったが、甘いものの旨さを改めて、みんなが口にした。

「みんな、万年一等兵になってござった。まんじゅう一等兵」と言うの、知っとるかや？」

分隊長の口出しに、甲西だけが笑った。

その間の事情を知っている甲西がその続きを引き受けた。初めから、顔が笑っていた。

「満州の部隊にいた時、同じ伍長で、酒保の当番責任者になったのがおったとお。ほんのちよいの間、人がおらんの見計らって、いやしか、作っている最中のまんじゅうの餡を一舐めたのがバレちまってえ、三階級落とされたとね。いっちよん、こいつは、まんじゅう一等兵、なあ、万年一等兵にうちよかれたとね。異風者扱いで軍隊止めたけん。今度もお呼びじやなかとお。ここへ、来ちよらんじやなかとね」

「ハハハ、甘い餡を舐めて、その始末が除隊か。この、ルソンにも足を踏み入れずに済んだってことだ。そんなうまい話があるなら、まんじゅう一等兵も、捨てたもんじゃない。みんな、あやかりたいもんだ」  
可笑しそうに友近が言った。

久し振りに甘い物を口にした嬉しさのゆえか、みんなが陽気な気分なり、軍隊ならではの事件、閑話休題の話まで入った。

実質的な話では、岩塩少々、粉味噌、梅エキスを入手したことで一時的ではあったが、小笠原分隊の者たちは、塩分補給も適った。

16

一晩中、無理カマドの番を、甲西と友近が買って出た。洞窟内にも煙が漂った。

みんなで焚き木は拾い集めた。

倒木を動かす時は、みんなで無理やりに掛け声を掛け合った。「おっ、ばい、さん」を使った。焚き木の使い道には、後ろめたさが何となくあり、みんなは陽気に振舞

ったのだ。

この冗句も、これ限り、やがては、封印された。

それどころでなくなるのであった。

翌朝、大きな笹葉に包まれた燻製の肉片を、一つずつ、みんなが受け取った。梅肉エキスを甲西は使い分けて、味付けにも工夫をした。

もちろん、直ぐには、誰も口にはしなかった。追々、生き残るために、みんなはそれぞれの知恵を働かせた。

便意を催すと、群れから一時は離れることになるのだが、その間に、素早く口に入れ呑み込むことから始まり、やがては慣れて、道々、肉片をしゃぶりつつ歩く者も出て来た。その内、みんなは慣れた。

いつも、友近の直言がみんなを救ってくれた。事有るごとに、その発言が重みを増した。

「どうやって生き残るか。食わねば生きてはいけない。そんなことはみんな分かっている。どうやって生き残るか、みんなが常識的な『既成道徳』を捨てられるかどうかにかかっている。人を食っていい道理はないが、食って悪い道理なんでもない。そう誰が決めるのか。太古の昔、原始人は何を狩りの対象にしたと思う？同類の居

る集落を襲った。その場所には食える肉があるからだ。これも「道理」だ。一日、一日、人は慣れて行く。いいか。みんな慣れよ。乞食同然のみんなの体はどうだ？五ヶ月も風呂にも入っていない。垢にまみれて異臭を放っているが、もう誰の鼻にもつかない。なぜって、嗅覚が鈍磨して行くからだ。この死の光景はどうだ？毎日、見慣れていると、この感覚たるや恐ろしいことだが、もはや、何でもなくなる。感じなくなる。そうだろう？感情移入をしない人間にと変わって行ってしまう。まともに考えていると気が狂う。気が狂わないように、人間の脳はうまく感情を抑制する働きをしてくれているんだ。余計なものを見るな。余計なことは考えるなとな。これも生存本能の一つだ。生き残るために慣れる。「非情」などという感情はもうわれわれの頭の中にはない」

この友近の言は、この生き地獄の地に捨て置かれた者たちの思いの総てを物語っていた。

それでもなお、小笠原分隊は人間の感情を持ち合わせた「恐ろしい体験」を、この後も重ねて行くのだった。

堀上等兵が悪性のマラリア症を再発した。



意識混濁や肺炎を伴うことがあるマラリア再発、重症の場合には命に関わることが多い。

誰しもが、何度か罹っているのだが、栄養失調とも重なり、かつ、スコール雨に全身がびっしょりと濡れたこともあつて、全身の悪寒が止まらず、堀は重患の症状を呈した。

足を踏み入れてはまずい場所に彼らは踏み込んだ。原住民イゴロット族が住む木小屋を、率先して、小笠原分隊長が見つけて来た。

その途次、木小屋まで辿り着けなかった多くの兵たちの白骨体を目撃することにもなったが、木小屋は雨露が凌げる場所、誰しもが、その場所を目指すのは当然のことだった。

やや、平地になった萱(かや)ヶ原を越した台地の上に、その高床式の木小屋はあつた。

熱で呻っている堀を休ませる必要があつた。

夕刻のことだった。甲西と穂坂に抱えられて、この小屋に堀は担ぎ込まれた。

貴重な薬、キニーネの錠剤を、堀には与えたので、堀の病態は治まったかに見えていたが、すでに、体力がな

く予断は許せなかった。

ともかくも、堀は床の上で寝かしつけられた。荒い木組みで、その上には、木組みの囲炉裏が掘られ、葦で編んだ筵が敷かれていた。

暗くならない内にと、小笠原分隊長以下が、高床の下にあると思しき食糧貯蔵所を探った。

何もなかった。イゴロット族の生活物資が収奪された跡だけがあちこちに残っていた。

今夜も口にする物はなかった。

近頃では、熱帯性潰瘍の傷跡に発生する蛆虫も食糧になっていた。もちろん、軍衣の縫い目にびっしりとくっついていく虱や、手足に吸いついて血を吸う山蛭も、彼らの口に入った。「ばってん、オイの体で飼つとる虫どもたい。生き血を吸うちよる。まっこと、ざまーにやー。自分の生き血を吸いよるけん、術なか。ごちそうさまでもなかとじゃが、しょーなか」何事も率先する甲西が、「こしやくな。虫めが。びっしやくぐ(潰す)るな」と口にしたながら、体にたかっている虫どもと格闘した。

みんなもそれに倣(なら)った。

先日は、料理人ならではの腕で、飯盒の蓋で、蛆虫を

火炙りにし、梅エキス<sup>①</sup>で調味、味付けに一工夫をして、みんなに食わせた。

この夜、無惨な出来事が発生した。

夜半、みんなが眠り、そして、小康を得て、堀が眠っている最中、「ううっ」と呻いた。

みんなが飛び起きて、病人が横たえられていた囲炉裏端に寄ると、胸のあたりから血を噴いて堀が苦しんでいた。暗がりなので、直ぐに、状況判断が出来たのではないが、小笠原分隊長がその場の出来事を読み取った。

高床式の下部構造の場所から、一本の槍が突き立てられていた。その鋭い矢の先は、堀の背中、心臓のあたりを一突きしていた。

「おい、まだ、この辺にはイゴロット族がいるかも知れない。用心せよ。いや、われわれ闖入者に、ここを早く立ち退けと警告しているのかも知れん。だが、この夜中、迂闊には動けない。島崎、穂坂は哨戒体制を取れ。外の動きに注意せよ」

小笠原曹長が一人の軍人に戻り、状勢の判断を示した。

島崎、穂坂は銃を手にした。

その間、可細くなった堀の苦悶の聲が、陰々滅々と、小屋の暗闇の中に流れた。

結局、堀幸一上等兵は明け方には息絶えた。

ここでも、内務班経験のある甲西伍長が素早く軍務を遂行した。戦死者たちの遺骨を遺族の元に還すために、内務班の仕事の内には、戦死者、戦病死者などの小指を切り落として保管、軍籍の標識記号を添え、内地送還の手続きが取られる処置が存在した。

堀上等兵の右手小指は、甲西伍長所持の「衛生サツクのゴム袋」に入れられて保管された。

明方、小笠原分隊最初で最後の遺体の処理が行われた。この戦況下、遺体は野ざらしで、文字通りの「草むす屍」になっていた。

木小屋外の芋畑があったと思われる場所に穴を掘って埋め、小さな木柱を立てた。

実は、この手掘りの穴掘り作業は労力を要したので、残りの者たちは疲れ果てもした。

「堀は幸せ者だな。幸一か。幸せが一番の名か。それでも死んでは何にもならない。こんな山の中で、もう一度、ここに訪ねて来いと言われても、到底、無理な話だ。い

や、この生き地獄の状況、もはや、一々、感情移入をすべきでないと言ったのはこのわたしだったな。木柱を立てたところで名も無い。この地で朽ち果てたことには何の変わりはない……」

これ以降、友近兵長も言葉少なくなって行く。おのれとの会話とて、人間としての思考が可能な体力が維持されない限り、思考の持続力を保つのは不可能なのであった。

数日後、島崎上等兵が不慮の死を遂げることになった。高原地に出た時、小笠原分隊の兵たちは、米軍機が落とす自軍への物資補給のための落下傘の一つを、偶々に、見つけた。

風に紛れて高い木に引っ掛かっていることがあり、場合によっては落下物が食糧であることもあったので、ついつい引き寄せられてしまう。落下傘爆弾としても使われていたので、不発弾装着の落下傘に遭遇する危険性も大であったのだが、食べ物の誘惑には、この窮乏の時期、誰しも勝てなかった。

伝わりところの携行食、米軍レーションの中身は、「缶詰肉料理」「ビスケット」「ハム、豆の煮込み」「イン

スタント・コーヒー」「フルーツ・バー」「錠剤塩・砂糖」  
などなどで、チューイングガムに、キャラメル、それに、  
マツチ、煙草まで付いていた。

甲西と島崎が自ら申し出て現地に向った。

台地の上から見ると、下方五十メートル前方の平地に  
位置した大きな樹の枝に、落下傘は引っ掛かっていた。

小笠原、友近、穂坂の三名は台地に残った。

危険性もありと分隊長が判断してのことだった。「おら  
は、いがり股<sup>ま</sup>やから蛙足い、柳の木に飛び付く蛙や。  
ぴよんと飛んで見せれば食い物が口に入るでえ」と、出  
発前に、嬉しそうな顔をして島崎はみんなに言った。

それが最後の言葉となった。

寸刻後、長めの木の棒の先で、甲西が落下傘を引き寄  
せた。背の高い分だけ役に立つ。

ふわりと揺れて落下傘が木から離れ掛けた。

待ち切れず、島崎が落下傘に手を掛けた。

その瞬間、「どんっ」と爆裂音がして、白い煙幕がその  
一角を覆った。砂塵が舞った。

台地に残っていた者たちの視野も遮られた。

修羅場になっていた。体ごと、島崎は吹き飛ばされて

死んだ。爆風で、甲西も数メートル先にと飛ばされた。

その時、空から、島崎の右腕だけが降って来た。それだけしか、生きていた者であることの痕跡物はなかった。

この場合に、甲西がやるべき軍務とは、右手の小指を切り取って保管することだった。

忠実に、甲西はこの軍務を実行した。

二人目の「遺骨」を預かることになった。

この壮絶な死の様を目撃してから、みんなは極度に無口になった。虚ろな眼差しで、事の次第を見守った後、みんなは重い足取りで、仕方なく、次の一步にと、また、歩を進めた。

その分、言語に絶する「極限の果ての末路」の地獄道を、小笠原分隊の者たちは、さらに、さまよい歩くことになるのであった。

これから先の話は、暗転にと向いて行く。

戦況の厳しさもあり、敗残の兵たちは、多くは「同じ道」を辿っていた。無慮、二十数万人とも言われるルソン北部の地に投入された兵士たちの、果ての果ての悲劇の物語が、さらに、行く手には待ち構えていたのだった。

みんなが山岳地帯を逃れ、平地を目指す。

小笠原分隊も、山裾野を巡るようにして、何日間もの逃避行を重ねて行く内に、いつか、白骨街道の一つと呼ばれた「過酷な地」に紛れ込むことになった。折りしも、雨期で、連日、雨ばかり、見渡せる山々の向こうには、いつも、低い雲海がたなびいていた。

小笠原分隊の進むところは、どこもかしこも、『生き地獄』の様を呈していて、彼らの一歩、一歩も、また、『生き地獄』そのものとなった。飢えて死ぬ。病いを得て死ぬ。奪い合う。殺し合う。極度に、おのが感情までも殺した。それだけではない。無惨であった。

この地では、累々として捨てられた死体から生じた蛆、金バエが、有史以来初めてとされる未曾有の発生を遂げたとされる。

この種だけが異常発生したのであった。

地獄の果ては奈辺にあるのか。これは『現実』なのか、『非現実』なのか、それすら、分からぬままに、小笠原分隊の生き残り兵たちは、なおも、人跡未踏の地をさまよった。



戦記形式でわたしが預かった『穂坂真吉の戦記』は、ここで、終わりを迎えた。

結局、事実ごとのみを記した『戦記』が、わたしの手元には残ることになった。

この後のことは書くに忍びないと、穂坂真吉は自らで筆を置いた。そのことは、この稿の初めに、わたしも記したことであるが、その後、交流を重ねることでのみ、わたしは穂坂真吉の心情を知った。その間、手紙だけに止まらず、穂坂真吉とは二度会ってもいた。

『生き残るためにみんなが戦わねばならなかった局面での、喰うための戦い』の話、語り継ぐべき話』は、決心がついたら仔細を書き記したいと思うのですが、しばらくの猶予を下さい。多分、わたしが自分の命について、つまりは自分の余命について考えられるようになった時、わたしは最後の手紙が書けるのかも知れません。あなたとのお約束は守ります。後世に託したいこと、このような、事実ごと<sup>3</sup>があつたこと、わたししか語りえなかつたこと、やはり、語るべきだと思っております。わがまま勝手を言つて申し訳ありませんが、その日まで待つて

下さい。なにやっちゃよーや、その言葉の意味を決して忘れてるわけではありません…』

大要、このような文面で、当時、穂坂真吉は、おのれの心境を手紙に託して来た。

穂坂真吉の決心の文をわたしは待つことにしたのだが、待ちに待った後、最後に、『遺言』の形で書簡を託された関係者の一人から手紙は受け取るようになった。

平成五年十月に、戦争世代の生き残り兵、穂坂真吉は七十五歳で、この世を去っていた。

わたしは穂坂真吉からの手紙に触発されて、「この物語」を書き始めたので、未完のままになることには心残りもあるが「未完」であるがゆえに、それなりの意味を持つている物語となっているのではないかとも思えるようになった。『戦記とは人の命を扱う物語』だ。

軽々しく、知ったかぶりの話など出来ない。「事の経緯」だけなら、書簡通りに伝えるのは可能なので、「穂坂真吉の思い」だけでも伝えられれば、この物語、それでも十分ではないかと、それなりに、わたしは付度した。

過酷な状況の下、生き残れたのは穂坂真吉一人だった。最後に残った小笠原曹長と二人、カガヤン溪谷支流の

谷間で人事不省のままに、ただ、死だけ待っている状況下、何者かに救出された。

終戦の事実も知らず、さまよい歩いていた九月も末のある日のことであった。

穂坂真吉が気が付いた時、小笠原健三の姿はなかった。すでに、命を失った末に始末されていた。この状況、そのようにしか判断は出来ない。

もちろん、その場所も知れない。

あの、「こって牛」の頑丈な体型の甲西三郎平さえも、複合症の病状を呈する「戦争性栄養失調症」そのものに罹って死に果てていた。

死に際に、甲西は重大な事実を告白した。

「堀、島崎、あの二人の遺骨として預かった小指じやが腐敗してオコナイエン、そいでもってオイが腹に収めておいたけん。オイが生き残ったらオイの血肉になるけえ、オイと一緒に内地に連れて還ってやつからと、オイは自分にも言い聞かせとったとお。だもんで、もう死ぬ身じやが、オイもオドンたちの血肉になって内地に帰るとねえ。みんなとは仲間(かたん)なっせ。堀も島崎もオイの血肉と一緒におんなさるとね。お互いがお互い、共食い

じゃ。それでよかとね。友近が言うちよったように、一人でも最後には生き残りたい。誰でもええとね。なんか言わんと、死に切れんと。そうせんとならんとよ。オイもオドンたちと内地に還りたかね。その意味はわかっておんなさるとね。それえ、一心じゃ…」

甲西が遺した最後の熊本弁だった。

同じように病いを得た末に、精神の均衡をすら失い、思考能力さえ奪われた挙句に、友近正晴は事切れた。

小笠原、穂坂に見守られながらで、孤独な状況下の死ではなかった。

猿の肉を食って以来のことだが、一途に、生き残るための、その場での『即物観―道理』と言うものを、友近は口にして来た。

穂坂真吉が遺した一文、『死んだ兵…そして、生きた兵の肉を食うのは最高の道理・道徳』であったの件りは、友近自身の主張でもあり、友近が死んだ後、儀式にも似た行為として、小笠原、穂坂の二人によって、粛々と執り行われたと思われる。生き残るためにであった。

甲西三郎平が死に際に遺した文句にもある通りに、生き残った者によって、甲西三郎平、友近正晴、堀幸一、

島崎卓治の四名は、穂坂真吉の身と心に成り変って、日本の地を踏んだことになるのだが…。

この伝を持つてすれば、一人、小笠原健三だけが、日本の地には帰れなかったことになるが、この心残りのゆえに、戦後の厳しい時期を、穂坂真吉は耐え抜き、踏ん張って生きたのだった。自分と一緒に連れて還れなかった分、穂坂真吉は小笠原健三の分も働いた。

いや、その気持ちや代弁すれば、戦友たちの分も、穂坂真吉は精一杯に生きたのだった。

一つの挿話を書簡の中から採り上げて記しておこう。友近正晴の思考が働き、そして、日々に口にした文句を、穂坂真吉は記憶に止めていて、それらの言葉が、書簡には書き記されていた。

穂坂真吉がもつとも影響を受けた人物が友近正晴であった。ふくろう博士、友近正晴の人となりも窺える言葉や、最後に、一つだけ、わたしは選ぶことにした。

『人間と人間、付き合ってみるとみんな多彩で面白いもんだと思うよ。わたしはお国コトバで話すみんなが大好きだった。自分の故里に帰れたような気分にもさせてもらった。お陰様で、いい仲間巡りに会えた。短い人生に

なるやも知れないが、みんなと出会えたのがわが人生、みんな、ありがとう。あの世でもまた会おう。そう思っている。お国コトバで、今度は、戦争とは関係のない、他愛のない話、に花を咲かせたいものだ。もつとも、みんながみんな、食い物語が一通り終わってからのことだとは思うがな。せめてものこと、腹一杯になる話ぐらいはしてみたいものだ。きつと、みんなが夢にまで見た、あの、おふくろの味、故里の味のオハギが主役になることだろう。ハハ、まんじゅう一等兵か。オハギが食べるなら、わたしも万年一等兵のままでもよかった。みんなもそう思わないか…』

18

秋晴れの一日、これほどまでに、大山の勇姿そのものが、遥かまでも望めるのは珍しいことだった。

いつも、たなびく雲海と共にあり、風も舞い、雪を頂く白い山容にもなつて、四季折々、大山はご機嫌が悪いことが多いのに、この日ばかりは、青々とした空を背景に、屹然として、大山は下界を見下ろしていた。

山の頂きは尖って見えるが、裾野に掛けてはなだらかで、やさしく稜線が下っており、その分、美しさも楽しめる。穂坂真吉が故人となつて十数年が経過していた。

その亡くなった年頃と同じ年齢にわたしも成っていた。月日が経つのは早い。

その頃、再び、大山の地を一人旅の身でわたしは訪れた。大山の輝かしさと、厳しさ、そして、山麓の地に住む人々の暮らしぶりに、今一度、わたしは触れてみた。思ったのだ。開拓道路という標識が途次の道に立っているのを見つけた。つづら折りの道を昇って行く。かつて、穂坂真吉の家まで押し掛けた道をわたしは辿っていた。目指すは、香取草谷展望台で、この地を下ると穂坂真吉と出逢つたことのある牛舎もあるはずだった。

米子空港から、一路、車で四、五十分、よく整備された十メートル道路を登り続けて、わたしは目的地にと着いた。わたしが思案していたことでもあったが、もはや、穂坂真吉は故人の身、前に訪れた地には人は住んではいないらしく、やはり、さびれた風の牛舎だけがその地には残されていた。跡継ぎの者もいなかったのだ、主がない今、一軒だけ取り残されるのも止むを得ないことだ

ったが、秋の一景色、白と桃色のコスモスの花が、軒先には乱れ咲いていた。

一つの謎を解くような話だが、穂坂真吉は小笠原健三の身と心にも成り変って生きたようなところがあった。

わたしはそのことにも思いを繋げた。

実は、この香取の地の開墾村には、それなりの接点のようなものがあった。

昭和二十二年四月、満州開拓団の帰国者である香川県出身者の一団が、大山南方十四キロの山奥の無村地帯に開拓のために入植した。

この時、穂坂真吉も、この入植した一団に加わった。そもそもが、「香取」の名も、香川県の一字と、鳥取県の一字を取って名づけられたもので、大山の北側中腹に掛けてのこの開拓地を、人々は香取村と呼ぶようになった。

期せずして、小笠原健三とは由縁のある、満州開拓団にして、香川県出身者の開拓者たちと、穂坂真吉は行動を共にすることになった。

小笠原健三の姉の嫁ぎ先が、香川県出身の開拓団であったという縁であった。

終戦になって日本に帰る時、満蒙開拓団の一行は辛酸



を舐めた。過酷な状況下、集団自決、越冬中の寒波、栄養失調による衰弱死、発疹チフスなどの病死も含めて、八万人余もの犠牲者を出した敗戦の悲劇の物語として、今も語り継がれているが、この幾多の苦難を越えて、小笠原健三の姉は無事に帰国することが叶った。

仔細は知れぬが、共に、穂坂真吉と、小笠原健三の姉とは思いも繋げ合った。

香取開拓団の出発点には、艱難辛苦の体験を生き抜いた団員たちの思いもあったのだ。

この姉の口利きで、穂坂真吉は妻の茂子を娶っていたのだった。もつとも、不幸にして茂子は亡くなっていたが、現在、『香取村開拓団』には、小笠原健三の姉から数えて三代目になる一族が、酪農の仕事を引き継いでいた。

穂坂真吉からの「最後の手紙」を、わたしが託されたのも、その由縁のある孫の一人からであった。ここら辺りは、全国でも名を知られた酪農地帯で、営々と事業は続けられており、樹ち立てた『酪農百年計画』も、道半ばを越え、もはや、目標は叶いつつあった。

開拓村の成り立ち、経緯を少し辿ろう。

地元の人たちからは、「あんなとこ、住む場所やない」

と言われたが、百戸の入植者が、新天地を夢見て、日々  
の開墾作業に励んだ。

標高三五〇〜一〇〇〇メートルの地帯、鬱蒼と茂る原  
生林と、作物が育ち難い強酸性の荒地で、多雨にして、  
冬は雪に閉ざされる地、開墾するのは、並大抵のことで  
はなかった。

もちろん、水も電気もなく、原始生活そのものの毎日、  
進駐軍の兵舎用テントを払い下げてもらったの仮住まい  
の家屋では、冬などは、室内に雪が吹き込んだと言う。

一台の戦車が持ち込まれた。「チハ・ドーザー」と名が  
あった日本軍の旧戦車であったが、砲台を取り去ること、  
平和目的に供する条件件の下、占領軍の許可が出て、開  
墾作業には大いなる力を發揮した逸話も残されている。

元輜重隊の隊員だった経緯から、改良戦車の運転には、  
率先して穂坂真吉も手を貸した。

倒木を片付ける時は、「お、ぱい、さん…」の掛け声も  
掛けながらのこと、小笠原健三の心の部分が、穂坂真吉  
の身には住み着いているかのような話も、わたしは聞か  
されていた。

そんな話を聞いた或る日のこと、わたしは穂坂真吉から、心からのもてなしを受けた。

わたしの来訪を心待ちにしていたように、予め用意していた逸品の食べ物、手製の牛乳豆腐<sup>①</sup>を、穂坂真吉はわたしに振舞ってくれた。この牛乳豆腐は、仔牛を生んだばかりの母牛から搾り取った初乳から作る貴重な食べ物で、おいそれとは、口には出来ない。

やや、チーズ味にも似ているが、まろみの広がりのお味に加えて濃厚味もあって、少しだけ、醤油を垂らして食べると絶品の味となる。

「ちーとだけ、日本の味、醤油を垂らすだっちゃ、うんまかどお。たった一つの、このオラの贅沢品じゃがな」

穂坂真吉からはそんな注釈が付いた。

いつも、戦記を書きながらも、わたしは「手製の牛乳豆腐」の味を思い出すことがあった。

穂坂真吉が「なんやっちゃよーや」と、戦友たちに肩を叩かれながら、戦記を記した囲炉裏端も、今は懐かしい思い出となっている。

もう一つの思い出の地にとわたしの足は向った。香取草谷展望台のある場所に戻った。

草に覆われた地の片隅に、今も、穂坂真吉の説明を受  
けながら眺めた石碑はあった。

『人は食べ物が無ければ生きてはいけない。この国には  
食べ物が必要だから、一から、耕せる地で、汗を流して  
働こうと思った』

この時、穂坂真吉はわたしにそのような主旨の事柄を  
説明した。真剣な眼差しだった。

終戦直後、開拓のために、この地に入った開拓団の決  
心、労苦のほどを物語る一文がその石碑には刻み込まれ  
ていた。次のような一文が、当時の団長の思いとして綴  
られていた。

夢をもって 冒険にいどみ

苦勞をして 汗をかいて

たくましく生きたい

金や物が目標では

もうからぬとやめる

地価があがると

土地を売る

ぜいたくな生活がしたい

開拓者はそういうものではない

無から有を生む努力

健全な心

苦難を越えたよろこび

計算できない大きなもの

人間が求めるものは何か

いまさらに、わたしが述べるものはない。

余り、近頃では人も寄らぬのか、一帯はひっそりとしていた。ぽつんと忘れられたように建つ碑、そんな印象だけをわたしは持った。

やはり、大山の方角を見やった。神の山なのか、神々しくもあつたが、直ぐに、天気が変わるこの山の倣い通りに、山頂辺りには低く雲が動いていた。秋晴れではあるのだが、雲一点もないお天気が続くはずもない。

これからやって来る厳しい冬のことと思われた。

穂坂真吉の仰ぎ見た日々の山の表情の一つを目にしな

がら、こうして、「わが旅愁の一日」を了えた。

ひゅと、冷たい風が吹いた。

「さよなら、大山、また来る日があればいい。それから、なにやっちゃーや、穂坂真吉さん…ひとまずの戦記は、このわたしの拙い筆ながら記させて頂きました。ありがとうございます…」

そう呼びかけながら、わたしは今一度、大山の北壁に対峙した。流れて佇(た)つ山の稜線が美しく走っていた。まだ、雪はない。

また、天気が変わっていた。

一陣の風でも吹いたのか、たなびきの雲は吹き飛び、すっきり晴れた秋空と共に、大山の頂上は、やはり、神々しく天と向かい合っていた。

穂坂真吉の言葉通り、大山が、どんとしてござる山であることには何の変わりもなかった。

(第一話了)

## 魔のバシー海峡

### 1

船員は船員同士、職業の特異性からみんな仲間意識が強い。一度航海に出たら長旅になるし、寝食を共にするのだから親密感も生まれるようというもの、男と男の世界、厳しさもあるが、それだけに男同士の絆も深い。

昭和三十年の夏のことであった。

わたしは中之瀬浩記(ひろき)と会う機会を得た。神戸・元町の海岸通り、海運会社ビルの一階にある洒落れた喫茶ルームでのこと、どこかからか海の匂いさえ届きそうな場所柄で、港街らしい雰囲気は漂っていた。

旧居留地の南、海岸通りに建つこのビルは、大正十一年に竣工された七階建て、地下一階の「高層ビル」で、当時としては数少ない建築物であった。

今も、外観は変わっていない

アメリカ・ルネサンス様式を取り入れた設計で、大きな石組で外壁は飾られているので、重厚感もあり、港街神戸を代表する建築物とされていた。今も、その外観は変わっていないので、旧居留地を代表する建物として、神戸の観光名所の一つとしても評価されていた。

わたしは学生で二十歳になったばかり、夏休みで、この日は東京から帰神した身であった。眩い夏の訪れ、そんな思いもあり、若者らしく足取りも軽かった。

中之瀬浩記は大阪船舶の社員、当時は海岸通りにある神戸本社の船員課に勤めていた。

三十半ばの齢になっていた。穏やかな感じの顔付きで、口元の笑みが柔らかく写った。

わたしの兄、菊池勇の親友の一人で、この度は、戦時中の兄との奇遇について、話をしてみたいと連絡を貰ってわたしは勇んでやって来た。

兄の菊池勇はルソン島で戦病死、中之瀬浩記は軍用輸送船でその島に送られる途中の海で、船が敵魚雷の攻撃を受けて沈没、漂流の末に、九死に一生を得て、日本に帰還することが出来た幸運の持ち主であった。

世の中のはさして知らぬ齡、何しろ若かったから、



わたしは夢中で中之瀬浩記の話聞いた。

もちろん、兄と、中之瀬浩記がどんな接点を持った同士のなかも知りたかった。

「ご存知かも知れんけど、お兄さんとは伊丹にあった阪神商業の同級生、二人共卒業したら大阪船舶に入って外洋航路に乘ろうやと話をしている仲でした。それが、わたしは家庭の事情で、あなたのところはお父さんを亡くして、途中退学ということになってしまつて、それで、

昭和十五年の春から二人共おんなじように、大阪船舶の船員課に行つて仕事探しをしたんです。お兄さんもわたしも司厨(しちゅう)助手、半ばは、給仕役つてところですかね。乗る船は別々、それ以来、会つたのは三度切り。それでも、わたしには記憶に残る想い出ばかり。それで弟さんにも、いい想い出話なら、お話してもええのやないかと思ひましてね」

「ぜひ聞かせて下さい。年が十二も離れているから、ほとんど話をしたことはないです。船乗りは家にも居ませんし、それに加えて戦争で離れ離れの運命、とうとう兄は戦地からは帰りませんでしたから」

「辛い話やけど、その話に触れないわけにはいきません

からね。そうやけど、私ら大正生まれの者は、実に七人に一人が戦争犠牲者になっていきますからね。自分一人だけ生き残ったようで、わたしなども呵責の念が今もあります。なんや、申し訳ない気分になることありなんですよ。いやいや、それで色んなことを話せば少しは楽になるかと思うて、まあ、弟さんとも会いたいと思うようになったんやも知れませんか。わたしの話を聞いてもらってもいい二十歳・成人の年齢になられたというの、お母さんから聞いて、お許し、もらったことなんです」

終戦からほぼ十年、昭和三十年の七月末の日のことだった。やっと、戦後復興が成って街には活気が戻り始めていた。それでも、B29の徹底的な絨毯爆撃で神戸市街地の六割の地は焼失、その傷跡は各地に色濃く残されてはいた。この元町、海岸通りも大きな被害を蒙り、復興したとは言え、海岸に向う地一帯ほど被害が大きく、海沿いに広がっていた重工業地帯猛爆の影響もあって、バラック小屋のまま暮らしている住民も、その地では散見出来るほどだった。

それでも、戦後復興の槌音はここかしこにあった。人々の暮らしぶりも平和さを取り戻していた。やっと、人々

は落ち着きを取り戻し始めてもいたから、十年一昔の話も口に出来るほどの世の中にはなっていたのだった。

「あの、ぼくなんかが一番知りたいんは、兄には、そのお…青春なんかというのあったんですか？ないんやったら、今、ぼくとほぼ同じ齡、こんな齡では死に切れんなと思うて」

「いちばん割りの合わない年代、折角、大正ロマンの華も咲き始めていて、一方では自由の風も吹いてはいたんですがね。みんな、戦争をした軍国主体の連中にいいようにやられてしまいました、それでもわたしら二人は、青春」とかいうの、少しは体験することが出来たんやないかと思えますけどね」

注文した珈琲が運ばれて来た。香ばしい薫りが立つ。飲み物を薦めながら中之瀬浩記が話を続けた。

嬉しそうな顔になった。

「珈琲にまつわる話ですが、大連航路就航の船に二人とも乗っていて、お兄さんが、吉琳丸、わたしが、長春丸、だったのですが、戦争の始まった年の五月に、偶々、一日だけの休暇の時間がうまく合って、大連港で落ち合い、この後、大連の觀光名所、中山(ちゅうざん)広場を二人

で訪れたことがあるんです。その時、飛び切りのうまい珈琲を口にしたことの記憶あります。中山広場は当時としては珍しい都市計画の元に造成された区画で、緑の芝生のある公園の真ん中に、白い十字の大通りが作られているデザインも素晴らしい最新設計、余りの美しさに、わたしたちは、驚き、驚きの連続でした。回りには銀行や官庁などのレンガ造りの西洋館が幾つも並んでいて、神戸にも負けないおしゃれな街並みでした。大連やマトホテルのルネサンス風造りの四階建てホテル、キャノピーと呼ばれる玄関正面の鉄傘も評判だったんですが、何しろ、格式が高くて我々船員如きは入れないので、まあ、その近くの喫茶店からの眺めやったんですが、珈琲の味は格別でしたね、当時は、最高級の贅沢品、いやあ、多寡(たか)が、船員の身でありながら、あの時は、眺めも珈琲の味も生涯一の大贅沢でした」

「兄もその大贅沢をさせて貰ったわけですね。その時、兄は幾つだったんですか？」

「二人共十八歳、船員生活三年目、いっぱしの船乗り気取りにはなっていましたね」

当時の若者としては船乗りになるのが夢、外国航路だ

と海外に行けるので人気のある職業であった。いまでも航空機業界の華やかさがあり、海の男としてのマドロス気風なども独特で、よく、歌謡曲の題材にもなった。

「これは、一点豪華主義やな。って菊池は言うつもりでした。わたしは尋常小学校までは山口県の農村にいた田舎者、伊丹の叔父に学校にやっつてやると言われて都会にやっつて来た口ですから、一点豪華主義なんて言葉にもまるで無縁でした」

「そうですか。一点豪華主義、贅沢と言えば贅沢な発想、いい話ですよ」

「夢の船員生活も、夢、また夢になりましたが、菊池勇とはもう一つ面白い珈琲物語あります。これも都会だからこそ、神戸ならではの話ってことになりますかね」

そう前置きしてからの話だったが、在学中、阪神商業の学生たちの間では、この頃、流行し始めたばかりの珈琲を親しもうという機運が盛り上がり、彼らもその仲間になった。

その話を聞き付けて、神戸・三宮にある珈琲豆輸入業者の社長が、本邦初めての焙煎珈琲を学生たちのために用意してくれ、みんなほろ苦さのある焙煎珈琲を初めて

口にした。

すでに、贅沢品と看做されて戦時統制品に指定されていたことから、この社長の反骨精神、その長講釈と共に、今にして思えばそれなりの含みもあっただろうに、みんな若かったのですこまでは読めなかつたと、中之瀬浩記は苦笑いもしながら話を付け加えた。

ちなみに、この時の社長の男は、自由社会になった戦後、昭和三十年代ではまだ焙煎珈琲自体が話題になるほどではない時代に、日本で初めて焙煎珈琲を採り入れて、その後、この道で名を成した人物となった。

そんな人物との出会いもあったという話を、わたしなどは面白く聞いた一人であった。

こんな話をしている二人だったが、平和な時代になったから口になっているだけのことで、戦場に送り込まれた若者たちは、苛酷な運命を負うことになった。

戦時体制下、民間船のほとんどが軍に徴用され、中之瀬浩記の乗る船も、その内、都合が付かず、陸組（おかぐみ）に編成変えさせられ、その挙句に、急遽、召集されて、激戦地ルソン島に送られる身となったのだった。

その途次での海難事故の話は、中之瀬浩記自身が、「大

阪船舶史」に、寄稿・記述しているので、そちらの文に頼ることにし、彼のこの時の想い出話をもう少し続けて記そう。

「結局、二人が最後に会ったのは戦争も最中の宇品の港となりました。召集されて集まった港の集合地で、ぱったり、菊池勇と出会いました。別の部隊に居たので、二人切りになることは出来ませんでした。すれ違い様に、おおっ、元気でやれよ、お前もな」と声は掛け合いました。本当は台湾で部隊は三泊したから、会う機会があったのですが、何しろ、軍隊、融通が付かずそのままになりました」

と、中之瀬浩記は残念そうに言った。

「それでも、声を掛け合う機会があったというんは友達同士、兄もよかったやろうし、喜んだやろうとは思いますが、すけれどもね」

「それがこちらは碌々教練も受けていない新兵上がり。そやけど菊池勇、お母さんの話を伺えば、なんや通信班の暗号担当、えらいシゴかれて特別の教練を受けてたみたいやから、やっぱり、部隊そのものに活気があって、あいつも浚刺としとりました。その元気な姿だけが、い

まも、はつきりと瞼の裏には残っておるんですよ」

この後も中之瀬浩記は、兄、菊池勇との想い出話を幾つか続けてくれた。

個人的な青春期の出会いの場、そんな貴重な時間を、兄が持つことが出来たことを知ったというのは、わたしにとっても大いに収穫のある一日となった。

柔らかな眼差しと、笑み、静かな物腰、何もかもが、わたしには嬉しかった。

兄も生きていたら、このように弟には接してくれるのかと、この時、わたしは自分の思いを探る気にもなっていた。何か、中之瀬浩記が頼もしい兄のようにも思えていた。

## 2

昭和十九年十二月六日に、鉄撃兵団の将兵を乗せた十三隻から成る船団は宇品の港を出た。護衛のために駆潜艇、哨戒艇が数隻ついたが、この時期、もはや、対空護衛のための航空機などはなく、ほぼ、無防備な体制のままに船団は一路、南の島を目指した。



この船団の「宇仙丸」に、中之瀬浩記二等兵も乗せられていた。中之瀬浩記の記憶によれば、わたしの兄の菊池勇も主力部隊の乗った「大蔚丸」に乗船していたはずであった。

行く先は告げられていなかったが、南の島に向うであろうことは、もはや、大方の者が出発時点で知っていた。

祖国を見る機会は最後になるやも知れないので、港を離れる時、ほとんどの将兵が船の甲板に出て見送る人々に手を振った。冬のことで灰色の空であった。船団が遠去かるに連れて、遙かな中国山脈の山々を望むことが出来た。せめてもの緑の山々、将兵たちは瞼の裏に故郷日本の風景を焼き付けた。

乗船時から、もはや、輸送船地獄が始まっていた。

中之瀬浩記が乗せられた「宇仙丸」は七千トンを超す大型の貨客船だったが、戦時標準船として民間の船を徴発、改造を加えた船舶なので居住性など一切が無視されていた。要するに、満載の将兵、輸送物資などを、目的地に送り届けられればそれでよし、軍の考え方がここでは最優先されていた。

宇仙丸に乗らせれた将兵、軍属は三千人余、それに、

甲板の区画には、大砲や機銃類、装甲車、車両、また、大小の上陸用舟艇なども積載されており、ほとんどは立ち入り禁止区画となっていたので甲板も狭かった。

一つ、異様な光景があった。

甲板の舷側の側に、竹で編んだ竹筏が無数に吊り下げられていた。太い竹を十数本束にしてロープで縛り上げた急造の竹筏、これが部隊の将兵の命を支える救命具なのであった。もちろん、将兵の数だけあるわけではない。

軍事徴用船の人員収容の実態は特に酷いものだった。<sup>2</sup>「カイコ棚方式」の寢床で、その狭い空間が兵士たちの居住区とされた。

一坪、約畳二枚の区画に、平均十六人、天井は膝を抱えても頭が支える低さ、そのスペース内に、各自の軍隊装具一式が持ち込まれているから、なおのこと居住場所は狭かった。

まして、南国に向う船の中、鉄板壁の焼ける熱も加わって、カイコ棚式の居住区は、すでにむーつとする人いきれに包まれていた。

ものの数分、その場所に居るだけで汗がどっと噴き出す。べつとりと肌に汗がまとわり付いた。とても人の居

られるところではない。

実際、カイコ棚の居場所に收容されただけで、換気不良で気分が悪くなる者が続出、その度に、上官の怒鳴り声が船内を走った。

その上、船艙下部のスペースには軍馬が積み込まれていた。動物特有の体臭、それに、馬糞の匂いも加わってみんなの胸を悪くした。

窓もなく光もなく、もちろん、風もない船艙の中、これが本当の「牢獄船」だとみんなは言い合っていた。

外洋に出た頃から、今度は、船酔いする者が続発した。弄ばれるように船は揺れた。

古参兵たちが、「根性が座っておらん」と、初めはビンタの一つや二つはくれたが、余りに数が多い上に、渴を入れていた古参兵たちも、名うての荒海、外洋を船が通過する頃には、<sup>①</sup>貫いゲロ<sup>②</sup>の症状を呈するようになり、甲板上は、どこでも、<sup>③</sup>小間物屋<sup>④</sup>の賑わいぶりとなった。

「おい、今福、おれについて来いや」

入隊時から、仲が良くなった新兵同士、今福洋次二等兵を中之瀬浩記二等兵が誘った。

とてものこと、ぎゅうぎゅう詰め<sup>⑤</sup>の、<sup>⑥</sup>地獄部屋<sup>⑦</sup>には

居られなかった。息が詰まった。

それに、この過酷な状況を察して、早々に、彼ら新兵組は居住区からは追い出された。要するに、邪魔者扱い、居場所とてなかった。

中之瀬二等兵は船員経験者、船の状況には詳しいから、万事、要領良く振る舞った。

空いている場所を、予め、頭に入れていた。

今福二等兵も、元船員の彼の身分については知っていたので、素直に彼の背に従った。

甲板舷側際には、もう一つ、異様な光景があった。臨時設置の天幕覆い式の「仮設便所」が、一メートルほどの間隔で、海側に向けてずらりと並べられていた。

急造の作りだった。

その前に並ぶ用便者たちの列も半端ではなかった。数だけ用意されているわけではないので、用便を達するのは一日仕事、とてもものこと、要領の悪い者たちはここでは生きては行けなかった。そんなこんなで、甲板は甲板で、これまた、人間どもで溢れ返っていた。

「みんな、ついついと、煙突の下あたりの広場に行っちゃうが、あそこに居るんはいけん。あっこでは、暑うて

体がえろうなるじゃ」

後部甲板の一郭に積載された空き樽の積み場所に彼らは移動した。立ち入り禁止のロープが張ってあったが、がらくた置き場になっていて、特に、咎める者もいなかった。大小の使用済みの味噌樽や醤油樽がそこには幾つも置かれていて、一部、ロープで固定してあった。みんな空き樽だった。

元船員・司厨手（しちようしゆ）としては、この戦時下、これらが何に使われるかを知っていた。

魚雷攻撃などで船が一部損傷、水入の状態になると水の掻き出し用にも使われることがあったし、救命具の代わりの役目を果たすので、捨てられずに、この場に置かれていたのであった。昨今の、船舶事情に精しい者だけが知っている、そこは絶好の隠れ場所なのだ。

「あやあ、猫が乗っておるわあね」

山口弁のままに今福二等兵が言った。

空の四斗樽のそばに一匹の猫が蹲っていた。

白と黒、ぶち模様の猫で、人の気配を感じ取ったのか、のっそりと立ち上がった。

尋常小学校までは、山口県の母方の村里で育った中之

瀬二等兵、今福二等兵が近在の村の出として知って二人は親しく口を利くようになった。今でも中之瀬二等兵は山口弁はちゃんと喋れた。子供の頃に使った言葉、懐かしくもあった。それで彼も山口弁を使った。

漁船・造船会社の船大工、召集には掛からないと思っていたのに、今福二等兵は二十七歳で補充兵に編入された。新婚ほやほやで、残して来た妻のことばかりを口にした。もつぱら、中之瀬二等兵は聞き役、切ない思いの山口弁をたっぷりと聞かされてもいた。

「猫がおっちゃるか。おいでませのんだ。じゃね。ほりや。こつちに来んさい」

、ようこそのお出でと、中之瀬二等兵としては好意のほども示して見せたが、大体が猫は無愛想だから無視された。

代わりに、その味噌樽の傍からひよいと少年が顔を出した。丸坊主、痩せていて小柄、一重瞼なのでどこか弱々しい印象があった。

それでも二人にちらりと視線を投げると、身を乗り出し、少年は自分の側に猫を招いた。

支給された服がだぶだぶで袖口が二重に折られていた。

そのまま、猫を引き寄せると、猫を抱えるようにして、少年は空樽の中に潜り込んだ。こちらも愛想はない。

この航海から雇われた甲板員、任務に就いていなければならぬはずなのに、この少年はサボっているように中之瀬二等兵には思えた。出航前までは甲板磨きの作業に就いていたのを、中之瀬二等兵は目にしていた。

多くの少年船員がこの船でも雇われていた。若者の数が不足していたので、軍属として狩り出された者たちが新たに加わっていた。

昭和十五年春から司厨手として四年間働いた彼としては、軍属船員としては同じ境遇、乗船時から何かと少年たちには気は使ってやったが、それにしても、今回は『危難』が予側される南洋航路、痛々しい思いで、中之瀬二等兵はこれらの少年船員たちを見て来た。

人手不足の折りから、機関室要員、甲板部員、炊事班などの助手役として採用されていた。また、信号手として手旗信号を振る少年たちが、この船には乗せられていた。赤と白の手旗を左右に打ち振り、交信する役目を負わされていた。みんな十代前半の少年たちであった。

軍の運輸船舶部が募集して集めた少年たちで、一応の

教練は受けていた。

にわか船員の少年たちもそうだったが、みんな、一名、<sup>ボカ沈要員</sup>と言ひ、員数合わせの役も負わされ雇われた少年たちであつた。<sup>ボカ沈要員</sup>というのは、沈む船なのに、ともかくも、員数揃えで動員された者たちと  
いう意味が込められていた。

「猫の番もええけど、あれこれ言う、しろしい(うるさい)のがおるで用心しんさい」

身を隠した少年に中之瀬二等兵が声を掛けた。山口弁が通じたかどうかは分からない。少年は返事をしなかつた。少年に構っている場でもなかつた。

二人は無用になつた大きな酒樽の傍に空き場所を見付け、そのわずかな隙間に、自分たちの居場所を確保した。足ぐらい伸ばしていられそうだった。

やっと、二人は一息吐いた。

「ここの空き樽やあ、みんないかい(大きい)で、このまんまに、空き樽ん中に入って漂流しておつても、少しは浮いていられそうじゃ。こりや、ごっぽいに」

と、今福二等兵が言った。

「うん？ごっぽうって何ね」



「良いって意味なあ。ほらあ、ごはんが旨いは、この飯、ごっぽううまい」となるじゃあ」

同じ県出身者でも不明の言葉もあるようだった。成る程と、その今福二等兵の答えに、中之瀬二等兵は頷いた。

何回か、彼らはこの少年と猫の組み合わせの話に接することになった。船内ではそれなりの噂になっていて、その少年には、「小便小僧」の名が付けられているのも知れた。その名の由来は、この少年が三段ベッドの上から寝小便を漏らす常習者であるからであった。十四歳で寝小便癖とは、性格的に弱いところのある少年なのかも知れなかった。

兵士たちよりも劣悪な環境にある船艙地下の馬匹収容場の直ぐ横がその居住場所で、牛馬以下の扱いを、軍属少年たちは受けていた。

年端も行かぬ十四歳、母恋しさに毎日泣いてばかりいてどうしようもないの声も、この少年に関してはそれとなく聞こえて来た。

凜々しい少年たちもいる中での落ちこぼれ少年のようで、容赦しない軍関係者たちによって私的リンチ制裁も加えられるようになったとも聞いた。中之瀬二等兵らはそ

の様を目撃したことはないが、ビンタを張られる程度では済まないというのは想像出来た。

その後も、猫の行方ばかりを捜し歩いている少年という噂だけはみんなの間には立っていた。狭い船の中、情報に飢えているから、上官の悪口も含めて、みんな、あれやこれやとあらぬ噂が飛び交った。「私物情報」という奴で、まるで、女たちの「井戸端会議」そのもの、隔離された軍隊社会では、これも、生きて行く知恵の一つなのであった。

「猫と少年」の話は、無味乾燥な船中では、色々この噂話には尾びれも付いて伝わった。「まだ声変わりもしていない」「二日中、将校用の水洗便所の掃除、それに、兵士たちが使わないようにその水洗便所の番をさせられている」などはまだいい方だったが、その内、空樽に入れたままの状態で、「猫と少年」は、海に捨てられたという話まで加わった。

「死んでしまったので水葬代わり、猫付きか」などは、かなり悪質な尾びれ話だった。

いずれも、事の真偽のほどは確かめようはなかった。

何しろ、数千人が一堂に会して起居を共にしている船の

中のこと、「猫と少年」に会う機会も限られていた。その後、二等兵二人は「猫と少年」に出会うことはなかった。自分たちのために確保した隠れ場所も、その翌日には二等兵二人は、軍隊生活に馴れた荒らくれ兵たちによって追い出された。

「あちやー、二等兵どもお、貴様ら、ここからは消えちよらんがっ。こけらに、居るっちゃなか」

声の大きい者たちがここでは生きていける論理、元気の良さでは聞こえた鹿児島部隊の者たちであった。難解な鹿児島弁ではあったが、その剣幕から、この部隊の者たちの意は二人には伝わった。早々に、立ち退かされた。

その後の話だが、多分、あの少年も隠れ場所から追い出されたであろうことまでは想像は出来たが、みんなそれどころではなくなった。三交替制のデッキでの敵潜水艦出没の見張り役、武器の手入れ、大部隊を支える飯上げ番、飯缶返納、食器洗浄などなど、いやというほどに、新兵たちは任務を与えられ、心身共にくたくたになった。寝る場所の確保、その場所の環境劣悪なことなど、もはや、関係ない話であった。

中之瀬二等兵、今福二等兵も、カイコ棚でも、いびき

を搔いて平気で眠れるほどに、鍛え直されていた。

出航三日目、船団は敵潜水艦の目標にもならず、無事、台湾基隆港に到着した。

三日間の停泊期間中、将校を除き、私的時間での下船が認められなかったので、「猫と少年」のまたぞろ話、「役に立たないので早々に下船させられた」の噂話も、真実味を欠いた。

兵士たちの間では、下船にならなかった腹いせで、上官たちの悪口だけが言い交った。

この「猫と少年」を巡る話は、この後、中之瀬浩記の語った物語には、後々まで付いて回ることになるのだが、誰しもが、この時点では、その結末のほどは知ることがなかった。

### 3

台湾基隆港を出た後、地獄船は一路、バシー海峡に向けて進路を取っていた。

日本は冬の季節とは言え、ここは南の海、猛烈な暑さがじりじりと船全体を焼いた。

これだけの人間が、一隻の船の領域に閉じ込められるということ自体が常軌を逸した話で、劣悪環境下、連日、あり得ないような話が、今度は、船内を駆け巡ることになった。

一日二度ある部隊毎の点呼では完全装備で全員が甲板に並ばされた。「避難訓練」が実施されたが、部隊長の長い精神訓話だけ、気分が悪くなって倒れる兵があると、たちまちに、ビンタが飛んだ。気合いを入れられた。

或る老補充兵は、それを苦にして船から身を投げ、行方不明になった。元中学校長で、抗議のための自殺だともっぱらの噂が立った。

デッキの手摺りに、その元校長が掛けていた眼鏡が結び付けられていたという話も伝わった。それも、日の丸印の入った鉢巻で結びつけられていて、その念の入れよりのほども兵士たちの間では話題の一つになった。

北満州の地にあった「日本人学校」が閉鎖されたことで、応召を受ける身となった用なしの学校関係者の一人、もちろん、軍事教練なども一切受けてはいない。

また、長い列をなす「仮設便所」だが、こちらでも犠牲者が出ることになった。

海に突き出た天幕内に設けられた便所は、木枠の便座で、碌々手摺りもない造り、揺れている船の中、用便中に足を踏み外して、海中に落ちる者が出たのだった。

また、居場所がないので仮設便所の天幕製の天上で寝ていた兵士が、寝ている最中に、振り落とされたという話もあった。

他にも、天井部分もない吊り便所が設けられていて、危ないので空いていることが多いのだが、どうやら、その吊り便所から落ちた者もいるらしいの噂もあって、その噂の後、吊り便所で用を達する者が急に減った。

もともと噂はあくまで噂だが、その後も仮設の天幕式便所では犠牲者が出るようになった。半分は尻を海側に突き出しての不自由な姿勢なので、直ぐ下は白波の逆巻く海、手摺りの枠など役に立たず、尻まくりのままに海に落ちたこれらの兵士たちは救助されることはなかった。

何しろ、波の荒い日には、お釣りどころか、波頭で尻が洗われるほどだった。

全員、行方不明者として扱われた。

余計なことをしていると、船が遅れるのと、その分、敵潜水艦に狙われるので、捨て置かれた。『ボツ沈』の意

味が改めて問われた。

兵士たちの健康状態も極端に悪くなっていた。仮設便所の設けられた甲板には、処理し切れなくなった糞尿が一つの流れになって屯ろしていた。揺れる船の角度に合わせて、三千人分の排泄物が垂れ流され、ハッチの階段口からも、ぽとぽとと、その臭い糞尿物が滴り落ちていた。船艙の通路にも、つーつーと、臭い水の筋が走っているほどだった。

、尻拭きの紙は海中に捨てるべからず」となった。

少年たちが甲板上に舞う尻紙を拾うために、いつも、甲板に張り付く役を負った。

海に漂うと、船の乗っている者の数が敵潜水艦に察知されるとするのがその理由だった。

少年甲板員たちが動員されてその処理に当たったが、本当のところは、ほとんど役を為さなかった。みんな幼くて役立たずであった。

注意して中之瀬二等兵は、あの「猫を抱いていた少年」の姿を探してみたが見当たらなかった。

それらの甲板要員の中にはあの少年の姿はなかった。

彼らも少年のことは忘れた。

どこにも、糞臭が充ち充ちていた。

中之瀬二等兵らの船艙の居場所にも、汗と垢と糞臭を身に着けた兵士たちが屯ろした。

夜になると、一層に、みんなの気持ちは滅入った。

船艙も、通路もほぼ真っ暗で、ところどころに裸電球がぶら下がっているだけ、正しく、これは、「奴隷船」に違いなかった。

宇品の港から台湾へ、そして、バシー海峡を経て目的地のルソン島へ、ほぼ二週間の航程を要した。潜水艦の攻撃を避けて、各船は、<sup>①</sup>之の字運動<sup>②</sup>の航跡を辿っていたので、その分、余計な航程時間も要することになった。

中之瀬浩記の「記述の一文」を記しておく。

『圧縮収容船、地獄船、奴隷船、どの文句も当てはまらない。異様な、この世のこととは思えないような過酷な状態であり、すべてがこの世の情景とは思えなかった。わたしののような船員体験のある者でさえ、この敗戦直前期の戦時輸送船は耐え難く、人間は荷駄以下の扱いであった。』

員数分だけ押し込んだ末の満載船、一日に握り飯二個、



佃煮昆布少々、水は水筒に一杯、これで飲み水、洗面、口漱ぎの総てを賄う。ほぼ、一週間もこの状況が続いた。とても、人間が生きていける状態にはなかった。

それだけではない。劣悪な船の環境に、多くの者が戦地に向う前に脱落することになった。浮遊する空気は独特の臭気を保っていた。塵埃と湿度の濃密さと、加えて人間の垢染みた体臭、(中略)それらのむーとする人いきれで、一瞬にして、衣服もベダベタしてくる。

実際に、劣悪環境により、下痢病患者や、熱発病患者、息苦しさ訴える呼吸器系統の病人なども続出し、死に至る結果となって、航行中、水葬に付された者も多く出た  
…』

もちろん、この「記述」に関しても、船内ではあれこれと噂話が行き交った。

鹿兒島弁の部隊の者の話ぶりがいちばん真実味が籠もっていた。中之瀬二等兵が甲板で、偶々に、立ち聞きした話の一つであった。

「水膨れになった下向きの死体が、いつのまにか、船の後にはついて来て居(お)っよ。ひでこっど、気色(けしよ)

く悪(わ)っか」

「男のお、土左え門は、けんしめ(うつ伏せ)じゃらよ。  
うっちよけ、うっちよけ」

もちろん、鹿児島部隊だけでの話ではなく、他にも尾  
びれ話は、幾つも船内には伝わった。

明日はわが身の切実な話―船上生活の不満をぶつける  
代わりに、兵士たちはあらぬ噂話をする事で、「自分と  
は関係ない話」と思うように努め、気を紛らわせていた  
のだった。

いよいよ、緊迫度の増すバシー海峡入り、どんな運命  
が待ち受けているのか、この時点では誰も「船は沈むは  
ずはない」と思っていた。他人事と思うようにしていた  
のだが、着々と敵潜水艦はこの大船団を目標にバシー海  
峡に集結して、雷撃の機を窺っていた。

この、宇仙丸などの船団が、ルソン島を目指して、大  
量の兵力を送ったこの十二月の一ヶ月の間だけで、南方  
海域に限っても、おおよそ、沈没船八百隻余、将兵の死  
亡者四千人余、船員の死亡者七百人余、邦人子女の乗船  
死亡者八百人強の犠牲者の数が出た。

船舶の損失数、将兵の犠牲者数とも、この時期、この

海域に集中しているのが、これらの数字からは看(み)て取れるー。

一番、危険な海域で、かつ、一番多くの犠牲者を出したこの時期に、鉄撃兵団の者たちも、戦地にと送られることになったのであった。

その危機一髪、運命の時間が刻一刻と近づきつつあった。F13偵察機が数機、船団の位置、その船団規模を確かめるために連日、飛来した。

何とも不気味な偵察行で、誰しものが不安そうに空を見上げた。これまで何もなかったのが、むしろ、不思議なくらいであった。

何度か、非常呼集が掛かり、重装備のままに兵士たちは甲板上で待機させられた。解除される度に、中之瀬二等兵は吐息を吐いた。

(とてもこのままでは海に飛び込めないー)

思わず、眩かすにはいられなかった。

重い三八銃に、腰に付けた帯剣、手榴弾、弾薬実包、鉄帽(てつかぶと)、防毒マスク、水筒、地下足袋、背に斜めに負った円匙(シヨベル)に、小物や携行食糧など

を収めた背囊、もう、これだけでも海に放り出されたら、背囊もたつぷり水を含みそうだし、何もかもが体に重し、を付けているようなもの、助かりようはないと、中之瀬二等兵は思った。

役に立ちそうなのは、帯剣、水筒、それに歯ブラシ、カミソリなどの洗面具、包帯包みなど、肝心の携行食糧は、靴下の袋に詰めた米二合分、乾パン、食塩、梅干し各一日分の支給分しかなかった。

自分なりの思いは今福二等兵にも伝えた。

いざという時は、身軽になること、背囊に入っている身の回りの物、携行食糧などは袋状の小型雑囊に入れ替えて所持、不時の遭難時に二人は備えていた。

#### 4

「総員、退船せよ！総員、退船せよ！」

メガホンで伝える高い声が甲板上を走った。

軍用輸送船・宇仙丸の指揮隊長の退船指令が伝達された。フィリピン海峡の外れの海域、通称バシー海峡に船が差し掛かった頃、敵の魚雷が二発、前舷側と、船の中

腹部に命中した。午後四時半を過ぎた時刻、あたりの光景が生々しく、はっきりと写し出されていた。

中之瀬浩記二等兵は、素早く動いた。蚕棚(かいこだな)式の船底の一室から、軍隊装備のままに飛び出すと、迷路のような避難路を右に左にと伝い、上へ上へと、いくつかの階段も駆け上った。

何度か足を取られて転んだ。

「うちやあに、ついて来んでえーや」

今福洋次二等兵に中之瀬二等兵は声を掛け続けた。戦時標準船、それも民間の貨客船を調達し改造した船だから、およそ通路や、階段なども整備されていない。

それでも退避兵を掻き分け、掻き分け、彼らもひたすらに甲板を目指した。怒号ばかりが行き交った。

さらに、「どどーんっ。びりりいっ」と、衝撃音がし、船全体が大きく振動した。低空を飛ぶ敵機が「きーん」と、金属音を響かせて通過した。

船底からでも聞き取れた。

敵潜水艦の雷撃だけでなく、空からの爆撃も、今や、果断なく、加えられているらしい。

中之瀬二等兵も、頭や、肩、腰などを側壁に強くぶつ

けた。痛さに呻く。

甲板上に出て見ると、もう、そこは生き地獄の様相を呈していた。甲板が傾いた時、ざーと甲板を洗うように血の川が何筋も流れて来た。寄せては返しており、波しぶきが甲板上に打ち掛かると血のしぶきが上から降った。その先の甲板には、兵士たちの血だけかけの死体が幾つも転がっていた。

赤と白の手旗も血に染まっていた。

採用されたばかりの、戦時海員・手旗信号旗手の少年たちも、犠牲になっていた。

戦時船に備えられた機銃座、砲座が根こそぎに吹き飛ばされていた。そのあたりには、血だらけになった船舶砲兵たちが何十人も倒れており、五体満足な者は見当たらなかった。

みんなまだ損傷部から血が噴き出していた。

血の波が流れて来るのは甲板上の至る所に無数の傷ついた者、無数の死体が転がっていたからだだった。

その一帯からも、呻き、絶叫の声と共に、多量の血が流れ寄って来た。

やっと、後ろを振り向いた。今福二等兵が甲板上に座

り込んでいた。腰が抜けていた。

「はよう、こっち、来んさい」

手を差し伸べた。肩を抱えて、二歩、三歩、歩き出す。あちこちで助けを求める声が上がっていた。

甲板上は負傷者で溢れている。

上空には敵機の飛来があり、魚雷攻撃によって海上に擱座(かくざ)した停船目掛けて、空からさらに爆撃が加えられていた。砲座も甲板上も、その直撃、直射を受けたらしい。

なおも上空を双発の爆撃機B25が何機も旋回していた。爆音を聞いているだけで生きた心地がしない。

中之瀬二等兵も首を竦めた。

「いけんいけん。こりや…いけん」

咄嗟に、中之瀬二等兵の口を吐いて出たのはお国言葉だった。だめの意のいけんしか口から出なかった。中之瀬二等兵の背を追う今福二等兵はぶるぶると全身を震わせているだけで、こちらは何も言わない。

逃げ延びるために、甲板上に転がる死体の上を、よろけながら跨いだ。

みんな童顔で若い。軍隊衣ではなかった。

臨時徴用された軍属の少年船員たちであった。多くは甲板要員として雑務に就かされていたから、この状況では犠牲者となる公算大であった。改めて、「ボカ沈」の現状を、中之瀬二等兵は思い知らされた。胸が痛んだ。

こんな混乱の中であつたが、甲板上では、繋がれたボートや救命筏のロープを下ろす軍需徴用の船員たちの姿があつた。何度も遭難に遭っている猛者も中にはおり、こんな危難時でも、みんながみんな任務に忠実であつた。ゆっくりと船体が傾き始めた。甲板上の死体や負傷者たちの体は何体も坂道を転げるようして彼らの傍まで寄つて来た。

同じように転びながら、二人は振り払い、逃げた。

すでに船の中腹からは水柱が立っており、寄せる波と共に大きな波頭となつて船を襲つていた。

水をたらふく呑んだ船腹が、一気に波を吐き出しのた。船も大きく揺れた。

逃げ延びる途中、中之瀬二等兵は忘れられない場面に遭遇した。ぽっかりと開いているハッチ口、下から助けを求める声が届いた。ひよいと覗き込むと、梯子が外れて、逃げる術(すべ)を失つた兵士たちの顔が、そこだけ



と開いたハッチ口にと、一斉に向いていた。

凄い形相でみんなの目が突き立った。

「ロープを投げてくれえ！頼む！」

その内の何人かが哀願した。見捨てて逃げるわけには行かないので、中之瀬二等兵は救難助具を探すため、二歩、三歩後戻りした。

と、その時、急に船が傾(かし)いだ。荒波のしぶきに、中之瀬二等兵の体も持っていかれた。怒涛の波が逆巻き、船を襲っていた。

あろうことか、その荒波は、さらに勢いを増した奔流となり、ハッチの開口部に向いた。

船底に残された兵士たちが一斉に悲鳴を上げた。屠殺される場に臨んだ獣にも似た断末魔の叫び声だった。ぞくつとし、中之瀬二等兵は我れを失った。

彼も腰が抜けていた。

斜めになり、歩行困難になった甲板上を、今福二等兵と一緒に這うようにして進んだ。

いつの間にか、「総員退船……」の掛け声も消えていた。人間たちの叫び合う声だけが、この場の生き地獄の生々しさを伝えていた。

舷側の際に積まれた救命胴着の置き場まで、やっと辿り着き、中之瀬二等兵と今福二等兵の二人は装着し了えると、舷側から飛び込むべく手摺りに掴まった。生死を決する覚悟を決めた。生きるも死ぬも後は運に任せるしかない。今福二等兵の顔を見ている暇もなかった。

他にも、避難者たちがこのあたりには何人も蠢いていた。誰が誰とは分からない。

「みんなキバレ！海(うん)に泳よっけいどっ」

鹿児島連隊の者たちの声であった。

隊長格らしい男の一人がロープでみんなの体を一つにして繋ぎ止めた。彼らは救命衣は装着していなかった。

一蓮托生、彼らは運命を共にする覚悟のようだった。

もはや、猶予はなかった。船が沈む時の渦に巻き込まれると生死を分けることがあった。

中之瀬二等兵は下腹に力を入れ、「ふーと」大きく息を吸い、落ち着くよう自分に言い聞かす。色んな事柄が、瞬時に頭の中を巡った。

「いけん。いけん。死ぬるっちゃや。これじゃ、いけんに  
こや」

と、自分に向けて、中之瀬二等兵は呟いた。

自分の気持ちを強く持つために、今福二等兵の手を握った。「死なばもろとも」、そんな思いも頭の中を過(よ)ぎった。海面はもう目の前にあるから、飛び込むこともなかった。海へと一歩、歩き出せばいい。

次には、「どどーんっ」と何回か音がし、船に搭載している石油入りのドラム缶が暴発した。次々と引火し、今度は赤い炎が船を包んだ。甲板に流れた石油に、たちまちに、点火して、今度は甲板上が火の海になっていた。

焦げ臭い油の匂いと、紅蓮の炎、もう、船全体が火熱の地獄に呑み込まれようとしていた。勝ち誇った爆撃機の爆音だけが、「きーん」と空を裂いた。かなりの低空飛行をしていた。

5

船首側に船体が傾いた時、中之瀬二等兵は滑り落ち、そのままに海上に投げ出されていた。途端に、何かにごつんとぶつかった。

長い竹を二十本ほどを麻縄で繋ぎ止めて作られた筏(いかだ)で畳三畳ほどの大きさがあつた。物資不足の

折りから考案された苦肉の策の特製筏であった。甲板に繋ぎ止められていた長いロープが竹筏から外れて、そのままに、波の上に何本も筏と共に流れていた。そのロープに掴まり中之瀬二等兵は近くの竹筏に取り付いた。やっつこのこと竹筏の上に乗った。今福二等兵の姿を探し出す余裕はない。

よじ昇ると自分の体の平衡がやっつと保てた。

真つ黒の重油が海の上には流れ出していて黒い海になっていた。一部にはもう火の手が上がっていた。ここらあたりも炎の海になるのは間違いなかった。黒い油にまみれた遭難者たちが懸命に手を差し伸べて援けを求めている。ここにも危機一髪の次なる修羅場が待ち受けている。人の頭が無数にあたり一帯に浮いていた。

もちろん、手足や頭を吹き飛ばされ、千切れた兵士たちの肉片も漂っていた。

直ぐ近くで、今福二等兵を見付けた。棒切れに掴まり、やっつこのこと泳いでいた。

あちらこちらに波に弄ばれた竹筏が浮いており、みんながその竹筏に向けて死力を絞って泳ぎ着こうとしていた。相身互い、そのための救助用の竹筏だった。

中之瀬二等兵は手を伸べて、今福二等兵を竹筏の上に乗せてやった。這い上がるなり、いつときだが、今福二等兵は氣を失った。

次に、二、三人の兵が泳ぎ着き、中之瀬二等兵に声を掛けて来た。みんな頭から油を被っているので真っ黒な顔をしていた。

目だけがぎよろぎよろしていて、彼を睨み付けていた。誰が誰とは分からない。

一本のロープで体を繋ぎ合っていたが、その内の一人が、竹筏に取り付く前に、ロープの輪から外れて溺れ、海中に沈んだ。

仲間が助けようとしたが適わなかった。

「うっちよけ。みんなキバレ。おい、ワイらも仲間(かたす)っで、乗せるだよね。うっちよくと、怖(こ)えーこつになんぞね。分かんちよとつか」

中之瀬二等兵は無言でみんなを迎えた。

さっきの甲板で出会った鹿兒島部隊の連中のようだった。一人が竹筏に取り付くと一本に繋がれたロープが引き寄せられた。数珠繋ぎになった兵隊たちが次々に竹筏の上に乗った。その度に、竹筏が大きく揺れた。

慌てて、中之瀬二等兵は今福二等兵の体をしっかりと掴んだ。二人共、海に放り出されそうになった。

今福二等兵もうつつすらと目を開けた。

やっと気が付いたようだった。

この後の筏の状況だが、隊長格の男は陸軍伍長の肩章を付けていた。もはや、二等兵ごときでは太刀打ち出来ない立場で、この伍長の指揮下に、竹筏は置かれることになった。

「あせつく（焦る）ね。このあたりにはいつきに火が付くぞお。まずみんな、けしんかぎい（精一杯）、ここはあ、手漕ぎばすつがあ。じゃっどん。ここば離れるちよらばねっ」

中之瀬二等兵らも入れて全員五名、みんな力を合わせた。拾い集めた竹のオールで筏を漕いだ。

炎上中の船から離れることが出来た。

回りの状況は、一切、目に入らなかつた。

この時、船の汽笛音が、「ぼおー、ぼああー」と鳴った。最後の訣れを告げる物悲しい汽笛の合図の音で、元船員の身であった中之瀬二等兵は一人目を瞑った。船長が船と運命を共にする時の、キャプテン・ザ・ラストを知

らせる汽笛音であることが分かった。

鹿児島隊の連中はそれどころではなかった。

携帯食糧や水筒などを一つにまとめた。

もちろん、二等兵二人も携帯していた食糧を、この部隊の者に預けることを承知させられた。

持参していた大きなドンゴロスと呼ばれた麻袋に詰め  
て食糧類は竹筏に繋いだ。

ひとまずの、漂流の準備が整ったところで、隊長格の男が中之瀬二等兵らに声を掛けた。

「自分は鹿児島師団、歩兵分隊の富永伍長、おい、二等兵、貴様らはどこの隊の者だ？」

やっと、軍隊口調になり、いかつい顔の男が言った。

ここには軍隊が存在していた。

二等兵二人は大きな声で答えた。

挙手の礼などしている場合ではないので、やっと、竹筏に掴まりながら官名を告げた。

「はっ、鉄撃兵団、歩兵第十六連隊の中之瀬二等兵であります」

「同じく、今福洋次二等兵であります」

この後、吉岡上等兵、肥後一等兵が、名と身分を名乗

った。どちらも階級は上だった。

「よし。この筏ではお前らが一番下じゃ。鹿児島弁が喋れんと、何かと厄介もんになるつとお。ナマ兵のほじよ(毛虫)がおらいで、きしよわつか(気味悪い)。二等兵はここではどべ(ビリ)だっちゃ。ごわんそ(判っているか)」

富永伍長に連られて他の兵が可笑しそうに笑った。伍長と言えば兵隊の叩き上げ、糞意地の悪い古参兵としての資格は十分であった。

また、軍隊には仲間意識があつて、一つにまとまる利点もありだが、部隊が異なると他人意識の方もまた人一倍強くなる傾向があつた。この時の部隊構成だが、折りからの戦線急の状況で本来六ヶ月の入営・教練となるのが、二人の二等兵は免除され、入営後十日で軍用列車で、広島・宇品の港に送られていた。

使いものにならない即製の新兵たち、戦場に送られるのは、通常、教練終了の一等兵以上、この間の事情をこの部隊の者も精通していた。だが、そんな内輪争いをしていいる場合ではなかった。狭い救命板の上に大の大人が五人、自分の座っている場所を確保するのがやっとで、他言している余裕などない。



それでも、富永伍長が軍隊口調になり、役立たず二等兵たちにけじめを付けた。

「おい、ここでは階級の高い者順に生き延びる権利がある。ひよっこ如きピーピーマラ野郎の二等兵が救命衣を着けているなんぞ許せんぞ。おらあ、こつちへ寄越せ」

否応はなかった。黙って二等兵二人は身に着けていた救命胴着を脱ぎ、差し出した。

富永伍長と吉岡上等兵が代わりに装着した。

改めてロープで体を結び繋ぎ直し、彼らは隊の結束を固めた。軍隊意識が強かった。

二等兵二人の居場所はなかった。

炎の海から脱出したものの、船団を組んでの今回の航行、宇仙丸だけでなく、他船も多く沈められていたので、竹筏や、流れた木片に身を預けた者、あるいは独力で泳いでいる者たちが、近くの海には放り出されていた。

生死を分ける者たちの選択法がここでは厳然と存在した。竹筏に乗ろうとして泳ぎ寄って来た漂流者たちは、みんな退けられた。

銃を手にしている者は台尻で、竹のオールを使って筏を漕いでいる者はその竹の先で、ロープを手にしている

者は、鞭をしならせて、それらの漂流者たちを事もなげに追っ払った。

中之瀬二等兵らが乗った竹筏にも、小さな木切れに掴まった何人かの兵が寄って来た。

みんな一様に重油で汚れた顔をしていた。

泳ぎ着く前に力尽きて波間から消える者、片腕を負傷していてもう一方の腕だけで、水を掻き泳ぎ着こうとする者、必死になって、この海域まで泳いで来たのに邪険に扱われた。

蠅がたかったようにも見える人間の頭だけが、うじゃうじゃと、海には無数に浮いていた。最後の力をみんなが振り絞っていた。重油を呑み込み、声帯をやられて声の出ない者もいた。口だけをぱくぱくと動かせた。

「こつちもあつね(危ない)。手一杯じゃと。あっち、行っちゃ」と、追っ払い、「いらんこつすんな」と、助けるあの声がこれに被さる。

「うつちよけ」と、それに、誰かが応じる。

「スマンが行きさん。ここはいけんけえ」

中之瀬二等兵も非情の文句を口にした。

年の頃は分らない。泳ぎだけは達者でまだ元気があ

った。少年兵かも知れなかった。

竹筏の端に手が掛かり、乗り上がろうとした者もいたが、高い波に煽られて体が離れ、そのままに海底に沈んで行つた者もいた。

「そうじゃ、おまんら、あいつらの救命胴着は使えるだら。おまんらで取つとつとお。助けば求めて来たもの身ぐるみつうーと剥いでえ、後は、ひっちゃえつ」

中之瀬二等兵にも富永伍長の口にした文句の要点は分かった。救命胴着を身に付けた漂流者がいたら各自の役に立つから、その救命胴着だけを剥ぎ取って、海に蹴落とせというような意味と取れた。

どこの隊でも程度の差こそあれ、この生きるか死ぬかの場、同様の略奪行為は行われていた。

結局、近くを泳いでいる者たちは、誰も救命胴着は身に着けていなかった。

見渡せる限りの海の向こうでは、まだ、無数の漂流者を取り残されていた。目視出来る範囲でも無慮数百人、運の悪い者たちは、船が火柱を上げ、黒い煙を空高く上げていく遠い海域の向こうで、漂うようにまだ群れていた。やがて、彼らとて、火に巻かれるのは時間の問題、

次の展開が読めた。

まだまだ、生き地獄の状況が続いた。

今度は、一度、飛び去ったと思われたグラマンP51の戦闘機が数機、また、その上空に現れた。凄惨の場となった。掃射機能に優れた攻撃機は超低空飛行態勢を取ると、無抵抗の漂流者たちに一斉に襲い掛かった。

漂流者たちはみんな海中に潜ろうとするのだが、救命胴着を着けている者たちは直ぐに浮かび上がるので、敵機の標的になることが多い。中之瀬二等兵らの離れた位置からは詳細は分からなかったが、「ぴしっ、ぴしい、きゅきゅん！」と、掃射の弾音がする度に、遙かな波の上にも何回も派手に血しぶきが立った。

どこか遊び半分のように見えた。

超低空飛行を重ねながら、アクロバット飛行のように急降下、浮上を、P51は執拗に繰り返した。

この世にあらぬ断末魔の悲鳴が海に向こうで上がっていた。血の海とは相当に離れているのに、海風に乗り、どよめきのようにその声は伝わって来た。底知れぬ海鳴りの音とも聞こえた。やがて、弾を撃ち尽くしたのか、殺戮を重ねたP51の姿も消えた。

しばらくの間は、青い海原が朱に染まった。

血の海が寄せて来て、竹筏のお陰で逃げ延びた彼らも、その悲惨さを思い知らされることになった。さすがに、みんな無口になった。

あたりの状況がやっと平静さを取り戻したのは、二時間ほども後のことであった。

沖へ沖へと、竹筏は流されていた。

生き残った者と死んで行った者、運と不運、その明暗の差がはっきりと付いていた。余りにも、呆気ない「非情な時間」の経緯だった。

波音だけの静かな海域に戻っていた。

このバシー海峡は水深七千メートルの深海海溝であった。海の深さは底知れない。

海だけは青く、空にある太陽は眩しかった。

焼き付く太陽が、今度は彼らの肌をじりじりと灼いた。軍衣も直ぐに乾き切った。

それでも、この南の海にはいつもと変わらぬ自然の光景が戻っていた。紺碧の海の上を掠めるようにして低く海鳥が飛んだ。

（こんなに簡単に人は死ぬのか、明日はわが身、生き残つ

たと言っても、この大海の只中、どうやって、これから生き延びるのか？)

中之瀬二等兵は回りの海を眺めやった。小波がちゃぷちゃぷと、竹筏を打っていた。

海の色は透明の青さで美しかったが、海の青さが、中之瀬二等兵には恨めしかった。

あちらこちらに幾つか竹筏が浮いていた。

みんな遠く離れていて連絡の仕様もない。

無人の物もあったが、天幕でも利用したのか、風を呼ぶために帆を掛けた竹筏も散見出来た。

南西にと吹く貿易風に乗るつもりらしい。

何隻かの救助用小型ボートも海上にはあった。

定員越えと分かるほど人が乗っていた。

運のいい連中のはずだったが、むしろ、敵機に狙われやすく、安全とは言え難かった。

この時、遠くから小さなエンジン音がした。波を蹴立ててこちらにと近づいて来る一隻の「大発」が水平線上に現れた。上陸用舟艇として作られた大発は機動機付きで揚陸の機能を備え、人員搭載も百人程度なら可能で、救助の役目も果たせる大型の舟艇だった。

「おおつ、あいがとさんね、おいじゃした。援けに来(け)つか」

「たつちこんめ(直ぐに)、来(け)つか」

「オイら助かるぞいねっ」

みんなが歓声の声を上げ、大発舟艇を見守ったが、何事もなかったかのように、洋上遙か、みんなの視野の先を大発は通り過ぎて行った。

白い波の軌跡だけが一筋残された。

こうなれば、救助の哨戒艇を待つしかない。

通過して行った大発が、無事航行中の僚船に危急を知らせるのを期待するしか、今は法はないようであった。

富永伍長の話を総合すると大発に乗っているのは、将官たちばかりで、いち早く安全地帯に向けて航行中、自分たち消耗品の兵は、もはや、見捨てられたと恨み事を述べた。

事実、これからの漂流記、見果てぬ海の上に放置された下級兵たちはおのれの生存を賭けて、自活のための戦いをすることを強いられていた。

まずは、海の浮遊物を集めることからみんなは始めた。

ボートの魯、木片、他の壊れた竹筏と、竹の棒、それ

に、ロープ類、それらを集める時の富永伍長の判断、指示は的確であった。

軍隊での体験が生きていた。

運を天に任せての漂流となるが、南の海は余りにも広過ぎた。どこまで辿り着けばいいのか、羅針盤一つないこれからの長い航路の果てが、みんなには思いやられた  
1。

6

真つ暗闇の海、やがて、夜が訪れた。

風ぎの風、波が静かなのだけが救いだった。

竹筏に乗っている者たちは疲労困憊、すでに、青息吐息の状態に追いやられていた。

漂流者たちの姿も真つ暗闇の中に吞まれたので、不安の目の色は読めなかったが、みんな無口になった。午後から何も口にしていない。当然の成り行きとは言え、携行食糧の管理は富永伍長の管理下に置かれていた。

富永伍長が札付きの評判の悪い古参兵だというのが、中之瀬、今福各二等兵にも追々に知れた。伍長、軍曹職



は新兵教育の鬼役(もさくれ)とされ、シゴキが売り物の下士官、まして、どさくさ紛れで新兵教育も受けていない急造の二等兵二人、こんな場でも、富永伍長は格好の「餌食」を見つけ出していた。

「馬は一銭五厘じゃ集まらないがお前たちは一銭五厘」「一銭五厘はハガキ一枚」など、数え切れないほどの暴言を浴びせられことになった。事実、二等兵二人は、銃の撃ち方についても、碌々、教えられてはいなかった。

今回も、軍は、員数合わせ策、ルソン戦線の戦いでも、多くの補充兵が集められていた。

富永伍長とその部下が必ずしも一枚岩の郷土意識で結ばれていないのも、やがて、二人の二等兵は知ることになった。富永伍長のその性格の悪さが、こと有るごとに露呈された。

この日の夜のこと、事の発端は、夕方の食事配分にあった。公平に分配されるべき携帯食料を巡り、その独断ぶりが不評を買った。

「みんながみんな生き残れる保障はないワ。なあ、そうじゃろう。ここにある食糧は各自が支給された乾パン五袋、米が五人分、梅干十個、それに鰹節が一本、各自の

水筒の水も半分になっておる。みんな、これらの水や食糧、何日分あるか、よく、考えてみるお」

二等兵二人にも伝えたい時は、富永伍長は軍隊語調、命令口調で喋った。

重苦しい思いのままにみんな無言だった。

「二日分じゃ。ここは内務班任務も負っている伍長が全責任を持つ。これからどうなるか。一人、二人、このよ  
うな状況では餓死者が出るじゃろう。その順序だが、当然のことじゃが、役立たずの者に食わせるもんはないぞお。それから、鯉節一本だが、これは齧(かじ)り齧(かじ)りで、水さえあれば人間五日間は持つと聞いておる。二等兵ども、自分の持ち物とは言わせないぞ。自分と、吉岡上等兵二名が半分ずつ、これは所持する。わかったか」

「じゃどお、みんなの今夜の分は…」

吉岡上等兵が他の者を氣遣ってか、口を挟んだ。その癖、二等分に分けられ渡された鯉節は、腰の雑囊の中にしまい込んだ。

実は、中之瀬が徴用船に乗っていた時、仲間内では、鯉節、を海難用食糧として持参するのが習いで、この食糧不足の折りから、無理をして、中之瀬自身が買い求め、

雑囊に入れていた物だった。その点では私物であった。

通常、軍用船で海路任地まで行く兵たちには保存食、または、海難時の際の非常食として、鯉節が二本ずつ渡されていたのだが、今回の船団の者に限っては、数が間に合わず、支給を受けたのは、高級将校のみに限られた。

結局、この夜は、乾パン二個ずつが配られただけだった。もちろん、二等兵二人には支給されなかった。各自、水筒の水を飲んだが、のどの渴きは癒されなかった。昼間からの暑さが、みんなの体の水分を奪っていた。

夜になると、急に気温が下がった。

これも、南洋特有の気象で、みんなは寝ることが出来なかった。寒さに震えた。

救命胴着を装着している者は少しは暖かいが他の者はそうはいかない。それに、波の揺れもあり、竹筏の上では体を固定していない限り海に投げ出されてしまう危険性も大、救命胴着を装着していれば助かる可能性もあるが、一度、海に落ちたら、二等兵二人はまず助かる見込みはなかった。

ロープで各自の体を繋ぎ合っている鹿児島隊の者として同じこと、運の悪い者は、海の藻屑と消えるはずだった。

空には満天の星が煌めいていたが、誰も夜空を見上げている余裕はなかった。

必死に、みんなが竹筏にしがみ付いていた。

竹筏のローリングの強さにやられ、一晩中、吉岡上等兵は船酔いに苦しんだ。

他の者と同じ、竹筏は波に弄ばれた木っ端そのもの、一晩中、みんな眠ることもならなかった。

それでも、水平線上に朝の太陽が射し染めた頃、やっと、みんなは生きている実感を持つことが出来た。

広々とした海の果てには、漂流している者たちの姿はもはや無かった。

「二人余分、いらんこつね。お前らあ、オマメ(※)ごきぶり(じ)ゃ。別の行動を取らんちよ。めしだけ食われても困(こ)まーつけねっ」

二日目の朝はこの富永伍長の文句から始まった。

石油で汚れた顔、ぎよろ目ばかりが目立った。

みんな同じような顔付きをしていた。

「お願いします。食うものは要りませんから、いましばらく、ここに、置いて下さい」

中之瀬二等兵が必死に懇願した。無口なところのある

今福二等兵は何も言わなかった。

「寝るところもない。そっじゃろお。邪魔になっちよるう。もう、おまんたちは」

否応のない文句を富永伍長が被せた。続いて、吉岡上等兵が追従の文句を列ねた。

船酔症状が酷いのに、無理をして発言した。

「分隊長殿、手足も伸ばせないままで、我々も三日とは持ちません。それに、手持ちの食糧も直ぐに底を尽きます」

「この海でこれから何日、漂流していられるか分からんが、何より大事なのは食糧を調達する方法じゃ。どう考えておるつちよね？あの、あほう鳥でも捕って食（た）もらんと」

その富永伍長のもの言いに、みんなが海鳥が舞う波の彼方を見やった。四、五十メートルほどの先に大きな波が盛り上がっていた。

その波に乗って運ばれている漂流物が、この時、みんなの目に入った。

その漂流物が何とは知れない。

あほう鳥なのかどうも分からなかったが、海鳥が七、

八羽、そのあたりには群れていた。白色の羽毛で、翼端は灰黒色、両翼を広げると、二、三メートルはある大きな鳥だった。

よく見ると、漂流物は人間の死体であった。

もはや、水膨れの状態で元の形状にはない。

誰もがその様に目を背けた。波が引く時、彼らの乗った竹筏は、死体の方に寄せられた。

「：難儀（※こえ）こっちな。あほうどりに食（た）もらえるたあ、あつらしいけ（※もつたいたい）。あの野郎ども、じゃつどまあ。ああやって餌に有り付いちよらね」

「明日はわが身じゃ、食うもんはないかてもん、みんな、ぎをゆな（※文句を言うな）。生きておらんど、あげんこつになつとね」

富永伍長のもの言いに、吉岡上等兵が追隨して言葉を重ねた。食い物の話になると、二人とも鹿児島弁になる癖があった。

改めて新兵二人に向って、富永伍長が人間の死体観なるものについて講釈して見せた。

「おい、食いもんが要らんと言うちよるが、この海には

あげんもんしかなかとね、どうする？そこの一銭五厘、手持ちの食糧はオイたちは渡さんぞ。どうやってお前らはこれから生きて行くとつね？おのれらの肉でも食(た)もるつちや？蛸足のようじゃ。いや、どちらかが、どちらかの肉を食(た)もるねつ。まこて、それしかなんけん」

「…別の方法を考えますから、少し時間を下さるようお願いします」

と、だけしか中之瀬二等兵は答えられなかった。やつと、この時、今福二等兵が重い口を開いた。その口元が怒りに震えていた。

「…自分は中之瀬二等兵に食われても構いません。しかしながら、自分は中之瀬二等兵の肉を食うようなことはしません」

「たっちこんめ(※直ぐ)にはだろがつ。どうなるや分かんぞ。この分隊でも同じことが起きんとも限らんとねえ。そういう話も他で聞いたことがあるつちや。食うか、食われるか、昨日も言ったように、わが分隊では食われる番は、下のもんからつと決まっておるつとお。これがあ、ここのお、軍律じゃ」

今度は、富永分隊の肥後一等兵が慄然とした顔になった。命一つを値踏みされていた。

この時、我慢を重ねていた吉岡上等兵が、海上に向けて、何回も吐寫物を吐き出した。

鯧えた匂いをみんなが嗅いだ。

強い海の横風に、その嫌な匂いは消し去られたが、富永伍長だけは露骨に嫌な顔をした。

ものの数分とは経っていなかった。

十数メートル先の波間がざわめいた。

近くの海に頭だけ覗かせた岩礁があり、そのあたりが鯨どもの巣窟となっていたようだった。

海底を覗き込むと、大きな魚影が幾つか近付いて来るのが認められた。体長四、五メートルほどもあるイタチ鯨の群れだった。

頭部が角張っていて、ずんぐりとした体型、タイガー・シャークの名がある獰猛な鯨であった。青白い銀色の肌で海の中だと透き通って見えた。そのイタチ鯨どもが、竹筏へと突進して来るのがみんなには見えた。

「やいや、やーや、サメじゃ。サメ、あつね(※危ない)」  
危急の場、鹿兒島弁が飛び交う。



「いかなこんで。人喰い鮫が来(く)つど」

「いけんしもんぞ。いっぺこっぺおるねっ」

思わず、中之瀬二等兵も、山口弁になり、「いけん、いけん」と、叫んでいた。

十数匹、そこまでは中之瀬二等兵も数えた。

鮫が吐寫物の匂いを嗅ぎ付けたらしい。

「こりや、おぜな(※怖い)。こいつら、人間の味ば覚えちよる連中ねえ。じゃっどお、生きた人間だって食(た)もるぞい。容赦はないとね。みんなで叩っ殺すじゃ」

みんながみんな、応戦するための武器を手にした。筏に繋いであったオール代わりの竹の棒のロープを解き、一人一人が竹の武器を手にした。鮫は水中に潜っているだけでなく、一匹、二匹と宙で跳ねるように動いた。

竹筏に向って来る。どれも、とてつもなく大きい。近付いた鮫の口吻部を吉岡上等兵がオールの先で殴り付けた。勇敢な行為ではあった。一撃した後、波間に血がさーと浮いた。

「がっ、がちっ、がちっ」

尖った鮫の歯牙がその竹の棒に噛み付いていた。ぐいっと引き寄せられた。そのままに、吉岡上等兵の体は持

って行かれそうになった。

肥後一等兵がその啜え込また竹の棒を一緒になり引いた。鮫の力の方が強かった。

その拍子によるよろしていた吉岡上等兵が海の上に落ちた。続いて、肥後一等兵も引き擦り込まれた。二人とも、「助けちよらんか！」そのような叫び声を上げた。

あつという間の出来事だった。

瞬く間に、吉岡上等兵の頭は波間に沈んだが救命胴着を着けているので、直ぐには体は沈まない。浮いている獲物に今度は数匹の鮫が食い付く。吉岡上等兵の体は弄ばれていた。

その近くの波間ではもう一つ、別の血の渦が沸いた。たちまちに、肥後一等兵の体は海中深くに持ち込まれていた。こちらは直ぐに海中に消えた。

海の上では、吉岡上等兵の体が食い千切られるのが、みんなの目にも写っていた。

やがて、救命胴着だけが浮いた。

あたりの海をぱーと鮮血が染めて行った。

餌の奪い合い、その凄惨さをみんなは見せ付けられた。

復讐心に燃えた富永伍長が竹棒で近くに寄って来た鮫ど

もに応戦した。初めからの負け戦さ、鮫どもは次の生餌を狙って来るに違いなかった。まだ、付近には多数の鮫が集っていた。血の匂いを嗅いだことで、鮫どもの興奮は極点に達していた。

「おい、焦(あせ)くなつ。打(う)ったくるは止めっちゃ。こいつら、これ以上に興奮させつちや、何すつか分からんちや。どんと竹筏にぶつかって来るぞね。知らんぷりするも策ではごわんぞお。逃げるが勝ちとねっ」

この窮余の策が当たった。

竹筏に竿を入れて、残った三人は必死で漕ぎを入れ、その場を離れた。

吉岡上等兵、肥後一等兵二人の生餌を捧げたことで、束の間の時間稼ぎが出来た。新たな血の海を背後にしなから、竹筏は離れるだけ、遠くに遠くにと漕ぎ出し海の流れに乗った。やっと、危険地帯から逃げ延びた。

「富永分隊はオイ一人け。だーれとも知れん二等兵二人がこん場には残っちよるう」

海に流されながら、ぽつんと富永伍長が言った。虚ろな眼差しになった。その心境の変化を見逃さず、

中之瀬二等兵が注文を付けた。

「富永伍長殿、われわれはもう二日間、何も口にしてい  
ません。自分が所持していたあの鯉節は返して下さい」  
「この竹筏の上にいるのは、三人だけであります」と、  
今福二等兵も言葉を重ねた。

「二名、減ったからばい、いつのまんか、おいどん、一  
人かねえ、うーむ…：そう言うのんは、蠅叩き(※へおっぱ)  
じゃがね。まあ、ちったあ、くれてやつがあ」

と、強がってみせてから、腰の皮袋に収めてある鯉節  
のあたりに手をやった。それから、中之瀬二等兵らの剣  
幕に恐れを為したのか、富永伍長は携帯食糧袋から食糧  
を取り出そうとした。少しは、分ける気になったらしい。  
この時、そのドンゴロス入りの食糧が、袋ごと無くな  
っているのに、みんなは気付いた。

鮫騒ぎの最中、どうやら食糧袋は、鮫どもに食い千切  
られたらしい。袋の繋ぎ目だけが竹筏には残されており、  
肝心の袋の底は、もはや、無かった。

「こげなこつか。あん、鮫野郎が！、あいつら、人間の  
もんまで漁(※あせ)くつて、人間まで食(た)もるう、  
おとぜ(怖い)もん、どぎゃんなつとお」

嘆いて見せたが、もはや、後の祭りであった。富永伍

長の目がさらに虚ろになった。

富永伍長が腰に巻いて所持している雑嚢に収めた鯉節の残り分だけが三人の食糧となった。自ずから新兵二人の目もそちらに向いた。

その視線に気付いたのか、二人に奪われないように、改めて、しっかりと、富永伍長は鯉節を確保するのに努めた。

7

漂流三日目、もはや、食糧は底を付いた。

自分だけ食べるわけにはいかないの、富永伍長は鯉節には手を付けていなかった。警戒心のためか、夜も、碌々、寝ずに過ごした。

南国特有のスコールがあつたので、みんなは軍衣を脱ぎ、雨水を集めて水筒に入れた。

一応は、水不足だけは防げたが、この先のことは水についてはお天気次第、心許ない状況は続いた。

飢えが始まると、腹に力が入らず、竹筏に掴まっっているのがやっとの状態になった。

三日間は飲まず食わずでも、人間は生きていられると言われているが、その限界の日が、もはや、二人の新兵たちにも訪れようとしていた。

人間、水だけでは生きてはいけない。

見ている海の色も青ではなく、ぼやけた灰色に見えて来た。なぜか、視点も定まらなくなった。血行が悪くなり、酸欠状態になりつつあるのか息苦しくもあった。

何をするのも億劫（おっくう）になった。

それでも、今福二等兵は元気を奮い起こした。

当然のことながら、富永伍長が所持している唯一の食べ物、鰹節のことで、竹筏の上では言い争いになった。

結局、こういう時は今福二等兵はしっかりしていて、

「力づくでも分け前は貰う」と語気を荒めた。

富永伍長は答えなかった。

そっぽを向いたまま、竹筏にしがみ付いていた。

緊張状態が続き、富永伍長は寝ずの番、結局、この晩も、富永伍長は眠れずに過ごした。

四日目の朝、三人とも目は虚ろになり、竹筏の一端に掴まっているのさえ苦痛となっていた。問題の鰹節は、雑嚢に収められたままで、一晚、見張っていたせいか、

富永伍長もげつそりと痩せて来たようだった。

あれから富永伍長も何も口にしていない。

三人とも同じような顔付きになっていたが、富永伍長の憔悴ぶりが目立った。

その日の午後、突然、富永伍長が、「えへら、えへら」と笑い出した。様子が変だった。

「兄(あん)さま。これでえ、水売ってくつちよんせ。おまんら、食(た)もるモン隠しておつなら、おいどん、買物せんで、売ってまっどお。それからよう聞いちよけえ。今度、死体が寄つて来たら、うつちよかんでえ、アホウドリの餌にはならんとね。掴まえんばならんがあ。こつちもんすれば、ちゃんと、おいどんが、その分、金は払うとね」

二人が様子を窺っていると、富永伍長は腰に巻いた雑囊の中から、内務班の兵だけにでも、事前に渡されていたのか、フィリピンで通用している軍票のお札を取り出し、中之瀬二等兵に渡そうとした。

五ペソ札が二枚、いまは何の値打ちもない。

「おめらも、鯉節い、欲しがあ時ば、金を払わねばならんどお。へへ、へえ」

売るような水など手元にはない。もちろん、食べ物を持ち合わせているはずもなかった。

この無理難題、富永伍長だけが一人陽気に振る舞った。やはり、様子が変だった。

「あ、あの：水の方はスクールがあるまでは待つて下さい」

やっと、中之瀬二等兵は答えたが、何か、遣る瀬ない思いになった。有り得ない話に、二等兵二人は付き合わされることになった。

「だああ、金を払うじゃで、渡さんけつ。オイら、飢(か)つ(え)て死ぬるぞねつ。いっちやーよ、いっちやっあ」

「愚図愚図していないでさっさと渡せ」このままじやよくない。の意だが、伝えようとするところは、中之瀬二等兵にも分かった。

中之瀬二等兵が応ずる前に、富永伍長は手に握っていた残りの軍票を、ぱーと空に舞わせた。「持つて行け」と言わんばかりの態度であった。ひらひらと、海風に乗り、軍票は海の上にも数枚は落ちた。風に弄ばれた。

「へへ、へっ、まこて、これでわしの好きな、しよっそ(※焼酎)の、おつまみに、さすん(※刺身)とかで、



一杯、呑んじゃらいね。さかぶり(久ぶり)、うんまか」  
芋焼酎か何かで、もう、晩酌でもしているような顔付きに、富永伍長はなっていた。

一見、幸せそうな顔にも二人には見えた。

にやにやと笑ったまま富永伍長はふらふらと、その場から立ち上がった。もう酔っているような足取りだった。とても危うい。ゆらゆらと竹筏が揺れた。

それでも富永伍長は歩みを止めず、海に一步を踏み出そうとしていた。その右手に新たな軍票がわし掴みにされていた。ぱーと目の上に軍票を撒く。

たっふたっふと鳴る波の上に、札束はひらひらと、枚数の多い分だけ、広く散った。

いきなりのこと、今福二等兵が富永伍長の腰にしがみついた。二人共よろけたが、その合間にうまく立ち回り、今福二等兵は富永伍長の腰帯を外した。

素早く動き、腰に巻き付いてる鯉節を確保した。中之瀬二等兵が咄嗟に、今福二等兵の体を懸命に支えた。

一度は倒された富永伍長だが体勢を立て直した。再び、竹筏の上に立ち上がった。

手に掴んでいた軍票をさらに撒いた。

それから、自ら進んで海に一步を歩み出す。「ぼちゃん」と大きな波音がした。

しばしの間は、富永伍長は海の上に浮いていた。嬉々として戯れているかのようにも見えた。立ち泳ぎをしていたが、それも、ものの数十秒、何者かに足元を掬（すく）われるように、ふいっと、波頭から、富永伍長の頭が消えた。何十枚もの五ペソ札だけが、いつまでも、波の上に、ぽかぽかと浮いていた。

これが、富永伍長の最後の顛末だった。

「ええころの話い。罰、しごうしちやるか」

「これでえ、二人減ったんじやろが」

中之瀬二等兵は、「富永伍長には罰が当たった」と言いたかったのだが、それに答えた今福二等兵の返し文句に驚いた。彼の手の内には、齧りかけの鰹節が一本握られていた。

奪った鰹節を二人分にした。所持していた小刀で削り削り、四日振りに、二人は食べ物を口にした。夢中だったが、半分ほども食べたなら、やっと味が分かった。旨かった。水も飲んだ後、やっと、二人は一息吐いた。

へたりと竹筏の上に、二人は座り込んだ。ひた

ひたひたと波が寄せて来た。

やたらと眠くなったが、寝入ってしまうと波に浚われるので、改めて、二人は竹筏に繋がれたロープで、体をきつく締め直した。

無情な波の音だけが今は耳に付いていた。

幾千尋あるのか、どこまでも、宏大な海だけが、水平線の向こうの向こうまで、果てしもなく続いていたー。

8

「これでえ、五日目の朝、いつまでえ、こんな日が続くんやん。なあ、早（は）よう、食うもんを手に入れんといけん。はら細るはどうにもならんにや。わっちら死ぬるだい」

今朝の海は穏やかだった。

そよそよと心地良い風も吹いていた。

水平線の彼方の空も蒼く抜けていて、太陽の光も、朝のこの時間は優しかった。

平穏な一日のようにも思えた。

昨夕もスクールがあり水だけは確保していた。申し合

わせたように、二人は水も飲んだ。

「へじやのう。はぶ（※気鬱）てたーね。ともかく、島を見つけて辿り着くしかないやん、はぶてる（※考える）間はないじゃやろ」

塞ぎ込み勝ちの今福がそれに答えた。

「うんにや。なにを言っちゃよん。どこがどこだかあ、この広い海、島というても、見知らぬ南の島、島人が待ち受けておって、罠り殺しにされという話もあるらしいけんね」

「おれは生きねばならん。めげるわけにはいかん。まんが悪いことに、るり子とは結婚して二週間での、別離の運命じゃ。どないなことがあっても、絶対に生きて帰るからちゆうて、るり子と約束したがじゃ。いや、会いとうてならん。もう一度会いたいけん」

「めいめい、ここは生き抜くしかないっちゃ」

中之瀬も力付けの言葉を口にした。

その時、空の晴れ間に、十数匹の蜻蛉が飛んでいるのを二人は見付けた。これまでに見掛けたことのない中型の大きさの蜻蛉であった。薄羽黄色トンボという種で、大海を渡る蜻蛉として、夙（つと）に、知られていた。

風に乗ってか、竹筏の上にもやって来た。

(食糧の飛来か。しめしめ、竹筏の上にも止まるかも知れないぞ)

と、中之瀬が考えた時、今福が顔を綻ばせながら、先に、言葉を挟んだ。

「とんぼっちや。縁起がえーのう。実はあ、るり子のお、結納を収める吉日に、るり子の古(ふ)る家の回りにや、一杯、アカネ蜻蛉が飛んでいたがね。何やら祝福してくれてっちや。そいよね。蜻蛉ばかりは食うまーやあ」

蜻蛉を見詰める目も違った。今福は目の上の蜻蛉たちを、愛おしげに目で追った。

何しろ、補充兵同士、まさか、召集になるとは思ってもいなかった二人だった。どちらも、軍需関係の仕事と言えないこともない。

中之瀬浩記は宇品で軍用船に乗る船員の手続きや世話をする仕事、今福洋次は漁船の造船所で働いていた身、軍用の船なら優先されたのかも知れないが、民間の船を扱う造船所だから、今福洋次は兵隊に採られたに違いなかった。新婚生活二週間での別れ別れの生活、似たような話は、この時代、他にもあった。

出征して行く息子のために、「せめて嫁を持たせたい」というので、結婚式を挙げた組が多くいたのは事実話、  
「一日花嫁」などという組み合わせも多くあり、戦後、  
戦争未亡人の言葉を生むきっかけにもなった。

これも戦争の生んだ悲劇の一つだった。

「そうじゃな。奥（※おごう）さあん、待ちよるね。

飢（かつ）えて死ぬるはならん。ここは、めえめえにい、  
二人して気張るじゃね」

「まーこと、ようやらんでは死ぬるがにい」

自分一人だけの体じゃないの思いを口したことで、今  
福は決意のほどを披瀝した。

やがて、蜻蛉たちは遠くの空に飛び去った。

波だけがうねっている海の彼方を、所在なく、二人は  
見るともなく見ていた。

急に、水平線上の一点が騒がしくなった。

「おお、ありや、なんねえ？」

と、この時、中之瀬が叫んだ。

指差す方向の海面が、ざわざわざわと波立った。その  
あたりには、ウミネコらしい海鳥の群れも飛んでいた。

白と灰黒色の尾羽、猛禽のような赤い鉤型の嘴を持った

鳥だった。二人には大漁の知らせのように思えた。

「魚じゃ、ありや、魚の群れじゃにい。こっちに来（こ）んでや」

竹筏から立ち上がり、今福も構えた。

言う間に、波の上で魚が跳ねた。海一面の壮観さで波が白く騒いだ。回遊魚らしく、大きな群れを成していた。それでも、目視距離は五十メートルほど先、いくら大群でも、手掴みにするのは、到底、無理と思えた。

いつの間にか、二人して竹のオールを使い、竹筏を漕いでいた。さして進まなかったが、魚の群れの方から近づいて来た。

魚の群れの中を竹筏が通過しようとした。

その途次、魚が跳ねて、三匹、四匹と竹筏の上に乗った。ぴちぴちと跳ねた。次々に、小魚が竹筏で跳ね、手掴みでも出来そうだったが、そうは簡単には行かない。

竹筏に結び付けておいた銃剣を、今福が手にし、鞘を抜いた。尖った剣先で、今福は、跳ねている小魚を次々に刺した。慌てて、中之瀬も真似た。

こうやると、捕獲するのは容易であった。

各々が三匹ずつ、悪戦苦闘の末、捕獲した。

鯛の大群であったが素手で掴み直したところで、手一杯、もはや、魚群は通り過ぎようとしていた。竹筏の端では跳ねていたが、水際では、自分が海中に落ちる危険性があった。

名残り惜しそうに海中を中之瀬が見やった。魚群は海底に潜り込んだらしく、もう、魚影は薄くなり掛けている。それでも、食糧を手にしたことで、今福は上機嫌になっていた。

「おりや、天の恵みじゃった。やっぱり、えー知らせ、蜻蛉が天の使いっちゃ。縁起がええのう。網があればあ、沢山（※えっと）捕れたじゃろうに、しもうたことをしたのお。直ぐに去（い）ぬるで」

ありがたさ半分、悔しさ半分の台詞を、今福は口にした。それでも、しっかりと、その手には小魚が握られていた。

「ええやないのお。はよう腹をふとうせんとお。へっぴったこったば、言うは止めんさい」

中之瀬が今福を嗜めた。ああのここの、と言っている場合ではなかった。

二人は小魚の頭からかぶり付いた。生臭さなどはない。



五日振りの食事らしい食事、三匹共、夢中で、尻尾まで平らげた。旨かった。やっと、二人は人心地付き、竹筏の上に仰向けになって寝た。もちろん、海に振り落とされないように、ロープに体を繋いだ。

青い空が望めた。どこまでも青い。

魚群を追い駆けて、ウミネコが飛んで行く。

獲物を追う鳥らしく、何やら騒がしい鳴き声を立てていた。「ぴゅう、ぴいぴい」と鳴く。

平穏無事などという日は滅多にあるものではない。代わりばんこで、振り落とされないように、互いの番をしながら、二人はうたた寝をした。

その分、波も穏やかだった。

午後の陽射しが強くなった頃、異変が起きた。遠くの空から飛行音が響いて来た。

「敵機の音じゃあね。こっちに来（こ）んでえーや。めえめえに、死ぬる振りをしちつよとね。そいでえ、撃たれたら一巻の終わりね」

耳敏く、中之瀬が聞き付け一案を授けた。

編隊を組んでいる敵機の飛行音だった。

遠くの飛行音に思えるが、恐ろしさの思いに捉われると、

自ずから体中が震えて来る。

のどかとも言える海の光景が一変した。

間もなく、グラマンP51が空の向こうから飛来した。

かなりの低空で耳をつんざくような爆音が響いた。

竹筏の上で死体を真似て伏せている今福が何か言ったが、中之瀬には聞こえなかった。

ちらと見やると、グラマンP51は七機編成、虻型のその丸い機体は鈍重に見えたが、攻撃体制に入ったら俊敏そのもの、容赦しない掃射力を発揮することで知られていた。大海の藻屑、そのように、彼らに乗せた竹筏は敵機には見えていたのかも知れない。

やがて、五機のP51が彼らを黙過し、消え去った。

「やれやれだ。あいつらにい、血祭りに上げられるところだっちゃんにい」

「頓狂（とんきよう）やられても、死ぬるけえ」

ほっとして二人は口を交わした。

面白半分、ゲーム感覚で撃って来る連中がいたのは事実で、これも、米軍の余裕のせいだった。

数分後、水平線の向こうで、敵機は獲物を見付けたらしく、攻撃態勢に入った。

彼らの位置からは掃射の様は見えなかったが、しきりに、P51は急降下を繰り返した。

どうやら、漂流者の一団でも見付けたらしい。

その辺の雲行きが慌しくなっていた。

水平線上で執り行われているそれらの殺戮の考えただけで、彼らは身が竦んだ。

その無惨な結果については、十数分後に、彼らには知れた。小型の舟艇が攻撃目標になったらしく、夥（おびただ）しい浮遊物が流れ寄って来た。

燃料が無くなり帆掛け船のように天幕で帆を作り、風まかせの漂流を続けていたのか、小型舟艇の剥がされた天幕の一部が波に弄ばれ、最初に運ばれて来た。

その天幕を早々に引き上げた。二メートル四方ほどの大きさ、破れ目があったが、これとて生きるための利器、使い道はあった。水筒、背囊、雑囊類や、書類カバン、鉄帽、皮製の双眼鏡入れなど、雑多な物も流れて来た。さつきまでは、それらの品々は、誰かが身に付けていたものに違いなかった。

竹筏の上の二人は、それらの浮遊物集めに夢中になった。直ぐに使えそうな天幕や、ロープの類い、水筒、鉄

帽、背囊、雑囊など、それらを竹の棒で二人は搔き寄せた。背囊と雑囊の中身を、早速に点検した。

一番は食糧を見つけ出すことだったが、みんな漂流兵、肝心の食べ物は何も入っていなかった。裁縫道具の小物と、歯ブラシが二本、私物のコンドームに入れられた針の止まった時計一個に、中身は空の双眼鏡入れの皮製ケース、それに、急造兵士たちには支給されてなかった地下足袋が二足見付かった。

収穫品はそれほどの成果はなしであったが、地下足袋だけは足場がしっかりするので、直ぐに、二人とも履いた。早速に役に立った。

集めた品を、一つずつ、今福は竹筏の端にロープで結び付けた。船大工をやっていただけあって、手先が器用だった。しっかりと結ぶねじ結びや、棒状の物を二重巻きにする垣根結び、巻き結び、そんな呼び名を、中之瀬は教えられた。特に、帆布を使って袋状にした「水受け装置」の仕掛けは優れものであった。

ロープで水筒を一つずつ結んだ。海中に浸す「流れ装置」のお陰で、熱湯のようになってしまう水筒の水を、二人は飲まなくても済むようになった。

工夫の成果があつた。

一通りの設置作業が終わり、背囊、雑囊などの中身を調べている最中、今福が波の彼方に目をやり、一瞬、視線を泳がせた。

「お、ううつ、……………」と、声を詰まらせた。

ことさらに、身構えていた。

引き寄せられて来る一物を、改めて、中之瀬は眺めた。やはり、身を硬くした。

人間の死体が幾つか波に乗り、寄つて来た。

後から、後からと、白波に洗われながら、それらの死体は竹筏にと近付いて来た。

五体満足な死体ばかりでなく、手足を引き千切れた者や、はらわたの飛び出した無惨な兵士の死体もあつた。露出したままのそのはらわたは、水藻のようにゆらゆらと、波の間に間に、漂っていた。

さすがに、手出しは出来ず、二人は竹筏の上に立ち尽くしたまま、それらの、漂っているだけの人間の浮遊物を眺めていた。

どこかに、もう、匂いを嗅ぎ付けた鮫の一群が現れているのやも知れなかった。

「ぴいー、ぴぴゅうー」と、騒がしい声を発して、また、空の上を海鳥が舞い始めた。

その時、今福がふらふらと立ち上がった。手近に寄って来た死体の一つを、竹の棒を使って、自分の側に引き寄せようとした。大波小波、波に浚われて逃げ伸びるように、その死体は遠くにと持ち去られようとしていた。

筏から遠去かろうとしていた。

五体満足だったが、俯けの姿勢で死体は漂っているの  
で、年の頃は分からない。

今度は、気抜けしたように、竹筏の上に今福は腰を下ろした。頭を抱え込んだ。

（まさか。富永伍長がいつか言ったように…あの、死体を今福は…いや、このおれだって止めはしなかった。この海の上では、われわれの口に入るもの何もない。いや、おれだって…、たったいま、そう、考えていたかも知れないではないか）

やはり、中之瀬も逡巡した。

（死体が竹筏に寄って来たあの好機を見逃す術はない。余計なことを考える余裕など、もう、飢えた者には残されてはいない…）

あらぬことに中之瀬の思いは及んだ。

漂流五日目、口に入れた物と言えば、乾パン二個に、鯉節を少々、それに、小魚三匹、どうして、このわずかな食べ物の量で、人間が生きて行けるのだろうか。

どうせ、一つ一つの漂流体は、鮫や、魚、海鳥どもの餌になるだけ、海中深く、海の藻屑になって、ただ、果てるだけのことだった。

飢えている身なら、有り得ない話も許されることだと思つた。今は、生死の瀬戸際に、二人共に、立たされているのだ。選択の余地などはない。食べ物が欲しい。

それだけの話なのではないか。

良心の在り処とやらも探つて見たが、その文句の空々しさに、それ以上のことは考えるのを止めた。

中之瀬も無口になった。

もう、遠くにと、人の肉の群れは流れ去ろうとしていた。幾重もの波が攫つて行つた。

沈黙に耐えかねたのか、その時、誰に言うことなく、今福が独り言を口にした。

ちやぷちやぷと鳴る波音を打ち消し、その呟きの声は、海の向こうの向こうにまで届きそうにも思えた。決意を

込めた文句なので、思わず、中之瀬も耳を傾けた。

「るり子のためじゃねえ。いっちょん。どけんことがあつても、うっちゃや、るり子んところに帰るけえ。まるつと（もしかして）、やや子が出来ちよつたら、その子のためにも生きんならんけね。こんな海ん上で、わっちゃや、死るわけにはいかんじゃろがねっ」

9

漂流六日目、海はやや時化模様であった。

時折り、横殴りの雨がざざーと降った。

やっと、二人は真水を飲む機会に恵まれた。

拾い集めた鉄帽と、双眼鏡入れの皮ケース、天幕などを利用して、せつせと、水を集めた。

天幕は大きな分、袋状にすると水溜り箇所が出来て、その分、多くの水を貯えられた。

拾得物の水筒は三個、合わせて六個の水筒があるので、水だけはひとまず確保した。

頭から雨水を被り、石油で汚れた顔を洗う。

目ばかりの人相が少しは人間の顔になった。



やつと、二人とも、生きている気がした。

「おい、ちーたー、ツイちよるかも知れんよお。一日に一度、こげーな恵みの雨があんなら、何とか、おれたちは生き残れるやも知れんけえのお」

久し振りに、中之瀬の声も弾んだ。

たらふく、水を飲んだせいか、今福も、少しばかりは元氣を取り戻していた。

肌身離さず身に着けたに新妻の写真に、軍衣の上から手をやった。改めて「るり子、おはよう」と、軍衣の内ポケットから一葉の写真を取り出し、見詰め直してから言った。やや丸ぽちやの、目の大きな可愛い娘だった。二十歳になるという。愛おしさの思いに、しばし、今福の顔も綻んだ。

この日は、風も和やかふうに吹いていた。

頭の中には食い物のことしかなく、この後、際どい話を、今福が中之瀬に持ち掛けた。

その話を神妙な気分で中之瀬は聞いた。

「のう、小魚で一日、水だけ飲んででは、わっちら、もう、やれんだあい。やっぱり、昨日、あれは、腕（も）げるうちに、わっちらのものにせにやあ。そうしとけば

良かったんじゃないかいね」

海に漂っていた昨日のあの浮遊物の死体について触れた。今福は禁句を口にしていた。

「…ああ、あのことかいね。小魚と変わらんと思えば、その通りじゃけ。それいね。いつか、そげえなこつ、誰もお、しちやるかいね」

もどかしげな口振りではあったが、中之瀬は同意の文句を口にしてしまっていた。

本当は口にすべき言葉ではなかったが、二人とも、この無体な会話を、「ない話」とは、考えられなくなっていたのだった。

この後は、二人共、話が話だけに無口になった。お互いが、触れたくない事柄であった。

漂流の日が重なった。飢えの日が続いた。

完全に食糧は尽きていた。

蓄えた水筒の水も残り少なくなっていた。

二人の目は落ち窪み、げっそりと頬はこけた。五十三キロあった中之瀬の体重も、四十キロを切っているやも知れなかった。

何をするにも大儀になり、竹筏に張り付いたまま、二

人は、ほとんど眠って過ごした。

それでも、正体もなく眠ると、竹筏にロープで体の一部を結び付けているとは言え、海中に振り落されるので、寝る時間は交互に見張った。二人の約束事、こればかりはお互い、守るしかなかった。命に関わる大事だった。

「このまま目が覚めずに、おれは死んでしまうのではないか」「いや、このまま死ぬるのならこんなに楽なことはない」と、中之瀬は、交代して眠りに就く時、いつも思った。ふーと、訪れる、死への誘惑、であった。

この日の夜、眠りに入っていた中之瀬は、只ならぬ気配を感じて目を覚ました。

交代期、見張っているはずの今福が、なぜか、銃剣を手に行っている様を、中之瀬は目にしてしまった。月明かりの中、中之瀬の方を窺っている今福の姿が目についた。

「かちやかちや」

と、鞘に収まった銃剣を抜く音に、中之瀬は、ふと、目覚めたのだった。単独行動自体が不自然な行為だった。刃先を今福が掲げた。

銃剣の刀身が鈍い光を放った。

（やめんさい！このオレを殺して食うちよるんかねえ

…)

中之瀬が頭の中で、咄嗟に、考えたことだった。ロープで二重、三重に自分の体を縛り付けている身、それに、揺れている竹筏、簡単には身動きはならない状況だった。

刃の長さは四十センチ、短いようだが、下から仰ぎ見ると、とてつもなく銃剣の刃身は長く見えた。刃先も鋭い。今福の顔が改めて、こちらに向いた。殺意を感じた。  
(…お、おい、止めるちゃ。わっっちゃ、殺して食っても何日持つねえー)

必死の思いで中之瀬は頭の中で考えた。首を擡げ、口に出そうしたが声にはならない。

「…わっっちゃ、なにしちよるね」

やっと、中之瀬が声を発した。

びくつとし、今福は身を硬くした。

月明かりだが、人影は読み取れた。

「…なに、馬鹿んこと言つとん。誰がおんしやーを食うと言うたね。自分のタコ足なら、自分のもんなら削(こさ)いで、食うてもええと思うただけっっちゃ。ここまで来た二人切りじゃろいね。仲間がおらんようだったら、わっちも一人では生き切らんねえ」

「ほんか？」

と、答えるのがやっとだった。

本気だったのか、引っ込みが付かなかったのか、今福は銃剣の刃先を自分の上腕部に当て、肉を削ぐようにして滑らせて見せた。ごしごし、ぎしぎしと、刃先の当たる音がした。何をしているのかは、中之瀬にも分かった。それでも、皮とも肉とも知れぬ塊を、今福は削ぎ落としていくようだった。

口を着けて、今福は自分の傷口を吸った。「ずずー、ちゆう、ちゆう」と、吸い音がした。それから、何か、呪文を唱えた。こちらは、よくは聞こえない。

もくもくと、口を動かす気配が伝わって来た。肉塊らしいものを飲み込んでいくらしい。

薬を飲み込むようであった。

「飢(かつ)えて死ぬるんはいけん。タコ足なら、いつか生えて出るじゃ。譬え、腕が一本、挽げて、のうなつても、飢えて死ぬるんはならんど。わっちゃや、るり子んところにい、帰(いぬ)るけえ。そう、決めたんだい。こげな傷跡(※きつぽ)の痛いんは我慢するけのう。いんや、食うもんないんなら、毎日(※まいひ)、タコ足、

食うちや。生きては残れん。どっちがどっち、腕か、命か、先に無くなりやーね。じゃけー、ここが真剣（※まぶり）勝負つちや」

気持ちが高揚しているのか、今福は喋りまくり、なお、危なげな手付きで銃剣の先で肉を削（そ）いでいるようだった。

呪文のような文句は、聞いてる限りでは、正気の部分があつたが、その素振りや、言動は、中之瀬には解し兼ねた。用心もした。

それでも、わずかに残った包帯を雑囊から取り出し、中之瀬は傷口に包帯をしてやろうと思った。少しでも、相手の気を落ち着かせようと、中之瀬は努めた。

中之瀬を敵対視しているかの口振りで、きつぱりと、今福はその好意を拒否して見せた。

10

この事件があつた後、これまでは、お互いの安全をお互いが見守りながら、漂流生活を続けて来たのに、その均衡が保てなくなつた。

今度は自分が殺される番だという思いがあるのか、今福は昼も夜も眠らなくなっていた。

同じ立場に、中之瀬も立たされることになった。二人とも、睨み合っていたのではないのだが、睡眠不足の状態が続くことになった。

その分、身心ともに衰弱した。

自分の腕の一部を今福が口にした三日後の夜中のこと、「うーむ。うーむ」と呻っている声を中之瀬は聞き付けた。

闇の中、中之瀬は声を掛けた。

「世話あない？切り傷（※きつぽ）がいけんちゃね。モノモライになって膿むと熱持つけえのう。やけー。わやになつちよらいね」

今福からは返事はなかった。呻きの声が小さくなった。虫の息だと知れた。

傷口からバイキンが入ったらしい。どのような病状なのかは知れず、弱った体力だから、どこまで持ち応えられるのか、今福の体力の回復を待つしかなかった。

何か、うわ言を口にしていたが、中之瀬には聞き取れなかった。新妻の名を呼び、助けを求めているのやも知

れなかった。

真つ暗闇の海、月一つ出てはいない。

その容態を確かめる法も、もちろんない。

治療が適う状況でもなかった。息を潜め、何度か、中之瀬は声を掛けたが、やがて、その呻きの声も聞こえなくなつた。竹筏を打つ、ちゃぼちゃぼと鳴る波音だけが、中之瀬の耳に届いていた。

容態が落ち着き、今福は深い眠りに入ったのかも知れない。そう、願つた。

朝が明ける頃、ひっそりと、今福は息を引き取つていた。呆気なく死んでいた。

このことあるを予期していた中之瀬だが、総ての苦痛を忘れ、安らかとも思える寝顔になつている今福に声は掛けることは出来なかった。「やっぱり、死んでいた。いや、敢えなくも死んでしまった」というのが、この時の、中之瀬の偽らざる心境であつた。

漂流八日目の朝のことだった。

今福の死体を中之瀬は眺めやつた。

坊主刈りの髪が伸び、無精ひげが生え、頬が一層にこけていた。閉じた瞼も引つ込んでいて眼窩も窪んでいた。



への字に結んだ口は、もはや人間の言葉は発しない。日焼けしていたのに、顔全体が青白くなっていた。

胸に手を宛てているのが何とも痛ましい。

軍衣の胸ポケットの内には愛妻の写真が仕舞われていた。なぜか、中之瀬は、手を合わせ、「なみあむだぶつ」と唱えた。胸のところで合掌をさせるのは止めた。

今福洋次は愛妻の写真の真上に手を置いていた。

仲を引き離すわけにはいかなかった。

朝から暑い日射しで、早々に、今福の死体は異臭を放ち始めていた。

いつまでも、竹筏の上に放置して置くわけにもいかない。それでも、直ぐには、水葬にするのが躊躇われた。

別れ難い思いがあった。

相身互い、生死を共にして来た者同士、水葬と言っても鮫どもの餌になるかも知れず、小魚たちが群れる漁礁で、骨になるまでその肉体は、しゃぶり尽くされるに違いなかった。海の波の間に、今福の遺体を中之瀬は投げることが出来なかった。

ふと、あらぬ思いが頭を過（よ）ぎった。

（もしかして、自分が生き残るために、このオレは死ん

だ者の、肉そのものの、この物体を口にしようとしているのではないのか。そのために、ここに、この死体を止め置こうと考えているのだとしたら？オレにはそのようなことは出来るのか：いや、もはや、躊躇っている時ではないはずだ。いつ、飢（かつ）えて果てるか、このオレだって、死ぬのは、もう、時間の問題ではないのか）

自問自答をしている内も、中之瀬の空腹振りを示すように、腹が「ぐうう」と鳴った。いや、空腹などという生易しいものなんかではない。食べることへの欲求ばかりが募って来て、脳の思考力が奪われていた。

食べねば死ぬーそう、呼び掛ける食欲本能が「食べる事」をひたすらに求めていた。

（キモを食べれば一週間は生きられる…）

船員たちの間で、そのような噂があったことを中之瀬は思い出した。漂流者の事実話として伝えられていた話で、一部の兵士たちにも、この話は、伝播していた。

そつと、中之瀬は手を伸ばした。

差し伸ばした手指の先で、二の腕のあたりを掴み取り、その肉の感触をまずは確かめた。冷たかった。

いつとき、大きな波がやって来て、中之瀬の姿勢が危

ういものになった。

この時、中之瀬はふっと我に帰った。

死体を口にしてはならないと告げるもう一人の自分の声を、聞いたような気がした。

後のことはよくは覚えてはいない。今福の死体を中之瀬は海に落とした。

たちまちに、青い海が死体を呑み込んだ。

それでも、浮き沈みしながら、しばし、今福の死体は波間を漂った。数秒の間は、別れの思いも込めて、中之瀬は死体の行方を目で追っていた。胸裂かれる思いに、思わず、中之瀬は嗚咽した。声を限りに泣いた。

そんな思いも届かぬままに、波間を漂う死体だけは、もう、遠くに遠くにと持ち去られようとしていた。無情だった。大きな波のうねりが来た。竹筏も大きく揺れた。

彼我（ひが）の距離が、なお、遠くなった。

ふーと、死体が波間に消えようとした矢先に、さらなる大きな波がやって来た。

すーと、竹筏もその波の上に乗った。

波の下まで下り、白い漣の上に戻った時、なぜだか、直ぐ近くに今福の死体があった。

自らで泳ぎ着こうとするのか、今福の死体が竹筏に向けて寄って来た。まるで、名残りを惜しむかのように……。

「こつちこんでえやー、こつちこんでえやー」

と、中之瀬は声を掛け続けた。

俯つ伏せなので、今福の顔までは見えてはいなかったが、波間に伸びた両手は、さも、竹筏の端を掴み取ろうとでもするように、水を掻いた。いや、「こちらに來いと」と、死の世界の使者になって、中之瀬を今福は手招いているようでもあった。

やがて、また、幾つもの波が訪れて、海の彼方へと、今福洋次二等兵の死体は確実に持ち去られて行った。

11

漂流何日目になるのか。もはや、意識が遠退いていた。時間経過の感覚すら失せていた。

うつすらと目を開くと、どこを漂っているのか、竹筏に打ち掛かる波のしぶきだけが、目の先で散った。「まだ生きているのだ」と思った。遥かな彼方の海の果てから、朝が明けようとしていた。微かに、風が吹いた。

瞼の裏で、来光の輪が大きくなったり、小さくなったり、遠くにもなった。やがて、そんな知覚作用も薄れた。夢を見たような気もした。

食べ物のことしか頭にはないらしく、竹筏に寄って来る小魚の群れに夢の中で出会った。

目を覚まそうと努めているのだが、どうしても瞼が開かない。その内、小魚の群れの夢も遠去かった。やはり、幻の一齣だった、

この後、すと、意識が吸い込まれて行き、中之瀬は完全に気を失った。

何時間かが経過した。いや、何日間かのことだったかも知れない。無為の時間であった。

竹筏が荒い波に弄ばれ始めているのにも気が付かなかった。竹筏だけが浮き沈みをした。

また、朝がやって来る頃、スコールの雨が、一気に、顔に打ち掛かった。雨礫の痛さに目が覚めた。いつとき、中之瀬は生き返った。

一過性の雨だったようだったが、そのお陰で、彼は居ながらにして、真水を口にすることが出来た。舐めるようにであった。

（オレはまだ生きていようだな。これで何日目のことになるのか…）

頭を巡らせたが、記憶はどこかで途絶えていた。それでも、視線を遠くに投げると水平線が望めた。その果ての海には厚い雲があつたが、その切れ間から朝陽が斜めに走るのが見えた。いつときの眩い光芒が放たれのだ。

「きれいだな」と、中之瀬は思った。

海の美しい光景が瞼の裏に映じたことで、穏やかな一日の始まりの様を実感した。

その思いを無心のままに受け入れている自分がそこにはいた。もはや、何の欲もない。

と、この時、水平線上に一隻の船がぼんやりと浮いた。蜃気楼の様に似ていた。

もしかしたら夢を見ているのかも知れない。

ぶわぶわと波に揺られ、揺られてもいて、遠くになりたり近くになったりするので、その海の情景はどこか現実感を欠いてもいた。

朝陽で染められた海面を目で追って行くと、その果てに、黒い煙突の煙を上げた船が現れた。

こればかりは、現実感を伴っていた。

こちらにと船は向いているようにも見えた。

もちろん、そう願ったゆえのことで、ひたすらに、船はこちらに向って来たのではない。

それでも、きらきらと輝く朝陽の道が一筋、作り出されていて、さも、救いの道が、そこには、用意されているようにも見えた。

「おーい、助けてくれえーっ」

やっと、中之瀬は現実の絵図に目覚めた。思いつ切り、叫んだが、その声は届くはずもなかった。目測で図ると、船までは、四、五百メートルほどの距離があった。

竹筏の上に、中之瀬は半身を起こした。目を凝らして前方を窺った。千載一遇の好機だった。敵か味方かも分かっただけはなかったが、この機会を逃したら、もはや、助かる手立てはない。帆布を手に掲げて懸命に振った。

日本海軍の駆逐艦のように中之瀬には見えた。

やがて、旭日旗が艦橋にはためいているのと、艦橋に人影があるのを視認した。

と、目の前で、異変が起きていた。

二つ三つと波がうねった。

竹筏が渦の底から、波の静かな海に移った時、その朝

陽の輝く道の向こうに、もう一つ、波間を漂っている竹筏があるのを、中之瀬は発見することになった。

その竹筏には二人の兵士が乗っていた。

やはり、その内の一人が、船に向けて手を振っていたが、どこか、弱々しくも見えた。

一人の兵士は竹筏に寝たまま、生きているのか、死んでいるのかも分からなかった。

数分後、駆逐艦が救助に向かったのは、この竹筏の方だった。その竹筏とは二、三百メートルほどの差、艦橋から双眼鏡で状況を確認していた視野の内に、その内、中之瀬が乗っていた竹筏も入ったらしかった。

そう、中之瀬には思えた。いや、願った。

こちらに向けて手を振る水兵たちの姿を認めた。数人の水兵たちが甲板上で待ち構えていた。

やはり、救助艦のようだった。

(これでえ、腹あ、細らずに済むじゃ。うっちゃ、腹一杯にメシを食べたいのねえ。へたら、もう、後は何もいらんけえ)

やはり、腹の底からの言葉は山口弁での叫びとなった。何回か、繰り返した。



ぎりぎり、悲痛な思いが込められていた。

だが、これからの救助劇にも一波浪が待ち受けていた。救助ボートが出されるわけではなく、艦の甲板上から下ろされた縄梯子を登らなければ、甲板の上に到達するころとは適わなかった。舷側に打ち付けている大きな波も、障害になった。ここは外洋であった。

竹筏だって、もろに、舷側にぶつかれば、木っ端微塵にされてしまうに違いなかった。

全長、百十八メートル、全幅、十・三六メートル、汽水、三、二メートルの新型駆逐艦、海に浮かべばそれなりの偉容があるが、見る限り、とてつもなく、高く聳え立っていた。

何より、艦橋からぶら下げられている縄梯子の高さに心が怯んだ。ビルの高さにすると、優に、二階の屋根以上の高さ、一階は三、四メートル位だから、六、七メートルほどは、この縄梯子は登らねばならなかった。

折りからの風と波に煽られて、縄梯子は上下左右に大きく揺すられてもいた。

それ自体が危険な吊り橋そのものだった。

初めに、二名の兵士の乗る竹筏が救助の対象になった。

竹筏が舷側に寄った時、弱っている方の兵士に、もう一人の兵士が助けを出した。やっと竹筏からその兵士を立ち上がらせた。その動作には危うさが先に立った。

甲板の上から、救助用ロープが竹筏に向けて投げられた。先っぽが輪状に結ばれていた。

その輪の中に体を入れる仕組みで、痩せ衰えた方の兵士も、仕掛けの輪を脇の下に潜らせ、竹筏の上で上体を支えた。やっと、立っているといった感じだった。

揺れる竹筏の上で体を支えながら、それでも、その兵士は縄梯子に手を掛けた。

それが助かる唯一の方策なのだから、その兵士の必死の思いが中之瀬にも伝わって来た。

一步踏み外せば、その下は奈落の底、まさしく、縄梯子だけが命の綱だった。

一步、二歩と、悪戦苦闘をしながらも、裸足の兵士が縄梯子を登った。死力を振り絞っていた。

今にも落ちそうだった。

甲板のブリッジにまで頭が届いた時、上から、水兵たちの救助の手が差し伸べられた。兵士が手を差し出して、体を預けようとした。

その瞬間のことであつた。

兵士の手が離れた。体が宙に浮いた。

力尽きて、もんどり打つように、兵士の体は真つ逆さまに、海にと落ちて行つた。

何の叫び声すら立てずにであつた。

一本の命綱も落下の時の衝撃のためか、兵士の体から外れてしまつたようだった。

痩せ衰えた身なので、脇の下に通した命綱の輪に力が加わり、骨が折れたのやも知れなかつた。命綱すらさえその役目を果たすことが出来なかつたのだ。

ぶらんぶらんと、高い艦橋から垂れたロープだけが、空しく宙に舞っていた。

「あつ」とだけ、中之瀬は叫んだ。

悪夢の瞬間を目の辺りにして、身が凍つた。

それでも、一人目の兵士は縄梯子を自力で登り切つた。小さな歓声が甲板上で起こつた。

その兵士に勇気付けられて、中之瀬二等兵は縄梯子に取り付いた。竹筏を操り、艦に接近することだけでも体力を消耗したが、最後の力を發揮した。縄梯子に手を掛けることが出来た。喘ぎ、喘ぎ、一段、一段と、縄梯子

を手繰った。息が切れた。ここでは、地下足袋が役立っていた。踏ん張りが利いた。とてつもなく長い梯子道だった。その位置で艦は完全停止しているわけではないので、白波が足下の波を切り裂き、飛沫を散らせた。

その分、縄梯子は不規則に揺れ続け、中之瀬二等兵の体ごと、舷側に打ち付けた。

かなりの衝撃だった。

手先も痺れ握力も無くなつて来たが、「もう一步、もう一步」と、自分に言い聞かせながら、ひたすらに縄目を手繰った。

水兵の顔が見えた。手が数本差し出された。

ロープの端をしっかりと掴み、水兵たちが中之瀬二等兵の体を確保した。ロープの先端は、甲板上の繫留具の一つに繋がれていた。

その様を目にした時、「助かった」と、中之瀬二等兵は確信した。抱きかかえられるようにして、甲板上に引き上げられた。途端に、体中から力が抜けて行つた。

「お前、よかつたな。よく、頑張った」

誰かの明瞭な声が頭の上から聞こえた。まさしく、生きてゐる者の天の声であった。

口も利けないままに、中之瀬二等兵はうつすらと目を開けた。回りを見回した。

人の顔が、上から幾つも覗き込んでいた。

「看護兵の言う通りにしないと命を落とすことになるぞ。いいか、貴君らは命はあるが重症であることを忘れんように」

兵曹長の襟章のある水兵が注意を与えた。

腕に巻いた赤十字マークが何とも頼もしかった。

兵曹長他の看護兵たちも元氣滲刺で、統率が取れているからみんな動きが機敏だった。

「水をくれ。水をくれ」

と、隣りの甲板上に寝かされていた兵士がしきりに哀願した。さっきの二人組みの内の生き残り兵だった。

強烈な体臭でみんなが鼻を顰（しか）めている。

衛生班の兵曹長が声を掛けた。

「下痢症状があるようだな。処置をしてからだ。しばらく待て。水を無闇に与えたら、死に水になることだつてある。分かったか」

諫められたが、なお、「水、水をくれ」と、その兵士は言い続けた。その間、二人は担架に乗せられて、艦内の

医務施設に移された。

中之瀬二等兵のこれ以後の記憶は絶えている。深い眠りの底に落ちたように眠り続けた。

人事不省、生死の境をさまよう状態のままに、中之瀬二等兵は内地送還される身となった。

駆逐艦「志神」は、軍命により宇品港に直行、無事任務を完了して、無事、帰港を果たした。

昭和二十年一月十一日のこと、どんよりとした冬空と、肌を切る冷たい風が、この日、彼ら一行を迎えてくれたが、まだ、この時も、中之瀬二等兵は眠ったままだった。

12

宇品の陸軍共済病院の医療関係者が岸壁では出迎えた。再び、故国の土を中之瀬二等兵は踏むことになったのだが、これらの一切は、中之瀬二等兵自身には不明のことだった。無事帰還の喜びすら知ることもなく、白衣の看護婦たちにより担架に乗せられ、中之瀬二等兵は運ばれ

た。人間としての意志を持たない「一個の物体」そのものの状態にあった。

いわゆる、一過性健忘症・記憶喪失症と言われるもので、心的傷害やストレスにさらされることで起きる症状であった。

解離性遁走（とんそう）に、譫妄（せんもう）などを合併して発症することもありとされ、戦時下、これらの記憶喪失を伴う心的傷害患者が多く発生していた。

解離性遁走は、一時的に自分から逃避する心理、譫妄は陳述記憶喪失症とも言われ、特に、言語によるコミュニケーションが欠落する症状を示す。

共に、現実にあった過酷な事実を認めたくない心理がここには働いていたのであった。

一過性なので、脳に器質的な障害はないとされるが、意識混濁に加えて、幻覚や錯覚などの症状も表れるとき、中之瀬二等兵も、あらぬことを口走ったり、フラッシュバック作用<sup>3</sup>で、魘（うな）されることも間々あった。昏睡状態で生死の境をさまよっていた。

それらの諸症状が、落ち着きを見せたのは、入院一ヶ月後のことであった。

やっと、体力が付き、痩せ細った体も元に戻り掛けた。栄養補給の処置が功を奏していた。病院関係者が懸命の治療を続けた。

或る日、中之瀬二等兵の身の上に奇跡がもたらされた。ふーと、意識が戻り掛けた。

「みゃー」と鳴く猫の声を聞いたような気がした。

中之瀬二等兵は、「心温まるいい夢」を自分は見ているのだと、その時、思った。

忘れ去ろうとしているおのれの過去なのに、その夢の中身は、ほのぼのとした「人間愛の物語」そのもので、とても、心が癒された。

（嘘だろう？これは、おれの見ている夢の中の、そのまた夢の物語、まさか、そのようなことがあるわけがない……。生き地獄そのものの様相を示したあの遭難船から、あの少年と猫<sup>ニャ</sup>が、共に、救助されるなんてことは有り得るはずがないではないか。いつか、そうは願った。幼な顔のまだ残る少年が、員数合わせに乗船させられた

ボカ沈要員<sup>ニャ</sup>の一人とは……。そのようなことがあつていいわけではないと、おれが思ったのは事実だ。だが、おれはそう願っただけで、その後は、猫と少年<sup>ニャ</sup>の存在そ



のものも、すっかり、忘れてしまっていた。それを、何を、いまさらに思い出そうとしているのか……)

おぼろげながら、<sup>①</sup>猫と少年<sup>②</sup>の取り合わせの場面が、中之瀬二等兵の脳裡に甦って来た。

宇品港を、<sup>③</sup>宇仙丸<sup>④</sup>が出航した当日のこと、中之瀬二等兵と今福二等兵の二人は、上部甲板の空き樽の置き場の隅で、一匹の猫と、その猫を大事にして可愛がっている少年を見付けた。まるで、兵員輸送船には不似合いな取り合わせで、この場面そのものが、当時としては、「現実味を欠いた話」ではあった。

噂話によれば、空き樽<sup>⑤</sup>ごとに、<sup>⑥</sup>猫と少年<sup>⑦</sup>は海中に遺棄されたという話も伝わっていた。

…と、そこまで、考えた時、うつすらと、中之瀬二等兵は目を開けた。あたりをひと渡り見回した。

ここが病院だというのが、直ぐに、分かった。

幾つかの病床が視野の内に入った。

ゆっくりと首を回した。この病室には猫がいるのか、視線を泳がせ追った。おぼろげながら、周囲の光景が浮かび上がって来た。

その時、また、「みゃー」と、猫が鳴いた。

はつきりと、中之瀬二等兵は自分の耳で猫の鳴き声を聞き分けていた。続いて、甘えた声で猫は鳴いた。

その後、猫を取り巻く連中が、いわゆる猫撫で声で、一匹の猫をとりなしていた。

人間たちの声がした。邪気のない笑い声も混じった。そこだけに、人の輪があつた。

首をもたげるようにして、中之瀬二等兵は病室の中を見回した。あの、一重瞼の、小柄の少年がみんなに取り囲まれていた。

しつかりと、その胸には一匹の猫が抱かれていた。白と黒のぶち模様の、あの、記憶の中にある猫に違いなかった。少年が猫に頬擦りをしていた。

「…ああ、よかつたのう。救かつたんじゃ。よかつたのう。よかつたのう」

と、中之瀬二等兵はみんなに声を掛けた。

声が小さかつたのか、誰も気付いていない。

「本当に、よかつたのう。生きておるがじゃ」

もう一度、呼び掛けの声を発した。

「あつ、意識を取り戻したのね」

やっと、看護婦の一人が反応を示し、中之瀬二等兵に

声を掛けて来た。同時に、二、三人の看護婦が。急いで、ベッドの傍までやって来た。

一人一人が、白衣の天使に見えた。

その内の一人が言葉を掛けた。

「もう一度、ちゃんと行って下さい。ほら、自分の言葉で。いま、言ったことをです」

その真剣な眼差しに驚いたが、中之瀬二等兵は臆せず、言葉を返した。

「よかったのう。なんでえ、この場に、あの少年はおるんじゃ。それが何より不思議なんけえ。それもお、猫も一緒にじゃ。こんな奇跡があるなんてえ。お化け（ごんごち）ば見とるようじゃに。いや、このお、自分もお、まだこの世に生きちよるのかね」

「それだけ喋ることが出来ればもう大丈夫です。自分の名前を言って下さいますか」

「はい、中之瀬浩記、鉄撃兵団の歩兵第十六連隊陸軍二等兵であります」

「分かりました。中之瀬浩記さんですね。あなたはこれまで記憶を失っていたので、名無し兵として扱われて来たのよ。やっど、カルテにもあなたの名前が書けるわ。

よかった」

今度は看護婦が歓迎の文句を用意してくれた。名無し兵<sup>が</sup>だったと知って、中之瀬二等兵は笑みを口元に浮かべた。頬が緩んだ。

一気に、記憶が戻り、感情そのものにも、表情そのものにも、人間らしさが戻っていた。

猫と少年<sup>が</sup>が救出された経緯だが、その後の入院生活で、入院仲間の兵士たちから、それらの仔細を、中之瀬二等兵は教えられた。

魚雷攻撃と空からの爆撃で船が沈没寸前にあった最中、猫を抱き、空き樽に入ったまま、少年は動けずいた。

そのことが、この場合、幸いした。船が傾き、沈没した時、その四斗樽<sup>ごと</sup>に海に放り出された。

海を漂う内に、一隻の上陸用大艇に救出された。だいはつ<sup>と</sup>と呼ばれた大艇には、百人の收容能力があった。

乗っているのは、逃げることを最優先した将官たちで、食糧や装備もひとまずは揃っていた。偶々に、空き樽の上に猫が乗っていたので、その「珍なる光景」が乗船者たちの目に止まった。それが発見された理由だった。

ペットのハムスターが操る<sup>回し車</sup>のように、猫も

空き樽の上に乗る、巧みに、空き樽の、回し車を操っていたのであった。

そして、海に浮いた空き樽の一端には、海中に投げ出された少年が掴まっていた。

それで、同時に少年も発見された。

この取り合わせ、何もかもがいいように作用していた。幸運だったのは、余りにも幼い少年であることが知れて、救助されたことであつた。これが、「一銭五厘の兵士」なら、多分、無視されたに違いなかった。

入院している兵士たちの間では、「猫付きなら救けるよ」の声もあつた。猫が可愛いからではない。「猫だつて貴重な食糧になる」が、飢餓状況から救出されたそれらの兵士たちの本音だつた。あの飢えた状況下、中之瀬二等兵にも領ける話の一つではあつた。

『猫と少年』の話題だが、病院関係者の間では「こんな子供が戦地に連れて行かれようとしていたのか」の不満と驚きの声もあつた。

入院二ヶ月後の三月上旬、まだ、春の息吹も届かぬ寒い日に、中之瀬二等兵は退院した。

せめてもの慰めは、あの少年が故郷の山口県の小さな

山村に帰ることが出来たことだった。母一人、子一人、母親が病院には迎えに来た。しっかりと、胸に猫を抱き締めたまま、少年は母親の許に引き取られて行った。

肩を並べて歩く、少年の笑顔と嬉しそうな母親の顔、甘えた猫の仕種なども目にしたので、中之瀬二等兵の心も癒された。

退院後、中之瀬二等兵は宇品凱旋館内に設けられた陸軍運輸本部・船舶本蔽所属の兵士とされた。

比島に派遣された原隊が海没、ほぼ消滅したため、部隊編成替え措置となった。

この運輸本部は外地に将兵を送り出す機関であった。員数合わせのための、いわゆる、ボカ沈要員<sup>ボカシヨウヤウイン</sup>なる者たちが、この宇品の軍施設には、連日のように送られて来た。

新たな犠牲者が出るのは必定で、中之瀬二等兵としては、複雑な思いを抱がざるを得なかった。

その中には、年端も行かぬ少年兵、また、軍属の身分で徴用された者たちも多く含まれていた。なお、暗澹たる思いが募った。

だが、多くは待機組となって敗戦の日を迎えた。もは

や、戦争の被害甚大で、輸送船の調達は無理な状況となつており、新たな犠牲者を生むことだけは、避けられたのだった。

13

中之瀬浩記から、直接に、わたしが聞かされた話の中には、驚くべき事実話も含まれていた。

救助された駆逐艦「志神」には、陸軍憲兵隊員が、乗船・待機していたと言う。

『日本船舶史』に、中之瀬浩記が寄稿した一文には、記載されていない話であった。

以下は、中之瀬浩記とわたしが対話をした際の一部の話、その話に関連した事柄である。

初めての出会いの日から、ほぼ、五年ほどが経過した「或る夏の一日」のことであった。

中之瀬浩記が三十七歳、わたしが二十五歳の年を重ねた日のこと、船会社の運営もうまく行き、中之瀬浩記は念願の外国航路の貨客船の乗組員になる夢を果たしていた。また、一時期、わたしの兄、菊池勇の所属した通信

隊の上官であった通信士希望の入江高志とも共々に、同じ船に乗り合わせたこともあり、輸出国日本の推進役を果たしていた。

わたしは社会人になって三年目のサラリーマン稼業、世間事情からは、またまだ、疎い身、まして、戦争の事実ごとについては、ほとんど、何も知らなかった。

夏休みが何日か取れて帰神した折りに、無理に頼んで、わたしは再会の機会を持った。

この日も、中之瀬浩記の柔らかな口調は変わらなかったが、話をして行く内に、少し、早口にもなり、訥々とした口振りにもなった。

その分、色々と思うところが表情にも窺えた。

「駆逐艦、志神」ですがね。最速の、海軍自慢の駆逐艦で、一度も、敵潜水艦の攻撃を受けたこともなく不沈の駆逐艦と呼ばれていたそうです。付いた名前が、その艦名の、志神にちなんで、死に神だったとか。他の艦の者から言わせると、死神が避けて通るのは、艦そのものが、死神憑きだからってことで、そんな名が付いたらいいんです。ところで、その、海軍の艦になぜ陸軍憲兵隊員が乗っていたかという話ですがね。実は、わたし



も取り調べの対象者の一人であったんですよね」

「はあ？中之瀬さんがですか？、なんで陸軍の憲兵が海軍の船に乗り込んで、そのお、取調べとか。ようは分からん話やないですか」

改めて、わたしは訊き直した。

場所は、いつもご指定の神戸の海岸通りにある大阪船舶の喫茶室、午後の時間になったので、少し、やはり、店内は込み始めていた。

外の陽気のせいで、明るさがみんなの顔を包んでいた。港街らしい整いのある店だった。

船員なども立ち寄るせいか、ボーイがウエイトレスの代わりに勤めていて、すべてが船内方式、船会社らしくもあつた。

飲み掛けの珈琲カップを手に、わたしは中之瀬浩記に驚きの思いも込めて問うていた。

「話せば長い物語になるのですが、船で遭難し、漂流する目に遭った者は、誰しも、飢えを体験することになります。わたしだって、漂流の末に死んでいても何の不思議もない状況でした。これは、船の仲間の遭難話なんですがね。ボートで漂流十日目、ある機関員が死に瀕して、

自分の体を提供すると言い残して亡くなったという話があった、その話だと、家に残して来た一人娘に、自分の骨の一片だけでいいから届けてやってくれと、その条件とやらを持ち出したらしんですね。もちろん、それは話だけのことだったんですが、そういう話、戦争になると、憲兵隊ともなると、ちゃんと耳に入れていってことなんですよ」

「…はあ、それで、駆逐艦にもですか？」

「昭和二十年にもなると、南方を初め、各地で玉砕も含めて、日本軍は悲惨な状況下におかれていました。そう言った、自分の体を提供するという話も、現実味を帯びて来ていて、実際に、漂流実記だけでなく、食糧の自給自足を強いられた各地の部隊では、この頃、似たような話が勃発していて、憲兵隊もそれらしき情報を得ていたということなんですな」

「取調べと言うんは、そないなことと関係ありだったんですか？」

さらに、わたしは驚きの表情を浮かべた。

「当初から、漂流で生き残った兵士たちを疑って掛かっていたってことになりますが、その実態とやらを把握し、

軍の規律に関わる問題を厳格に取り締まることが、彼らの使命、つまりは、それまでに、幾つかの具体事例を彼らは掌握していたと言うことでしょう。それ以上のことはわたしには分かりませんが」

「幾つかの具体事例ありですか…」

「…うーむ。実際に、戦地で戦って来た元兵士たちは、この問題に関しては沈黙を守ったままですからね。誰も話したくない。触れられたくない。そうでしょう。まだ、戦争が終わって十五年しか経ってはいません」

今から、およそ五十年ほど前の頃の話、

まだ、『戦記』も含めて、関連の情報が世間にはそれほどには流通していない時代で、『戦争そのもの』について話をするには、当時としてはまだ勇気が要った。そんな時代背景についても、その時、中之瀬浩記は言及した。

世の中は復興景気で浮かれ始めていて、もはや、過去になりつつある『負の遺産である戦争』のことを、改めて口にする者は少なかった。わたしの若気の至りも含めて、今回は、中之瀬浩記が、親友であったわたしの兄、菊池勇への思いも込めて、口を開いてくれたからこそ、この出会いの場はあったのであった。

「知り得る限りのことを言うと、そういう、止むに止まれぬぎりぎりの状況にあったことは事実で、ことの良し悪しは、わたしは口に出れませんが。その内、そうですね。年月を経て、戦争世代の者たちが亡くなる年齢になれば、これらの真実話も伝えられるようになるのかも知れません。今でいうところの「トラウマ症状」ってことになりますか。みんな、心の傷は深いと思いますから…」と、そこで、一旦、中之瀬浩記は視線を泳がせ、そして、遠くを見詰める目になった。

この時、わたしは不問の事柄を、問い質しているような気がして、所在なく、冷めた珈琲を口にしていた。

沈黙の時間が流れた。

実は、ここに記した『魔のバシー海峡』の、「中之瀬二等兵自身が、漂流相手の兵士を食する対象としていたのか、どうか」の緊迫場面は、その後の何回かの再会時に、少しずつ、中之瀬浩記が語ってくれたもので、記録としては、わたしの補遺の部分もある。

やはり、それなりの歳月を経て、中之瀬浩記も、『戦争実記』を語り継ぐ気持ちになることが出来たのであった。

これらの、中之瀬浩記との交流があつて、その後、わ

たしは幾つもの『戦記物』の記述に目を通す機会を得たのだった。

戦争そのものの話はみんな暗い話ばかりのようだが、その後も、何回か、この海岸通りの喫茶室で会うごとに、中之瀬浩記は、「ここの珈琲はいつ飲んでもうまい。船員仲間でも評判がいいからほんまもん。そうそう、菊池勇も、戦前、船員の時代、ここの珈琲は何度か飲んでいと思いますよ」という心温まる話なども、わたしは聞かされていた。中之瀬浩記自身のその後の人生の幸せさも合わせて、わたしは嬉しくなった。

その後、わたしがいっぱしの『珈琲通』を気取るようになったのは、多分に、この、中之瀬浩記の影響を受けたことだった。

中之瀬浩記の言によると、コーヒーの横文字では味がせず、やはり、『珈琲』の漢字の方でないと『珈琲』を飲んだ気がしないということだった。大正ロマンの時代への思いも、中之瀬浩記には色濃く残っているということなのだろう。わたしにはそう思えた。

海運会社の古風な七階建てビルだが、戦災にも、阪神・淡路大震災にも耐え、今も、大正モダニズムの雰囲気

そのをままだに伝えて、旧居留地内にある。

内観の天井の高さも、石を組んだ外観もそのまま、こればかりは、幾世代もの時代を乗り越えた建築物として、今もこの地に懐旧の思いを止めて遺されているようだ。時代の変遷もあるから、中之瀬浩記とわたしが何回か会った海運ビル内の喫茶室は、今はない。

やはり、時は流れて行く。

それでも、海風と共に、船の汽笛の音なども、時折りは、この地には届けられることがある。

そればかりは今も昔も変わりはない。

(第二話 了)

ほたるじゆのそら

## 蛍樹の空

### 1

どこの国へ行っても夕焼けの空は美しい。

暮れなずむ一日の哀愁も沈めてのことで、人々の様々な思いも、併せ、吞まれて行く。

まして、それが異国の地で見ると夕焼けの空なら、なにかおかわん、海の果てに繋がる故里への郷愁たるや、いかばかりか。この日、マニラ湾マラテビーチの海は穏やかであった。風の風なので、白砂の海岸に沿う椰子並木も今はそれほど騒いではない。

それでも人の背丈の三、四倍はあろうかという南国ならではの椰子の並木の道、仰ぎ見れば、ざわざわざと葉擦れの音が聞こえた。

遠く故里へと繋がる白波も、見ている者の胸の内を打

つようにひたひたひたと寄せていた。

小波(さざなみ)は寄せては返す。

夕刻のこと、やんわりと、風の潮風が頬をくすぐるように撫でて、心地良くもあった。

昭和十九年四月二十日。

鉄撃兵団第二大隊、電信連隊・通信班に属する四人の兵士がマラテビーチの白砂の砂浜に座り、美しい夕焼空を眺めていた。

本格的な米軍によるマニラ攻撃が始まる前のことで、南方軍を統括している第十四方面軍司令本部もマニラにはあり、比島作戦の先遣・待機部隊として、彼ら通信部隊はマニラに送られた。その間の寸暇のひと時であった。

「なあ、菊池二等兵、お前は神戸生まれの神戸育ちと聞いている。ここ、マニラで見る海の景色は一入だろう。

このおれは横浜生まれの横浜育ち、こういう海の光景に思いが一杯詰まっっていて、海の匂いを嗅ぐと弱い」

「はっ、入江軍曹、実は自分は横浜生まれで、関東大震災をゼロ歳で体験した身であります」

「うん?となると、大正十二年生まれか。あの、関東大震災の際に横浜に居たことになるな。どうなんだ?生年



月日はいつだったか？」

「大正十二年十月十四日となっております」

「関東大震災発生は九月一日だぞ。その日付じゃおかしいが、事情ありか。あの時、おれは六歳の子供だった。菊池とは同じ体験をしている。震災の時の大混乱の様子、子供ながらにもわたしも色々と覚えているよ」

こんな会話で、入江高志と菊池勇との交流は始まった。同じ、「鉄撃兵団通信班」の兵士同士だが、入江は民間の通信会社から狩り出された元教官、菊池は入江の教えを受けた身、同じ上官でも師弟ということで、親しく口を利いたりはしなかったが、この会話を契機に、入江からは特別に目を掛けてもらえるようになった。

午後五時からの通信班の「定時通信」の軍務を了えた午後六時半の休憩時刻のことで、まだ、夕焼け空は朱く染まっていた。

同じ通信分隊の村中達郎上等兵と、石丸和男一等兵の二人は同郷・島根出身者同士、彼らとは少し離れた砂丘の地を見つけ、肩を並べて、やはり、夕焼け空を眺めていた。

「生まれたのは八月十四日で、出生届けは二ヶ月遅れ、

出身地も住む場所も、避難先の神戸となったのであります」

「地震発生時は生まれて二週間の身、まだ、ぶよぶよの赤ん坊じゃないか。両親は赤ん坊を抱えて大変だったろうな」

「はっ、父親は船乗りで横浜にはおらず、自分は長男、初めての子で、母親だけだったので、大変苦労したようであります。親切な人たちに援けられたと聞いております」

「なあ、軍隊口調はいいよ。ここでは普通の話だ。わが通信分隊では珍しいたった一人の関西弁、関西弁にも色々あるようだが、<sup>①</sup>神戸弁<sup>②</sup>、あれは言葉の響きが柔らかくていい。お前の口癖の<sup>③</sup>かなわんな<sup>④</sup>。わが班ではあれは便利でいい。思い通りにいかない、適わん時に<sup>⑤</sup>かなわんな<sup>⑥</sup>。あれ、相手を軽く交わせるからな。気が楽になる。重宝しているんだ」

「そいじゃ、かなわん話をさせてもろうてもええですか？」

「そうだな。横浜からどうやって避難したのか。そういう話に興味ありだな。わたしの父親も長期出張で留守だ

った。おれの一家、母と七歳になる姉の三人は、震災発生一週間後に横浜港に臨時に設けられたバスで運ばれて、その時、開通していた唯一の国鉄の発着駅、甲府駅から超満員の列車に乗り、母親の実家のある大月まで避難した。超満員で、列車の屋根に乗っていてトンネルの入り口で跳ね飛ばされて死んだ者もいた」

「自分と母親は横浜港から、大阪船舶の救助第一船に乗せられて神戸に行きました。自分はなんにも覚えてはおりません」

「そりやそうだな。目を見開いて、起きている事態を見ていたわけではないからな」

「いや、ちゃうんです。今でも地震なんかがあると、自分の目からはなんや知らんけど、涙がぽろぽろとこぼれ出ることありなんです。恐怖感からか、演習の時も、機銃音を耳にした時、涙が流れて止まらず、この腰抜け、泣き虫野郎<sup>、</sup>いうんで、だいぶ、ビンタ喰らいました」

「地震の時のあのごおーっという地響きの音、大地の揺れ、真つ黒な煙と、渦巻く火の玉のような火焰雲、あれは怖ろしかった。六歳のおれは腰が抜けて碌々歩けず、母親の手に掴まって引きずられながら歩いてた。あの

時の阿鼻叫喚の様が、お前には何もかも見えていたってことだ。第六感、心眼、ってやつだ。見えない目で何もかもを見てたってわけだ」

「その、震災の時の救助船なんです、この船には自分はんや縁があるらしゆうて、その船名が大興丸、わが部隊が乗船してマニラまでやって来たあの船なんです。お蔭でというか、バシー海峡も無事通過してマニラ港に到着、自分だけのことではあるんやけど、えらい感謝しとるんです」

「いや違う。運の悪い船はバシー海峡で海の藻屑だからな。菊池勇の生まれ持った運を背負って大興丸、わが部隊を戦地に無事に送り届けてくれたってわけだ。お前の持っているその運だが、戦地ではこういう運が命を左右することありなのよな。わが通信班分隊の心を込めた千人針、いや、お守り神か。一つ、よろしく頼むよ」

この時期でも、内地からの輸送船は敵潜水艦の標的になっており、湾内で触雷沈没した艦も含め、すでに多数の海没者が出ていた。

現に、彼らがマニラ湾に上陸した時も、護衛艦に救助されたものの命が保てず、埠頭岸壁に放置されたままに

なっている多くの兵士たちの屍体に出喰わした。悲惨であった。入江軍曹の「守り神」云々は、真実味も加わった話であったことになる。

その後、菊池二等兵はちよつと黙り込んだ。

「自分は疫病神かも知れん」と、入江軍曹とは別のことを考えていた。

遠くの夕焼けの空に入江軍曹は視線を投げていた。

小さな灰色の雲が水平線にはあり、沈み込む夕陽がその雲海を射すように眩く映し出していた。

暮れの光芒、一瞬、一日の名残りを惜しむように天に向けて、光は瞬く。

二年前の昭和十七年五月三日の出来事が、この時、ちらと、菊池勇の頭を掠めた。

敵潜水艦からの魚雷攻撃を受け、菊池勇は乗船沈没の憂き目に遭っていた。船員軍属の身の時のことで、南支那海沖で地獄の様を目の辺りにしていた。

それこそ、海に投げ出された者たちの様は「生き地獄」そのもの、誰にも語り得ない内容の話だった。

もちろん、今回、宇品港を発つ時も、分隊の仲間たち

には、そのことは一切伝えていない。

「疫病神」？であってはならない。やはり、その思いを強く持っていたゆえのことだった。

その後の大興丸の運行予定だが、内地に引き上げる邦人婦女子が、多数、埠頭庫の本屋(ほんくおく)に待機していた。この危急時、帰りの便で内地に送還されるらしい。彼ら兵団が埠頭に到着した時、日の丸の小旗で出迎えられた。この一団の者たちで、母親に手を引かれた幼い子供たちが多かった。

海を越えての行き来は危険度が高い。

帰りの便は、錫、ゴムなどの資源類、それに、一部は石油等の燃料類も搭載するから、特に、貨客船は敵潜水艦には狙われ易い。

ふと、あらぬ思いが菊池勇の脳裏に兆した。

(みんなに、もしものことがあったら…)

誰しもが慮(おもんばか)る命の儚さ、いや、海難の恐ろしさを思わずにはいられなかった。

「見ろ。かもめの奴が沖合いで魚群を見つけたようだ。

群れているのは鰯の大群ってところか。あいつらの餌の

奪い合い、餌を啜えて飛び立った奴から餌を奪うちやっ  
かりもんもいる。あれでなかなか生存競争は厳しい」

入江班長が言った。煙草を取り出したので、慌てて、  
菊池二等兵はマッチを手にした。

この時、村中上等兵と石丸一等兵が彼らの傍にやって  
来た。村中上等兵が煙草を取り出す。石丸二等兵が今度  
はマッチを擦った。この時、ふーと吹き出した煙草の煙  
を吸わないよう石丸は息を詰めた。

その間の事情はみんなも知っている。

石丸は故郷の島根に居た時は昆虫集めに夢中な昆虫少  
年、煙草の煙を吹きつけたら昆虫が死ぬ、と信じての煙  
草嫌い。農業地の高等小学校を出た後、夢であった生物  
の先生になるのを諦め、国鉄勤めの兄と共に田畑を耕し  
て母親と三人で暮らしていたところを召集を受けた。

父親は早くに亡くしていた。心の優しい青年だったが、  
その分、少し気弱でもあった。分隊では、虫も殺せない  
男、虫は虫でも、弱虫、で通っていたが、むしろ、本人  
は、そう呼ばれることを、唯々諾々と受けていた。

「この夕景は果てがないぐらい壮大であります。自分  
は山家の育ちでありますから、海を見るとよその国に来

たようであります」

村中上等兵が切り口上で言ったので、入江軍曹が苦笑いしながら、それに答えた。

「いまはわが班は一服中だ。さあて、この南の島に送られてこれからの戦いどうなるかだな。通信班は特別任務を負つての独立部隊、人数も少ないから仲間意識が求められる。軍隊つてところは、部隊単位で何事も動く。他の部隊のことは我れ関せずだ。一番兵員も多い歩兵は歩兵、彼らは人数主義、数でものを言わせる。戦車部隊に砲兵部隊、重機関銃部隊、自動車部隊を持つ輜重部隊、みんな特科部隊だから鼻息が荒い」

「はい。気性も荒いし、体格もいい兵が多いようでもあります」

「そう言えば、わが通信班分隊の連中、小柄、痩せ型が多い。石丸、菊池、このおれも眼鏡を掛けているからな。みんな、ひ弱に見えるつてわけだ。その分、わが通信班、頭がいいんだと思うようにしよう。こういうところ、軍隊つていうのはよく色分けされておる」

班長も痩せ型で中肉中背の体型、他の三人も、やや小柄であった。入江と菊池は細縁の眼鏡、石丸は黒縁の眼



鏡を掛けていた。

「工兵部隊はいっぱしの技術者集団、ここにも逆らえない。戦地に送られて、一番、大事な要諦は、兵站（へいたん）部隊と仲良くすることかな。後方支援部隊だが、何しろ糧秣をしっかりと握っている。こいつらのご機嫌を損ねたら食い物が手に入らなくなるから生きてはいけん。通信班がいなければ情報収集、伝達の軍務は機能しないんだから通信班の存在、大いに認めてもらいたいところなんだが、この辺はみんな分かってない。もう一つ、大変なこと、菊池、何だか分かるか？」

「いえ、自分には…」

「通信班が相手にするのは、司令部の高級将校、作戦参謀のベタ金連中、それに、大隊長、中隊長級だ。みんなお偉いさんの将校尉官、こぞって威張り屋ばかり。気を付け一つを取っても、一々、立ち止まらなければならん。そういうお偉方（えらがた）と、いちばん、日常的に接しているのが通信班だ。気が休まらない。まあ、おれは通信の器械を触るのが好きで、横浜の国際電気通信会社に勤めているところを召集された身、この道一筋だ。元々は船の通信員になろうと思っていたから、通信業務は苦

にはならないんだが、ほんまにかなわんやな。かなわん」

そう言い、入江軍曹は首を竦めて見せた。

「そないなことやったんですか。戦争がなければ、自分も元船員、お互い、おんなじ船に乗り合わせていたかも知れんですね」

「そうだな。大興丸、あの船はかつての欧米航路の花型貨客船、一万三千トン、乗り合わせるのにおれとしては不服はないな。そう、願うことにするよ」

また、話が合って、二人は笑みを交わした。

「船乗り志望のもんが、陸(おか)に上がったんなら、皿に水のない河童だがや」

村中上等兵が二人の話に加わった。

入江軍曹が答えるともなく後を続けた。

「陸に上がった河童か。そういうことだが、トン、ツーの発信記号は万国共通、どこにいても同じだ。通信器械は通信器械、何も変わらない。こよなく、おれは通信の仕事愛している男、どんな困難な任務であれ、与えられた仕事は全うするよ」

マニラ湾の海はどこまでも美しい。夕焼け色に染めら

れて、水平線の向こうから、ちかちかと輝く波が幾波も届けられて来た。

小魚が跳ねているようにも見えて、海が波と共に生きていることをみんなに教えてくれた。

台風の目の内に入っているような、「平和なひととき」が、この美しい海にはまだ息付いていた。

## 2

通信部隊には有線班・無線班があるが、「有線班」は電話での連絡業務を担うので、通信用ケーブル敷設が新たな戦地では必要となり、道なき道にケーブルを張り巡らせることが多いので、これはこれで大変な軍務であった。

無線班は、いわゆる、「トン、ツー、トン、ツー」のモールス通信の符号を操るのが軍務であった。

通信手による送受信、さらに、仮名文字を使い、暗号の組み立て方式で送受信される「暗号文」の組み立て、解読も、彼らの大事な任務となった。

当然、指令文書は敵側に傍受されることもあるから、「暗号文」は単一なものではなく、暗数表による乱数法

によつて、より複雑化されていたので、特に「暗号手」は頭を使う。

その「暗号手」としての特殊教育を菊池一等兵も受けた一人、この時期、歩兵は一期三ヶ月だが、無線兵は一人前になるのに六ヶ月掛かった。

その分、無線班の兵士たちは戦線でも心身共の激務を負わされている身、何しろ、当時の日本語、特に軍隊用語は難解で、「トン、ツー」の仮名文字を並べたところで解読は不可能、それほどに軍隊用語は特殊だった。

例えば、「敵殲滅(せんめつ)」「敵ヲ撃摧(げきさい)破摧セヨ」「変通自在ノ戦闘」「各隊ニ跟随行(こんずいこう)セヨ」など、中には「命ヲ鴻毛(こうもう)ノ軽キニ比シ」などという人命軽重の命令、通信文もあった。

一兵卒でしかない彼ら通信兵たちだが、司令本部の通達文、命令文、戦局の推移に関する秘密交信事項などを知る機会を多く得た。

「兵团ノ新任務ニ就(つ)ツイテ 現下ルソン戦局ヲ一転セシメントス」

「神兵ナレ 神ノ如キ戦技ヲ習得セヨ」

「一兵ヲ以ツテ敵兵一〇〇 敵TK(戦車)一〇以上ヲ

タホサズシテ死ヌナ」

「各地区共住民ハ全面的敵トシテ連絡我等ヲシテ困窮セシムルモノアリ之(これ)ニタイシ断乎(だんこ)容赦セザルニ決ス」

これらはルソン島の南側に位置するミンダナオ島の日本軍守備隊から発せられたものだった。

戦局の急を知らせる緊急文書であった。

数日後、不幸な情報も通信室内には届いた。

多くの艦船が海没させられており、案じた通りの大興丸沈没の悲報を菊池勇は耳にすることになった。彼らの部隊がマニラに到着した時、埠頭に待機していた婦女子たちの一団を乗せたあの「帰還船」であった。

マニラ沖で敵魚雷により沈没、「行くも帰るも地獄船」の実状が明らかになった。

この情報は入江も承知のことだったが、菊池には何も語らず、口を閉ざした。

(やっぱりおれは疫病神なんやな。あの、大興丸も海の藻屑と消えてしもうた。軍人だけやないでえ。女子供もみんなやられてまうんや。これが戦争ちゆうもんや。もは

や、この地に足を踏み入れた時からおれには運なんてモンのうなつてしもうたんや。これから、我々はどないなことになるんやろ？ここは、幾千里と離れた南の島や、おいそれとは日本には帰れんでえ)

一兵を以つて敵兵一〇〇、敵TK一〇をたほさずして死ぬな。の強い文句には怯んだ。

虫も殺せない石丸の奴。とて同じ思いに違いないと、この時、菊池は石丸の心中を思いやつた。

やはり、この口にしたくない文句、電文に関しては、石丸も黙して語らなかつた。

それでも、マニラでの日々、菊池と石丸の両通信兵は思わぬ「出会いの場」を持つことになった。

マニラ市街地から北外れ、サンミゲルにある日本人学校に通信班からも何人かの兵が派遣された。

多くは有線班の挽馬(ばんば)隊員で、電線などの物資運搬を負わせる挽馬を海没で大方失い、彼らは任務に就けず、待機組に入れられていた兵士たちであった。

学校は臨時閉校、避難邦人たちを受け入れる一時的避難場所になるので、その準備の雑務を、待機兵たちが負うことになったのだ。

トラックを降りて、校庭に着くなり、兵士たちは校庭の隅に植えられた翡翠蔓（ヒスイカズラ）の鮮やかな空色の花房群に目を奪われた。

一様にみんなが驚きの声を上げた。見たこともない華麗な花で、翡翠蔓は藤棚式に組まれているので蔦のような枝が頭上には這っており、その棚から二百から三百もの空色の花卉を付けた花房が垂れ下がっていた。

各一米ートルほどはあろうかという大きな花房で、樹高も七メートル余はある大樹だった。

大きなものでは二十メートルにもなるとされるから、これでも樹高は低い方だった。南国の花は大きさも花房の装いもまるで桁が違う。明るい空色というのも驚きであつた。その空色の花房は大きな実も付けることから「ジエード・パイン」の呼び名もあつた。

熱帯雨林帯にしか自生しない植物で、フィリピン諸島特産の花、これ見よがしに、ここでは、豪華絢爛に咲き誇っていた。

見とれていた兵士たちは「集合！」の声に背を正し校庭に整列した。軍務に就いた。

軍用毛布や、天幕、蚊帳、幾らかの食料などが、校舎

内には運び込まれた。この地が戦場と化せば、軍隊の駐屯地として転用も可能なので、その備えの準備かとも思われた。

マニラに近い地だから、ここが、いつまでも、避難所でいられるわけもない。

ところが、すでに、この学校の校舎には三十人余りの邦人婦女子が寝泊りをしていた。

この校舎から、子供たちと一緒に何人かの邦人女性が顔を出した。みんな着のみ着のまま、訳知った兵の一人が、「帰国のため大興丸に乗船していて助け出された者たちだ」と説明を加えたので、その話を聞いて菊池は心を傷めた。やはり、「帰りの船も怖い」と心配していたことが、この結果であつたのだ。

この時、母親たちに混じっておかっぱ頭の少女の一人が現れた。小さな子供たちの手をそれぞれに引いていた。みんな十五、六歳頃の少女たちで、お下げ髪であつた。

マニラでの新天地を夢見て単身海を渡り、この地にやってくる者たちに違いなく、彼女たちも「海没船」の生き残り組と思われた。

菊池らの兵団がマニラ埠頭に到着した時に、日の丸の



小旗で迎えてくれた者たちであった。

特別の思いで菊池は遭難者たちの一団を眺めた。連れの誰かを亡くしたのか、肩を落とし、言葉少なな母子などもいた。みんな一様に元気がない。

菊池も暗然とした思いになった。

何より、国に残して来た妹と同じ年頃の少女たちに菊池は心を奪われた。国を出る時も、活発で利発な妹には、「親不孝の自分に代わって母親には孝行してくれ。まだ、小さい弟の面倒もみてやってくれ」と、言い置いて来た。

もちろん、これらの少女たちと口を利く機会はなかった。そんな思いを抱いただけの話であった。一人、みんなから、「チャコ、チャコ」と呼ばれている少女がいた。動きも活発なのでみんなの中では目立った。

お下げ髪を額のところできっちり切り揃えているので、「お下げ髪の少女そのもの」、色白で目の張った美少女ぶりも妹似だった。

この「チャコ」と呼ばれた少女とは、後に、通信班の者たちは再会する機会を得ることになるのだったが、この時は、すれ違っただけ、袖触れ合うも他生の縁で何かの機縁を感じて注目してしまった少女だったが、妹似

の話石丸に告げたら、こつそりと、小さな声で、「なあ、あげなんを、谷間のユリ」と言うんでアーマシタ」と島根弁で冷やかされた。そんな言葉を知っていた石丸の男心振りに、思わず、菊池は苦笑させられた。

谷間のユリは手にしてはいけない清楚な美しさで谷間に一輪だけ咲いているもの。

言い得て妙だと、改めて、虫も殺さぬ男の心中を慮った。「なかなか石丸もやるもんやな」と、こちらは関西弁で自分に答えを用意した。石丸は瓢瓜(ひょうきん)なところもあった。そんな浮いた文句を口にしながら、石丸は翡翠蔓の花壇の隅では、空色の華麗な花には目も向けず、薄羽のツノゼミをちやつかりと捕らえた。

昆虫の方に興味大で、これもフィリピン特産だと、ひとしきりの注釈を付けた。もう、谷間のユリの話は、石丸はすっかり忘れていたようだった。

やがて、このサンミゲルの街もマニラからの退路で、戦火にまみれることになるので、見事な翡翠蔓の花棚も、徒花(あだばな)のように咲き、消滅して散り果てる運命にあった。

戦争の事態は日増しに悪くなって行った。

九月中旬から末の時期にかけて、マニラ湾内、沖合いに停泊していた艦船十数隻が、米軍空爆隊の集中攻撃を受け、沈没、あるいは大破などの甚大な被害を蒙った。むろん、多くの人命が失われたのは当然のことであった。

遠雷のように鳴る地響き、爆音、破裂音、そして、目にもはつきりと分かる濛々(もうもう)たる黒煙、猛った炎の高さ、すべてが、大地震の様と変わることはなかった。攻撃は数時間も続いた。

マニラ湾の惨状をマニラ駐在の各部隊の将兵は、この時、嫌でも目撃することになった。

高見の見物ではないが、米軍の圧倒的な空爆力の凄さを、将兵たちは見せつけられた。

マニラ沖の惨劇のこの場には、入江も立ち合わせていたが、菊池の姿がこの場にないことに、その時、入江班長は気づいていた。

入江高志自身も、また、関東大震災の経験者、自分が少年の時に体験した「生き地獄」の様が、やはり、この時、脳裏を掠めては過ぎて行った。

まさしくこれは、人災で、止むことがなかった。

暗澹とした思いになった。

地響き一つにしても地底を抉るような凄まじさ、身の毛がよだち、心底、「怖ろしい」と、入江は心から思った。

未だ、戦いは著（ちよ）に就いたばかり、人災の恐ろしさに唇を噛んだ。

一人、菊池は通信室からは一步も出なかった。

ぼろぼろと涙を流し続けていた。

「心眼感知」のあの防御本能の為せる技か、涙が止まらなかった。そんな無様なさまは誰にも見られなくなかった。強くなければ兵士ではないのに、その資格に欠ける「泣き虫兵士」の自分が情けなかった。毛布を頭からすっぽりと被り、耳穴を両手で塞いでいた。

「ずずんっ、ずんっ」と鳴る遠雷の轟きは、大地を覆すかのように、いついつまでも続いていた。

止どまることを知らない。

（いつまでもこんなことをしとったら、自分はこの戦場で生きては行けへんでえ。この場から逃げようとしとるんが自分を弱くしとるんとちやうか。こういうことではあかんのや）

何度か自分に言い聞かせた後、涙を払うと菊池は立ち上がった。おのれを叱咤した。

居室を出ると、遠くマニラ湾が望める丘へと足を運んだ。班員たちの後を追った。

恐怖心を抱いたのは菊池だけではなかった。

恐ろしいマニラ湾空爆の様には、村中、石丸も立ち会っていた。班の者たちを見つけ、菊池は歩み寄った。

入江班長も気づいた。

「おい、菊池、大丈夫か。お前の震災以来の『泣き虫病』、こういう状況が一番弱いんだろう。本当はおれも弱い」

菊池の心中を思いやりながら、入江班長がそう声を掛けた。きつぱりとした顔を菊池が向けた。

もう、泪顔ではなかった。

「いえ、もう自分は腹をくくりました。いつまでも怯えてんやない。涙が出るんは、あれは、きつと神様が与えてくれた自分への試練なんやと思うようにして、開き直ろうと覚悟を決めたんです。人生で、こげえな恐ろしいこと、二度もあるんとは思わんだけど、これが自分に与えられた現実、いつまでもくよくよしてるんやないで。震災の時は、みんなに援けてもろうて生き残った命

なんやから、大事にせな。そのためには、いつまでも泣き虫兵<sup>な</sup>。なんじゃあかんでと自分に言い聞かせました。もう、泣いたりはしません」

「よし。よく、そこまで決意をした。もはや、この場で、逃げるわけにはいかんものな。どうやって生き延びるか。戦場ではこういう気構えも大事だと思うよ。一兵卒と言っても、みんな、生有る人間<sup>な</sup>だ。一銭五厘で扱われても困る。おれは教官出で職業軍人ではないから、軍の組織にはからきし弱い。苦勞もさせられる。だがな。通信の仕事は全将兵の命を預かっている仕事でもあるんだから、軍の命令にはおれは従う。お前たちの命もおれは預かっているのだから、将校連に文句をつけているだけでは、これも埒が明かないことだ」

「はっ、入江班長を支えて、われわれ隊員は懸命に務めてまいります」

班員を代表して、強い口調で村中が答えた。

「あの関東大震災の時もそうだった。どんな困難状況であれ、生きるために人間は最大の知力を働かせるものさ。そうだな。一生懸命<sup>な</sup>という言葉があるが正しくその通り。その場、その場の知恵も出し合ってた。お互い、援

け合い、励まし、あの時はみんなが生き延びた」

入江班長の声は力強くもあつた。

マニラ湾の空の果てには、「地獄絵図」がもはや繰り広げられていた。燃え盛る赤い炎が空を焦がし、濛々たる黒煙がうねりの風を、巻き起こしていた。「どんっ、どどんっ」と、ドラム缶の爆ぜる音も混じった。

これからもっと過酷になる戦線、その地獄の様が、ここには、すでに指し示されていた。

身を固くして、みんながみんな、この惨状を瞼の裏に焼付けることになった。

着任した当時とはすでに戦況は一変、もはや、美しいマニラの夕焼けはこの地にはなかった。日一日、戦況は激しくなりつつあつた。

### 3

昭和十九年十二月中旬のこと、鉄撃兵团第二大隊電信連隊、通信班の待機部隊は移動を命じられ、ルソン島北部山岳地の入り口になる要衝（ようしょう）の都市、サンホセへと転進することになった。

十二月になると、汽車やトラック、乗用車などは軍に徴発され軍用車となり、「日本軍首都放棄」の噂も流れて市内は騒然となっていた。また、米軍空挺部隊(落下傘部隊)がマニラには空から落下して来るとの噂もあり、マララ在住の邦人たちはみんな浮足立った。

あらぬ流言飛語も飛び交った。

マニラ在の各部隊も一斉に転進を開始したので、マニラ周辺からの鉄路、輸送貨車は兵士たちで溢れた。

怒声も入り混じった。

抗日ゲリラ部隊が各地で蜂起して、物資保管所なども襲撃され、治安も乱れ始めていた。

民間人の男たちも、松葉杖をついている者、病人までも防衛本部に集められ、最後までマニラで敵と戦うことを命じられていた。

婦女子などの在留邦人については、まだ、正式な撤退命令はなく、各自がめいめいの家財道具を、乗り合い馬車(カルテラ)に積んで、北の街、サンホセを目指した。

現地に駐在していた民間会社などの所有する乗用車の列も、サンホセに通じる陸路には延々と続いたので、この退路はすでに大混乱状況となっていた。



通信部隊は通信機材などの運搬携行もあるので陸路、輸送部隊のトラックの力を得てサンホセに入った。軍用トラックに便乗を申し出る婦女子もいたが、軍用トラックは爆薬、糧秣、薬品や他の軍用機材を最優先に運搬していたので、一切、同乗は禁じられていた。

この間も米軍は攻撃の手を緩めず、蟻の行列にも等しい避難民たちを攻撃機で空から掃射したので、みんな生きた心地がしなかった。

むろん、死者も出、傷を負う者も続出していた。

爆薬を満載した軍用車などは、回りの者も巻き込みながらに爆裂して果てた。

マニラからサンホセのまでは徒歩だと、ほぼ三日は要した。途次、難渋を極めていたから、その日程も、目安でしかなかった。

日本軍後退の情報がこのような混乱を招いていたのだが、日本軍司令部からの邦人救助についての正式な通達はない。この時期に至っても出されてはいなかった。

戦後に明らかになった軍令電文書によると、

「在留邦人ノ子供ハ作戦上足手マトイニナルノデ殺シテモイイ」旨の発信さえ為されている。

すでに、この時点で、在留邦人の子女たちは、軍に見捨てられていたことになる。

これらの混雑ぶりを横目に見ながらの部隊移動、通信班の兵士たちも、みんな複雑な思いで避難民の列を見ることになった。

サンホセは鉄道の終着駅で、ルソン平原の尽きるところに位置していた。西欧風の生活様式や瀟洒な建物なども含め、サンホセは田園都市としての体裁を整えた美しい街であった。この時期は、丁度、稲の収穫期で、一面の田んぼには黄金色の稲穂が揺れていた。

いなごが元気良く跳ね、そして、黄色い胴体の蜻蛉が、すいすいと青い空を飛び交った。

その背後、北の方角には、行き先を閉ざすように幾つもの険しい山々が聳え立っていた。

ルソン島北部のそれらの山岳地まで六十キロの地点、山々を控えた静かな街並みというのがサンホセの街の景観であったのだが、多数の避難民でこの街は溢れ返ることになった。

それでも、サンホセに元から住む原地の人々は、ひとまずは彼ら避難民を暖かく受け入れてはくれた。避難民

を見る目はいつもととは違ったが、食糧調達などの便宜については協力的に応じてくれていた。

もちろん、日本軍部の無言の圧力が、彼らをしてこのような行動を取らせたのは事実ではあったのだが…。

フィリピンの国は西欧列国の支配下に置かれて苦渋を舐めさせられた時代が長く続いて来たので、いつの間にか、人民はその対応の仕方などを身に付けさせられていたので、総じてこの地の人たちはお人好しで人懐っこいところがあつた。笑顔も絶やさない。

もちろん、情勢を見るに敏なところがあるのは当然で、事態の急変事、このサンホセの街の人々も、どこか、用心深そうでもあつた。

元々は、一五七一年にスペインがフィリピンを征服して以来からの約三百年間、スペインによる植民地支配が続いていたのだが、一八九八年に勃発した米西戦争で、アメリカが勝利した後、当時の貨幣、二千万ドルの些少の対価で、敗戦国のスペインが戦勝国のアメリカに、この小国を売り渡した。

国を国とも思っていない取引きだった。

それらの西欧大国の植民地支配を真似したのか、今度は、アジアの小国日本が太平洋戦争で米英に宣戦布告した後、一九四二年一月二日にマニラを占領。呆気なく、この戦いで米国が降伏、フィリピンを去ったことで、今度は日本がフィリピンを支配下に置いた。

そんな位置関係下での危うい状況の下、植民地フィリピンを取り戻すために、いち早く、米国は各所で反撃を開始していた。

この時期、首都マニラのあるフィリピン・ルソン島を初め、ルソン島に列なる多くの島々、ミンダナオ島、レイテ島、コレヒドール島、セブ島など、多島海国家の周辺の小島の多くは、米軍により奪還されており、首都マニラが存するルソン島は、「焦眉急な決戦の場」になるのは必至の状況となっていた。

また、この時期、米軍の武力支援によって抗日ゲリラ隊も各地で蜂起しており、民族戦争の色合いも帯び始めていたので、なお一層に、戦いは困難の度を増していた。

サンホセの街も、いつまでも、治安が保てる保障はなかった。

不安を抱いての在留邦人たちの逗留だった。

ひとまずの落ち着き先ではあったのが、それでも、逃れて来た者たちにとっては、この街は、今のところは、「安住の地」ではあった。

4

昭和二十年の年が明け、各部隊の体制が一応整った。待機組通信班も大隊通信隊長を迎えて、実戦任務に就くことになり、サンホセから北方六十キロの険峻な山々が阻むバレテ峠への転進を命じられ、配置に就いた。

そんな或る日の夜、入江分隊の通信員は、やっと、自分たちで掘った壕の中で顔を合わせた。彼らの分隊の者だけしか入れない小さな壕の中なのだが、シャベルもスコップもないので、鉄かぶとの端を使い掘った。

二メートルほどの横穴を掘るのに一週間を要した。

丁度、ルソンの地は雨期に入りかけていて、壕の中は蒸し暑かった。じっとしても、肌に汗が滲み、軍衣も汗にまみれた。

暗い壕の中なのでみんなの顔は見えない。

それでも、ひとまずの自分たちの居場所が完成し、みんなが顔を合わせられたことで、この場には和やかさがあつた。

「トン、ツーも、未だ発信せずだがや。われ、未だ、戦わずじゃけん。毎日、壕掘りばかりじゃけえ、鍛えた腕がこれじゃ鈍るがや」

これは村中上等兵の言だった。

「各大隊は、この辺りの山々に散開布陣しての決戦体制に入った。わが通信班も、早々に、大隊司令部、または、大隊付け実戦部隊配置への発令が出るだろう。ここまで来たら、肝を据えて掛からないとな。命が幾つあつても足りんぞ。トンツーも、命あつての物種だ。自分らの隊のために、トトト ツーツー ツー トトトだけは、打つことがないようお願いしたいものだ」

入江班長が口にしたのはSOSの符牒で、「・・・」  
——・・・」の三短点、三長点、三短点の繰り返し符号のことであつた。

「みんな怖いんだがや。口にこそしとらんが、爆弾の音が怖うないものなんておらんぞお。どこぞにいつ落ちるかも分からんがや。それが今なんか、明日なんか。自分

の足元なんか。かんべんしてごーさんじゃ」

と、入江班長に向かい、村中が真面目顔になって告げた。直ぐに、入江班長が応じた。

「かなわんなは、島根弁だと、かんべんしてごーさんになるのか。こっちの方が、本当に参っているのが、よく分かるな」

入江班長が相槌を打ち、感心して見せた。

ひとときの笑いの時間に入江分隊の者たちは和んだ気分になった。それでも、閉塞感のある壕の中、みんな息苦しい夜を過ごした。

これからの毎日、緊迫の日々となつて行く。

誰しも心境は同じ、こんな山奥の人知れぬ未開の地に投入されたという思いは強かった。

一月中旬までに、各部隊はバレテ峠、サクラサク峠の陣地構築を了え、臨戦態勢を整えた。人をも通さぬ密林山岳地帯、幾多の困難が待ち受けていた。天然の要塞でもあつたが、その分、人間の住む環境には適していない。

地下壕によって交通し、連絡し得る個人用散兵杭、掩蔽部(えんぺいぶ)のある火点、洞窟内の各施設が手掘り

作業で整えられた。通称日本名で、後方基地の金剛山に大隊本部司令部は置かれることになった。

他にも、天王山、朝日山、四王山、六甲山など、作戦上の判断で一帯の山々は日本名で呼ばれた。

入江通信班も、この金剛山基地に配置された。

幾つもの山と谷を越えた奥地で、鬱蒼とした天をも塞ぐ樹葉林に囲まれた地帯だった。

その分、安全地帯のはずだったが、すでに、前方基地のバレテ峠入り口になる地帯の山々に散開する部隊は交戦状態にあり、連日、敵味方交戦の爆裂音が響き渡った。

当初は、日本軍の戦車隊が、近接戦で応戦にこれ務めていたのであった。

大隊本部通信室には幾つかの区切りのある横長の洞窟が当てられていた。五班の通信兵が詰めていたが、通信業務をこなしている兵たちは悪条件下でも整然と軍務を果たしていた。「トン、トン、ツー」の交信音が飛び交う。

同時に、有線班は電話線の敷設のために、山地の谷や、樹林などの目立たぬ場所に、被覆線を張り巡らせる作業に追われていたが、すでに、この時点で抗日テロ部隊の格好の目標となり、作業中に襲撃されて戦死する者の数



が増えた。ここはもはや戦地であった。

急を告げる交信ばかりが無線通信では行き交った。

風雲急を告げる戦局となっていた。

「一月五日、リングアエン湾ニ向け米軍上陸部隊数百隻ガ北上中」「二月九日米軍リングアエン湾上陸開始」「米軍七万名ヲ揚陸、橋頭堡確保セリ」「米軍前衛部隊ハ早クモ南マニラニ向ケテ進撃中」「サンホセニ米軍戦車部隊突入」など、いずれも、相継いで、圧倒的な米軍の軍力を誇るものばかりが交信内容となった。

米軍の哨戒機が空を飛び、日本軍部隊の動向が伝えられていたが、手出しは出来なかった。

空の敵機に向けて銃を放ち、応戦体制を取ると、たちまちの内に、迫撃砲が撃ち込まれ、双胴の爆撃機B51が飛来して、まるで、蜂の巣を退治するように、徹底的に、その陣地を破壊し尽くした。

当然のことながら、交信電波を発信する本部の無線通信壕や、各大・中隊の通信壕などは交信電波が傍受されて、狙い打ちにされる傾向にあり、すでに、金剛山を越えた山々に布陣する最前線地の大隊の通信室の一つは、早々に直撃弾を受けて壊滅、交信不能の状況に追い込ま

れていた。SOS信号も発しないままの部隊消滅で、狙い打ちにされた可能性大であった。

何より、食糧の逼迫は日増しに過酷さを増しており、司令本部付きで恵まれているはずの入江通信班の兵士でも、粃柄のままの米が各部隊に配られる程度であった。

これとて、煙を出すことは敵に拠点を知られることになるので、炊飯禁止、兵士たちは粃殻をそのままに口に入れて噛み砕いた。

、自給戦、のための、食糧調達員を通信隊からも出さざるを得ず、「トン、ツー」の技能を習得した意義も日々失われつつあった。

通信部隊の食糧班が互いに持ち寄るものは、草っ葉だけ、食糧不足は深刻さを増していた。

そんな或る日、実戦部隊から派遣された伝令兵が司令本部に、急ぎやって来て戦況報告をした。

緊迫した戦線の過酷な状況が手に取るように、居合わせた入江通信分隊の兵士たちは知ることになった。

すでに、敵陣地に向けて夜間の斬り込み隊が出動している、その多くの部隊が消滅させられ、また、彼ら通信班が一時駐留したサンホセの周辺も、すでに、米軍の戦

車部隊が侵攻した後、最前線基地を構築完成しており、日本軍部隊はサンホセからの後退を余儀なくされていた。「えらいことやな。山一つ越えたら、もう、トーチカごと吹き飛ばされてしまうんや」

「しゆるしゆるつで一発じゃい。山一つと言うとるが、敵さんには、あっちの山もこっちの山もおんなじことじやーね」

菊池に答えるように、村中が小声でしゃべった。

実際に、“SOS”を発信したままに消息を絶った部隊も続出しており、通信室ではその悲報が直ぐに知れた。

ここは大隊司令本部なので、ひとまずは、安全地帯だったが、刻々に迫って来る敵の攻撃に、包囲の陣が狭められて行くのが手に取るように分かった。

## 6

そんな折り、通信業務に異常状態が発生した。二月頃からは、この山地は雨期に入るので、作戦本部、大隊、中隊などを繋ぐ通信器設備の故障が相継いでいた。

当時としては、性能の優れた精密器械であったが、通

信機器は湿気に弱いという欠点があり、その欠点がモロに出た。送受信状態が極度に悪くなった。

この事変の始まりは、入江通信班にも及ぶことになった。单身、入江軍曹が補修班に転入されることになり、村中、石丸、菊池の通信兵たちは、入江班を解かれ、別の通信班に編入されることになった。

「機械いじりが出来る奴が狩り出される。そういうことだ。本来は通信隊に属している機械に強い機関兵の任務だが、大量の兵員の動員で機関兵不足となっている。お前たちとは別行動となり残念だが、これも止むを得ん。補だが、みんなとはもう会えないというわけじゃない。補修班は各通信隊のご用聞きのようなものだから、お前たちの所属する通信部隊にも、顔を出すことはあると思う。それにな。一つ、いいことを教えておこう。兵站本部に補給用の通信機器の多くは保管してあるから、そこが補修班の連絡本部となる。知っての通り、兵站庫には、食糧なんぞもまだあると聞いている。あくまで噂だから分らんが、将官用には応分の食糧は隠匿されているって話もありだ。おれがみんなと再会する時は、こっそり食糧もかすめて来るさ。役得の術を發揮しないと。みんな

な、約束は出来んが楽しみにしてろ」

「はっ、通信機器の故障の度に、食い物付きとは発信しませんが、腹が減ったらSOSを発信させてもらいます」

村中上等兵が冗句の意味合いも交えて、そう答えたが、声は低かった。他の兵たちの落胆度も大きく、冗句に応ずる余裕もなかった。

「この戦場、食うことの方がよっぽど大事だからな。食い物あつての、そうだ。食い物あつての物種だ。かんべんしてごーさい。いや、かなわんなか。どっちにしても、そんな程度の話じゃない。この通信隊のことは、わたしにとってはこれから気掛かりだよ。なるだけ、諸君らの力にはなる。そのつもりだ」

この後、入江軍曹は班長なりの心遣いをみせた。これまで司令本部にいた部隊なので、他の戦線部隊に比べれば、佐官級の将官も詰めていることから、多少の食糧の備蓄はあった。どのような人脈で入手したかは分からなかったが、一言、言い置いてから、入江軍曹は小さな紙包みを村中上等兵に手渡した。

「この戦場でいちばん不足するのは。塩分らしい。この山の中だからな。司令部ではそのようなことは承知で、

兵站本部から多量の梅干しを補給させて持っているようだ。三人で分けて各々で所持せよ。絶対に役に立つ時が来ると思う。もはや、兵士たちの手には入らない品だ。

司令本部だけが大事に保存しているところが、この品が貴重だということを如実に物語っているってわけだよ」

手渡された紙包みの中身は、軍隊では「ミイラ梅干し」の名が付されている乾燥梅干であった。うまい名を付けたもので、文字通りのミイラ状態、むしろかちかちで、ミイラを越えた保存食状態、一袋に十二個入っていた。

兵士たちには、少量の塩が支給されていたが、それも、絶対量は不足していた。この、人の踏み込まぬ山岳地帯への、無慮、数十万人の兵隊の投入、これからの「餓死戦線」の到来はすでに予測されていたことであった。

「なあ、菊池、お前は関東大震災の最中を赤ん坊で過ごした稀有の体験の持ち主、おれたち被災家族も、梅干し入りの握り飯で救われた。一個の梅干しがあれば、舐め舐めしながらでも一週間、何とか人間の体は持つとも言われている。酸っぱい唾液が出るのも体にいい。梅干は解熱効果もあり、下痢止め、傷口の消毒液にもなるからな。昔からの妙薬だよ。梅干し一つと侮ってはいかん。

昔の人はいいことを言っている。梅干しのことを、お陰さま、と呼んで珍重して来た。干して、漬けて、夜露に当てて、じっくり梅酢に漬けて、また、干してだ。万病の薬だから、お陰さまだ。この戦場、薬もないに等しい。みんな、他の奴には見つからんように、雑囊の奥にしまっておくといい」

「はっ、自分も母親から同じようなことを聞いたことがあります。貧乏をして飲まず食わず、その時、命を救ってくれたのは梅干しだったと、わたしの母親は申ししておりました」

「そうか。菊池のお母さんも苦勞をしたんだな。親孝行するためにも生きて内地に帰れよ。もちろん、村中も石丸もだ。この戦場で大きな声では言えないが、不利な戦いにあるのは事実のようだ。通信文でも、みんなも知っているように、米軍の迅速、果敢な進攻の様がみて取れる。これからの戦線、なお、過酷なものになるだろう。ともかく、今回はわたしは編成替えとなったが、諸君のことは、遠くからでも見守っているつもりだ」

そう言い置き、分隊のことを心に掛けながら、即日の移動となり、入江軍曹は司令部本部を離れて行った。

運命の別れ道、そんな予感をさせられるひとまずの別れだった。

7

その翌日、二月二日、入江通信分隊は連隊本部のある後方基地、日本名金剛山から、前線基地、妙高山に陣取る中隊司令部への転進命令を受けた。

死地に赴くにも等しかった。

本部付きだと、佐官級の将官も居ることから、一応、食糧、医薬品も揃えられており、軍医も常在していたが、最前線部隊に配置、または、常備されているのは、衛生班の兵と多少の医薬品だけで、それとて、末端の兵が恩恵に浴せるわけではなかった。

「いよいよ、トトト ツーツーツー トトト」か。何もかもが、トトト ツーツーツー トトト「じゃ」

このSOS符号を口にしたのは、村中上等兵だった。通信兵たちは移動用通信機器を肩にしていた。

深い谷越えの後、山を二つ越えた南側の前線基地妙高山の第三中隊に彼らは合流した。



本部司令部と第一線の中隊との交信の軍務を担うことになったが、到着してみると、すでに、この地は戦場そのものに化しており、塹壕に作られた他通信班の通信隊員が二名、迫撃砲の直撃を受けて戦死を遂げていた。彼らの一行はその補充員でもあった。

日本軍側の戦闘を示す交信は、二月に入ると、さらに、戦線の焦眉を決するような不利な内容が打ち交わされた。大要が作戦失敗を告げるものとなった。

「各隊ハ寸暇ヲ惜シミ全員ニ対シテ勇猛果敢ナル斬り込ミ隊ノ訓練ヲ励行スルコト要ス」が発信されて来た。やがてのこと、これらは実行に移された。

しかし、その作戦も無為となつて行く。

「夜間、斬り込ミ戦法デ戦ツタガ大勢ハ動カズ。〇〇部隊分断包围サル」「米軍M6戦車部隊、装甲機団〇〇方面ニ多数集結進攻中ナリ」と、いずれも敗北の戦闘状況を伝えるものばかりとなった。戦死者の数が増えた。

連日の雨もまた大敵となった。

雨期特有の気候とは言え、みんな初めての経験で体力的にも消耗した。蒸せる暑さに汗だくになるのだが、この汗の滴(しずく)とて通信器には大敵な上に、滝のよう

に豪雨が降ったりで、通信施設の置かれている横壕では水の浸入を防ぐための要員も必要とした。

中隊通信班では彼ら三名はよそ者同然なので、もっぱら、入り口防御対策班、水掻き班にされてしまった。

「こりゃ、補修班に食い物付きでSOSじゃ」

と、村中上等兵が愚痴をこぼすのも無理はなかった。

食べ物も、補給はなく、自給自足<sup>3</sup>で、中隊にも急造の食糧班が編成されていたが、雨の中、集められる物にも限度があった。

こんな天候の中でも、朝から夕刻まで、間断なく、米軍の猛爆は続いた。凶<sup>4</sup>ったように、夕刻五時になると、ぴたっと攻撃が止んだ。

まるで、会社勤めをしているような正確さであった。

やっと、一時休止の時間、彼らは退避壕の片隅を与えられて、肩を寄せ合っていた。背を丸めなければ入ってられない低い壕で、壕の中では不寝番を解かれた何人かの兵士たちが、いびきを立てて深い眠りに落ちていた。

「おい、命の洗濯じゃーね。菊池も、もう、だいぶ慣れたようじゃが、あの爆裂音、生きている心地がせん。今日もみんなやつと無事い。あいつらも、夜の休みに入り

よった」

「ほんま、心臓がいくつあっても足りんわ。この頃は、ぱくぱく来たら、あっちの心臓、こっちの心臓、もう一つの別の心臓ちゆう具合に、ぱくぱくさせて持ち堪えとるのや」

と、菊池が村中の気遣いに答えた。

「ほんまにかなわんな。じゃろ。わしや、虫の息だがや。弾が飛んで来よる時は、虫みたいに小さくなつてかがむんじゃ。どの虫も防御本能があるからろう。菊池、虫になるがええがじゃ。虫になれ。保護色になって身を守る虫もおるが、死んだふりをするもおるがじゃ。虫は虫で、生きるのに一生懸命じゃ」

もつともな説を、昆虫少年、石丸が披露した。暗いのでみんなの顔は確かめられないが、全員が細面だったので、頬がこけて落ちた分、小さな顔になっていた。

目ばかりがぎよろりと光っている。

小声で、菊池が会話を続けた。

「そつか。虫か。なんの虫になつたらかいな。なあ、石丸、生き残れる虫や。這つてでも、わしや、内地に帰らんとお」と、菊池が言葉を重ねた。

「そうじゃ。みんなそうじゃ。菊池は家では父親代わり、小さい弟妹がおる身じゃからな」

「そうや。まだ、母親孝行もしとらんしい」

「蓑虫（みのむし）になるとええがじゃねえ。あれや、二重三重、蓑を作つて自分で身を守りい、一冬越すがや。春になったらお目覚めじゃけん。知らんぷりして寝ちよらいね。眠り虫がええがじゃ。知らんぷりしちーおけん」

「そがんこと言うても今は無理がじゃがな。まあ、おれは虫になれるんじやったら、蜻蛉がええがや。羽があるだけん、この地から離れてすいすいと空を飛べるがじゃ。そうじゃが、こりや、部隊離脱う？そげだが？」

「敵前逃亡じゃ。ここから出られんちゃ？あんなあ、枯れ枝や、枯れ葉になつて敵の目をくらます昆虫もあるでないでえ。クツワムシとか、蛾の幼虫とか。そうじゃ。ムシクソハムシなんて、クソそのもんに擬態して見せる虫もおるがでや。それに、コメツキムシとか、コガネムシとかは、死んだ真似もしとるう。あいつらなんでもありだがね」

昆虫のことになると夢中の石丸が饒舌になった。

やつと、昆虫少年に戻つた。

「ここではじつとしていたら、みんなやられてまうでえ。飛び立つのがいちばんやな。ほなら、伝書鳩になったらええんとちやうか。こないに通信器、調子悪いんやから、同じ通信班、危急を知らせる時は、伝書鳩になるんやったら許されると思うんやけんどもな」

「そうやったら、菊池が伝書鳩になってじゃ。自分はその辺の葉っぱに変身してえ、伝書鳩の口に啜えてもろうがや。そいでえ、ここをみんなが無事に脱出するんがええがじゃ」

と、村中が言い、石丸がそれに答えた。

「おいはな。伝書鳩にたかるダニじゃ」

「おい、ダニか。なんだだ。おめー、おいの血まですする気かや」

島根弁同士の二人がやりとりをした。

その思い付きが面白くて、回りに遠慮しながら、みんなは小さく笑った。

「やっぱり、糞虫だねか。あれはな。幼虫の時に回りに色つきの糸くずや、色紙を刻んで入れておくと、その色の糞を作るだっちゃ。おれもあんなきれいなべべ着てみたいと思うたことはあるだっちゃねえ。へへ」

二人に答え、石丸が照れ笑いをしてみせた。

8

戦局は短期間の内に激変しつつあった。

守勢一方の日本軍に対して、米軍は物量にもものいわず、一気にバレット峠一帯の山々を打ち砕いた。

幾つかの山々は禿山になり、大量に投下された黄燐弾がいつまでも燃え続けて、各所に有毒ガスを発生させた。

この有毒ガスを吸い込むと肺の機能が侵され、かつ、皮膚、筋肉、骨までも侵食されるので、戦わずして敵を制することが可能となった。いわゆる、卑劣の意味が込められた、「汚い爆弾」の一種だった。

次に、高い山や深い谷の形を変えてしまうほどに、空から陸地から、連日、限りなく大量の迫撃弾、榴弾、空からの爆撃弾などが降り注がれ、すべてのものを破壊し尽くした。

これらの戦略を称して、「鉄量作戦」とも呼ばれた。

いずれも圧倒的な米軍の軍事力を誇るもので、国力の差が歴然と示された。

太平洋戦争では、いちばんの激戦地のルソン島北部戦線だが、その実は、戦わずして兵士たちは敗残兵となつて行つたのであつた。

日一日と、「餓死戦線」と称されたその実態が明らかになつて行く。「自戦自活令」を發した司令部の指令、思惑だが、この秘境の山岳地帯は千古斧鉞(せんこふえつ)、地形を成した昔から、人間どもの住むことを拒否して来た地である事実を彼らは知ることにはなかつた。

陸、海、空軍の最高統帥機関である「大本營」の、一國の運命を負つたキラ星肩章の参謀たちが、地図の上だけで練つた作戦には、当初から救いなどはなく、この地で多くの將兵が無為の死を遂げることになつた。

峻険の峰々、千仞(せんじん)の谷合い、人をも通さぬ未踏の道が、守りの要塞となると信じた愚劣さも、ここでは、不幸にも、「明々白々の事実」として示されることになる。

村中、石丸、菊池の三人の通信兵たちも、過酷な山中で過ごしていた。食糧事情がさらに逼迫(ひっぱく)したものととなつていた。

三月の時点で、すでに、敗残兵そのものの姿の兵員たちが、バレテ峠を越えた山中に多く集結するようになった。本隊から離脱した部隊の兵員たちで、マニラ死守の任に就いていたが、早々に壊滅的打撃を受けて、やっと、ここまで逃げ伸びて来た空軍兵、海軍兵たちなどであった。すでに、分隊、小隊単位で、全滅に近い被害を受け、部隊そのものが消滅したゆえに、原隊追求命令が適わず、山中をさまよっているだけの各歩兵部隊の「生き残り兵」たちも、一部、この敗残兵の群れには含まれていた。

文字通りの「自戦自活」を、彼ら兵士たちは、日々、強いられていたのだった。

もちろん、兵員の群れるところには、容赦のない敵機の掃射攻撃、爆弾投下、敵陣基地からの迫撃弾も打ち込まれ、すでに、米軍戦車部隊も各地に進出、それに加えて、活発化した抗日ゲリラ部隊による拠点攻撃もあり、一方的に、日本軍は劣勢に立たされていた。

この山中で、兵員の数が増えた分、食糧らしき物は、草の根であろうと、食い尽くされつつあった。

だが、元々は、峰を連ねる峻険の山々も、半分は岩壁ばかりの、木さえ生えぬ地形の山だから、草の根とて、



そうは容易に手に入るといってもなかつた。

ましてや、異国の厳しい風土にも立ち向かわなければならず、飢餓による栄養失調に加えて、マラリア、アメーバー赤痢、熱帯性潰瘍、風土病のデング熱なども、容赦なく敗残兵たちの身には振り掛かった。

もはや、地獄絵図の様を呈していた。

「山を降りると死ぬことになるぞ」というのが、此処、妙高山に陣取る歩兵中隊本部の兵たちの口癖だった。

歩兵部隊からは、戦果を挙げるために、連日、「斬り込み部隊」が出されていた。山を降り、谷を下った兵たちのほとんどは、一度と原隊に戻ることはなく、「山を降りると死ぬ」ことが実証されていた。

部隊の兵士も山中に籠もって三ヶ月、軍服も汚れてぼろぼろ、その上に、縫い目には虱(シラミ)がびっしりと棲みついでいて、兵士たちは虱退治にも精を出さねばならなかつた。

通信隊は後方部隊ではあるが、ここは実戦部隊の指令本部なのだから、生々しい報告が後方部隊の兵たちの耳にも入っていた。

「山を降りたら…」は、「山を降りることになるであろう」

という、自分たちの運命を気遣う者たちの恐れの気持ち  
が込められていた。

元入江通信分隊の村中、石丸、菊池たちは、中隊所属  
の通信兵ではあったが、送受信、暗号解読の腕を揮うこ  
となく、中隊通信室に備えられた無線通信器の手回し発  
電機の輪把(ハンドル)を回す役に就かされた。

本来は、機関兵が発電作業の役目を負うのだが、兵員  
不足な上に、馴染みのない部隊に編入されているので、  
主任務からは外されていた。

送受信の電信文で、彼らは戦況をつぶさに知る立場に  
あったが、もはや、何度も、前線部隊から、「トトト  
ト  
ト  
ト」のSOSの最後通牒文を傍受して  
いた。

また、「斬り込み部隊による敵への攻撃」の命令発信の  
回数が頻繁になっている事実も、余すことなく、彼ら通  
信兵たちは知った。

最後の発信を行った通信手の悲痛の思いが伝わって来  
た。彼ら通信兵も心を痛めた。

唯一の救いは、中隊司令部の固定通信室に身を置いて  
いたことで、食糧、薬品などの便宜供与の恩恵に多少は

預かることが出来たということだった。

三人ともに、マラリアには罹ったが、特効薬キニーネの服用で重度の症状になるのは免れた。

つまりは、将官用の特効薬、歩兵などの兵士たちには、この特効薬は行き渡ることはなかったが、通信部隊員は「特務要員」なので、人員を補充するのが難しいの判断があつての、これは、「特別待遇」だと言えた。

入江軍曹から授けられた「ミイラ梅干し」も役に立っていた。下痢症状に襲われた時に限り、三人は申し合わせて、この貴重品を口にした。塩分補給になる上に、腸内の消毒作用、整腸剤としての効用ありと思われた。

三月十七日、彼らにとっての嬉しい情報が寄せられた。通信機器の不良、不調により、機器交換などの修理が必要となり、入江軍曹らの率いる特設通信補修班が、妙高山の中隊司令部に派遣されて来る報が入った。

「おい、入江軍曹と再会出来るぞ。明日の午後六時、補修班の方は地理不案内だから、当方から冥加谷に迎えに行き、補修班と合流することになった。有賀通信隊長からの命令を今受けて来た。入江軍曹と顔見知りの者一名

が同行することになった。中隊から派遣の警護分隊、古澤伍長以下七名の兵員に、村中も随任せよとの命令だ。有賀通信隊長のこれは特別の配慮、やはり、通信隊同士、われわれは冷遇されているかと思っていたが、これで、少しは、隊長殿を見直したよ」

司令部の横穴壕から戻って来た村中上等兵が、軍隊口調で他の二人に伝えた。

うつすらとした闇、まだこの時間、日は暮れていなかった。当番の不寝番を解かれて、壕内で一眠りする前の時間のこと、全員が顔を綻ばせた。

「おお、眠気が吹っ飛ぶわ。全員で入江軍曹の顔を見るのは残念やけど、村中上等兵、よろしゅう伝えておいてんか。この連日の猛爆撃で、泣き虫男、菊池の泪も、もう枯れ果てて、泪も出えへんようになつとるう。そやから泪は出ん。もう大丈夫やとな。それにい。食べた後の梅干しの種をや、飴ん玉のように、口の中に入れてしゃぶっていると、そないな時は、えらい気が落ち着くんや。効用ありやな」

「天地がひっくり返ってしもうて、虫もびっくりして逃げ出したままじゃけに。虱に居付かれちよるだけでは、

おいも、淋しいけに、泣き虫でも一匹ぐらい仲のいい虫がいたほうがええ。泣き虫のまんまでええがじゃ」「そやな。虫には涙腺はないんやろ。泪が出るんちゅうんは、まだ、人間、生きてる証拠なんやからな」と、菊池が石丸に答えた。

「泣き虫に、弱虫の取り合わせじゃ。石丸の話も入江軍曹には伝えておくがや。菊池と石丸は虫が合う同士、えらい仲がええとな」

村中が二人の話を分けて入った。

しばらくの間、三人の話は弾んだ。こんなに打ち解けて話をするのは、久し振りのことであつた。

自分の時間を持つ余裕もない日々であつた。

「そやけど、冥加谷ちゅう名は、なんやご利益があるつて名やんか。冥加てえ、仏さんからご利益をもらうて意味やからな」

「そうじゃ、命の綱、ミイラ梅干も、残り少のうなつたしな。喰いモンをもらうのんがいちばんええな。おらたちあ、そないなことも期待しとるわけや」

と、村中も同意した。

「ええ虫の知らせじゃ。入江軍曹はわしらにとって

父親のようなもの。あのな。蓑虫は「ち、ち、ちち」って鳴くってことになつとるう。いつも父親を呼んでおるんだそうじゃ。入江軍曹はわしらにとつては父親みたいなものじゃけにい」

「はは、うまいこと言いよるな。石丸はなかかええことを言う。そつか。蓑虫は「ち、ち、ちち」って鳴くんか」と、こちらは関西弁。

「ほんまは、蓑虫は鳴かんがえ。秋も深まると鳴く、カネタタキの鳴き声であーました。そうじゃが、蓑虫になる前じゃ、蓑虫の食欲は旺盛じゃけえ、蓑も作れるがじや。おいらあ、こないに食う物ないんでは、あげな蓑虫にもなれん。自分の身も守れんがや」

「はがいーが、そげだわね」

村中が島根弁で、はがゆい思いを伝え、相槌を打った。菊池も思いを込めて頷く。

やっと一日の終わり、彼らは狭い壕に入っていた。ごつごつした岩床に座り、支給されたモミ殻をそのままにみんなは口に運んだ。炊飯のために火を勃こすことは、敵の目標になるので禁じられており、このような味気のない食事となった。糲は不消化物、多くは腸内に止まる

ので、兵士たちはひどい便秘症状に悩まされていた。

腹痛を訴える者もいたが、マラリア罹患者でも、重度でない限り軍務に狩り立てられる始末で、もはや、兵士たちは人間扱いはされていず、少々の体調不良は不問、ここでも、兵隊は消耗品の一銭五厘扱いが罷り通り、すでに、戦病死者の数も増えつつあった。

むっとする暑さで、直ぐには、みんなは寝つけなかったが、村中がみんなを促した。

「みんな、いい夢を見て、今夜はぐっすり寝るがええ。それしか体を持たせる法はないがや。死なぬようにじゃ。ちゃんと目は覚まさんといかんがじゃが、明日は明日の風が吹くぞね。ちょい、いい風が吹くかも知れんがや」

9

翌日、夕刻を見計らって、歩兵分隊の兵と共に、村中上等兵は妙高山を下った。

石丸、菊池の二人が村中を送った。

任務とは言え、「山を降りる」には危険が伴うことになる。目的地の冥加谷に着くには、幾曲がりもの谷の道を通

通らねばならなかった。ちよろちよろとした水の流れが谷間を縫う。けもの道を歩くより、川筋の道の方が踏破し易かったが、その分、ゲリラ兵に遭遇する危険性があり、警護部隊は遠回りの道を選んだのだった。

水のあるところに人が集まるのは常で、その途次、村中は生き地獄の一端を、目の辺りにすることになった。

多くの死体が遺棄されたままになっていた。

原隊を追求して来た兵たちなのか、すでに、白骨化した兵たちの死体が、それらの川筋には何体も放置されていた。水を求めてここまで辿り着いた者たちの哀れな死に様を、村中は目にするようになった。

連日、中隊本部からも、遺体搜索、収容、埋葬のための兵員が出されていたが、その余裕も、もはや、無くなりつつあったのだ。

「この辺からはゲリラ部隊の待ち伏せ攻撃あり。みんな用心するように。むやみに音は立てるな。ここは見通しが悪いが、この地点を越えれば視界は開ける。その直ぐ先の谷を下ると冥加谷となる。もう少しだ」

古澤伍長が全員に命じた。背は低いが、がっちりした肩幅で、頼もしく写った。村中上等兵も三八銃は持たさ



れていたものの、これまでに実戦体験はないので、敵が現れたとしても、実戦の役には立ちそうにもなかった。

この時、冥加谷と思(おぼ)しき向かい側の地で、突然、銃声が響いた。しんとした空気がつん裂かれた。「伏せ！」と、古澤伍長が命じ、全員が草地に伏せた。

機銃音が続いた。

「これはまずい。合流するはずの友軍部隊が待ち伏せを食ったのかも知れん。先を急ごう」

まず、近くに着弾がないのを確かめてから、古澤伍長が立ち上がった。先着部隊の動向を気遣った。

全員が小さな丘地を駆け上がった。

草地の丘で、再び、匍匐の姿勢をとった。

「よし、右手前方の草むらだ。敵の機銃が火を噴いている。あれを止めよ」

言う間もなく、古澤伍長の手にした軽機関銃が的確に目標地点の草地を抉った。

歩兵たちの銃射がそれに続いた。

その時、冥加谷の地点からも、友軍のものとは分かる何発かの応射の弾音が発せられた。

「よし！ゲリラ隊なら直ぐに逃げ出すはずだ。多勢に無

勢、あいつら、逃げ足も早い」

と、古澤伍長が告げた通り、間もなく機銃音が止んだ。ゲリラ隊は少人数なので、状況不利と読めば直ぐに撤退するのが常だった。

「冥利谷に急げ。ここを駆け下りて、右手の谷合いが待ち合わせ地点となる。全員の無事を祈ろう。後方の二名はわれわれを援護する態勢を取り、進め。ゲリラ隊の現在の動きに注意、他の者は目的地向けて前進せよ」

数刻後、兵站本部から派遣された部隊と彼らは出会うことが出来た。八名の友軍部隊が待ち受けていた。

全員に負傷などはなく、散発戦であったことで古澤分隊のみんなは安心したが、入江軍曹の姿はその中にはなかった。その間の事情を友軍下士官が説明した。

「部隊を率いて来た刈田軍曹であります。命令により、入江軍曹は後方司令部基地に転進、兵站本部も爆撃機の目標になるので移動中、未使用の短信用通信機器、並びに、在庫備品のみ持参しました。膂力(りよりよく)運搬しかないので、ご苦勞であります。妙高山までの搬送をよろしく願います。なお、入江軍曹からは村中上等兵宛ての手紙と、この包みを渡すように指示されており

ますので、お渡ししておきます。受け取って下さい」

名指しされたので村中上等兵は手紙と小さな包みを受け取った。大事に雑嚢に収めた。

通信機器備品と言っても一式、発電装置なども備わっているので、随行部隊の兵たちは帰り道は重い荷を負わされることになったが、そこは何でも隠し持っている兵站部<sup>①</sup>の噂通り、乾パンが一袋ずつ、荻田軍曹から、これから警力(りよりよく)搬送をする全員に支給された。

「斬り込み隊」に出る兵以外は、中隊本部でも、もはや、乾パンの支給はなかった。

夕食時、みんな腹へこであった。

友軍部隊と、この冥加谷で袂を分かった後、待ち切れず、みんなが一斉に乾パンに食い付いた。もちろん、村中上等兵もその内の一人であった。いや、夢中で全員が素早く呑み込んだというのが当たっていた。

あたりは、急に暗くなって来た。

日が暮れ出すと密林地帯のことゆえ、一切、明かりもないから、たちまちの内に、とつぽりと深い森は闇に閉ざされてしまう。

元来た道ではあったが、やはり、難航を極めた。元々

が道などはない道、それでも歩兵部隊の兵たちは重荷を肩に登りの道を黙々と歩いて登った。

喘ぎ喘ぎ、彼らは中隊本部を目指した。

真つ暗闇の時刻ともなれば、米軍も攻撃の手を休める。谷地も多いから、あとは足元に気をつけることだった。苦行が続いた。

乾パンの効果のゆえか、この帰り道、困難な道なのに、誰も文句一つ言わなかった。

『みんな元気でやってくれ。命を賭した戦いの毎日だが有為に事を成して欲しい。

今回は諸君と会えるのを楽しみにしていたのに残念だ。又、会う事が屹度(きつと)あるだろう。

南国の地は広いが吾部隊は諸君と行動を共にしている。再会出来る機会があることを願いたい。通信隊の軍務に誇りを持って臨むよう。敢えて記す事もないと思うが、通信兵操典にある通り、通信兵の本領は戦役の全期に亘(わたり)指揮統帥の脈絡を成形して、戦闘力統合の骨格となることだ。通信兵は相互の意志を疎通して、特有の技術に成熟し、かつ、周密にして機敏、耐忍にして沈着、

進んで任務の遂行をしてもらいたい。

何よりも、それには生き抜く事が肝要なのは言うまでもない。村中、石丸、菊池、相互の意志を尊重し、お互いがお互いを助け合い、この難局を切り拓いてくれるよう入江も強く願っている。みんな元気でまた会おう』

入江軍曹が電信書に刻むように記した一文に、村中、石丸、菊池の三人は目頭がじーんと熱くなった。共に暮らした兵たちを思う心の内が、みんなには伝わって来た。

「この電文だけじゃないがや。ちゃんと、ミイラ梅干し。までみんなのために入江軍曹は都合してごしなつたけん、ありがたいことじゃ。さあ、三袋あるがいに、各々がみんな一袋ずつ所有することにするがあ。これは塩分補給用の元氣非常食、それに、特效薬だがや。ミイラ梅干し。のお陰さまで、わしらはまだミイラにならんで済んじよるわい」

言葉通りに、入江軍曹調達の貴重な贈り物の品が、村中から石丸、菊池に分配された。

「中隊本部でも、もう、見かけんようになっているものじゃ。他の奴に見付からんよう大事にせんといかんがや。本意じゃないけんが、こりや、虫下しの特效薬でもある

からのう」

「はは、虫も殺せんに虫下しかい？笑える話やけど、わしらみんな、ほんまに、酷い戦地に送り込まれたもんやな。このお、どないも治まらん腹の虫はどいなことになるんや」

と、これは菊池が石丸の話を茶化した。

「二進(にっち)も三進(さっち)もならんぞい。山を下ったら、もう、語りとうはないぐらいのお、生き地獄じゃつた。斬り込みに行かされた連中も、戦果があつてえ、帰隊することがあつたとしてもお、原隊に戻るんも容易なことじゃないぞね。やっぱり、山は下らんほうがええ、山は下らん方がええぞいね」

村中が二人の顔を見やりながら、改めて、自分が目にした仔細、事柄を口にしてみせた。

三人ともやつれており、さらに、頬がこけて来た。石丸、菊池の掛けた眼鏡も外れそうになっていた。

髪も伸び放題で、それに、体を清めることもないので垢にもまみれていた。異臭が鼻を付いた。

ぼろぼろ軍衣もほつれが目立ち始めていた。

どの兵も同じことだったが、山に籠もつての、自給自

活戦、その実は、浮浪者同然の「遺棄された集団」と化していたのだった。

「そうやけど、いつまでも、このお、剣が峰の山を死守しておるわけにはいかんでえ。弾はのうても、こないに喰いモンがのうては、戦さはでけへん。みんな栄養失調やから、熱がでて、下痢しても、助からん。頼りは、この、ミイラ梅干し、だけやな」

「ほんまに、アリガトさん。なあ、ありがとうをな。島根の言葉で言うちよつと。はい、だんだんになるっちゃね」

「ワイも、はい、だんだんやでえ。これから先、どないなことになるやも知れんから、ワイは、よつぽどのことがない限り、最後の最後まで、みいら梅干しは取つとくう。自分がや。ミイラ取りがミイラにならんようにや」

菊池の決意のほどを聞いて、他の二人も頷いた。

三人とも、雑嚢の奥の奥に、十二個入りのミイラ梅干しを、しっかりと収めた。

殺菌作用があるので、整腸薬、消毒・解毒剤、食中毒予防薬、ともなり、また、栄養剤、塩分含有食品、

でもあり、昔から、『梅干しは命を守るための万病薬』なのであった。

いつ、山を降りるのか、いや、山を追われるのか、作戦に携わらない兵たちでさえ、この戦況の中、自分たちの運命は知っていた。

三つつ、山を越した後方基地からのさらなる転進、多分に、入江軍曹は軍司令部直属の任務に就いたと思われるが、これとて、『転進は後退のこと』で、早々に、司令部は逃げ出したということを実に物語っていた。

この頃、現に、師団司令部や、基幹部隊は、より後方の安全地帯へと移動をし始めており、一連のこれらの動きとは合致していた。

この翌日、妙高山中隊本部、通信隊で、一大異変事が発生することになった。

第三中隊本部付けの通信隊が「通信室」を設けている洞窟壕外の場所で、ゲリラ隊の狙撃兵により、脳天を撃ち抜かれて有賀通信隊長が即死した。

将校を狙ったの狙撃例が各地で続発しており、その実態のほどが中隊本部でも知れることになった。

この事態は予測は出来たことだった。



地理に詳しい、この地の原住民イゴロット族もゲリラ部隊の手足となり、この頃は活動していたので、人跡未踏の奥深い山中とは言え、もはや、丸裸同然、さらに、日本兵たちは辛酸を舐めることになるのであった。

10

この日が何月何日なのかも、多くの兵たちは知らなかった。山一つ、焼き尽くされ、また、次の山が破壊されて灰燼に帰して行く中、各部隊は孤立し消滅して行った。

「止まるも地獄」「逃げるも地獄」の阿鼻叫喚の日々が続いた挙句、四月末日、第三中隊には転進命令が出た。

バレテ峠の死地を離れるの通達で、これは事実上の完全敗北であった。

『中隊通信部隊隊員はこれより転進、自活自戦するものとする』

『次の集結地点は北の地、サンタフェとする』

この通達だけで、元入江通信班の兵たちはバレテ峠脱出を命じられた。

通信班の三人は裸同然で妙高山を追われた。

もはや、「山を降りるも降りない」もなかった。これからは、道なき道を歩み続けるしかなかった。

その一步を彼らは歩み出した。村中が声を掛けた。

「おい、石丸も、菊池も心して掛かるがえ。この山山中、逃げて来た他の部隊の兵隊ばかり。喰いモン争いになるんは目に見えとるがや。弱肉強食、弱いモンが飢えて死ぬるがぁ」

「えらいこつちや。こないなったら梅干しだけが頼りや。一週間に一個で生きるつもり、大事にしよ。十個残ってるから、二カ月ぐらいやったら体は持つかも知れん」

と、改めて、菊池が決意のほどを口にした。

「入江軍曹のお陰じゃけに。命の贈り物じゃ。最後の最後じゃ。梅干しを頼りにするんは。それまでは口にせんがぁ。我慢するつちや」

そう石丸は告げた後、「うひゃ」と奇妙な声を上げた。道々、立ち竦んだ。

他の者も石丸が立ち止まった草むらの方を見た。ぼろぼろの軍衣をまとった白骨体が二つ、身を寄せ合うようにして草むらに転がっていた。それだけではない。

山の斜面、谷地を巡る内に、何体もの白骨体が無惨な

状態で捨てられていた。異臭が鼻をつく。

三人共、目をそむけた。彼らは無言になった。

生き地獄を目の辺りにしていた。

ここ、一ヶ月ほどの間、最前線に配備されていた歩兵の実戦部隊は壊滅状態にあつたので、やっと、この地ま  
で逃げ伸びて来た末の始末であつた。

みんな見捨てられたのだ。

道々、死体を避けて通つていたのだが、半日も歩くと、  
これらの白骨体になった兵たちの行動が手に取るように  
分かつて来た。

小さな川筋に出ると、決まって亡骸の数が増えた。

みんな水を求めて谷地を下って来るのだつた。

もう一つ、恐ろしい現実にも出遭うことになった。

ゲリラ兵の待ち伏せ襲撃であつた。

水呑場では多くの血が流されていたのだ。

敗残兵が列をなして通つた道筋には、空からの掃射も  
加えられたらしく、ここにも、多くの犠牲者の亡骸があ  
つた。草木も薙ぎ倒されて、攻撃の跡が生々しく残され  
ていた。今も、遠い方角からは爆裂音がしていた。

時折りは、双発の偵察機が低空にまで飛来して来て、

敗走兵たちの行方を執拗に追っていた。

物音をキャッチする能力ありとされていたから、どこまで逃げてでも逃げようはない。

結局、奥深い山中へと、敗走兵たちの足は向いていて、それらの地では、食べ物を探めて、草がむしられ、小さな木の根が掘り起こされていた。みんな生き残るために必死であった。これが自活戦の実情なのであった。

「昼も夜もないがや。先に行けたモンが有利なんじゃ。まだ、元気がある内に、一歩でもはようサンタフェへの道を目指すがや」

村中上等兵が通信分隊を統率して、取り敢えず、苦難の道を切り拓きつつ進んだ。

雨期に入っているので道はぬかるんでおり、林の道には霧が降りていて、先が見通せない。

たちまちに夜になった。暗い空、ましてや、大木ばかり生い茂る密林の山の中のこと、踏みしめる道も、目を向ける向こうも、深い闇に閉ざされて、みんなが恐ろしく思った。杖代わりの枯れ枝を拾い、その杖の先で一步先の道を探りながら歩く。

その杖の効用で一步先が急な草地の坂になっているの

を石丸が嗅ぎ当てた。なお、杖で探った。

「滑り降りた方が楽かも知れんがじゃ」

と、石丸がみんなに教えた。村中、菊池も従う気になった。その時、人の気配を後方に感じ取った。

全員、足を止め耳を澄ませた。

その内、「おい、お前ら、どこの部隊か」と、問い掛ける者が後ろに迫って来た。

闇の道なのに目が慣れていのか後ろから追いついて来たのであった。不気味であった。

闇の中、相手の正体は知れない。

様子を窺い、返事をしなかった村中上等兵だが、相手の足音が迫って来た。止まった。

「第三中隊通信部隊、村中上等兵であります」

と、正直に、短い答えを返した。

「へっ、トンツー屋か。第五中隊歩兵部隊五名、おれはさとう曹長だ。何か、食い物を持っていないか、あったら寄越せ」

「何ありません。自活自戦組であります」

「馬鹿野郎！この山の中では、挨拶代わりに何か出すものなんだ。みんな剥ぎ取るとは言わんから、雑嚢を一つ、

そのまま寄越せ。後は見逃してやる」

「と、言われましても…」

「そつちは三名か。さつきから確かめているんだ。殺されたくなかったら黙って寄越せ！」

「雑囊には何も入っておりません」

「何だどつ、なめるんじゃない」

と、二人の押し問答が続いた。多勢に無勢だった。

控えていた他の兵たちが、闇の向こうから口々に、脅迫文句を浴びせ掛けて来た。

この時、菊池が村中の上着の裾を引っ張った。

「逃げるんや」と耳元で囁いた。

こうなると、全員結束、行動は早かった。

あつという間の出来事だった。二メートルほどまでも走ると、谷地だった。全員が草の坂を転げ落ちた。

さらに、立ち上がると、そのままに谷地を走り逃げた。

突然のこと、三人は闇の中に消えていた。

「おらーっ、おめえら、喰い物を持ってるな」

執念の叫び声が、闇中の丘の上の方からしたが、三人の耳には入っていなかった。

さすがに、略奪部隊は後を追い掛けては来なかった。

闇の中、闇が助けを出してくれた。

「追い剥ぎじやね。こうなったら何でもありませんがや。あいつら、ああいうのんが、うようよ、おるがじや。そげだねか」

「あの、さとう曹長なん言うのんも怪しい。さとうの名なんか、いくつもあるし、曹長と言うて脅しておいたら、怖い者なしやからな」

と、菊池が穿った意見を口にした。

「闇の中なら階級章、分かん。上等兵では幅がきかんのう。向こうは智能犯じや」

村中が応じた。安堵した石丸が口を利いた。

「よかったがじや。雑囊盗られたら塩分補給ゼロ、敵に塩を送るところじやったにい」

「そうじや、梅干し、やるわけにはいかんが。通信班の命の源じやい。盗られるなんてえ、入り江軍曹にも申し訳ない。味方も敵、部隊ごと、ああやって行動しとる連中と、小人数の通信班とはえらい差があるのう。上等兵では幅がきかん。これも氣いつけんといかん」

腹を括ったのか、村中が自分の判断を示した。たった一日の逃避行だったが、山を降りたら、そこは生き地獄、

苛烈な日々を過ごしていた敗走兵たちの一団、いまは、野に放たれた「野合の集団」となりつつあったのだ。

11

敵機やゲリラ、米兵の目標になるので、昼間は山中で日を過ごし、食糧探しと就寝時間に費やし、夜になると行動する日常となった。ほぼ、一週間が経過していた。

もっぱらの食糧探しと、道なき道を探つての原隊追及、どちらも、過酷な逃避行だった。

草の根を掘り、ニセ椰子の若木の幹を割いて、通信班の三人は口に入れた。

それとて、余程のことがない限り手には入らない。

この未踏の山地に、夥しい数の敗残兵たちが入り込んでいるので、大抵は喰い荒らされた跡であった。もちろん、道々、部隊から取り残されて、遺棄同然、「水をくれ」「食べ物をくれ」と、ねだる病兵とも多数出合った。

みんながみんな、数刻後、数日後には死を待っただけの者たちであった。体にたかった虱には、血を吸った白い点がなかった。



もはや、栄養分が無く、血の色も失せていたのだ。

いちいち、構ってでは前には進めないで、素知らぬ顔をして通り過ぎることに彼らは慣れたばかりなのに、その内の負傷兵の一人が、縫るような目で彼らの一行を眺めやった後、関心を引く文句で引き止めた。

「一口でいい。死に水でいい。くれ。くれたら、お前らが生き残れる方法を教えてやる」

上等兵の階級章を着けた敗残の兵の一人が語り掛けて来た。村中が足を止めたので、他の二人も立ち止まった。

水を貰う前に、弱々しい声ではあったが男がさらに囁き掛けた。

「お前らも食われるぞ。今は、死んでる奴より生きている奴の方が高く売れる。おい、水をくれ。おれの水筒に水半分だ。この話、もっと教えてやるから」

「食われる？売れる？」

「そんなことより、水だ。水……」

「水ですか？それは……」

村中が相手の男と押し問答をした。

「おい、上等兵、どこかでお前は見掛けた。うん？そうか。おれは第三中隊歩兵部隊、古澤分隊の杉原上等兵、

トントー野郎を迎えに行くんで妙高山を降り、同行した  
ことありだ」

「古澤伍長の分隊？思い出しました」

村中が答え、菊池が応じる気配を見せた。

男の水筒を菊池が手に取った。岩の湧き水を見つけ、  
彼らは水筒に水を満たしたばかりであった。水筒に半分  
ほど水を入れてやり、菊池が男に手渡した。

「ごほつと咽喉音を立て水を飲む。水筒から口を離  
し、一息吐いた後、男は続きの後の文句を口にした。

「うまいな。一日はこれで持つかもな。死に水にならな  
い方がいい。そうだ。生きた人間狩りの話だ。おれの仲  
間がいきなりにやられて、その時、おれは足を撃たれた。  
そいつらのせいでこのさまだ。歩行困難、自分から申し  
出てここに残った。みんなのお荷物にはなりたくないか  
らな。この山を降りた平地に兵站（へいたん）病院があ  
ると聞いているが、もう右の足首から下が腐り落ち始め  
た。そんなには持たん。もし、古澤伍長と会うようなこ  
とがあったら、まだ、杉原は生きていたと伝えてくれ。  
おれたちの分隊はもう一ヶ月以上もさまよっているが、  
お前ら、新参だな。まだ虱、蛆虫、食ってないだろうが。

喰いモンはこの山ん中にはない。いいか、虱も蛆虫も食え。人間の血と肉をすすっているから、人間の味だ。食われた分、元を取るのが生き残る法よ」

それだけ言うと、男は「他に喰いモンはないか。塩だつて持つてるだろう。何でもいい。くれよ。もつと教えてやる」

と、畳み掛けて来た。

この場では、したたかになるしか法はないと思われた。

「ありません。三日、何も口にしておりません」と、ひとまずはうまく村中が言い逃れた。

「こんな体でなけりや、お前ら力で捻じ伏せて、切り割いて食つてやるのにな。うまそうに見えらあ。ま、いいか。こんなこと言えるだけまだいい。出す物ないなら、もう、行け」

今度は睨み付けて、彼らを追っ払った。

その場を離れ、五十メートルほど先の丘地のあたりまで、足を運ぶと、いきなり、後方で「バン！」と、破裂音が一つだけ響いた。

死に水を口にしたのか、さっきまで口を利いていた杉原上等兵が、手榴弾で自決して果てたに違いなかった。

捨てられた兵の身の処し方、この自決法の法も日常化していた。明日の自分たちの在り様を想起させる様に、三人は慄然（りつぜん）とした。

さらなる生き地獄を、この先も道々で彼らは目にする  
ことにもなるのであった。次第に無口になった。

歩を進めると、その先には死体が幾つも転がっていた。  
ほぼ、白骨化していた。異臭が鼻をついた。

金バエがたかり、蛆が湧いていた。三人とも、さつき  
の男の話を思い出し、胸が悪くなった。

蛆虫どもは人間の血と肉を啜っていた。

雑囊、雑袋、軍靴、水筒、飯盒などの各自の所持品が、  
死体からは奪い盗られているのも目にするにもなっ  
た。通り過ぎる者たちとて、生き残ることに必死になっ  
ている様が窺えた。

この場合、盗む行為が悪とも言い兼ねた。

軍隊用語だと、調達になるに違いなかった。

進んできた道の後方も、これからの遙かなる前進の道  
にも、この地獄絵図は描かれており、また、新たに描か  
れることになるのであろうことは間違いなかった。

それでも、通信班の三人も、道なき道を前へ前へと進

むしかなかった。これが敗残の道だった。

「まだ、一山も越えてないが、へたへたじゃけん。みんな、ここいらで一休み、寝るところを見つけるがじゃ。

不眠不休で、どこまでも歩いていたら身が持たんぞい」

やっと、村中の一言で三人は罅(ねぐら)を見付けることになった。金バエの羽音のしない道を選んで進み、急な崖の途中にある岩穴を見つけた。先客がいないかを確かめた。それらしい場所には、先客ならまだしも、大抵は、死体があったからだ。鼻をくんくん鳴らし、まず死体の有無を石丸が確かめた。二人を招き寄せた。

午後の時間帯で、今から寝ると昼寝になるが、逃避行の行動軸は昼と夜が逆転していた。

三人は崖を上がり、ひとまず小さな岩穴に身を潜めた。でこぼこの岩床に腰を据えると、痩せ衰えているせいで腰骨が当たり痛かった。

「体力がいるからのう。この穴までは、みんな、来れんのが多いんじゃない。わしら、山を降りたのが遅かった分だけまだ持つておるう。これからどないなるかじゃな。よし、非常時食の大事な梅干し一つ、体力保持のために頂戴することにするが。塩分不足、こう汗ばっかり出と

るっっちゃ、体が持たんがじゃ」

村中の許しが出で、ミイラ梅干しがみんなの口に一個ずつ入った。一週間に一個のつもりの供給日予定、今日がその初日となった。

「うわっ、酸っぱいがじゃ。ミイラ様々じゃのう。これでミイラにならんで済むがじゃ」

「お陰様じゃ。この酸っぱさで、身も心もお目覚めじゃね。入江軍曹殿に感謝だがにい」

「しゃぶり尽くしたら、この種も貴重品やで。飴ん玉、飴ん玉、夜歩きで辛い時は食い物も見つけられんのやから、飴ん玉みたいに舐め尽くしたろ。種かて、栄養分なんやからな」

島根弁に関西弁が混じり込んだ。

「そげだね。梅干しは良(よ)うでけてるだーがあ。命の種付き、舐め舐め、寝るがあ」

村中の弁には実感があつた。

三人とも、ひと時の眠りに落ちた。

それで、目覚めたのはもう夕刻に近い時刻となり、埒を出たのだが、危機一髪の緊急の場が、この後、彼らを待ち受けていた。

昨日、水を与えた杉原上等兵から耳に入れた情報が、その場では早速に生きた。

実のところ、彼ら通信兵は、逃避行の日々銃機は手にしていなかった。射撃訓練はほとんど受けていなかったし、三八銃さえ手薄だったので、通信兵には支給されてはいなかったのだ。村中の知恵で、捨てられた三八銃を拾い、一挺だけ所持することになった。

重いので、三人は代わる代わるに持ち、手にした。

ぐねぐねと曲がる尾根の崖、峠の一本道に差し掛かった。一巡りし、坂を下ると向こうの山にと出る道筋だった。視界は開けてはいたが、所々は、生い茂った木々で塞がれているので死角ともなる。

敵のゲリラ兵とて潜んでいそうな地点でもあった。用心すべきだった。この時は石丸が三八銃は所持していた。

村中、菊池、石丸の順で、三人は、一、三メートルほどの距離を保ちつつ歩いていった。

突然、村中、菊池の背後で、「ぱんっ」と一発、乾いた銃弾の音がした。「うわわっ」と、続いて奇妙な声を上げて石丸が後ろ向きに倒れた。

同時に、「だ、だ、だん…」と連射の弾音が続いた。

誰と誰なのか。双方が撃ち合い、銃撃戦が展開されていた。「伏せー」と、村中が叫んだ。

一瞬、何が起きたのか分からず、「おい、石丸っ」と、声を掛けながら、倒れている石丸を援けるために、後戻りをし、村中が石丸の傍にと、にじり寄った。

「うらあ、人を殺してしまつたがじゃ。この鉄砲でえ。えらいこととしてしもうたぞい。菊池を狙つてえ、銃口を向けとる奴が向こうの草陰に居つてえ、銃口を向けとつたがにい。そいでえ、うらあ、銃爪を引いてしもうた」この場の状況は緊迫したものだつた。

味方同士の撃ち合い戦、菊池を狙つて発砲しようとする者がいた。その男は、杉原上等兵が語った、人間狩り部隊の一人だつた。

その狙撃兵に向けて、返り討ちの応射の銃弾を浴びせたのは古澤分隊の兵士たちだつた。

この場の状況だが、吊い合戦そのもので、凶らずも、殺された僚友、杉原上等兵の仇討ちが果たされていたのだつた。人間狩り部隊の連中は、この応射で三人が殺された。間もなく、この場に、古澤伍長らが姿を現した。

かくかくしかじかと、事の仔細が語られた。



石丸が銃を構えた時、すでに古澤分隊は、不穏な動きをする一隊を発見していた。

菊池を獲物にするために銃口を向けていた男は、石丸が銃爪（ひきがね）を引く前に、古澤分隊の兵によって逆に狙撃されていたのだった。

再会した古澤伍長だが、村中が前に会った時は、肩幅のがっしりした体格だったのに、やつれて小さな男になっていた。杉原上等兵との出会いについて村中が触れた時だけは、落ち窪んだ目の奥に、うっすらと、古澤伍長は涙を浮かべた。会得して、小さく頷いた。

「そうか。みんなの足手まといになると、あいつは覚悟してあの場に一人残った。戦友の仇だけは討てた。それがせめてもの餞けだ。ああいう連中は生かしてはおけん。おれの分隊も、今は三名失って四名になった。これからみんなを守ってしつかり生き抜く。当分の目標はそれだけだ。お前ら、ばらばらになるな。それから、銃を持っていない奴は狙われる。略奪、物盗り、詐欺、たかり、ゆすり、何でもありだ。気をつけろ」

それだけ、言い置くと、古澤伍長の一行は、通信班の者たちとは別れて、先行して行った。

他の隊の者には構ってはいられない。

そんな状況ではあった。改めて、三人は自分たちが置かれた立場を考えさせられた。

「虫も殺せん、この昆虫少年がじゃ。人間をお、殺しちまうところだったがな。ワリヤ、何をしとるんだい、こげんことはいけん」

しみじみと、石丸が語った。虫も殺せない兵隊の心情そのものが表されていた。

12

「この虫は、班猫(はんみょう)。ミチシルベとかミチオシエと言うがじゃ。人の歩く道で飛んでは止まる虫、みんなの行く先の道を教えてくれるんでミチオシエ、後を追って行きや食べ物に有り付けるかも知れんがい？」

石丸が説明した通り、青緑色の羽に黒い斑点のある一匹の小さな虫が彼らの行く先々で、一メートルほども飛んでは、ひよいと止まる仕種を繰り返していた。

「どちらに行っていていいか迷っておるところ。この山人中、道しるべはなしじゃからな。そげか、虫の知らせに頼る

ことにするがじゃ」

そう、村中が決断を下したので、ミチオシエ虫に導かれて彼らは進んだ。

やがて、土手道のような地形の場所に出合った。

道の切れたところからは笹藪の土手坂、彼らは坂を上がつた。村中が判断を下した。

「この先は笹藪、寢床にするにはええがじゃ」

その時、右手の笹藪の向こうから、女の声が出た。

先入者の必死の思いの聲が届いた。

「兵隊さん、日本の兵隊さん、わたしたちを助けて下さい」

「お願いします、兵隊さん」

二人が言葉を重ねた。初めは空耳かと思ひ、三人は声のした方角を怪訝そうに見やった。

目先の笹藪がごそごそと動いた。ぼうぼうの髪の毛の頭が二つ、その笹藪から顔を擡(もた)げた。垢で汚れた顔かたち、それに、ぼろ衣をまとっているの、到底、見た目では女性とは判別し難いが、まだ、年端もいかない少女たちであることはその声からも分かった。

「足を怪我しているから動けません。助けて下さい」

痩せ細って顎が尖っていたが、目だけは、ぼつちりと大きい少女が、そう、哀願した。

逃げることもならず、彼らはそちらに近付いた。

小柄の少女が二人、手を合わせ、彼らを拝んだ。

しきりに、頭も下げていた。

村中が事情を訊くまでもなく、風間知世子と名乗った少女がひとしきり喋り、訴えた。

それによると、足の負傷跡の悪化で歩けなくなり、仲間の井関ミサと、ここまで逃げ伸びて来たが、このままでは死を待つしかない。

「わたしたちはこの先のサンタフェの兵站病院まで行って、看護の仕事を手伝うよう言われているが、道に迷って、とてもそこにも行けそうにない」

と、十五歳の少女たちは大要を語った。

三人は耳を傾けた。この場の状況から察すると、まだいたいけない少女なのに、この場で二人は野垂れ死にするしか法はないと思われた。

怪我の具合は、爆撃弾の破片が足に刺さり、そこからバイキンが入ったのが因で、膿が出て、もはや、蛆虫が巢食っていた。衛生兵でもないから彼らにはどうしよう

もなかったが、余りにも不憫なので、貴重な梅干しを各々に一個ずつ、村中の発案で二人に与えた。

食べものも口にしていないので、梅干しの効用に期待してのことだった。口に含んだ梅干しから生じる唾液を、風間知世子は傷口に塗り付けた。効用のほどは、ともかく、これが今は最善の策ではあった。

大事そうに二人は梅干しを口にした。

塩分不足にもなっているに違いない。兵隊と違って邦人には、支給物は何も渡されていないのが実情であった。こんなところまで、よくも女二人で辿り着けたものだと、彼らは感心もした。その間の労苦のほども思った。

やっと、二人の少女の顔に笑みも戻った。

その時、菊池が何かを思い出し言った。

「もしかして、いつか、サンミゲルの日本人学校に避難していた邦人一行？そんな時、あの避難場所に二人は居たってことはありませんか？なんや、そんな気がするんや」

と、菊池が頭の中を整理しながら言った。

「ああ、あの翡翠かずらの花棚があつたところじやね。

菊池、よう、覚えておらいね」

その時の状況を石丸が付け加えた。

それから先の話は、菊池勇と「チャコ」こと、風間知世子が話の中心になり、時折り、井関ミサも加わっての会話となった。二人とも、マニラのホテルに勤めていた。

新天地を求めてやって来たその来歴ではあったが、戦局急となり、内地に向かう送還船に乗せられたが、マニラ湾を出たばかりのところ、敵潜水艦の雷撃を受けて、船は沈没。まだ、沖合いの海域だったので、二人とも命を落とさずに済んだが、乗船者は女子供ばかり、その多くが犠牲者となっていた。

船での遭難記については、菊池も災難に遭っているの、少女たちとは話が合った。

「船での遭難か。えらい目に遭おうたんやな。自分も戦争が始まったばかりの船員の時、南支那海でおんなじ体験をさせられてるのや」

「小さな子もみんなやられて。それに、捕虜を乗せていたら攻撃しないとわかっていて、甲板には捕虜が自分の国の国旗を持たされて立たされていたのに、初めに、艦載機が飛んで来て、そんなこと関係なく討ちまくり。その後、雷撃を受けて、船は沈んだんです」

「投げ出されて海を泳いでいる時も、掃射されて、あれ

でもみんな命を落としました」

話す相手もなく過ごして来たのか、二人は代わる代わるに、一気に喋った。一部のことしか伝えていなかったが、ここでも、血の海の、「生き地獄」の様が二人の口からは生々しく語られた。

「そういうこともありや。自分が乗っていた輸送船も捕虜の兵隊たちを運ぶ任務を負っていて、こちらは捕虜は船倉に閉じ込められたままやった。それでも何人かは自力で脱出して、海を泳いどったけど、助かったもんはおらんのとちやうか。ここに、今も、こうして自分が生きてるんも奇跡みたいなもんや。よう、二人とも生き残れたな。十五歳かあ。絶対に、これからの人生も一杯生きんとな。自分が船員になつて、海に放り出されたんも十六歳の時やった。せいからは、何があるか分からん世の中やから、毎日、毎日、充実した日々を送ろうと決めて、生きて来たのや。親孝行も含めて、ちゃんとはやつとらんけんどもな」

風間知世子は家庭の事情ありか、祖父、祖母が内地では待っており、特に、その事情からか、育ての親には孝行したいと告げた。

井関ミサは母と妹が待つており、やはり、稼ぎ手としての任も負つてのこと、遙かな地、マニラまでわざわざやつて来た理由が知れた。

サンミゲルの避難所から、バレテ峠を越えて、穀倉地カガヤン溪谷帯に目指すよう軍に命じられた後の彼女たちの避難行も困難を極めていた。

日本列島・本島の三分の一ほどをも踏破しなければならぬ距離、しかも、行く手は平坦な地ではなく険峻な山々の立ちはだかる地、未踏の密林地帯には、灌木と、雑草があるだけで、もちろん、食べ物などはなく、医薬品とて手に入る当てなどなかった。

当初は、邦人一行の逃避行をまとめ、行動を共にしていたのは、在外マニラ領事館の職員だったが、結局、途次、彼らはこの重要な任を放棄した。老領事の命を守ることに専念したのだった。

結局、放り出された邦人一行は単独行動せざるを得ず、止むなく、邦人たちは幾つかの班に別れて、その後、行動した。ここでも、自給自足体制が強いられた。

風間知世子、井関ミサの二人も、初めは一行の中にいて、小さな子供たちを、親に代わり面倒も見ていたのだ



が、小さな揉め事が起因で、その一団からは追い出された。十五歳と言えば、元気盛り、食い気も旺盛、食糧調達の任も負わされていたのだが、いわゆるところの役得で、草の根の一つを偶々に口にしたことから、問題視にされて、余計者扱いにされた挙句に、班の秩序を乱すと宣告されて、兵站病院に行くように、体よく、申し付けられた。追い出されたのだ。

問題は、そんな単純なことではなかった。

一団に加わる前は、単独行、「邦人の一行に入れればいい」と、その道すがら教えてくれる者があって、難行苦行の末に、彼女たちは、この一行に追い付いた。

助かったと思った。

やっと、死地を掻い潜って、「邦人一行の一団」に辿り着いたという経緯がそれまでにあっただので、再び、一行から離れるのは、「自分たちの死に場所は自分たちで見つけろ」と宣告されたと同然のことなのであった。

この話を二人は泪ながらに語った。

余程、悔しかったに違いない。

要するに、切実な話なのだが、二人分、食い扶持が増えた分も嫌われた理由であったようだった。結局は、ま

たも、二人切りの逃避行、今現在の、死をも覚悟しなければならぬ状況に追い込まれることになったのだ。

話し疲れて、いつとき、寝入った少女たちのその寝顔を見ながら、菊池は内地に置いて来た妹のことを思った。

同じ齡、いたいけない今の境遇だった。

『この山を降りた平坦地に兵站病院がある』

この情報を杉原上等兵から得ていたので、彼らは、翌日の朝、風間知世子、井関ミサの二人を目的の兵站病院まで送り届けることが適った。代わる代わるに肩に負い、杖をつかせながらの道行きで、二時間後に、運よく、幾棟も並んだニツパハウス造りの仮設野戦病院を発見した。ひとまずは目的を適えた。

この野戦病院でも、彼ら通信班隊員は、地獄の様相<sup>じごくのようさう</sup>を目の辺りにすることになった。

次々と、傷病兵がやって来るので、收容が間に合わず、多くは、草地に寝かされていた。

手当ての方も行き届かず、あちらこちらで、傷の深さに、呻いている兵も多くいた。

何より、ここでも、金バエがぶんぶん羽音を立てて飛んでおり、傷病兵の傷口には、蛆虫が湧いて出ていた。

迎えてくれた看護婦の一人が、「蛆虫は傷口を舐めて膿を吸ってくれるので、あれでも役に立っているんですよ」と、顔を顰めている彼らに教えを垂れた。

「ありがとう。兵隊さん。わたしたち、生かされた分、ここで、しっかりと看護の仕事をします。このご恩は忘れません」

「みんな絶対に生きてまた会いましょう。だから、さよならとは言いません」

井関ミサが泪ながらに言い、風間知世子が泪ながらも、しっかりとした口調で告げた。

お下げ髪の少女の趣きとは縁の遠いぼろをまとった少女たち、それでも若者と若者同士、みんなに淡い思いは兆した。

二人の少女は通信隊のみんなと別れの握手を交わした。結局、この二人とは、後々に邂逅(かいこう)する機会を得た入江軍曹から、事の次第は語られることになるのだが、彼ら通信兵の全員が、少女二人らとの再会を果たせたわけではない。

次なる厳しい局面が、彼ら通信兵を待ち受けていたのだった。

敗残行、まさに、その言葉通りの毎日となった。

通信班の三人の兵士たちの物語も、途切れ、途切れの情報、酷い物語しか記せない。

「逃げて来た道々、山々、みんな片っ端から無くなってしまいがじゃ。あぎゃん、爆弾落として、密林の木なんかも根こそぎ吹き飛ばして、けもの道まで人間の血で埋めて、まだ、あつら手を休めん。怖(おぞ)い連中じゃのう」

「地中に潜つとる虫まで、みんな掘り起こして殺しておるがじゃ。蠅と蛆虫、蚤(のみ)、虱に、ダニ、オラが体で飼つとるもんだだけが虫じゃにい。いや、みんな喰いモンかいね」

二人が嘆くのも無理はなかった。

さらに菊池が言葉を継いだ。こちらは、非衛生極まることから生じる病いについてだった。

「出けモン(腫れもの)だらけや。膿が出て、ぼこぼこ体中に穴が開いてしもうた。蛆虫の巢や。栄養失調だけや

ない。マラリアの再発に、止まらん下痢、その弱った体にバイキンや。ほんま、こら、あかんでえ」

誰もがそのような症状を呈していた。

峠の一本道などに出ると、延々と、敗走兵の列が続いた。みんな、幽鬼そのもので、杖を付き、やつの一歩を進めていた。

夜道を歩くと、点々と赤い火の列が遠くに見えた。誰が考案したのか、車輪の輪ゴムを刻んで火を点すローソクのような明かりが出回っていた。この危急時なのに誰か知恵者がそれを作り、したたかに、「商売」にしていたのだ。支給品ではないので物々交換の品を持っている者だけが入手可能な品、暗闇でも、足元ぐらいは照らせるので大いに役立つていた。村中の提案で彼ら通信兵たちも貴重な梅干しを二個提供して、その明かりを手に入れた。

菊池が口にした「病者たち」の様だが、この明かりの列に加わると、その様子が知れた。

みんながみんな杖を付き、一歩、一歩を進めるのがやっついで、半分は病者のはずだった。

そんな列に列なつて歩いてみると、突然、ぱたっと倒れて、息を引き取る、行き倒れ兵、にも多く出合った。

一步でも前に進まないと、落伍者になる。兵たちは、その恐怖感でぎりぎりの一步まで歩を進めていたのだった。栄養失調症、衛生状態の悪さ、それが起因しての色々な病気の発症、また、雨期に入っていたので連日降っている雨で、持ち物にカビさえ生える最悪期も迎えていた。

いつの間か、代用の明かりも灯が尽きた。

彼らの一步は。元の真つ暗闇道に戻った。

見知らぬ道、一步、一步が、心もとない。

或る夜、迷い込んだ夜道で、ふわーあーと飛んでいる数匹のホタルを目敏ざく、石丸が見つけた。

草露の合間で光っているもいた。

「この真つ暗闇道、一步も歩けんと思うておったら、こりや、また、道オシエをしてくれちよるう。こりや、助かるのう。なあ、ほう、ほうホタル来い。じゃな」

と、早速に、虫男の石丸が螢を褒め讃え、童謡の一節を口にしてみせた。

♪ほう／ほう／ホタルこい／ちいさなち  
ようちん／さげてこい／星の数ほどとん  
で来い♪ほうほう／ホタル来い／あっち

の水はにがいぞ／こっちの水は甘いぞ／  
ほう／ほう／ホタル来い

みんなが、<sup>①</sup>螢の歌<sup>②</sup>を頭に思い浮べた。

無邪気に、声を出して歌を唄うほどの元気は彼らにはなかった。歌の一節を頭に思い描きながら、その心境のほどを村中が代弁した。

「この辺りは、爆弾も飛んで来よらんけん、やつと、ホタルも生きとるのがや。<sup>③</sup>ホタルの聖地げな。<sup>④</sup>あっちの水は甘いぞ<sup>⑤</sup>の命の泉に行き着くだ<sup>⑥</sup>ね。<sup>⑦</sup>虫の知らせ<sup>⑧</sup>なんやも知れんがや。ホタルの跡について行こうや。この山人中、水かて、今は、そうは手に入らんぞいね。そげだけん。旨い水、腹一杯、飲みたいだ<sup>⑨</sup>や」

そんな村中の意見を待つまでもなく、みんなは螢の行く道を追った。小さなせせらぎの音がやがて聞こえて来て、<sup>⑩</sup>命の泉<sup>⑪</sup>に、辿り着いた。川の支流、谷間の窪みに、小さな水溜りの場所があった。

何匹もの螢たちが群れていた。

手に取れる近さで、青白い光を放っていたが、<sup>⑫</sup>昆虫少年<sup>⑬</sup>の手前、他の二人は捕まえることなどはしなかった。

螢は数十匹はいた。

せせらぎの水を集めた旨い水を、腹一杯に飲めただけで、ひとまずは彼らは満足した。

「これこそ、命の水や。溪流が生み出す清い水や。ほんまに、命の洗濯させてもろうた。ありがたいこっちゃ」

菊池の言を待つまでもなく、ここでは貴重な水だった。おいそれと、この道不案内な山の中、水源地が見付かるわけではなかった。水筒にも水を満たして、夜明け頃、彼らは、次なる道なき道を、この日も歩き始めた。

何より、原隊と遅れるのが、一番、怖かった。人と人の群れ、どんなに悲惨な群れであれ、やはり、日本兵のいる場所にと足は向った。

人恋しさの気持ちには変わりはなかった。

様々な悪条件が重なる中の、或る日のこと、通信班三人の内の一人が命を失うことになった。

道シルベの虫など、もう、どこにもいず、行く道には、敵の戦車さえ姿を見せ始めていて、平坦な地や、山の尾根道を歩くのは、危険な状況になりつつあった。

敗残兵たちは、再び、山中の奥深くに追いやられた。



どの兵隊も、否が応でも、足場の悪い山中にと足を踏み込むしかなかった。

その道々、「もう、虫の息じゃな」と、日々に悪い冗句も口にしていたのに、夜の移動中、真つ暗闇の中、石丸が誤って崖から落ちた。

みんな用心はしていたのだが、過酷な地理条件下のこ  
と、防ぎようがなかった。

横殴りの激しい雨も降っていた。

「おい。石丸、返事をせい！」

と、暗い闇の中、足下の崖の谷間に向けて、村中が声を発した。声は返って来なかった。

残った二人は、息を詰めて、谷底を覗き込んだ。

雨の音だけが耳に付いた。

恐々に、崖下を覗き込んだが、地形は読めなかった。

「夜明けを待つしかないが。息があるんなら何としてでも助けるがじゃ。今は手が出せん」

「崖を下ってでも、あいつの無事を確かめなあかん。こんな、誰も来んような寂しい場所で、あいつを死なすわけにはいかんもんな」

この後も、二人は交互に、崖下に向けて、励ましの声

を掛け続けたが声は返って来ない。

数時間が経過することになった。どちらも動けない闇の状況で、手の施し様はなかった。

じりじりした思いのままに、夜が明けて、やっと、この場の地形が判明した。

崖というより、削られた山肌の一端、突き出た裸の岩壁が足下から急に落ちていた。

十数メートルほどの下に突出したもう一つの崖地があった。そこは平らな窪地で、その場所に、石丸の体は辛うじて引っ掛かっていた。仰向けの姿勢だったので血まみれの顔面が少しだが読み取れた。

岩窪に生え立っている小さな木が視野を妨げていたので、やや、見通しが悪い。雨は止んでいたので、うつすらとした明るさ、崖上の二人はこの状況を確認した。

自力では這い上がるのは不可能で、こちらから、崖を下るのにも無理があった。

「おい、石丸あ。返事をせい。返事を！ 蔦を下ろしてやるのに、蔦に掴まるがじゃ。引き上げてやるから力を絞ってここまで上がって来るがねっ。おい！ 返事をせい！ 返事を！」

と、この村中の声が聞こえたのか、崖下から、この時、微かに声が返って来た。

風雨の音に消されない分、声が届いた。

少しだが石丸の手が動いたようにも見えた。

二人は希望を見出した。次の行動に移った。

「よし！ 蔦じゃ。蔦を用意するがい」

「おっ、やらいでか。どないもこないもあらへん。あいつを助けてやらんとっ」

太そうな蔦を二本選び、手早く銃剣で切り揃え、用意した。実は、この作業もこれはこれで大変だった。

体力がない上に、おいそれと、蔦がその辺りに這っているわけでもない。

やっつと、二人は、元の場所に戻った。

二本の蔦を木の根株に巻き、支えとした。

「石丸っ。蔦を下ろすじゃに、しっかり掴まれい。手が動かせるんなら、手え、振れっ」

呼び掛けに応じて、微かに、崖下の石丸が手を動かさせた。そのように見えた。その仕種に、二人はさらに元気づけられた。懸命に二人は蔦を下ろした。十数メートルほどの長さ、何本かが結び合わせてあった。

目標地点まで二本の蔦は届いた。ぶらぶらと揺れた。

石丸が手に取れる位置にあった。

実は、この時、もう石丸は虫の息にあった。顔面強打で一時失神、どこかも打ち付けていて、出血量が多く、彼自身は意識朦朧の状態にあった。

それでも懸命に目を見張った。

「おい、弱虫っ、石丸っ、上がって来いや。上がって来んと弱虫や。なっ、弱虫や。そないなんはあかん。なっ、泣き虫の菊池が言うとるんや。弱虫！石丸、這い上がって来いや」

その励ましの声は、石丸は聞き取っていた。痛さにも呻いていたが、友の声は聞き分けた。

（はい、だんだん…だんだんじゃ…）

そう、石丸は呟いた。だんだん、と言うのは、島根弁で、ありがとうの意であった。

この時、やっとの仕種で、石丸は自分の背に負っていた雑嚢を外した。そして、垂れ下がって来た蔦の一つにその雑嚢を結んだ。それから、最後の力を振り絞って、蔦を振った。その蔦の振動は、崖の上の二人にも知れた。

「おお、気張って、吊り上げたらんとっ」

蔦に手を掛け、村中が菊池を促した。

力を込めたのに、二人は拍子抜けに合った。

「何じゃ。こげいに軽いつちや、あいつ、掴まりよらんのけえ。まだ、生きとるがにいい」

悔やんだが、そのままに蔦を手繰ると雑嚢が一緒に上がって来た。二人は顔を見合わせた。

事の次第に息を詰めた。手元に戻って来た雑嚢が意味するものを、直ぐに読み取った。

「何や。どないあつても、這い上がってくる弱虫やないのんか。あいつ、弱虫男があ、梅干しを送って寄越しよった。梅干しより命の方が大事や。命の方が大事なんや」

菊池の思いも空しく、二人が崖下を覗き込んだ時、平らな窪地にいたはずの石丸の姿は消えていた。その下は、もっと険しい谷地、落ちたとしたら、もう、命はない。

「こういうことがや。命の種の梅干しを無駄にせんようにい、こないなことまでしてじゃ。石丸の奴、オラたちに送り届けてございた」

「…虫は虫でも、あいつ、羽化した蝶みたいに羽を広げてや。ひらひら飛んでるみたいに、ワイらに最後の贈り物をしよった。ええとこあるな。あいつ…。ワイは泣き

虫や。そやけんど、こうなつたら石丸の分まで生きてる  
う」

そう、言った後、菊池は堪え切れず、「うわわっ」と、  
声を張り上げ号泣した。男泣きに、声が涸（か）れるま  
で、村中も泣くだけ泣いた。

15

この時期、入江軍曹は彼らより、遥かな後方の師団本  
部参謀部付けの通信隊に属していた。総本部の南方総司  
令部とも連絡を密にする部署であるので、実戦部隊より  
は安全な地帯に布陣しており、食糧、医薬品の備蓄も相  
応に整っていたので、軍隊組織が未だ機能していた。

その恵まれた状況ゆえに入江軍曹もひとまずは健在で  
いられた。

それでも熱暑の国の風土病には弱く、通信隊でも戦わ  
ずして、激務も重なり、戦病死する者が多く出ていた。

通信隊員の員数不足が問題視され、通信の特務をこな  
せる兵員に限り救出するよう、本部からの特命が出され  
た。その特務部隊の一員として、入江軍曹も志願して加

わった。何より、村中、石丸、菊池の三人の通信兵たちの動向が気掛かりだった。

これからの苦難の道、相交差が叶う地点に行き合えるのか、行き合えないのか、入江軍曹の思いが通じるかどうか、神のみぞ知るの運命の「時間軸」の針が、この時、少しだが動き始めた。

その間、南方総司令部は、安全地帯から安全地帯へと転進に転進を重ねて、四月中旬には、穀倉地、カガヤン溪谷を目指していた。

まだ、米軍の進出が及ばない地域であった。

すでに、最前線の基地では転進が相継いで降り、三月上旬から五月上旬に掛けて、サンタフェ、バレテ峠、サクラサク峠などの主力部隊は壊滅し、各通信部隊とは通信途絶の状態にあった。やっと、六月一日に残存部隊に総退却令が出されたが、最後に残った者ほど、過酷な状況に追い込まれることになった。

一台のトラックが師団の命で調達されて来た。

敗走の途次、どこかの掩蔽壕内に隠されていたものらしく、輜重隊所属の自動車手の兵と、数名の武装兵が共に加わった。味方の敗走の兵たちに襲われないように、

機関銃の台座がトラックの荷台に据えられた。

多少の救援物資も車には積まれていた。

カガヤン溪谷に向けて逃げて来る者たちは、すでに、飢餓と病いで疲弊し切っていた。

その列の中を逆行し、突破して行くのだから、たちまちに、行く手は阻まれる恐れがあった。

「おれたちは、これから敵陣に突っ込む決死部隊だ。行かせてくれ。この先の戦車部隊を阻止しないと、ここまできたお前たちもやられることになるぞ。道を開ける！道を！」

隊長の言だが、どこまで通用したかは分からない。敗残兵の者たちは銃だって手にはしてはず、力づくで立ち向かう気力さえ失せていた。手向かう者はいず、絶望感のためか、誰しも、一様に、暗い目をして彼らを眺めた。

泥沼道の泥だけを跳ねて、救出隊は南進して行った。

その間、入江軍曹は、連日、「この世の地獄の様」を目撃した。幽鬼のように痩せ衰えた者たちは、敗走の兵たちだけではなかった。

幼子の手を引いた婦女子たちの列をやり過ぎた。その先に待ち受けているのは、道端に、延々と続く白骨街



道で、その「生き地獄の様」を、入江軍曹の一行は、ここまでやって来る道すがら、否応なく目にさせられた。

みんな、ここでは死の行進を強いられていた。

やっと、こんな遠隔の地まで、何ヶ月も掛けてやって来たのに、この地で力尽き果てた婦女子の死に様を見るのが、いちばん辛かった。母親が先に亡くなり、ただ、まとわり付いていただけと思われる小さな子供たちの、死に様の悲惨さを、各所で目にした。

恐ろしい現実も目の辺りにすることになった。

何日間かの駐留地で、妙な光景に出合った。モノウリの兵たちが出沒した。

欠乏している、塩を求めてのことで、干し肉と交換してくれと言うものであった。

そのモノウリ兵たちの正体については、噂ではあったが入江軍曹らは予めの知識を得ていた。

師団本部には憲兵隊本部も在していたことから、噂の中身については承知していた。

野豚の干し肉と称する物は、兵士たちの死体の腿肉などを削ぎ、干して作られたもので、念の入った物は、匂いを消すために、一部、燻製にしてあるというもつと

もらしい話もあった。もちろん、生きた兵だって、狩られるという話も聞き及んでいた。

飢餓街道ではなく、鬼餓街道の実態を、改めて、入江軍曹は知らされることとなった。

各部隊の動向について、道々、聞き取って行く内に、このままでは、到底、元入江分隊の者たちとは出会えそうもないので、入江軍曹は一計を案じた。

噂話の幾つかに耳を傾けた。

当然のことだが、水を求めて兵たちが集まる川筋にも入った。そこでも、また、地獄の様子を見ることになった。うら若い乙女が半分ほど顔面を流れの水に埋めて死んでいた。薄汚れた髪であるのに、水流に弄ばれている髪の毛の部分が黒々としていた。

黒髪だけが波打つその様に、入江軍曹は言葉を失った。

もちろん、その墓場のようにになった川筋のあちこちには、累々とした白骨体があった。

（もう、すでに手遅れなのかも知れんな。どこまで追って行ったらいいのか。こんな、惨状の中、村中たちを見つめること自体が、もう、あり得ない話になっているようだ。それでも、諦めるわけにはいかん。村中たちだけの

ことではない。司令本部からの通達がない限り、各部隊は動きようがない。例え、離散していても、命令系統が正常に機能すれば、多くの兵が助けられる機会もあるはずだ。自分たちの行先さえ彼らは分からぬままに、こうやって、いついつまでも死の行進をやらされている。こんなことがあつてはならない。そう信じての、この、救出隊、どこまでもやるしかない)

入江軍曹は改めて決意した。

さらに、幾つかの噂を分析をして、次の行動を取った。行動指針の精度を凶った。

南進するほどに米軍との距離も縮まって行く。空からの攻撃もあるから、もっぱら、人目に付かぬよう兵たちは夜間の行動を余儀なくされていたが、夜間でも動けなかった兵たちが集まってくる場所が、ある日、特定出来た。南国の地にいると、この世にあらざる現象に、偶々に出食わすことがある。

その不思議な現象の一つが生んだ噂に、幽霊樹を見ると死ぬ、と言われている類いのものがあつた。

幽霊樹とは、地元民の間では、大挙してホタルが集まる ホタルの木 のことだったが、日本兵たちは、

この現象を自分たちの死と結び付けて、<sup>①</sup>「幽霊樹」などと名付けた。

不思議の世界を作り出す青白い妖光に誘われて、心惹かれるままに、多くの将兵たちが、<sup>②</sup>「幽霊樹」の元へと集まって来るのだった。

スペイン統治時代に、この不思議の木を見たスペイン人たちがこの光景を称して、<sup>③</sup>「イスラ・デル・フエゴ（火の島）」と、名付けた。

また、キリスト教の信者も多い地なので、<sup>④</sup>「クリスマス・ツリー」の名もあった。

一年中、驚くほどの個体数の、<sup>⑤</sup>「ホタルの木」がフィリピン各地に現出する。それも、特定の木、ユーカリ、ヤシの木、地元でモラブエと呼ばれている木などに限られていた。

雨期なので、連日、雨ばかりの鬱陶しい日々が続いていた。寒さに体調を崩す者も出た。

そんな日の、ほんのわずかな晴れの間のこと、一本の名も知らぬ大樹に多数の虫たちが群れて来る現象と、入

江軍曹の一行も出遭うことになった。

遠くからでも望見出来るほどに、青白い夜空が行く手にと浮かび上がった。

余りの壮大さと美しさに、我れを忘れて、敗走の兵たちも、この大樹の元に寄って来るのだった。みんなが一筋の光明を求めていた。

「幽霊樹を見ると死ぬ」と言われているのは、何よりも、光に憧れる人間の心理そのものがこのような行動に走らせるのであり、そのこと自体が、自らが死を意識していること」と、大いに関係があるのだった。

この日の夜、絶好の気象条件が整った。

入江軍曹らの一行は、山の奥地に分け入った。日が暮れる頃から、回りには、小さな蛍が飛び始めていて、案内させた兵によると、間違いなく、こんな夜は、蛍の大集団が、この山の端の空を、埋めるだろうと言った。

この後、その通りの展開となった。

腐葉土の道に足を取られながらの行路で、この地が万古の大自然に囲まれて育まれているのが、みんなにも分かった。

すでに、蛍自体が道案内役を務めていて、足元も照ら

し始めた。この場に青沼がいたら、きつと、「ミチオシエの虫」だと、みんな教えたに違いなかった。

山の中腹にある、幽霊樹は、遠くからでも見る事が出来た。青白い妖気が風の流れのようになりながら、空の果てを覆っていた。

天を突く大樹で、それ自体が壮観でもあったが、宿った蛍の群れが、また、一段と、見事な光を放った。暗い闇の宙(そら)なのに、ここだけは別世界となっていた。

とても、神秘的な眺めだった。

数千匹などという単位ではない。

数万匹、いや、そんな数も遥かに凌駕していた。

空一杯に、青白い光の点々が点滅する様は、もはや、この世のものではなかった。

ホタルが集まる木には精霊が宿っている、という信仰も、この地にはあった。

(そうか。あの青白い光の集団は、人魂のようでもあるな。この地で果てた兵たちの霊が、このようにして、この蛍の大樹に寄り集って来るというわけだ。それで、付いた名が、幽霊樹か。その、人魂に魅入られて、敗残の兵たちが、一人、二人と、今夜も光明の光を求めてこの地

にやって来る。それにしても見事な光景だ。この地で果てた仲間たちの霊が集まって来るのだとしたら？その魂が宿る木？そう、納得させるほどのこれは不思議の世界だ…)

しばし、入江軍曹はおのが思考を停止した。

さつきから、道々、ここでも、入江軍曹は多くの白骨体に出会っていた。無惨だった。ミチオシエの虫ではなく、異臭に導かれて、この、幽霊樹の元にはやって来たというのが、本当は正しいのかも知れない。

それにしても、あの美しさは何だろうか。

無慮数万匹、いや、十数万匹かも知れない。

地球のどこかという思いはすでに消えていた。

無数のホタルたちだけが、ここには存在しているのだという思いだけが強くなった。

見果てぬ夜の空には、青白い光だけが漂うように舞っていた。灯っては、消え、また、瞬く。ホタルたちが光の輪舞(ロンド)の輪を、どこどこまでも広げて行く様に、入江軍曹は見惚れて、しばし、我れを失っていた。

ふわー、ふわーと飛ぶ。それだけではない。移動した後、また、青白い光を点滅させ、ホタルたちは命ある

者であることを教えていた。これだけ、一箇所に集まって来るのは、繁殖期にあるからだだった。

それも、木々の若葉の芽が出る頃のこと、オスはメスを求め、メスはオスを求めて、これらの大木に謂集して来るのであった。

ここでは、<sup>、</sup>厳肅な性の営み<sup>、</sup>が、自然の摂理のままに執り行われているということであった。<sup>、</sup>生きることの意味が、ここには存した。

<sup>、</sup>幽霊樹<sup>、</sup>なんかではないと入江軍曹は思った。

命そのものが輪舞している、その躍動感そのものに入江軍曹は思いを投げた。

自分と縁のあった通信兵たち、村中達郎、石丸和雄、菊池勇の三人が健在であることに思いを繋げ、そして、再会出来る日を、入江軍曹は強く願ひ続けた。

すでにして、この時点で、石丸一等兵を失っていたのだが、なお、入江軍曹は希望を繋いだ。

命ある者たちをどうしても救い出したかった。

その強い思いを自分に言い聞かせた。

一刻を争う事態の中に身を置いていた。



時日は経過して、八月十五日、戦争が終結する日と話は及ぶ。夜十時半、天皇の玉音放送を、通信本部が傍受し、『帝戦の大詔』を確認した。だが、各部隊に停戦の通知を発信する体制は、まだ、整ってはいなかった。

正式に、比島の米軍との間での降伏文書に署名はしていなかったし、実際のところ、各部隊に、『停戦』の事実を通知しようにも、発信先、受信元共に体制不備な状況にあった。

唯一の『停戦の事実』を確認する方法として、『戦争終結』を知らせるビラを米軍が空から各地に撒いた。激しかった攻撃もぴたりと止んだが、鉄撃兵団の生き残り兵たちが武装解除をして、米軍に投降したのは、敗戦一ヶ月後の九月十五日のことであった。

その間、参謀部は命令を厳達するために、主力部隊などには将校を向わせたが、併せて、通信本部からは電文を持たせた伝令兵が各所に走り、『停戦の通知書』を残存する各部隊に送り届ける役目も負った。文字通りの「伝書鳩」の役、残存兵たちの命運を預かる重要な任務であ

った。連日、通信隊員はその役務遂行に務めた。

実際の話、交信途絶の密林地帯に取り残され、そのままに、敗戦を知らずして、この地で朽ちた兵たちが多くいたのは事実であった。

事の経緯を記すと、一人、辛うじて救出された村中上等兵だけは、この『終戦を告げる電信文』の作成に関わることが出来た。通信兵の役目も果たしたのだった。

この時、村中達郎は病いを得ていたが、それでも、他の二人、亡くなった石丸和雄、菊池勇の分も含めて、「通信発信の大事な軍務」を懸命に果たした。

あの、幽霊樹の元を集った兵の中に、石丸も菊池も招き寄せられていた。

一日、その場に、入江軍曹が来るのが遅く、菊池一等兵はマラリアを再発した上に、アメーバー赤痢も患っており、その上に、栄養失調も重なって体力が持たず、幽霊樹を眺めやりながら、この地で儂くも果てていた。

入江軍曹は、菊池二等兵にまつわる悲しい話を、石丸一等兵から聞かされることになった。

縷々綿（るるめんめん）とした話の内容は、ここから

は、入江軍曹の口を借りての、語り継がれた物語の一つとして、記すことにしよう。

入江軍曹と、三人の通信兵たちの『哀切の物語』、以下は、その後の経緯、彼ら通信分隊員たちの一部始終の話の運びである。

来る日も来る日も、およそ、望みのない、「飢餓流浪の日々」であったことでしょう。

特に、小部隊に属した者たちが生き残るのは、かなりの困難を伴ったはずです。

軍隊というところは、見知らぬ者は他者、まして、困窮を極めた『自活自給戦』、他の隊の者など構ってなどはいられなということになります。それだけに、元入江分隊の通信兵たちは苦勞をしたことでしょう。それでも孤絶した状況の中、転進命令が出されてから二ヶ月ほどの間も、お互いがお互いを支え合いながら、必死になつて、『一生懸命』に、彼らは生きて来たのでした。

わたしたちの救援部隊が、地図の上にも記されていない小さな山に差し掛かった時、探していた『ホタルの木』に、やっと、遭遇することが出来ました。

谷道を巡る地で、その谷の山上に、そこだけ、切り取られたように、もう一つ、高い山があり、その山の中腹に、ホタルの木の大樹は立っていたのでした。

夜の光景でなければ、きっと、その大樹も見逃してしまったことでしょう。

ホタルが無数に群れていることで、そこだけは、「神の領域」となっており、わたしたちは、幽霊樹の意味するものを、ある種の靈感にも打たれながら、目の辺りにすることになりました。そうです。ホタルがふわふわと舞う様は正しく人魂そのものでありました。

わたしたちは、これまでに、実際に、人魂に出逢ったことが、度々、ありました。

或る人は、「あれは風のいたずらだ」と言いました。草地などに寝かされている死体から、青白い燐光が発せられているのは、兵隊たちの間では、よく知られた話、一度、うまく風が吹くと、人型をした燐光が、ふわーと、死体から離れる瞬間を目撃することがあるのです。わたしも、この現象に出くわしたことがあります。この様を見た者なら、幽霊樹に集まって来る「死者の魂の存在」を信じることも、有り得る話なのではないでしょうか。

「通信隊の兵士はいないか？いたら合図してくれ。通信の仕事は重要な軍務、通信兵の数が足りない。今一度、通信兵の諸君らには軍務に就いて一働きして欲しいんだ」

そう、わたしが何度か呼び掛けた時、やっと、幽霊樹からは遠く離れた闇の向こうから、可細い声で応答がありました。

その場所まで行くには、何層もの深い腐葉土に足を取られることになるので、わたしは四つん這いになり、その腐葉土の坂の道を匍匐しながら進みました。

「どこの通信隊の者だ」わたしが道々問うたところ、「鉄撃兵団の元入江通信分隊の村中上等兵であります」の声が返って来ました。

わたしは、勇躍心が勇み、思わず、立ち上がろうとしたのですが、たちまちに、足を取られ、腐葉土のぶよぶよの足場に足を取られてしまいました。

それでも、懸命に、わたしは腐葉土を、両手で掻き分け、掻き分けしながら進みました。

ホタルが舞っていて、行く先には、仄かな光明が灯されていました。

「おれは入江だ。村中、分かるか？入江が今そこへ行く。待て、待て、もうすくだ」

と、さらに、わたしは声を掛け続けました。

何度か、村中も応答をしました。

寸刻後、向こうからもにじり寄って来て、わたしと村中との再会が叶ったのです。仄かな明るさの中でのことでしたが、しっかりと、抱き締めた時、村中の体は折れそうに細かったのを覚えています。

いちばん、気になっていたことを、わたしは村中に問い質しました。とても、勇気の要(い)る問い掛けでした。

「石丸は？菊池は？どうした？」

「二人とも…。分隊長、申し訳ありません…」

と、答えた後、村中は声を忍ばせ泣きました。体力がないのか、嗚咽するのさえ苦しそうに…。

「そうか。間に合わなかったか…」

「はい、その…菊池だけは、この地に眠っております」

と、聞き取れないほどの声で、村中が告げました。

腐葉土の上に身を屈ませて、改めて、肩を震わせ、村中は泣きました。

「自分だけ生きていて申し訳ありません…」

とも繰り返して言いました。

消え入りそうな可細い声で、やつと、答えたのでした。

事の次第を記すと、次のような物語がここには用意されています。村中上等兵からの聞き取りの話をも加えて、ここからは、その一部始終を、記述させて頂くことにします。

わたしは、何よりも、あの「ミイラ梅干し」を、彼らが大切にしてくれたのが、唯一の慰めとなっています。事実、栄養失調の上に、塩分不足となると、血流障害、脱水症状、昏睡などの諸症状が生じることありなので、多くの将兵が、塩分不足のゆえもあつてか、様々な病いを得ることになり命を失っていました。

ここの「幽霊樹」の地にやって来るまでに、残されていた梅干しは、二人で二つ。後生大事に、最後の最後まで重用し、彼らは大事にして来たのに、前日の夜のこと、何者かに菊池は自分の雑嚢を盗まれてしまったのです。

ふと、寝入った隙でのこと、「生きるために盗む」、「生きるために奪う」、或るいは、「生きるために殺す」、そんなことさえ許されるぎりぎりの状況下、この場合は盗まれ

る方が悪いということにはなるのですが、菊池の落胆度はとても大きかったようです。「二週間に一個や、あと二週間も歩けば、野戦病院に着けるんじゃないか。そこなら、キニーネはあるはずや」というのが、菊池のもの言い、兵士たちの間では、希望を繋ぐために、そのような言い伝えが、伝わり伝わっていたのでした。

菊池の場合、一週間に一度は再発するマラリア、体力の消耗度が激しいので、キニーネなどに頼らなければ、この時点では、明日の命は危うかったです。空襲に遭った野戦病院では、撤退時、携行不能なので、兵士たちの通る道筋などに薬品類が配置されていることも事実としてはありました。その噂の一つを菊池も信じていたということなのでしょう。

慢性になり、何度も発症するマラリアに加えて、原発性の下痢症状も重なり、村中も菊池も二人ともに、体力を消耗していました。

やはり、青白い「幽霊樹」の怪しい魔力に魅入られて、二人も「幽霊たちの墓場」にと足を踏み入れてしまったのでした。

ふらふらとした足取りで、辿り着いた場所は、腐葉土



の積み重なる小さな丘、何よりも、寝心地の良さが二人には救いで、岩や、ごつごつした石ころばかりの上で寝て来た者にとっては、腐葉土の床は別天地そのもの、あろうことか、ここを死に場所と定めたのか、すでに、このあたり一帯の斜面には多くの将兵たちの死体が埋まっていたのです。

山一帯が太古の昔のままの腐葉土地帯で占められている地、ふと、寝入ると、その寝心地の良さのままに、腐葉土そのものに体が埋没してしまう落とし穴構造で、場所によつては、深みに嵌まる「蟻穴地獄」なので、二度と抜け出させなくなる恐れもあったのでした。

「あかん。こらあ、もう、体が持たん。ここやったら、道端に死体を晒して死ぬよりはええか。なあ、わしが死んだら、村中上等兵、わしの体の上に何層もや。この、腐葉土の柔(やわ)いのもん掛けてんか。掛け布団や。暖かいでえ。ほかほかの布団や。目一杯、ほんまに、気持ちよう…眠りに落ちれるさかいに…」

「このだらくそが！しよもないこと言うちよるな。ちよんぼし、元気出すじゃ。ここまで生きて来た一人だがや、オラを一人残してなんだだ。弱気は止めれ。まんだ、死

ぬるはならんぞい！おい、菊池い！」

この時、マラリアの発症で菊池勇は高熱に魘（うな）されていました。ぶるぶると体が震え、苦しそうに、喘ぎ喘ぎの息をしていたのでした。

それでも、菊池は最後の気力を振り絞って言いました。人間としてのおのが思いを告げたかったです。最期の、最期まで…。

「そうやな。こんな誰も来んような人知れん地でくたばるわけにはいかん。まだ、二十一歳の若さや。この齢でサイナラは言いとうはない…そやけど、なあ、あの梅干しが一個でもあったら、よっしゃ、もつと生きたらと思えるのに、この始末や。そいだけが悔しいな。わしや、もう、持たんで…それぐらいのことは分かるう。えらい、息も苦しいし…もう、喋るんも…。」

「菊池！目を開けるがじゃ。目を開けるがえ！オラがこうやってここにおるがじゃ。そうはいけんがっ。目を開けるがえっ」

「…ああ、蛍や。大（おお）けな木やな。わしも死んだら、あないになって飛びたいな。ふわふわ、ふわーや…。石丸もホタルの虫やったら、喜んでなるやろ。もしかした

ら、ミチオシエになつてや。昆虫野郎がここに、ワイを導いてくれたんかも知れんでえ。なあ…生まれ変わったらあいつとも一緒に飛んだらお…あないにして…あないにしてや……………」

「…ああ、ホタルがえ？きれいがや。あげんに飛べるとええがいのう…」

二人の会話は、儂くも、そこで終わったのでした。菊池勇は眠るように死んだのでした。幽霊樹に見守られながら、青白い魂はどこへともなく飛び立ちました。わたしは、いまでも、そのように思っているのです。

ホタルの木は、いまも、わたしの瞼の裡で、頼りなくも儂い光ではありますが、光そのものの存在感を示して、ふわふわと、いや、「生命体」としての命の輝きを示しながら、季節毎に、ホタルの木に、花を咲かせてくれているのだと思うようにしています。

わたしは、朝が明ける頃、菊池勇が埋められた腐葉土の墓の上に、村中上等兵と共に、緑の葉を付けたユーカリの一枝を供えました。

わたしたちの、それが、精一杯の菊池勇の弔い方、心からの手向(たむ)けの法でした。

もはや、その時刻には、闇夜を照らしたあのホタルたちは、どこかにと飛び立った後で、そこだけ突出した辺りを払う大樹が、吃然（きつぜん）として、山の中腹には佇（た）っていました！。

17

【昭和二十年十月五日、八隻の帰還船が、日本内地に向け、マニラ港を出航することになりました。待ちに待った帰還第一船、わたしと共に、村中達郎も乗船したのですが、担架に乗せられて、彼は船に運ばれました。

わたしたちが救出した際から、村中は腎臓に疾患があり、さらに、病いが昂じて体調がすぐれなかったのです。捕虜収容所（PW）でも、特別介護の身であったのですが、この間、村中とわたしは、筆談になることもあったのですが、色々なことを話し合いました。

もちろん、石丸、菊池の話が中心となりました。わたしが二人の最期について関心を寄せたという事情もありますが、村中に取っても、この世での「替え難い二人の友」であったのです。無理な体であっても、亡き友のこ

とについては、村中も喋りたかったのです。

いくつか、石丸や菊池が口にしていたことを、ここに、記して置きたいと思います。

大正世代の若者たちの夢や、もの思い、悩み、そして、切なさ、空しさなど、その心の裡も窺えて、わたしなどは何度も胸を詰まらせました。「無為な戦争の時代」に、生を享けた若者たちの人生への思いです。

「あれもやりたかった。これもやりたかった。それなのにまだ何もやってない」

「命が短いと思われる時代に生まれて、自分にとって充実した日々であろうと思ったのに、その通りに自分はお来たのだろうか」

「二十歳そこそこで死ぬ。これって何なのだろうか？誰か教えて欲しい。悪い夢を見ているなら、夢の中の夢と言ってくれ。目覚めたら、朝の清々しい空気を胸一杯に吸ってみたい。そして、さあ、一日の出発だ。今日はどこへ行こう。何をしてやろうかと、自分のために言ってみたい」

つれづれの彼ら若者の片々（へんぺん）の想い、これらは、ほんの少しの記述部分です。これとて、多くはお

のが胸の奥に秘められた想いのはずでありました。

同じ世代の生まれ、もちろん、これらの想念、私自身の想いとも繋がる場所があります。

帰還船が日本に向った数日後のこと、無念にも、村中達郎は静かに息を引き取りました。

腎臓が悪く、もう生きる力が彼には残っていないかったです。「みんなに見守られてじゃにい…」、そんな感謝の一声を遺して…。

船の倅(なら)いにより、村中達郎の遺体は、軍用の粗末な緑の毛布に包まれ、水葬の手続きを経て、茶毘(たび)に付されました。

わたしにとって救いがあったのは、帰還船でも、傷病兵の看護を務めてくれた白衣の天使たちがいたことでした。その中に、いつか、村中、石丸、菊池たちが助けてやった二人の少女の姿もありました。

風間知世子と井関ミサの二人です。

二人は、野戦病院を転々とした後、幸運にも恵まれて、終戦の日を無事に迎えることが出来たのでした。「みんなに見守られて…」と、村中が言ったのは、この二人の少

女たちが、親身になって村中の介抱に務めてくれたことへの感謝の意も含まれています。

翡翠（ひすい）かずらの花の美しさにも、村中と少女たちの間では、話が及んだこともあります。

ミチオシエの虫が、みんなを結び付けた話も、改めて語られました。風間知世子が菊池勇の無事をいちばん祈っていたという話も、耳にしました。淡い恋心というのではありませんが、二人が『船の遭難話』のことを、夢中で語り合ったその時間が、今となっては貴重なひとときであったのだなど、わたしは思いました。『儂い青春の夢の、そのまた夢』のような話ではありませんが、わたしはこのような考え方が好きな人間の一人です。

いつとき、話を元に戻します。

マニラ港を帰還船が離れる時には、万感、胸に迫るものがありました。船が出港したのは、真夜中に近い時刻でした。船の甲板上には、ほとんどの帰還者たちが並び立ち、そして、離れて行くルソン島に別れを告げました。きらきらと、電飾の明かりが、街と思しき辺りには灯っていて、平和な世界がこの地にも戻ったのだということ、わたしたちは実感しました。

船の汽笛が「ぼぼおー、ぼうおー」と、哀愁に充ちた出航の合図音を發しました。白い波頭が真つ二つに切られて、行く手の闇を裂きました。誰からともなく、亡き戦友たちへの哀悼の思いを込めた言葉が投げ掛けられました。「さよなら…」、その一言に尽きますが、戦友の名を呼ぶ者、また会う日を誓う者、一緒に連れて帰ると叫ぶ者、みんながおのが万感の思いを、去って行く島影に向って、思い思いに語り掛けました。

もはや、遠くになって行く異国の地、海の果ての果ての、もう、それは見知らぬ島でもありました。「さよなら」、わたしも、何度か呟きを繰り返しました。いつまでもみんなは甲板上からは離れません。そうやって、帰還船が日本に向ってエンジン音を高めている最中、誰かが、「お前たち、みんな、この船に付いて来い。みんな、一緒に日本に連れて帰ってやるぞ」と、叫びました。

他の者も、その声に和しました。この声と期を一にしていたわけではありませんが、この時、島の方角から、何筋もの、青白い、放射状の光が發せられました。

わたしにはそう見えませんでした。いや、みんなも同じ思いだったに違いありません。余りにもそれは奇異な情景で、



この世のものではありませんでした。一つ、一つ、おのが意思を伝えるように、島の方角から、その青白い妖光は飛びました。不思議の光でした。

さも、みんなと遅れてはならじと、慌てふためいているかように……。無慮数千、数万、いや、数などでは数え切れません。闇の空を、一杯に覆う壮観さ、命の輝きを見たような気もしました。

この時、わたしは、あの幽霊樹<sup>ツル</sup>に群がった人魂とも思わせるホタルたちの飛び交う様を、自ずからに思い浮かべていました。そうなんです。今、見ている青白い妖光とて、正しく、人魂そのものであったのです。

そう、思わずにはいられない、哀しい別れの場に、わたしは立ち会っていたのです。

この、ルソン島で、兵士だけでも十七万余の者たちが犠牲になったのです。「お前たち、みんな、おれたちに付いて来い。一人残らずにだ」「おい、日本に連れて帰ってやるぞ。みんな、一緒にだ」。帰還者の口から、なお、犠牲者を思う魂の叫びの音が続きました。

この場の情景は、甲板上で、村中達郎も目撃していたことです。その後、村中が亡くなったことで、改めて、

わたしは、幽霊樹<sup>幽霊樹</sup>に、我が思いを投げるが多くなりました。

わたしは、村中や、石丸、菊池たちに、今も我が思いを蛍に託して、心からの呼び掛けをすることがあります。

「ワイも死んだら、あないな蛍になって飛びたい」と死の間際、菊池が漏らし、「あげんに飛べるとええのう」と、村中もまた夜の闇を飛ぶ蛍たちへの賛歌を口にしています。蛍の樹に集う日、もちろん、みんなに遅れじと、あの、蛍男の石丸も、また、この場に、馳（は）せ参じるのだと、わたしは思っています…」

毎年、終戦記念日がやって来ます。

丁度、蛍たちが飛び交う季節、せめて、一年に一度でもいいから、この一夏、一匹の蛍になってこの世を自由に飛んで欲しいと…。そう思い、わたしは呼び掛けて来ました。

「ホタルたちよ、ホタルたち、<sup>ホタル</sup>の空<sup>空</sup>の元に集うホタルたち、みんな、思うがままに飛べばいい。人魂なら一匹残らずに…。或る夜は、生きていて、蛍のように、恋を囁いても欲しい。そして、蛍のように、子孫も残しながら、自然の営みのままに、幾万、幾千万の蛍に生ま

れ変わって、思いのまま、気のままに、広い空を飛んで貫きたい…】

ここで、入江高志の遺した一文は終わるのだが、終戦から十数年が経過した或る日、入江高志から、別便でわたし宛に一通の手紙が届けられた。

その書簡に収められた「挿話」の中身に、改めて、わたしも感銘を受けたので、ここに、余禄ながら書き記すことにした。

「螢樹の話」とは異なるのだが、もう一つの「螢にまつわる話」を入江高志はわたしに伝えてくれていた。

新聞に記載された一文が、几帳面な四角い文字で書き写されていた。

以下は、その挿話となるが、一人息子を失った、或る母の哀悼の記で、戦死の公報を受け取った日の母の思いが綴られたその一文に入江高志は心打たれたのだった。

戦後十八年が経過した昭和三十八年の年に、東北の地方新聞に寄稿された「ホタルとなって帰郷、女手一つで育てた愛児」の文の一節を、入江高志の意のままに記しておこう。(寄稿文は原文、一部、改行句読点修正)

『近くの小川ですすぎものをして立ち上がると、まだ月も沈まないのに、一匹のホタルがわたしの目の前をすつと飛んで行ったのです。』

何と気の早いホタルだろうと、わたしはしばらくホタルのあとを目で追っていました。すると、ホタルはわたしの前を去りがたげに、物言いたげに幾度となく行き来したのです。不思議に思いながらそのままに家に帰ってみると、役場の人が門口に立っていたのです。

一枚の紙を差し出されたとき、わたしはすべてを察しました。

ああ、ホタルは死んだお前の化身（けしん）だったのかとさとしたわたしは、公報を手にしたまま一目散に夕暮れた小川のほとりへと駆け出していました。

だが、もうホタルはすでにかき消えておりました。

いとし子よ：それからホタルはわたしの命となりました。毎年の夏の訪れがわたしには待ち切れなく慕（した）わしく、悲しいのです。

おとしも去年もお前と小川のほとりで会いました。

そして、幾度となく繰り返しお前の名前を呼びました。

ことしの夏もお前と小川のほとりで会える日を、わたしはいまから心待ちにしています。きっと、きて下さいよ…』

終戦の日、八月十五日は、丁度、ホタルの飛ぶ季節だとも、入江高志は書き添えている。

【わたしだけの思いかも知れませんが、年に一度でもいいのです。今年の夏も、異国の地の夜空<sup>3</sup>を美しく飾り立てて飛んでいるであろう、あのホタルたちにでも、せめてものこと、みんながみんな思いを投げてやって欲しい】と、書き加えた一文もあった。

やはり、「いとし子よ」と呼び掛けた母のように、入江高志もまた自分と知縁を得た若者たちに、ホタルの季節になると、「おい、お前たち…」と、父親の想いも抱きながら、慕わしく、語り掛けていたということなのだ。村中、石丸。菊池、みんな心の真っ直ぐない奴ばかりだった」とも、書き添えてあった。

わたしも心救われた。

入江高志の一文には次のような一文も記されていた。

【もはや、年毎に忘れられようとしている終戦記念日、

そのままに、青春が晩年であったような世代の若者たちの無念さ、通切の想いも捨て去られ、またまた、心なくも、心なき者たちによって、再びもまた、彼らは殺されようとしているような気がしてなりません。はたまた、吾ら、生き残った者たちの痛哭（つうこく）の想いたるものも、また然（しか）りです。人の命のままに、やがて、消え行く運命にあります。そして、黙して語らぬ者となつて行くのです。これとて、無念です…】

晴れ曇り、酷暑の夏、そして、時には、夏の嵐も吹き荒れて、夏の季節の表情も様々だ。

今年の夏はどんな天気模様なのか。

一気に、木々の梢で夏蝉が鳴き競い、そして、一日中の酷暑かと思うと、俄かの夕闇知れずの夕立もありと、どこか、夏は騒がしいところもあるが、その分、活気に充ちている。誰しもが開放される夏の季節、それでこそが夏の季節なのだとわたしは思う。

どんな天候であれ、毎年八月十五日が『終戦記念日』であることは周知の事実だ。

こればかりは守られている。

いや、敢えて『終戦記念日』でなく、『敗戦記念日』

だどことさらに言う人もいる。

何の意味があつてのことか。

どちらかではなく、前途のある若者たちが、人生の夢も果たせぬままに、儂くも命を絶たれた、忌わしき戦争が終わった日であることには、何の変りもない。

(第三話 了)

△全編完▽

あとがき

もはやとでも言うべきか、痛哭の戦争が勃発してから

七十数余年が経過した。不幸なああの時代などと締め括ることは許されない。誰が誰と共に、そして誰に…この悲劇の物語を引き継いで行くのか。戦争体験を強いられた者たちが、おのが人生を了えようとしている今、改めて、わたしは『戦記』の伝えようとする意味を考えさせられた。こんな折り、わたしは『ルソン敗走記 石長真華著―光人社刊』の書物に触れた。私的事情とも重なるが、触発される所が大いにあり、その意志を継ぐのも意味あることかと思ひしこの小説を書いた。「戦った／飢えた／死んだ／死んだ兵隊の肉を食うのは／そこでは最高の道徳でした(中略)」と、一兵士は魂の叫びの声を残している。冒頭作の「まんじゅう一等兵」では、ほぼ同じこの文体をプロローグとして使わせて頂き、一編の小説とした。もちろん、わたしなりの着想・構成もあるが、『真実の戦記』には遠く及ばないとしても、究極、生き地獄さながら、飢えの戦いでしかなかったとされる「北部ルソン島戦線」の様々な視座を見据えて、さらに、「魔のバシ―海峡」「蛍樹の空」の作をものにする事が出来たので、『死んだ兵隊の肉を食うのは／そこでは最高の道徳でした』と、一兵士に言わしめた無惨な実態、その無念の思



いの程は、多少なりとも当物語では伝えられたのではと、わたしは考えている。何よりも過酷な国策の下、若くして命を奪われた者たちの「生きようと願った心の必然性」、そして、「命の儚さ」「無念さ」「絶望感」など、個々人の、一つ、一つの想念が、今の世にでも、「普遍の物語」であることに、改めて思いを致した。

「飢えるとは？」その問いさえも、遙か遠くの時代の物語と化している今、今一度、このような『非日常の現実』が存したことに、思いを投げても欲しい。

遇者一得、そうも、わたしは願っている一人である。

《完》

※参考資料

ルソン島野戦病院全滅の記 西井弘之 文芸社

太平洋戦争最後の証言 門田隆将 小学館

- 最前線爆雷製造部隊 村田三郎平 風媒社  
 ルソン島 戦場の記録 沢田 猛 岩波書店  
 フィリピン敗走記 石長真華 光人社  
 ルソン戦記 上下 高木俊朗 文春文庫  
 ルソン戦―死の谷 阿利莫二 岩波新書  
 下級将校の見た帝国陸軍 山本七平 文春文庫  
 通信隊戦記 久保村正治 光人社  
 ぼくは少年通信兵だった 中江進一郎 光人社  
 ぼくの比島戦記 山田正巳 光人社  
 玉砕を禁ず 小川哲郎 光人社  
 カンルーバン収容所物語 山中 明 光人社  
 船舶砲兵 駒宮真七郎 出版共同社  
 めしたき兵 奮戦記 丸編集部 光人社  
 海に墓標を 伊東 信 農文協  
 撃沈された船員たちの記録 土井全二郎 光人社  
 戦時船員たちの墓場 土井全二郎 光人社  
 戦時商船隊 土井全二郎 光人社  
 悲劇の輸送船 大内健二 光人社  
 葉草毒草300 朝日新聞社編  
 毒虫の話 梅谷献二 安富和男 北隆館

鼻の話

高橋 良

岩波書店

※IT関係資料他

ルソン仏印無線通信隊 橋川篤美 第二次世界大戦の谷間にて  
佐々木譲二 比島敗戦記 福井 勉 死闘の鉄 光延一穂 鉄兵  
団バレテ峠の死闘 山下正雄 輜重兵第十連隊米倉大隊の戦闘  
高倍徳雄 蛍の墓標 瀧野成吾 二等兵哀話 岡本 睦 マカピ  
り哀歌比島派遣第十四軍司令部特別工作隊顛末記比島散華 松山  
勇 北部ルソン山岳地帯逃避行 北島華江 二十六歳の補充兵  
松浦 進 生きている間に手記を 川嶋恒男 ルソン島で人肉を  
食う敗走日本兵 長井 清 日本軍の命令・電報に見るマニラ戦  
林 博史 吾れ赤道越えて戦えり 片桐敏男 天声人語」 平成

二十四年十月二十一日欄 朝日新聞朝刊